

がっこうぐらし！ ver2.0__RTA 『一人ぼっちの留年』 ルート《参考
記録》

ゆキチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本RTAは、一部のコアな性癖を持つ人のカタルシスを刺激するルート
のRTA……

だったのですが

リセット疲れで妥協してしまい、猛烈にガバガバになり、それでも結果的には面白かった為、参考記録として残します。

《ミーハーなので初投稿です》

目次

	前日 O s a n a z i m i	1
	当日・昼 The Project SWEETPOTATO	
12		
	当日・夜 The Nightmare	26
	二日目・午前 Restore	40
	二日目・午後 Warm	60
	二日目・深夜 Dream	83
	三〃四日目 Lost	111
	五〃六日目 Present	143
	七日目・表 R (・) e—W h a t (・) C o l l a (・) p s e e ?	164
	七日目・裏 Re—W h (・) a t C o (・) i l l a p (・) s e (・) ?	195
	八日目・日中 Sweet Dream	222
	八日目・夜半 Bitter Reality	247
	九日目 “THE SHINING” of りーさん P A	273
	九日目 “THE SHINING” of りーさん P A R	302
	T 2	336
	十日目 WELCOME TO “SCHOOL life C L	336
	UB “!!”	336

前日 Osananazimi Is Trap

最近追加されたシステムで、最高のエンディングを、最速でクリアしようとして、最初でつまずいたRTA、はーじまーるよー！

計測開始はOP開始、計測終了はエンディング終了とします。
では、早速。

はい、よーいスタート（棒読み）

キャラクリは——します！

名前だけ入力するのでそれほど誤差はありません。

『万寿 柳』と入力し、きちんとその横に（幼馴染）と付け足しましょう。リセットが続くとたまに忘れます（5敗）。

それではゲームスタート。

ver2.0から飛ばせなくなったOPムービーをだらだら見ながら、その間に今回使用する『幼馴染』システムについて説明します。『幼馴染』システムは、ver2.0で実装されたもので、キャラクリの際、名前欄に（幼馴染）と入力すれば、主要キャラの幼馴染になれるというものです。

残念ながら、幼馴染になれるキャラを選ぶ事は出来ませんが、そのキャラの好感度はゲーム開始時点でかなり高くなり、キャラによって様々な恩恵があります。

このゲーム、少しのガバが命取りになるので、最初から調整しないで済む分めちやありがたく、個別ルートへ行くのも楽になるまさしく神システムなのです。

UNEI IS GOD

今回はこの新システムで楽をしつつ、私の大好きなエンディングの一つ『一人ぼっちの留年』を目指していきます。

『一人ぼっちの留年』は、名前からわかる通りバッドエンドです。で

も、私の中ではグッドエンドです（不屈の意思）。

これは、学園生活部の面々（+α）を生存させ、なおかつ全員の好感度を一定値以上上げる。そして抗ウイルス剤が無く、主人公が感染した状態で、学校脱出の場面になると移行する、かなり面倒な条件があるエンディングです。

—————

陰に日向にみんなを支えた主人公と主要キャラ達の涙の別れ。

夜明けの朝日に向かうように去っていく面々を見送りながら、主人公はどどん『かれら』へと変わっていつてしまうのであった……。

—————

このスチルが…たまらねえぜ！（メリーバッドエンド大好き民）

好感度が高ければ高いほど、キャラの悲壮感は上がり、その悲しみは鰻登り。美少女の涙は…：…やっぱり、最高やな！

そんな、空しくも希望を託すようなこのエンディングが私は好きです（鋼の意思）。

だから、これでRTAします（狂った意思）。

さて、OPが丁度終わりましたのでさっそく逝ってみましょう。

使うキャラは入力した通り、『万寿 柳』。

アダ名はやーくんのシヨタです。名前は渋いくせに、中世に産まれれば権力者が黙っていないような実にホモ受けのする顔と体型をしています。

能力値はそこらのメスガキにも劣り、特に筋力と持久力はカスです。お前女の子みてえな肌してんな！腕も細いしな！（男の娘並感）当然このゲームの敵である『かれら』に正面から立ち向かう事など出来ません。

しかし、その代わりに初期スキルを異例の三つも保持しています。『発見』・『隠密』・『話し上手』はそれぞれ、全行動の発見率アップ・『かれら』の探知能力の減少・会話による好感度上昇率アップと中々のものです。

これらを十全に使い、またレベルアップで取得するスキルなどを駆使し、幾つもの屍を乗り越えてきた私のプレイスキル（リセットの賜物）を以てすれば、このクソザコ能力値もカバーできます。

無双など容易いのです（自信）。

さて、ゲーム開始時点は学校の教室の夕方。日付はアウトブレイクの前日になりました。

好スタートですね。

開始時点の日付は、当日・前日・一週間前のどれかなので、ベターと言えるでしょう。

一週間前の方がありがたく見えますが、罨です（16敗）。その理由は後で説明します。

幼馴染になったキャラは、スタートの時に話しかけてきます。ドキドキですね。

本命は、スコップゴリラことくるみです。

主要キャラ中突出した戦闘能力を持つこのゴリラと幼馴染であれば、大抵のガバをカバー（激ウマギャグ）してくれ、なおかつ恩恵としてこちらも体育会系になり初期スキルと一緒に、戦闘スキルが一つランダムで手に入ります。

実に頼もしいゴリラです。

そうじゃなくても、みーくん・けい・チョーカーさんじゃなければそれほど問題ではありません。この三人は、アウトブレイク発生地点が特殊になり、学園生活部と接触出来ないのでリセットです。

——だが、ゆき。テメエはダメだ。

たとえ超絶可愛くて私の最推しだからって絆されてはいけません（51敗）。

この子はめぐねえ（要介護。目を離すと死ぬ。この主人公の場合、目を離さなくても死ぬ）が死亡した場合、高確率で精神を幻想入りさせ、生存キャラの正気度を0が見えるぐらいにゴリゴリ削り、主人公

の行動にも影響を与える動く爆弾です。

なのでゆきちゃんにならないように祈りましょう。

ゆきはいやだ、ゆきはいやだゆきはいやだゆきはいやだ……！

「あつーやーくんー！」

グリフィンドオオオオオオ
!!!!!!

……。

はい、スリザリンですね。

ぼんやりと教室に突っ立っていた私に抱きついてきたのは、ぽやぽやロリっ子の精神安定剤粹の丈槍由紀、ゆきちゃんでした。

いや、マジでどうするのもうリセット？早ない？ええ……これで何度目リセットめんどいもうこれ神様がゆきちゃんやんでやれって言ってるんじゃないやでも戦闘中に無邪気に寄ってこられても困るしこのチャートじゃあ精神幻想入りさせられたし死ぬしいやでもめぐねえとチョーカーさんがいれば違うか……？（0.3秒）

……よし。続行しましょう。GOのお告げです。

この時点で私は、今回のRTAに暗雲が立ち込めているのは直感的に理解しています（114514敗の実績と信頼）。

ですが、私の最推しであるゆきちゃんの幼馴染で『一人ぼっちの留年』行ったら最高に気持ちが高になります（ゆきちゃんの泣き顔すがり顔絶望顔）。

なのでやりましょう（お目々グルグル）。ダメならリセットすりやええねん（やけくそ）。

取り敢えず。

「丈槍さん……？補習を抜け出していったい何をしているのですか……？」

「めっ、めぐねえ……！」

補習をサボってきたゆきちゃんをめぐねえ（男女経験無し）に押し付けましょう。

「やーくん助けて！」

「こらっ！万寿くんに迷惑かけないっ！」

（生徒に恋愛事情で敗北して内心ショックな）めぐねえに引きずられながら、涙目で此方に手を伸ばすゆきちゃんを見送ってから行動開始です。

アウトブレイク前日にスタートの場合、軽い下準備が可能なので、さっそく主人公のスキルである『発見』を活用すべく、工具箱のある一階事務室に向かいました。

工具箱を荒らして、ゾンビ映画では欠かせないバールを手にいれます。バールは一定確率で工具箱で入手可能で、なければリセットですが、この主人公なら大丈夫でしょう（2敗）。

バールは校舎内全ての扉をこじ開ける事ができ、なおかつ『かれら』への攻撃力も高く、能力値を必要としないマルチツールです。

本来であれば、リーチのあるモップや即死攻撃のあるドライバーなどの方が確率に左右されず入手出来る分、楽です。

しかし、ゆきちゃん幼馴染ルートで戦闘スキルのないクソザコ主人公にはひのきのぼう以下なので、ここは攻めます。

事務室に到着しました。この時間帯には、誰も居ないのは屍を積み上げていた過程で知っています（これをガバ中の幸いと言います）。

なので、人目を気にせず荒らしましょう。

ごまだ れ〜！

おおつ、長柄・ステンレス製を手に入れました。

リーチが長く、比較的軽くて血錆びしないという主人公にとっては最高のバールです。確率はおおよそ三割でしたので、運が良いですね。

ですが、問題点として隠し持つ事が出来ません。

アウトブレイク後なら気にならないデメリットですが、前日ではこれを持っているのを見られると一発補導で没収されます。没収されてしまったらもう手に入る事は出来ません。

なので、どこかに隠す必要があります。

アウトブレイク当日の、屋上手前攻防戦の為に、三階の廊下にある掃除ロッカーに隠しましょう。一日ならバレる事はありません。

……一週間前に隠した場合、誰かがその間に見つけてアウトブレイク当日に持ち逃げされるので注意が必要です。

本来であれば、このボールを一階から三階まで持つてくのは大変です。他生徒に見つかったら先生にチクられますし、主要キャラに発見されたら、後々大変な事になります。

ですが、ご安心下さい。

ここでゆきちゃんの幼馴染としての恩恵が生きてきます。

ゆきちゃんの恩恵はざぱり『初期好感度上昇』です。

簡単に言えば、アウトブレイク当日までに関連するキャラ全ての好感度を10換算で5にします。5は友達以上親友未満。普通ならリア充生活まったなしですね。

おかげでボールを持って校舎を歩いていても不審に思われません。安心して隠しに行きましょう。

ですが、これでも主要キャラとは遭遇してはいけません。

他のと会ってもいいのは、結局こいつら全員『かれら』になるからです。死人に口なしです。

下準備を主要キャラに悟られると、アウトブレイク後に『もしかしてこの事件が起こるのを知っていた……?』と疑念を抱かれ、好感度上昇が妨げられます。さらに好感度が足らないと『黒幕だ!』と難癖付けられ、拷問・監禁、最悪殺害されます。

なので、注意が必要なんですネ。

おっと、道の先に覚醒素材と一緒に歩いているゴリラがいました。回避しましょう。

三階の掃除ロッカーに難なく隠す事が出来ました。

ゴリラ以外に主要キャラを見なかったのは実に運が良いです。この積み重ねが、ゆきちゃん幼馴染ルートをカバーしてくれる事でしょう。

今回のRTAで出来る下準備はこれだけです。

後は家に帰り、さつさと当日にします。

幼馴染システム使用の場合、幼馴染と一緒にないと家に帰れないのでゆきちゃんを探しに行きましょう。

めぐねえの補習は、空き教室を利用しているので直ぐ見つか……あれ？居ない。ああ、この隣で……いなた、あれ？

あれ？

………（チャートガン見）。

「む……あつー！やーくん！」

——直ぐに見つかります。ええ、直ぐに見つかりました。

……誤差だよ誤差（小声）

性懲りもなく、ゆきちゃんが飛びかかってくるので避けます。

捕まると抵抗出来ないのでロスです（可愛さ的にも、能力的にも）。

避けられてぶーたれるゆきちゃんに早く帰ろうと急かして、さつさと補習を終わらせます。ゆきちゃんはやればできる子です。

それでも難航している場合は、めぐねえに適当に話しかけ視線をこちらに向けさせ、答案をゆきちゃんにチラチラさせてゴリ押します。バレると大幅なロスになりますが、いったいどれほど私がやり込んだと思っっている！（13敗）

補習が終わりました。

ゆきちゃんとおててを繋いで帰りましょう。

夕焼けが綺麗ですね。嗚呼、これから始まる悲劇を想うと胸がきゆうとしてニヤニヤが止まりませんね。

校門を潜ったと同時に、暗転し——アウトブレイク当日が始まります。気合いを入れましょう。

……

……

……

わたしは、学校が好きだ！

理由はたった一つだけ。やーくと一緒にいれること！

やーくんとは一緒にのクラスで隣の席！いつも一緒に、行きも帰りも授業中も休み時間もごはんも一緒に……さすがにおトイレとか着替えは恥ずかしいけど……。

小さい頃からの公認カップルなの！

でも、さいきん不安で不満だ。

それはやーくんとを狙うどろぼーねこが沢山いること！

やーくんは可愛い。しよーじき、わたしよりも可愛い気がする

……。

そんなんで優しいならみんな好きになっちゃうのはしよーがない。でも、好きが愛してるになるのはしよーがなくなる。

……やーくと一緒にいるのはわたしだけでいいのに。

だから、わたしは監視しなくちゃいけない。

目を光らせて、お邪魔虫を見つけなきゃいけないのだっ！

「——だからね、めぐねえ。わたしが宿題やってなくてもしようがないと思うの」

「そう……。さあ、丈槍さん。宿題終わらせましょうね」

せつ、説得がきかない……！

たかえちゃんにやったときは「はいはいわかったわかった」って納得してくれたのに！

「むう……終わらないよお、めぐねえ……！」

「しよーがないでしょう？宿題をしなかった丈槍さんが悪いんです。

あと、佐倉先生です」

めぐねえが厳しい。

しょうがない子ね……みたいな目で見てるけど、加減してくれない。

プリント一枚しかないのに、積み上がった束みたいに見える。

「うう……やーくと遊びたい……」

「でも、やってれば今の時間は万寿くと遊べていたんですよ？」

「うぐう……」

「これからは計画を立てて、その通りにちやーんとやりましょうね」

「実に耳が痛い話ですね」

むっ！この声は！

「あっ！やーくん！」

教室の出口には、愛しい王子さまが立っていた。

わたしはたまらず、やーくに抱きつく。

「あいぎどー！」

「ぬわー!？」

でも、私の愛の抱擁は避けられた。

ひどい、あいしてるのに。

「やーくんひどい！」

「ひどいのはゆきちやんのあっぱらばーな頭でしょ」

「さらにひどい！」

「ほら、そんな事よりさっさと補習終わらせて。一緒に帰るよ」

ぶう。でも、やらないと帰れないのは事実だ。

わたしは机に戻って、プリントにがつついた。……でも、分からないのは分からない。

「すみません、めぐねえ。うちのゆきちちゃんが」

「いいえ。丈檜さんがやってないのがいけないんです。万寿くんは気にしないでいいんですよ。あと、佐倉先生です」

「はい、めぐねえ」

「もうっ！ですから——」

……やーくとめぐねえが仲良さそうに話してる。

ずるいずるい、とやーくんを睨んでいると、やーくんがめぐねえの

持ってきていた答案をチラチラ見せてきた。

っ！流石やーくんだったっ！わたしは急いでそれを写して、めぐねえに見せる。

「めぐねえ！終わったよ！」

「……………まあ、いいでしょう。はい、帰っていいですよ」

「やったー！やーくん帰ろ！めぐねえ、さようなら！」

「はい、さようなら。……………次はないですよ？」

ば、バレてた……………！

「♪♪♪」

「機嫌良いね。ゆきちちゃん」

「うんっ！やーくんと一緒にいられるからっ！」

「そっか」

いつもの夕方。いつもの帰り道。

わたしとやーくんはいつも手を握って一緒に帰る。

わたしがやーくんに笑いかけると、やーくんもわたしに笑いかけてくれる。

この瞬間が、わたしは何よりも大好きだった。

「また明日も一緒に帰ろうね！」

「……………そうだね」

暖かい気持ちに満たされながら、わたしとやーくんは一緒に帰る。

また明日、また明日も一緒にいようね。

わたしは、学校が好きだ。

やーくんがいる限り、ずっと……………ずうっとそう思う。

ずっと一緒にいようね。

離ればなれになるなんていやだよ。
もし……離ればなれに、なるくらいなら……

でこつちを見ています。

彼女は、原作ではモブのように『かれら』になっただけですが、ゲームだと助ける事が出来ます。色々と便利なスキルも持っているので助けには行く予定です。……チャート通りに行けば。

「——丈檜さん、ちよつといい……相変わらず、仲が良いですね二人は」

おっと、めぐねえがやってきました。

丹念にこねた餅が名残惜しいですが、ゆきちゃんを見送ります。また後でな！地獄で会おうぜ！（直諭）

「……ほっぺ真っ赤ですけど大丈夫？」

「ふへへ、あい……」

「そう……」

二人の背中を見送った後——急いで逆方向から屋上に先回りします。

持久力カスのシヨタですが、スタミナバーギリギリまで走って回復させてからまた走ってという非人道的走法を使えば、容易く二人より前に屋上に行けます。

「あら、柳くん？どうし——えつ、なんでそんなくたくたなの？」

コラテラルダメージだ。気にするでない。

屋上には、園芸部の活動をしている主要キャラの一人、若狭悠里ことりーさんがいます。巨乳美人で隠れ発狂枠です。丁寧丁寧丁寧に扱います。

ゆきちゃん幼馴染ルート之恩恵で気安く挨拶してくれるので、こつちも気安く挨拶しましょう。

さて。此処にやってきたのは、アウトブレイクを屋上で迎えたい

……という事でもありますが、確認をしておきたい事があるからです。

おうりーさん！その恵体（筋力値、主要キャラ中三位）で育てた畑には何があるんだい？

「畑？このプランターのお野菜のこと？ええつとね……」

アウトブレイクの際、最初に手に入る食べ物は、この屋上にあるプランターの野菜です。

ゴリラと私が三階を制圧するまで、食べられるのがこの野菜だけなので、そこで育てられる種類はとても重要です。

ランダムで二種類育てられています。因みに季節感は関係ありません（ゲームだからね）。

優良なのはキャベツです。生で食べて、且つ茹でれば満腹度が増えます。キャベツがあれば、後一種類は適当でいいです。

これで「育ててるのはきゅうりとミニトマトよ」つて言われたらリセット……までは行きませんが、三階制圧の予定を早める必要があります。

そんなんじや腹は膨れねえんだよお！（男子高校生並感）

「育ててるのは、キャベツとサツマイモね」

フア!?（歓喜）マジで!?（素）

キャベツは良しとして、サツマイモですか！これは実に運が良いです。このシヨタの『発見』スキルはこれにも作用するんでしょうかね（リサーチ不足）。

サツマイモは、野菜の中で唯一甘味にも属する万能食材です。火を通さないと食べられないのがネックですが、お菓子などの甘味が手に入らない序盤・終盤はとても心強いです。

甘味を食べれば、正気度回復や好感度上昇に繋がります。『一人ぼっちの留年』エンドには好感度が重要なので、稼げる手段は多い方

が最高です。

さらに、このサツマイモから作られるデザート、スイートポテトは正気度回復と好感度上昇の値がとても高いのです！

良いですね！実にベネ！デイモールト！

サツマイモは、育てられている可能性が低いので、最初から選択肢に入れていませんでしたが、これはチャート変更が求められますね……。

りーさん対策にありがたいので、これは利用しない手はありません。

「ん？スイートポテト？ああ、確かにいいわね。サツマイモも大きいし、美味しくなりそう……」

りーさんも美味しそうやな……（体を見ながら）。という冗談はよみましょう。

サツマイモは、スイートポテトだよねと話題を振り、りーさんがそれに乗ってきたら、「いつかごちそうするね」と言います。

「あら、いいの？ふふっ、期待してる。ありがとね」

ふふふのふ。約束フラグが立ちました。

りーさんには、アウトブレイク前にこういった日常を想わせる約束をしておくのが重要です。

りーさんは、アウトブレイク後は料理などの家事・物資の管理など雑事のオールラウンダーとしてとても重宝するのですが——いかにせん正気度がくっそ低いのです。正直ゆきちゃんの半分ほどしかありません。ひっくい！

そのせいでほつとくと気付かない内にひっそりと発狂し、非実在系妹を脳内に召喚したりしてしまいます。さらにこのシヨタがいると実在系弟にもしてくる、姉を名乗る不審者にもなります。人の業とはやべえですね。

……私は『偽物の家族』エンドも好きですが、今回は『一人ぼつちの留年』に行きたいので、リーさんの正気度はきちんと管理していきます。

こうした約束は、正気度を大きく回復させるのでありがたい。運が良い、実に！

「若狭さん。お待たせしました。……あら？」

「あつ、やーくん！とう！」

おや、二人がやってきたみたいですね。条件反射で飛び込んできたゆきちやんはリーさんにでも受け流しておきましょう。

補習イベントは適当に流しながら、この途中で起きるアウトブレイクに備えます。

……ふむ。

先ほどスイートポテトをごちそうするぜ！っと、このシヨタは言いましたが——おわかりの通り、このシヨタは料理スキルは持っていません。その為、スキルポイントでの取得が必要です。

早めに取っておけば不測の発狂にも役立つので、屋上手前攻防戦はチャートよりも多く稼ぐとしましょうか。なあに、私のプレイスキルを以てすればそれほどのロスにもなりません（自信）。

あと、サツマイモ自体普通に食べれるように火も確保しておきましょう。

三階制圧で火が使えるようになりますが、初日から使えるようになっていればキャラの正気度の減少を抑えられます。

攻防戦の際に、不良の『かれら』を倒すと、一定確率でライターが手に入りますので、それを使って火を起こし、アウトブレイク初日は焼き芋を食べましょう。温かい食べ物を渡すと、少しですが好感度も上がりますし。

大胆なチャート変更は、走者の鑑。

これをプロジェクト：スイートポテトと名付けましょう。

——悲鳴が聞こえてきました。アウトブレイクが始まります。

屋上から校庭を覗くと、命を賭けた逃走中が始まっているのが確認出来ます。もう始まっている！

……あつ、ゴリラが星四種火^{せんぱい}を背負って校舎に入って行くのが見えました。これは早めに屋上に来そうですね。ラッキー。

「なつ、なに？」

「やーくん？」

不安そうにしているリーさんとゆきちやんを宥めます。この際、私自身も困惑している風なのを忘れないようにしましょう。あまりにも超然していると前述した“不審な下準備”に該当します。

『屋上!? なら絶対に鍵をかけて絶対に誰も入れちゃダメ!! ひっ! だれか職員室の——』

「神山先生! ……神山先生!!」

めぐねえが同僚メガネからの電話を受けました。

屋上施錠のフラグです。

この時に、この助言に従うと屋上手前攻防戦がキャンセルになります。タイムを意識するなら、これに従うべきですが、良い稼ぎを逃す訳には行きません。

「……先生は、校舎の様子を見てきます。丈檜さん達は此処に居てください。扉は閉めて、私や他の生徒じゃない時は絶対に開けないように」

「めっ、めぐねえ……」

「大丈夫です。……大丈夫ですからね」

めぐねえがそう言って、校舎に消えていきます。

おっ、待てい(江戸っ子)。私も行きましょう。居て下さい(居るとは言っていない)の精神です。

「柳くん！駄目よ。……危ないわ」

知ってる。

でも、行くの。スイートポテトの為に。

初日に、焼き芋。食べたいでしょう？私は食べたい。

怯えるゆきちゃんをりーさんに任せ、私も校舎の中に入ります。

こちら現場です。

はい。有り体に言つて、地獄です。以上。

「こっ、こんなの……ありえないっ……！」

私が隣に來ている事も気付かずにショックを受けているめぐねえは正気度減少中です。

でも、安心してください。初日に焼き芋を食べさせれば、減った正気度などちよつちよいのちよいです。

「……柳！めぐねえ！」

おっ、どんどん増えていく『かれら』の隙間から、強化石せんばいを背負つたくるみが走つてきました。……校庭から三階まで駆け上がったいるのに息すら切れていません。覚醒前にこれなら、覚醒後にゴリラになるのは必然だったんですね。

「いったい何が起きたんですか!？」

「わかんないっ！いきなり襲つて來たんだよ！ゾンビみたいに……それで、先輩が……！」

「っ、屋上ならまだ安全なはずですよ！そちらに行つて下さい！」

「はいっ！」

おう、気を付けろ。

因みにシャベルなら分かりやすい所に置いといたからな（優しさ）。

めぐねえが『かれら』の一人と目が合いました。

「——ひっ！」

さて。増えた『かれら』がこちらの存在を捉えました。

『かれら』との戦闘、開始です。

初戦である屋上手前攻防戦は、時間制限付きの無限湧きイベントで、クリア条件は『時間経過』か『屋上に立てこもる』で達成します。スキルが整ってない内に、大勢とやり合うのは大変ですが、まとまった数出てくるので良い稼ぎになります。

普通プレイでもスキルポイントを手に入れる為、何体か狩るのが定石ですね。

無論、私もそれに従います。特に狙い目は不良『かれら』です。焼き芋の為に、わかりやすいリーゼントな『かれら』には犠牲になって貰いましょう。

だから、掃除ロッカーにボールを隠しておいたんですね（例の構文）。

呆然とするめぐねえを尻目に颯爽と前に出ます。

ふっ……シヨタ無双する瞬間をとくと見るんだなあ！私のプレイスキルの見せ所さんです。見とけよ見とけよお（自信）

ロッカーの中にボールがある！

取りに行く！

「——やーくん、ダメえ!!」

あっ！（腕を捕まれる）

このゆきちゃん（唐突なエントリー） つよい！（フィジカル）

ぼぼぼぼぼぼっ！（振りほどけない） ぼあっ！（ダメーじ）

ゆきちゃああああん!?

なあんで邪魔するのぉ!?!いつもだったら屋上にとって……そういえばこれ幼馴染ルートだつ、たあ! (池沼)

好感度が高いと不安で見に来るのを忘れてました。

おおおおおちつけ、まだ焦る時間じゃありません。

慌てず騒がず、抵抗しましょう。

離して?

「嫌!」

なんで? (半ギレ)

「危ないよやーくん!逃げよっ!もう、みんな……無理だよお!」

危なくない!無理じゃない!まだ間に合う!まだ行けるから!

ボールがあれば大丈夫だから!ボールでいけるからあ!

うおお!離せえ!流行らせコラっ! (がつこうぐらしRTA)

ムーミン野郎! (精一杯の罵倒)

くっ、クソザコ能力値のこのシヨタではゆきちゃんですら振りほどけません!

ち、ぢぐじよお……!

こっ、この中に『合気道』持ちの方はいらっしやいませんか!いらっしやったらこのゆきちゃん投げ飛ばしてください!

うわああ!『かれら』が来た!無限湧き特有の複数で来たあ!

むっ、無防備では流石のプレイスキルを持つ私でも無理です!ゆきちゃん離して!ボール取らせて!頼むお願い何でもするからあ!

ぬわああああん! (絶望)

こんな事なら「私のプレイスキルで行けます(笑)」とか言つてこんなシヨタ使うんじゃないかったああ!さいっしょから『アーノルド・シユワルツエネツガー』って入力して、ターミネータープレイにしときゃ良かったよもおおん!!

ああ……終わっ……えっ、あれ?

めぐねえが前に出てきました。えっ、なして……？

——ガツシャンツツ!!

……

……

……

万寿くんは、職員の間でも有名だ。

なんでも卒なくこなして、面倒見も良くて下手な女の子よりも可愛くて——幼馴染思いの子。

友達だつて多くて、学校中の子と知り合いだつて言われてる。……ちよこつと灰色な青春を送った私には、正直、ちよつと羨ましいぐらいな子だ。

それに優しい子だ。

……先生の目を盗んで、答案を幼馴染に見せるといのが果たして優しさなのかと思わなくもないが、それでも優しい子だ。

それに丈槍さんもちよつとおちよこちよいで、勉強をおろそかにする気弱な子なのに、万寿くんの事になるともの凄い行動と主張をし出す面白い子だった。

丈槍さんの補習を見ている内に、なにかと万寿くんとも仲良くなつた。

二人との関係は、他の生徒よりもちよつと抜きん出ていた。充実していた。

このまま続けば、きつと——安穩とした幸せが、あつたはずなのに。

なにかありえない事が起きた。

突然の悲鳴、逃げ惑う生徒の姿。神山先生の切羽詰まった電話。

校舎に入って見えた——人が人を喰らおうと襲う凄惨。

ほんの数分前の現実、血で潰され始めた。

恵飛須沢さんが一人の男子生徒を背負って走って来た。状況を聞いても、まるで映画みたいとしか思えない。彼女を屋上へ誘導する事しか私には出来なかった。

——その時。

ふら、と——万寿くんが、私の前に出てきた。

どうして、と思う前に、その後ろから彼の腕を掴む丈槍さんも出てきた。

……つくづく私の話を聞かない二人だ、と逃避ぎみに思った。

「ゆきちちゃん離して！」

「危ないよやくん！逃げよっ！もう、みんな……無理だよお！」

「——無理じゃない!!」

それは彼にしては強い口調だった。聞いた事が無いくらい激しい叫びだった。

「無理なんかじゃない！まだ……まだ間に合う！絶対に！」

丈槍さんに引つ張られながら伸ばされた彼の手は、前に伸ばされている。

その先には——襲われ、血を流しながら、変貌していく生徒だった『かれら』。……万寿くんの友達だったはずの『かれら』がいた。

……万寿くんは信じられないんだ。

たった数分。ほんのその時までであったはずの輝かしい記憶、思い出。それがこんな凄惨なもので塗り潰されているのを。

『かれら』の一人が万寿くんへと手を伸ばす。

それが友好的ではない事は私にも分かった。……それはきつと万寿くんにも伝わっただろう。

伸ばした手を下げた彼の目に、恐怖が浮かんだのを横目で見て……

「」

私の中に駆け巡ったあの時の感情は、今でも言葉で表せない。

——ガツシャンツツ!!

我に返ったのはロッカーが倒れた音でだった。

『かれら』の一人に当たって倒れた。先生が、私が、生徒だった『かれら』を突き飛ばして……ロッカーが倒れた。

「めぐねえ……う？」

茫然と呟く万寿くんの声が背中から聞こえた。ロッカーに潰された『かれら』の一人は血を流しながら動かない。

——殺した。私が。

「めぐねえ、前！」

丈檜さんの声が聞こえた。

前を向くと、『かれら』の一人がこちらに手を伸ばして近寄って来ていた。口は裂け、血と唾液が溢れて気持ち悪い。

一步後ずさる。カンツ、と足に何かが当たった。

視線を向ける。そこには、ロッカーが倒れた時に散乱したであろう掃除箒に混じって。

——銀色に輝く長柄のバールがあった。

「」

なんでここにあるかなんて考えなかった。葛藤は直ぐ。

——目の前には、守るべき生徒だった『かれら』——

——背には、守るべき生徒である二人——

……葛藤なんて言ったが。

今思えば、そんなものあってないようなものだったのかもしれない。

確かな重さの物を振り抜いた。ぐしゃりと湿った柔らかい感覚は

今も手に残っている。自分のせいで倒れたあの人型は、忘れられない。

息は切れ、足だつて震えたし、気を抜けばその場で吐きたくなるくらい気持ち悪かった。

「私の……」

それでも……きつと。

「私の生徒に手を出さないで……!!」

『かれら』の数は、悲鳴が聞こえなくなると一緒に増えていった。

対処出来ないのは直ぐに分かつて、急いで私達は屋上へと戻った。鍵を掛け、農業用具があつたロッカーを倒して、バリケードを作る。直ぐに『かれら』が扉を叩いてきたけど、頑丈なおかげで『かれら』は入って来れない。

……屋上は安全だった。

血に塗れて茫然とする恵飛須沢さんを、泣きながら必死で抱きかかえる若狭さんと、その近くでスコップが突き刺さってる人型。

何があつたかは一目瞭然だった。

それでも、ここは安全だった。

これは——現実だ。と私はその時初めて思った。

手に握る血塗れのボールが、それを如実に教えてくれた。

「め、ぐねえ……」

「……っ……っ」

弱弱しく私を呼ぶ丈檜さんところらを見て震える万寿くんを、私は抱きしめる。

腕の中で震える二つの温もり。
それを守れた事は、確かに現実だ。

—— 私達の絶望はこの日、この時始まった。

—— そして

—— 失いかけたものを守れたこの感覚だけが、私の、残された希望
だった。

なっ……なっ……!!

私のボールがめぐねえに盗まれたあああ
!!!!?

なあんで覚醒めぐねえに……?!

ていうか、こっつ、攻防戦……すっつ、スキルポイント……!!
すっつ、すっつ。

スイートポテトおおおおお
!!!! (断末魔)

当日・夜 The Nightmare

めぐねえに見せ場もボールもスイートポテトすらも奪われたRT
Aはーじまーるよー!!!!!!

すうー……はあー（深呼吸）。

はい。

屋上手前攻防戦の達成条件である『屋上に立てこもる』を選択すると、『かれら』は扉をぶち破ろうとしてきます。

本来ならば耐久フェイズとしてボタン連打で耐えるのですが、めぐねえがロツカーをバリケードにしたおかげでその必要がありません。なので後は、『かれら』が飽きるまで扉でリズムを刻んでドラムいるだけです。

おおよそ1分ほど。

いい休憩になりますね。

はい。

はあ………（クソデカ溜め息）。

あ ほ く さ（諸行無常） やめたらこのRTA？（栄枯盛衰）
なあんでこういう時に限ってポカやらかすんですかねえ!?! ゆきちちゃん幼馴染ルートなら今まで沢山やったダルルオ!?! あつゆきちやんルートやる時いつも「ゆきちちゃんを危険に晒すなんて僕にはできない!」って言ってすぐ扉閉めてたわそれかそれだなそれだわぬわあああああちあああくああわああぶああつあ!!

—— 続行します。

………。

はい。理由を説明します。

まず、攻防戦が序盤でキャンセルされ、かつ稼ぎを行う時間ロスが無くなったおかげでタイム自体は良い事。

そして、この序盤で『覚醒めぐねえ』というレア中のレアを手中に納めた事です!

これって……勲章ですよ……？（ねっとり） 傷だらけのだけだな！

めぐねえは主要キャラ唯一の成人女性という事もあってステータスは万能型。

家事全般は勿論、戦闘も出来るポテンシャルを持っています。

これだけ見るとゴリラ並みに有能に見えますが、弱点としてメンタルが脆いのと——生徒である『かれら』に攻撃することが出来ません。びつくりするぐらい致命的です。

アウトブレイクが学校スタートである以上、当然、敵はそこにいた生徒の『かれら』が大半なので……まあ、有り体に言ってお荷物です（断言）

ですが、その弱点を無くす事が出来るイベントが定期的に発生します。

それが覚醒イベントです。

めぐねえが『覚醒』するには、このイベントをクリアしなければなりません。

実に簡単そうに見えますが、これが実に難しいのです。

覚醒イベントは、敵と遭遇する・衝撃的なものを見るなどの “ 転機 ” を迎えると発生します。

そのイベントの際、めぐねえは何とか奮起してその事実に向き合おうとします。

——で、大抵失敗します（無慈悲）

失敗すると正気度は、まるでかき氷器を回すようにガリガリ削れ、数秒その場から動けなくなります。敵と相対していた時などは、すぐに掴み・噛みつき・感染・『かれら』化の即死コンボを食らいます。

ですが、打って変わって。

成功すると生徒であった『かれら』相手に戦ってくれるようになり……なんか補正が掛かるようになるらしいです（リサーチ不足）。

正気度が下がりにくくなるんだっけかな……（不安）

……いや、だつて覚醒めぐねえになると思わなかったんだもん!? 私

は悪くない！めぐねえが悪い！（責任転嫁）

まあ、めぐねえ特有の詰めの甘さがあるので、要介護なのは変わらないみたいですが、ステータスの高さを存分に発揮してくれるようになるのは実に魅力的です。

今回は、私が運良く手に入れた最強ボールもあつてか成功したようですね。

能力値クソザコなシヨタが使つて強いなら、ステータスだけは万能なめぐねえが使えば、鬼に金棒、ゴリラにシヤベルなんだよなあ……。……そう考えると、ロスもロスじゃないように見えますねえ！（ポジティブ）

めぐねえも頑張ってるし、私も頑張らないとっ！

でも、ボールは返して（切実）
よつて、止まりません。

主人公のスキルポイントに不安がありますが、それを除けば結果的には良い感じになったんじゃないですかね（適当）

あつ？スイートポテト？……知らない子ですね……。……

世の中には『急ガバ回れ』という名言があります。

きつと大丈夫でしょう。

「行った……。のでしょうか……。……」

おつ。丁度『かれら』の扉ドラマが終わったので耐久フェイズは終了しました。さっきのめぐねえの台詞がその合図です。

一回暗転し、ここから場面は、夕方〜夜に移ります。

「これから、どうなっちゃうの……。……？」

こちら現場です。

生き残った要介護、ゴリラ、偽姉、最可愛、役立たずが、屋上にあつた懐中電灯の周りに座ってます。近くには、シヤベルが突き刺さったままの先輩もいます。

場の空気は時間が過ぎる毎に死んでいっています。宜しくお願い

します。

はい、初めての夜は空気最悪です。

覚醒めぐねえを以てしてもこれを脱する事は出来ません。

本当なら……そう、本当ならここに、なあ？火があるはずだったんだよなあ!?あれれー？おつかしいぞー？（白目）

ともかく、このままでは宜しくありません。

ですが、やれる事は限られています。

食事を与える事は出来ず。

……ほっ、本当ならここでやきつ焼き芋、だったのですが！（滲み出る悔しさ）

火が無いので、食べる事が出来ません。

ですので、キャベツを与える……のは待ちましょう。

このゲームは狡猾です。

大抵のプレイヤーは満腹度を心配し、プランターの野菜を皆に与えようとしています。

……満腹度を増やす事は、確かに重要です。

ですが、こんな絶望的な状況で、粗食以下の餌を食ると逆に正気度が減っていきます。特に初日で気持ちに整理がついていないので、余計に減ります。

すぐに変化として現れませんが、後々に響いていきます。

ので、今日一日は我慢しましょう。チャート通りに行けば、明日にはまだ文明的なものが食べれますし。

会話による好感度上げも、ゆきちゃん幼馴染ルートなので、特に何もしなくても心配ありません。

よって——後は寝ましょう。

嫌な事があつたら、さっさと寝るのがいい。この世の真理です。ニーチェも言っていました（賢いアピール）

時間を無駄にせず、就寝準備に入りましょう。

おう、リーさん！そのダイナマイトボディを隠せるようなブルー

シートはあるかい？

「……………」

ん？リーさん？

「…………えっ？ああ、ブルーシート？そこにあるわ」

ベネ。

ブルーシートは屋上にある寝具として唯一使えるものです。何も
なく寝るよりはかなりマシです。

返答が遅かったのは、流石に疲労でしょう。

では、皆に今日はもう寝る事を提案します。

ブルーシートでくるまって一緒に寝ようぜ！

コンクリブルーシートはテンション下がるけど、キャンプに来たみ
たいでテンション上がるよなあ!？（実質プラマイゼロ）

「…………うん、やーくんと一緒に寝る…………」

「そうですね。このままでいても気が滅入るだけです…………」

幼馴染ルート不使用の場合、好感度上げてないと大抵嫌がられて蹴
られる提案ですが、ゆきちゃん幼馴染ルートなのでそこは問題ありま
せん。

ゆきちゃんどめぐねえはともかく、華の女子高生二人は戸惑いを見
せますが「もう二人は家族みたいなもんやし（平行世界の記憶）」でゴ
リ押します。

お前の知らないお前と一緒に寝た事があるから問題ない（支離滅
裂）

では、ブルーシートを取ります。園芸部のプランターの近くにある
ので、大きめのを持っていきましよう。

あつ、シャベルに刺さったままの先輩。

…………今回は先輩殺害シーンには関与してなかったのですが、
絶命するまで滅多刺しにしていますね。正気度減りますねクオレは（実
際、今滅った）。

公共の福祉です。ブルーシートを掛けて隠してあげましょう。このままにしていると、視界に入る毎に正気度が減ります。

「……柳」

先輩を労った(ように見える)ので、まだゴリラじゃないくるみちゃん
の正気度が少し回復します。

好感度も恩恵で上がっていますし、この勢いならば明日の朝にはク
ルミ・クルミとして活躍してくれる事でしょう。

では、皆でもそもそとブルーシートに包まります。

ゆきちゃん幼馴染ルートで皆まんべんなく好感度が高いので、大き
い一枚に皆で入ります。人肌でぽつかぽかやぞ(ご満悦)。

好感度が高いキャラと同じ布団を共にすると正気度が大幅に回復
します。現状ゆきちゃんが一番上がり幅が大きいです。

まあ、幼馴染だし安心は一塩なのでしよう(ほっこり)

「あつたかあい……」

ゆきちゃんがすり寄ってきます。ああ……最高や……! (癒し)

「ふふっ、モテモテね。柳くん」

「……………」

「ちゃんとぎゅーっしてしますからね。もう怖くないですよ」

おっ、りーさんが軽口を言いました。……意外に正気度は減ってな
い? うーん、まあ中間くらいでしょうか。

くるみちゃんは表情が落ち着いてきました。これは明日に期待で
す。

あと、めぐねえ。ゆきちゃんごと抱き締めてくるのはいいけど、
ボールが当たってダメージ受けたんですが今。意地でも離さない気
だなこいつ。

盗んだボールを持ちながら一緒に寝るのは気持ちいいか? (煽り)

では、就寝に入ります。

おやすみなさーい。

ここから、本格的ながっこうぐらし！が始まる為、フィールドの読み込みに少し時間が掛かります。

ので、暗転^{NOW LOADING}している間。

明日・二日目の予定についてお話ししましょうか。

二日目には、必ず三階職員室に向かわねばなりません。

そこには本RTAにおける、薬にも毒にもなる物への行き先が書かれた物があります（意味深）

まあ、職員用緊急避難マニュアルの事なんですけどね（暴露）。キャラがそれを読むと、正気度がかなり減りますが、その代わり隠された地下室へのルートが開放されます。

そこには多くの物資と、感染を一度だけ食い止める重要アイテム『抗ウイルス剤』があるのです。

高校脱出までに手に入る数は一本のみなので、通常プレイではエリクサー並みに出し渋るやつです。

しかし、このRTAでははつきり言って邪魔者です

本RTAの目指す『一人ぼっちの留年』達成条件の一部に『主人公が感染状態である事』がありますが、これのせいでリセットポイントを発生させています。

抗ウイルス剤を所持している状態で感染した場合、主要キャラの好感度の関係上、たとえ拒否したとしても無理くり使ってきます（11敗）

所持してなくても、存在を知っていれば、無理して地下室まで取りに行ってしまうのです（4敗）取りに行く場合、取りに行った人は高確率で感染して帰ってきます。

やめてくれよ……（恐怖）

こうなると『一人ぼっちの留年』エンドには行けません。

その為、誰かに知られる前に抗ウイルス剤の事が書いてあるマニュアルをどうにかする必要ががあります。

本当は私以外の誰かが感染した時の保険の為に取っておきたいのですが……地下室まで行く時間ロスと前述の条件不達成の可能性を踏まえて、やりません！（RTA走者の鑑）。

……もう私は、泣きながら笑うというやべえ顔をしながら、抗ウイルス剤片手ににじり寄ってくるゴリラ（噛み跡付き）と筋力対抗フェイズをしたくありません（本音）

コントローラーと親指が死にました。その犠牲でも突破出来ませんでした……。
ので。

明日は、脇目も振らずに職員室に向かい、地下室の存在が知られる前にマニュアルをこの世から抹消しましょう。

焼き芋の燃料には良い代物です。

明日の探索には、私とゴリラになっているであろうくるみちゃん。あとは、おそらく覚醒めぐねえが付いてくるでしょう。

頭数は三人。これなら何があっても大丈夫です（自信）

まあ、反対されるでしょうが、このゲームにおける私の実績と信頼を知っている皆様なら、大丈夫なことは分かりますね？

まあ、ダメだったら先駆者兄貴みたいに振り切って行けばいいねん。

おつ、そろそろ始まりますね。

……それにしても素朴な疑問なんですけど、伝説の剣の台座みたいななってた先輩の死体って二日目の朝には消えてるんですけど、何でなんでしょうかね？

蒸発でもしたのかな（適当）

まあ、ゲーム上の仕様なんでしょうけど。

「……………」

——寝る前に思った事。

ブルーシートがあるとはいえ、コンクリートで寝るのは身体痛くし
そうだな。誰かと一緒に寝るって、暖かくて安心するんだな。先輩の
死体が消えていますように。

今までの事が全部夢でありますように。

——起きた時に思った事。

もう二度とコンクリートでは寝ない。誰かと一緒に寝たおかげか
意外と頭がスッキリした。先輩の事をどうにかしないと。

今までの事は、全部が全部悪夢げんじつだった。

「……………」

ぼんやりと空に浮かぶ夜の雲。地平線から出てくる小さな朝の光。

屋上から見える景色は実に綺麗だった。

校庭に蠢く人型と、遠くの街並みから浮かぶ大量の黒煙さえ無けれ
ば。

心の底から、私はそう思っただろう。

「はあーあ………」

屋上の手すりに凭れかかる。からんと手すりに立て掛けたシャベ
ルが風で傾いた。

手に残った冷たさが、やけに鬱陶しくて、ひどく辛い。

「——恵飛須沢さん？」

後ろを向くと、めぐねえが立っていた。

優しいめぐねえには似つかわしくない、血がついたままの銀色の

ボールを手に持って。

「……見てた？」

「見て……た？なにを……？」

「いや、見てないなら、いい」

私の問いにめぐねえは一瞬戸惑った。

でも、突き刺さっていたはずのシャベル。手すりへと延びる赤い跡。べつとりとへばりつく手すりの赤色で……察してくれた。

「……ごめんなさい。嫌なことさせてしまったみたいですね」

「……いいって。私が、やったんだから」

「恵飛須沢さん……」

めぐねえが私の隣に立つ。私と同じように景色を見る。

目に見えるのはどうしようもない悪夢だけ。

めぐねえが小さく「夢であつたら良かったのに」と呟いたのが聞こえた。

「……私さ。さつき死のうかなつて思ったんだ」

めぐねえが私を見てくる。

ひどく悲しげで焦燥した表情だった。

「最初は……埋めようとしたんだけど。畑に埋めるのは皆も抵抗あるだろうなつて思つて。でも、このままにしとくのもダメだから……それで、引きずつたんだ。身体に、手を通して……」

「泣きたくなるくらい、冷たかった」

抱きつくのはぼんやりと浮かんでいた夢だった。

叶った。こんなバカらしい悪夢が、握り潰すように叶えてくれた。

「終わった時。気づけば抜け落ちてたシャベルが見えて……刺さるくらいだから、これで首でもやれば一発だろうって」

刺した感覚は手に残っていた。

向ける側が、自分か自分じゃないかっただけの違いだった。

「それで——」

「もういい、恵飛須沢さん。もう、言わないで」

ふわり、と何かに包まれた感覚。抱き締められたのは直ぐにわかった。

そう、これだ。寝る時にも感じたこの「暖かさ」。それを思い出したら……シャベルがそれ以上動かなかった。

「こんな時、どう言えばいいか。私にはわかりません。でも——私が、皆を守ります」

「みんな……？」

「ええ、丈檜さんと万寿くん。若狭さんも、勿論恵飛須沢さんだって。絶対に、私が守りますからね」

その言葉を聞いて。

私の視界が急に晴れたような気がした。

「初めて……」

「うん？」

「初めて、めぐねえを先生って呼びたくなかった」

「……出来れば、もつと前に言って欲しかったです」

「こつ、これからはちゃんと佐倉先生って呼んだ方がいい？」

「いいえ。もうめぐねえで結構です。その代わり——これから恵比須沢さんの事、くるみさんって呼ぶから」

照れ臭くなって離れる。

上がってきた朝日のせいか、顔が暑い。

「……ん」

シャベルを持つ方の手を、めぐねえに伸ばす。

それを見て、めぐねえはポカンとした表情を浮かべていた。

あく……めぐねえ、こういうのあんま知らなさそうだもんな。仕方なく、めぐねえのボールを持つ方の手を引っ張った。

「こうだよ。こう」

「あつ……」

こつんつ、と握った拳同士を当たる。シャベルとボールが微かな金属音を響かせた。

友達が、親友がやるような——友情の証。ちよつとやってみたかつ

た事が出来て、嬉しい。

軽く深呼吸をする。さっきの光景がほんのちよつとだけマシに見えた。

「これからどうすんだ。めぐねえ」

「え？あつ……そうね……取り敢えず、職員室に行こうかなつて。そこなら屋上からすぐだし、非常時に用意されたマニュアルや宿直用に保存食もあると思うの」

「よっしや。んじゃあまずはそこだな」

「……くるみさん。その——」

「——自分がやるからつて言うなよ？」

私は手に持つシャベルを見せる。

そこにはまだ赤黒い跡が残っている。めぐねえのボールと同じように。

「めぐねえが皆を守ってくれるんなら——私も。皆を守りたい。めぐねえを守りたい」

意識して、シャベルを強く握り締める。

「お願いだから、これに——縋らせてほしい」

少しして。めぐねえは軽くため息を吐くと、そつとまた私を抱き締めてくれた。

「無理はしない事。いい？」

「めぐねえもな」

「もう」

もぞもぞと後ろで動く音が聞こえた。

三人が起きたみたいだ。

私は、急いでめぐねえから離れて、意味もなくシャベルを担ぎ、腰に手を当てた。

「みんな、おはようっ！それで早速だが……みんなでサバイバル、するぞ！」

空元気でも明るく叫ぶ。

皆には私のような目覚めをしてほしくない。
それが嘘でも、まやかしても——明るく一日を始めさせたい。

おやすみ、私。

おはよう、あたし。

今日から、この悪夢げんじつを生き抜いていこう。

“つづける”か、“おわる”か。

あたしに残されたのは、その選択肢だけなのだ。

——

「んじや、言った通り。あたし達は職員室を見てくる」

「一時間以内には戻ります。直ぐにごはんも持ってきますからね」

やはり職員室ですか……。

いつ出発を？ 私も同行する（花京院並感）

「柳は駄目だ」

「万寿くんはダメです」

なんで？（半ギレ）

「いや、だってお前……あたしより弱いだろ、たぶん」

お前が……お前が言うのか……！

ここにいるキャラ全員の筋力値を足しても、尚も上回るお前が!?

……何も反論出来ないでしょうが！（敗北）

「そうですよ。武器も無いですし……危ないんですよ？」

その武器をお前が持つてるんだよなあ!?

それがないと今のシヨタじゃあ確かに危ないんだよなあ!? (敗北)

……よし、問題ないな! (0勝2敗)

バカ野郎お前私は行くぞお前! (強行突破)

「駄目だよやーくんっ!」

「そうよ、柳くん。これは遊びじゃないのよ?」

そうだよ!遊びじゃねえんだよRTAはなあ! (至言)

うわっ、あにすんだこら……!!

離せこのっ……!!

流行らせコラ! (がっこうぐらしRTA)

流行らせコラ!! (がっこうぐらしRTA)

「あんな猛然とほっぺをぐにぐにするのが愛なのね……」

「ふふふ。愛が強いから、熱も良く分かるの」

「ほっぺが林檎みたいになってれば、そりゃあね」

幾つもの屍を晒してきた歴戦の私は、非戦闘者プレイもした事があるので——この時間がいかに暇かもわかります。

行動範囲がまだ屋上しかないので、出来る事は野菜の世話と会話だけ。

野菜の世話は、特に消費してないのでいらないですし、会話イベントもゆきちゃん幼馴染ルートのおかげで、今やる必要性はありません。後々、いっぱいありますし。

めぐねえ達が帰ってくるのはリアルタイムで大体、五分程度。

今時走らない流行遅れの『かれら』に、余裕で帰ってくる事でしよう。

暇な上に、時間が良い感じに余る……実に良いものです。
です。

みなさまのため

これ以上のガバが起きないように——攻略WIKIを見ようと思
います。

(時間を無駄にしないのは) 当たり前だよなあ? 情報戦が物を言うつ
てそれ一番言われてるから。

形振り構っていられません。(ガバを) やるか、(ガバに) やられる
か。それがRTAというもののなのです。

私の全ての敗因は『覚醒めぐねえ』です。めぐねえのせいなのです
(これをガバのなすり付けと言います)。

ですので、今の時間を利用して『覚醒めぐねえ』の特性を完全に把
握します。「こんなレアな事滅多に起こらねえし、スルーで大丈夫大
丈夫」という過去の私を全力でぶん殴って行きましょう。

それにこうなってしまった以上、前線で戦っているだけではもう無

理なので、後方でのタイム短縮方法も予習しておきます。

元々のチャートを保全するような形でオリチャーを混ぜ込んで行けば、もう何のガバもない素晴らしいRTAになるでしょう。

こういう時の為に、PCを側に置いといたんですね（例の構文）
すごいよお、かがくのしよりだよお！（ゆきちゃん並感）

「そういうえば、自己紹介してなかったわよね。私、若狭悠里っていうの。宜しくね、丈槍由紀さん」

「……私の事知ってるの？」

「ええ。柳くんといつも一緒にいる子猫みたいな子って有名よ？」

「そっ、そんな子猫みたいにかわいいなんて……照れるよお」

「……柳くんに近づく人に誰彼構わず威嚇するって意味だったんだけど……」

勿論、片手はコントローラーに。

ボタン連打して、会話イベントを飛ばしていきます。

こちらに話を振られる時がありますが、この会話イベントで好感度が増えはしても、減りはしません。それにゆきちゃん幼馴染ルートなので、たとえ下手な選択をしても滅多な事はありません。

適当に流して、チャート再構築に集中しましょう。

「やーくんはやーくんだよー！」

おっ、そうだな。

「そうね。柳くんとは良く話していたし……ねっ？柳くん」

おっ、そうだな。

「……そうなの？」

「ええ、たまに園芸部の仕事を手伝って貰ったりとか……ありがた

かったわねえ、私以外真面目にやる人居なくて……」

「……ふうん。やーくん、そんな事してたんだ。私がめぐねえとの補習の時にやってたの?」

おつ、そうだな。

「私を置いて?若狭さんと?二人つきりで?」

おつ、そうだな。

「ふうん……」

「あつ……。そつ、それよりもっ!今の話をしましょう。少し、怖いけども……」

さて、攻略WIKIを立ち上げましょう。

ブックマークバーに登録してたので、キーボード打つよりもタイム短縮ですね。

あつ、『やさしいきょうしつ』エンドRTAがまた世界記録更新される。『やさしいきょうしつ』の項目を……。

まあ、ゆきちちゃん化めぐねえが量産されたのか、(精神)壊れるなあ……。五分切ってるし、これ終わったら見よ。

ええつと。『覚醒めぐねえ』の項目を……。

《『かれら』との戦闘参加・各種補正の強化・主要キャラの正気度減少抑制・レイイベント発生率アップ》……?

やべえ……。これは確かに覚醒めぐねえですねクオレハ。これですらに万能ステータスなんでしょ?ゴリラに匹敵するなあおい。

……伏せ字で『ゴリねえ』と書かれているのは見なかった事にしましょう。人権尊重ムーブ、いいゾこれ(自画自賛)

なら、二日目にゴリラがいるのは納得です。

正直好感度が高くて、不安は残ってました。覚醒めぐねえの効果が効いたと思うのが自然でしょう。

ありがとう、めぐねえ……でも、ボール盗ってつたのは忘れないよ赦さないよ。

ふむう……でも、やはり突発的戦闘イベントの耐性は弱いのか……覚悟を決める時間があるとかでしょうか、めぐねえ的に。

それでもこの序盤に戦闘キャラが増えるのはいいですね。

じゃあ、ただのシヨタが弾かれるのは当然か……。

これからどうしましょうか。

「……すごい事になっちゃったね」

「ええ、恵飛須沢さんが……その、殺した時から、頭がどうにかなっちゃいそう」

「……やーくん」

おつ、そうだな。

「……やーくん？」

「……少しだけ、そつとしてあげましょ。だって、今二人がやろうとしてる事って——」

「……うん、そうだね。ぎゅー」

——……この状態では、三階制圧もダブルゴリラに頼らねばならぬいでしょう。三階は、数は居ないので問題無いとは思いますが。対策の為、非戦闘員にも武器を……あつ、枝切りバサミ。これはいいですね……

「大丈夫だよ、やーくん。私はずっといるからね」

「……」

「どうかした？」

——……チョーカーさんも助けるには少し手間が要りますね。……うーん、夜はどうせ見張りはゴリラがやるだろうし、その時に何

とかどうにか言い包めて……—

「二人は仲が良いわよね。幼馴染……だっけ」

「うん。あと許嫁なんだよ。前世も夫婦で、生まれ変わって夫婦なの。ねっ、やーくん」

おっ、そうだな。

「二人が羨ましいわ……」

「そう……？」

「ええ、そういうの家族みたいで……私には、そんな……」

——……減少抑制があるとはいえ、減少はするみたいなのでそこはしっかり調整すべきか。……サツマイモ。これで……くそう、なんでこういう時だけは運が良いんだ……—

「どうして、こんな事になったのかしら……私何か悪い事した……？
いままで頑張って真面目にしてきたのに……今度は私から何を奪
うって言うの……また、一人にするの……？」

「若狭さん……？」

——……他の三人はともかく、リーさんは本当に知らぬ間に狂って
る事が多いからなあ。ギリギリまで非戦闘者で正気度回復を優先し
た方がいいか、いやでもな……—

「——どうしてっ！なんでこうなるのよっ！なんでっ！……なんでっ
!？」

「あわわわ……どっ、どうしよやーくん！若狭さんが……」

おっ、そうだな。

「……えつと、えつと……そうだ！なればいいんだよ、若狭さん！」
「……なる？」

「家族はなれるし、なるものなんだよ……だって、そうじゃないと私とやーくんが家族になれないし」

——……だとすると、えんそくも考える必要がありますね。戦闘員になれば行けますが、このままの場合……——

「……か、ぞく」

「だからね。家族——その、ともだちに……なる？一人じゃないよ、若狭さん。ねっ、やーくん！」

おっ、そうだな。

「……いいの？」

「うん！……あつ、でも私の家族はやーくんだけだよ心配しないでねやーくん、やーくんの家族は私だけだよわかったやーくん？」

おっ、そうだな。

「……かぞくはなれるし、なるもの。そうよね、なら私は……——」

「若狭さん……？」

——……ふむう。後は何か必要な事は……——

「ごめんなさい。丈檜さん。取り乱しちゃったりして。その……私でよければ友達になってくれない……？」

「うん！もちろんだよっ！よろしくね——りーさん！」

「りー、さん？」

「えつと、ね。若狭悠里さんだから、後ろを取ってりーさん！友達ならアダムだよっ！」

「……………でも、私の事も愛してるって言ってたわよね」

「ええー？もーっ、りーさんったら。やーくんがそんなこ——」

おっ、そうだな。

「——えっ？」

「昨日の夜だつて抱き合つて寝たものね」

おっ、そうだな。

「——ええっ!？」

「熱烈だつたわ」

おっ、そうだな。

「……………っ!」

「——なーんて。ふふっ、冗談よ。こういうのって一回やってみたか……あの、ゆきちちゃん？顔が……」

おっ、そうだな。

「いや、あのね？私も二人と仲良くなりたくてあの冗談だったのごめんな——」

「——やーくんの浮気者っつ!!」

——ふむ。

まあ、こんぐらい考えれば大丈夫でしょうか。

さて、会話イベントはどれだけ進——ふんならばっ!?(ガード不能・中ダメージ・スタン付与)

屋上から、三階へ。

階段を下りる毎に、ボールを握る手に力が入った。

「……………」

遠くで聞こえる、人ならぬ呻き声。生徒だった、『かれら』の声。

やらなくちやいけない。教師である私には、守るべき生徒であるあの子達がいる。

「……………めぐねえ」

階段も終わる。

目の前には誰もいない。でも、曲がればいるだろう『かれら』が。一緒に来てくれたくるみさんの顔は強張っていた。…………その大きな瞳に映る私も、似たような顔だ。

「…………取り敢えず、確認します。左は私、右はくるみさん。数が多ければ、一度引き返しましょう」

「ああ。わかった」

足音を経て、静かに壁に背を当てる。聞こえる心音が、耳の奥でうるさい。

ボールを見つめ、深呼吸。

大丈夫。あの子達の為なら、私は——出来る。

「——いくぞ」

くるみさんの言葉を合図に、意を決して、顔を覗かせて…………

——拍子抜けした。

「……………居ない?」

廊下には誰も居なかった。

まるで、あの悪夢が無かったかのように——直ぐに、廊下のあちらこちらに散らばる血が現実だと教えてくれたが。

「……………どういう事？」

昨日を思い出す。

あの時、屋上まで戻る時は十数体の『かれら』がいた。教室にいたのも数えればもつといただろう。

なのに、今はとても閑散としていた。……………移動したという事？

「めぐねえ。教室には何人かいる。それでも二人、か……………」

くるみさんが近くの教室を覗きこんでいる。

呟く言葉に嘘はないのが分かるほど、素直な驚きが見えた。

くるみさんへ手招きして、屋上への階段へと戻る。

ある意味、想定外の事態だった。

「あたし、リアル無双ゲーの気持ちだったんだけど……………」

「……………そのたとえはよくわかりませんが。沢山いる事は私も想像してました。……………良い兆しなんでしょうか」

「……………だと思う。罨……………できると思わないしな」

茫然とよだれまみれで寄ってくる『かれら』。

そこに知性は見られなかったように思えた。そう考えれば、今は本当に運が良い時なのかもしれない。……………罨だったら、おしまいだが。

「目的は変わりません。職員室へ」

「ああ」

とはいえ、このままびくついてる訳には行かない。

私達は廊下へと躍り出た。

ゆっくり進む中。

私達の現実だったものは崩れ去ったのを如実に教えられた。

割れた窓、血に塗れたハンカチ、跡、跡、跡——ひどい、匂い。

飲みこむ生唾に、その味が通るようで——吐き気がした。

職員室にいた『かれら』は三人ほどだった。

そしてその『かれら』は——私にとって、良き同僚たちだった人達。あのジャージは、あの大きなお腹は、あの小さな背丈は——間違えようもなかった。

「……………」

「めぐねえ」

放心するのは一瞬。肩に乗せられた温もりが、我に返してくれた。振り向く。強張りながらも——決心した瞳、光に反射するシャベルの金属。それが見えた。

「…………あたしがやる。めぐねえは、その…………」

「いえ、ダメです。私も…………」

そこで。

ひた…………ひた…………と、引き摺る足音が聞こえた。

「——っ！」

私達が覗いていた職員室の扉——その反対側。開いていたのだからその扉から、一人の『かれら』が出てきた。

見た事のあるスーツだった——何故なら、私と一緒に選んだものだったから。

見た事のある姿だった——何故なら、私の同僚だったから。

見た事のある顔だった——何故なら、私の友人だったから。

「——神山先生…………！」

の——『かれら』。

最後の、最期。私に警告してくれた——一番仲が良かった同僚。良き隣人、だったもの。

ソレは、緩慢な動作で首をぐるりと動かすと、白く濁った目で私を捉えた。

小さな呻き声、求めるように手を伸ばして来る。それがどういう意味かは、口から延々と漏れ出る涎が教えてくれた。

「——っ、来やがった！」

先んじて動こうとするくるみさんを止める。

一步前が出る。両手でボールを握り締め、ゆっくりと振り上げた。誰もが見れば分かる。振り下ろす構え、攻撃する動き——それでも、『かれら』は向かって来た。

「……よかった」

これは神山先生——だった。『かれら』だ。

なら、私に出来るのは力を込めて、それを振り下ろすだけ。

「じゃあね、昭子ちゃん」

『かれら』についてわかった事。

動きが非常に緩慢。攻撃しようとしても避けようともしない——頭を潰せば、もう動かない。

職員室に立っているのが私とくるみさんだけになった時、それが良く分かった。同僚達が、未熟な私に教えてくれた最後の事だった。

職員室の扉を閉める。これで『かれら』は、こちらに気付かないだろう。

息を整えるくるみさんに努めて、落ち付いて声を掛けた。

「大丈夫？くるみさん」

「……大丈夫、だけど——大丈夫つ、じゃない……」

「……少し休んで。私が必要なものを集めてるから」

「それは、めぐねえだつて……」

「私は大丈夫です。ホラー映画とか大好きで良く見えましたから」

「——うそつけ。序盤に流れるBGMにすらビビリそうなくせに」

——なぜバレた。

とはいえ、くるみさんは休ませるべきだ。彼女を面談用のふかふかソファに座らせる。

勇気ある子。でも——彼女は私が守るべき生徒だ。

なら、任せるところは任せる。気負うべきなのは気負う。そうした

メリハリは大切だ。

それに動いていた方が、気が紛れる。

集めるべきは先生達が持ち寄っていたもの。

暇な時に摘まむおやつ、宿直用の置いてあったカップ麺、私が持ってきていたダイエツト用のカロリーメイト。

それを先生達の誰かのバッグに詰める。中身は捨てた。もう、使う人はいない。

集めるだけ集めた。バッグ二つに満載。これを切り詰めて行けば、三日は大丈夫なはず。

「ああ、でもカップ麺は……」

ポットはある。だが、お湯はどうしよう。

まさか直にバリバリ食べさせる訳にはいかない。屋上の太陽電池のおかげで電気は動いているし、ポットで沸かして持ってくるのは……ああ、でも人数分は量が。往復するにしても『かれら』が潜んでる中は危険だ。誰かだけでも可哀そうだし、どうすれば——

「延長ケーブル」

ふと、くるみさんが声を掛けてきた。

ソファから立ち上がり、軽く屈伸している。

「あの丸くて、ケーブルがまとまってるやつだよ。どつかのコンセントに刺して、屋上まで持っていけば、あっちでもポットは使えるだろ。水はまだ出るだろうし」

……それは考えつかなかった。

それにしても。

「なっ、なぜ私がカップ麺で悩んでいるってわかったの……?」

やはりこの子は天才か。

頭も良く運動できるとか、心の中の若い私（今も！）が嫉妬僻みの嵐なんだが。

「いや、そりやめぐねえ——カップ麺両手にウロウロしてたら想像つくって」

「あっ……あー、これは恥ずかしいところを」

「ちよつと可愛かったよ、年の割に」

「もうっ、からかわな——今、なんて言いました？」

「さてっ、こーたいっ！今度は私が探すよ。めぐねえは休んでな」

「今、なんて言いました？ねえ、なんて言ったの？謝らないとボールがどこに飛ぶかわかりませんよ」

「——めーんごっ！」

くっ、かわいい。許す。

くるみさんは教えた用具棚を漁り始めた。あの中には、他にも使えそうなものがあつたからきつといいのも見つけてくれるだろう。

その間に、私は——

「……………」

生徒名簿を手にとった。

机に座り、綺麗な紙を取り出して、名簿を開く。

まず思い出すべきは——最初に殺した生徒の名前。

変わり果てた顔を思い出して、照らし合わせる——見つけた。その名前を書く。

次に書くのは、殺した同僚達の名前。一つ一つ、噛みしめるように書いた。

——『かれら』は生徒だった。同僚だった。良き隣人だった。

そう、だった。

だから——忘れる訳には行かない。

「……………」

いつか、この罪が償える時。

忘れない為にも——殺した『かれら』の名前を書く。そう決めた。

書き終わり、ペンを置く。

少し、深呼吸をして、引き出しを開けた。

そこには——職員用緊急避難マニュアルと書かれた、仰々しい文書があつた。部外秘と赤く書かれた表紙が、実にしかめっ面だ。

……赴任した際に渡されたこれ。埃をかぶるだけのものだと思っていたが、使う時が来るとは。

「——それが、マニュアル？すげえこわい表紙」

気が付けば、くるみさんが肩越しからこちらの手元を見ていた。背にはバッグの一つ。手には延長ケーブルとシャベル。あとは、腰に――縄？

「……それ、何に使うの？」

「ああ、この紐？まあまあ、気にしない気にしない」

そう言われると余計気になるんだが。

「で。そのマニュアル。今、読むのか？」

くるみさんに聞かれて、そうは思っていたが――彼女がもう準備万端なのに、悠々と読む訳には行かない。

「いいえ。持っ^ていき^ます。大切^なもの^ですし、皆^と一^緒に^見ま^しよ^う」

「ああ、そう。まあ、情報の共有は必要だしな」

くるみさんに急かされるように、私はマニュアルをバッグを詰め、ポットとボールを持った。

……残った彼らの死体は、後で処理しよう。くるみさんのように。

……ゲームみたいに自然と消えてくれればいいのに。

屋上までの道。

小さくカラカラとケーブルが延びる音だけが響いていた。

「――今がチャンスだと思う」

くるみちゃんが突然呟いた。

「このまま屋上にいたってダメだ。日除けは少ないし、雨でも降られれば風邪引いちまう」

それで、なんと言おうとしているかわかった。

「……どういう訳か、三階には数は居ないですもんね」

「ああ、階段にバリケードでも作って、三階にいるやつら^を処理すれば

――」
「――私達の安全地帯が手に入る」

「そゆこと。まあ、今は飯にしようぜ。あいつらも腹空かせてるだろ

うし」

まあ、私は腹空いてないからいらねえけどな、とくるみさんは笑った。

……それは私もだ。あんなのを見た後に口に何か入れたら吐きそうだ。あの子達にも、あつちで済ませたと嘘をつこう。心配させないように。

階段を登る。

そこまで行けば、流石に緊張も解けてきた。
くるみさんと「なんとかあったね」と笑い合っていると、

——外で騒ぎ声が聞こえてきた。

「……っ！」

緩んだ緊張が、背筋に鋭く突き刺さる。

まさか、私達が居ない間に『かれら』が入って来た？それとも、噛まれた誰かが居て今襲ってきたのか？

直ぐに駆け出して、扉を開ける。

そこには——

「ぬぐおおお」

「やーくん大丈夫!?ごめんね、結構奥に入ったよねっ！」

「ごめんなさい、なぎくん！私に変な茶目っ気なんて出したから……っ！」

『かれら』よりもゾンビみたいな呻き声を上げながら蹲る万寿くと、その周りでわたわたしている丈檜さんと若狭さんがいた。

特段、血の匂いはしなかった。

「なにやってんだあいつら……」

私も思う、くるみさん。

——持ってかれた！

ゆきちゃんのビンタで、HP半分が持ってかれた……！脳も揺らされた……！！

「やーくん大丈夫!?ごめんね、結構奥に入ったよねっ！」

入るどころかめり込んだ気がするんですが!?

痛恨の一撃と会心の一撃が、同時に入った気がするんですが!?

「ごめんなさい、なぎくん！私が変な茶目っ気なんて出したから……！」

茶目っ気って何言ったの!?

ゆきちゃんオークの腕力を獲得するほどの冗談っていったいどんな冗談なの!?

「——なにしてんだよお前ら。びっくりさせやがって……」

ああ、ゴリラが帰って来た。

……なに持ってきた……??

「んん?ああ、カップ麺」

ベネ。

回復量、高い。オデ、今ソレ、必要。

テ。オ湯ハ……??

「電気は使えるので、延長ケーブルを引いてきました。これで温かいものが食べれますよ」

なら、3分のを2分でお願い……そうすれば固めで美味しくタイムたんしゅ……ぐう。

「やーくううん！」

二日目・午後 Warm

戦闘力皆無なはずのゆきちゃんにビンタされて、HP半分持ってかれたクソザコシヨタのRTA、はーじまーるよー！

……。

かなり叫んでみましょう。

元気でー！ーすっ！（やけくそ）

ゴリラズがカップ麺を持ってきてくれて助かりました。もし無ければ、私はリセットの向こう岸へと繰り出していたところでしょう。

朝食兼早めの昼食の時間です。

皆で輪になって、カップ麺を食べましょう。

ポットと延長ケーブルを持ってきてくれているので、皆が食べる事ができます。これらが無ければ、お湯が足りず、あぶれた誰かがカップ麺をクツキーモンスター（動詞）しなければならなかったのでありがたいです。

こうした差を作ってしまうと、正気度増減の値が変化しやすいので注意。ラブ&ピース！平和で平等なのが一番！

「やーくん、リーさん、ごめん……」

「いいえ、ゆきちゃんは悪くないわ。ごめんなさい……なきくん」

……私は赦そう。

だが——RTAこいつが赦すかな！（豹変）

RTA「赦そう」

だそうです。

シヨタがイキかけましたが、結果的に回復しています。どのみち、飯は食うつもりだったので、RTA的にはロスらしいロスはしていませんので特に問題はありません。

チャートは補強できましたし。

……ビンタは、走ってる最中にWIKIを見るといふ暴挙をRTAの神がお赦してくれなかったただけなんでしょう。

……チャーメン……（走者の祈り）

「ん？なぎくん、リーさんって……アダ名か？」

「あつ、うん！これから一緒なら仲良く！だよ」

「へえ、いいなそれ。あたしらも混ざっていいか？」

「もちろん！」

おつ、アダ名呼びイベントが始まりました。

このイベントは主要キャラが一堂に会し、好感度・正気度が著しく低くなければ大抵発生します。

アダ名で呼び合うようになれば、互いの好感度が下がりづらくなるので、ありがたくスルーしましょう。

ゆき、リーさん、くるみ。

あとは、めぐねえですが、先生という立場を誇示するのでやんわりと拒——

「めぐねえはめぐねえだねっ！」

「ああ、よろしくな。めぐねえ」

「改めてよろしくお願いします。めぐねえ」

「もう……はい、宜しくね。ゆきちちゃん、くるみさん、ゆうりさん」

おやおやおやあ？

……覚醒めぐねえのせいか（直感）

まあ、特段メリットもデメリットも無いので気にしない方向で。

「やーくんはやーくん！」

「そうね、なぎくん」

「んー……まあ、あたしは普通にやなぎで」

「やなぎくんも宜しくね」

私にも、しっかりとイベントが来ました。

好感度が足りないとなチュラルにハブられたりするので、よかったです。ゆきちゃん様々ですね。

「——そういえば、二人は食べないの？」

おっ、その話題は。

「……あー、ごめんな。あたしら我慢できなくてあつちで済ませてきたんだよ。なっ、めぐねえ」

「ええ。ですから、気にしなくて大丈夫ですよ」

「……………そう」

はい、嘘です。二人は何も口にしていません。

それはりーさんにも伝わってます。

これは、戦闘に参加するキャラの起こす現象ですね。

戦闘慣れしていない序盤は、食欲が減退しほんの軽いものしか食べなくなりませす。特に肉や赤色の食べ物はダメです。

……まあ、ついさつきまで知り合いだつたのをフルスイングでぶっ潰しているのでもありなん、ですけど。

ですが、それではダメです。

二人がお腹空いていないと思っけていても、二人の空腹値は容赦なく減っており、ステータスに影響を及ぼしています。

……だいたい一日は食べていない事を考えると——今の状態が続くと行動が精彩を欠き始め、些細なミスが発生するようになっていくでしょう。

私先頭立って三階を制圧するのであれば放置でも構いませんが、この二人に任せるしかないこの現状。ガバを引き起こしかねない要因は排除せねばなりません。

……本当なら、一緒にカップ麺を食わせたいところですが、それは諦

めて菓子くらいは食べて貰いましょう。
とはいえ、特別なにかする必要はありません。

ズルズルズル。

ああ、やっぱラーメンは醤油に限るんじゃないか。

このサツパリ感が……たまらねえぜ。

お前どう？……豚骨醤油？またヘビーなもんを……だからそんな
デカイんですかね……（リーさんを見ながら）

ちらっ。

「……………」

「……………」

もう一押しですね。

はい、ゆきちゃんあーん。メンマ食い。えっ？チャーシューがいい
？……もー、しょうがないなあ。はいっ、あーん。おいしい？ああ、良
かったねえ。

そんな笑顔を見ると――

ちらっ。

「……………ぽり、ぽり……………」

「パリッ……………」

――勝った。

決まり手、ゆきちゃんの写真――プライスレス。

めぐねえとくるみちゃんが各々適当に菓子を摘まみ始めました。

一度してしまえば、求めるのが人間です（意味深）。

合間合間に食べ始めるので空腹値を心配する必要はなくなります。

やったぜ。

「……………やったわね、なぎくん」

リーさんが私の意図に気づいたらしく、好感度が上がった模様。ダブルやっただぜ。

では、食事をさっさと終わらせて三階制圧に移りましょう。

いやあ、どうなるかと思っただけど意外に何とかなるもんですね。悩みの種である覚醒めぐねえ（柿の種）が可愛く見え——

「そういえば、皆さん。良いものを持ってきましたよ」

ん？

「良いもの？なあに、めぐねえ」

「ふふふ……じゃーん」

「……職員用緊急避難マニュアル？随分、物騒な表紙ですね」

えっ？

「こういった非常時になったら見るように、と教員全員に配布されたものです。……あんまり期待はできませんが、今の事態に有用なものが書かれてるかもしれません」

「サバイバル術とか？そういうのだったら必要そう」

「でしよう？だから——」

……は？

「——皆さんと一緒に見ようと思って」

………（思考停止）

なっ——

なんてもん持ってきてやがる、この《検閲済》！

バカかバカなんだなバカじゃないとできねえよ、この《みせられないよ》！《みせられないよ》！！《みせられないよ》！！

だから、お前は万年《nice boat》なんだよもう！

ぬわあああああああ！！

これもめぐねえか！覚醒めぐねえのせいかな!?——そうだよっ!!!（断言）

どっ、どうする……！

ここでもんなもん見たら三階制圧以前に、RTAどころじゃなくなるぞ……!!

まず、めぐねえがこっから飛び降りて、皆の正気度ストップ安！RTA株は紙切れ以下、価値ゼロになるううう!!

ここは——！

「では——」

——多少不自然でも真っ向から誤魔化すしかねえ!!

おっ、待てい（江戸っ子）。

こんなのいつでも見れるんだよなあ。まずやる事があるってそれ一番言われてるから。

このまま屋上に居てもダメだゾ。なんか考え、あるんでしょ?（知将）

疾きこと風の如し、侵略すること火の如くってはつきりわかんかね

（武田並感）

だからそれ仕舞って?あくしろよ……あくしろよお！

「……………そう、ですね。やなぎくんの言う通り、目先の事を済ませてからにしましょうか」

「そうだな。その方がいい。皆、聞いてくれ——これからの事だ」

勝った！RTA……完！（まだまだ続くんじや）

とはいえ、安心は出来ません。

なんとかできたのは、このマニュアルが『あつてもなくても構わないもの』という認識であるからです。こんな事態が想定されてるなんて思ってもないですからね。だから正気度減少の値が死ぬほど多いのです。

ですので、何の気無しにこの悪魔の書を捲ろうとする愚か者が出るやも——いや、出ます（反語）。

まだ間に合います——焼きましょう。

職員室にある教員全員のもの。その後は、めぐねえのものです。

……あつぶねえ。

なんとか挽回できそうですね……。

「やなぎも気づいていたみたいだけど——」

という前置きと共に、ゴリラズは『このまま屋上においても体力を消耗するだけ、三階に通りの設備があるのでそこを一先ずの住処にしよう』と提案してきます。

その為には、三階にいるやつらを一掃する必要があるとも。

よし、これで三階制圧のフラグが立ちました。

ゆきちちゃんとりーさんは渋りますが、このままでも意味ないというのは分かっているので、頷いてくれます。

皆、察しがよくて好きですが、そういうところが嫌いです（ガバの要因）。

では。

この後、戦闘になります。

こちらにはシャベルゴリラとボール万引き犯がいるので、だいぶ戦力過多ですが、こちらも出来る事はやっておきましょう。

おう、りーさん！その恵体揺らして、ちよつくら園芸部の備品の枝切りバサミを持ってきてくれや！

「……武器に使う気？」

使うけど使わないから大丈夫だよ（適當）。

「……………」

渋々ですが、リーさんが枝切りバサミを持ってきてくれました。往年のシザーマンが持つてるデカイハサミの農業版ですね。

これを分解すると、ほど良い短さの槍として使う事が出来ます。しかも、二つになるというコスパの良さ！これは大きいですねえ！（リーさんを見ながら）

攻撃箇所を絞れば即死が狙え、且つリーチが少しはある——ベストではありませんがベターな武器です。

期待を込めて、枝切りバサミさんと名付けましょうか。自分のネーミングセンスにクラクラしますね（照れ）

片方はリーさん。もう片方は私が持ちます。ゆきちゃんは戦闘力が皆無ですので、（持たせたところで）意味ないです。

……あのビンタは本当になんだったんだ……（戦慄）。
常に使えるようにすればゆきちゃんも戦闘員で行けますかね。これ走り終わったら検証してみましようか（向上心の塊）

はい、リーさん。大切にですね。

「……………枝切りバサミさん……………」

私の苛烈なハイセンスについてこれないなんて遅れてますね（嘲笑）。

これで武器が手に入りました。……最強バトルには劣るので不安は残りますが、これでゴリラズが討ち漏らしたやつを倒して、スキル

ポイント確保を狙いましょう。

運良ければ戦闘組昇格、本チャートに戻れるチャンスだぜ。

「はい。脇からちよつと失礼するぞー」

むっ?ゴリラが抱きついてきました。

くるみちゃんは好感度が高い相手には積極的なスキンシップを取ってきます。

これは好感度足りてますねえ! (歓喜)

「——むっ」

「ゆきちゃん。大丈夫よ、腰を見て」

「——むむっ」

「それもダメなのね」

はっ?腰?

腰に……紐?……これは、紐ルートお!?

私の腰に紐が巻き付いてあります!これは信頼されてない時に発生する行動が著しく阻害されてしまう魔のイベントです!

やっぱり好感度足りてないじゃないか! (憤怒)

「——ごめんな、やなぎ。りーさん」

「ええ、私が持つてる。絶対に離さないから安心して」

「たのむ」

「——むむむっ」

「……なんで、ゆきは膨れっ面してんだ。ていつ」

「——ぷひゆい。なにするのっ!」

なにするの、はこっちの台詞なんだよなあ……。

えー……まあ、紐ルートは動きづらくなるだけなのでそこを考慮していれば戦闘行動自体可能です。クソザコシヨタはゴリラズとは違

い、攻めるよりかは迎撃でカウンターを狙った方が効率が良いので。最悪、枝切りバサ槍さんを使って脱出する事も考えときましよう。が、紐ルートが発生しているという事は、ゴリラとの信頼度が足りてない事を示しています。これは後でゴリラに媚びを売っておかねばなりませんね……。バナナとかあげればいいんでしょうか。

「——やなぎくん」

おう、なんだ正気度テロリスト。着実に罪状増えてるからなお前な。

「どうか、気をしっかり持ってね。……私達が、付いてますから」

……？

なに言っただこいつ。

「私とくるみさんがやります。三人は後ろから警戒して下さい。かれらが近づいてきたのを知らせてください。……無理をする必要はありません」

めぐねえの号令と共に、三階制圧が始まります。

ふふふ。太陽の光に照らされて、枝切りバサ槍さんが輝いています。これは行けます。期待できそうですね。

こちら現場です。

「はあっ………！」

「……っ！」

ゴリラズが無双しています。大体一撃で仕留めてます。

こつちに『かれら』が来る気配がありません。……つうか、これ一部屋に2、3人しか居くないか……？

一部屋に何人いるかはランダムで、少なくて2人・多くて30人というガバガバで選ばれます。

つまり、三階は——良い引きを連発しています。なんでこういう時だけ良い引きすんの！

自己ベが絶賛更新中なんですが！（複雑な思い）

いつもは死角やロッカーなどの隠れた所に、ひよっこり出現したりするのですが——それも無く。果敢な大進撃が続いています。もう半分からいいですね。

このままでは、『かれら』が完全に駆逐される……！こつちにお鉢すら回ってきません！

——くそつ、誰か……誰か居ないのか！スキルポイントがなくなっていく！

体裁など気にしてられません。ロッカーや教室、手当たり次第覗きに行きます。紐など知るか！

まだ誰か残ってるか？（本当に動かない）死体だけです。ぎやっでむっ！

「やーくん……」

「なぎくん……離れましょ。もう、誰もいないわ」

いるねっ！絶対いるねっ！ロッカーとか低確率で！

私がいるって思えば、開けるまではそこにいるかもしれないだろ！

（シユレディンガーの猫並感）

くそつ、先駆者兄貴達の時には大抵いるのに、どうして私の時はもぬけの殻なんですかねえ!?

手頃な奴、その辺で適当してる奴とか！

早く……早くしないとスキルポイントが……！

「——このぐらいか」

「ええ、もうこの階に彼らは居ないみたいですね……」

——ジーザスツツ!!!

戦闘終了!

被害ゼロ! 私の獲得スキルポイントもゼロ! プラマイゼロ!!

自己ベ更新! タイムも良き! 私がやった時よりはやーいつ!

ちくせう。

………。

私達いりましたかね、この戦闘!?

枝切りバサ槍さんが……意気揚々としてたのに出番が無かった枝切りバサ槍さんが見えないのか貴様らあ! おいどんは恥ずかしかつ!

三階制圧した後は、急いでバリケードを設置します。ほつとくと、二階から補充要員がやってくるからです。

バリケードには机と椅子が大量に必要になり、本来なら一日は掛かる行程ですが——スタミナバーギリギリ酷使走法を会得している私の手にかかれば、夕方には形は出来上がります。

どうせ、終わったら特に重要な事もないので、惜しみ無く酷使していきましよう。

全身筋肉痛になるのはシヨタであつて、私ではありません(無慈悲)。

「——やなぎくん。このぐらいでいいわ。後は私達がやるから大丈夫よ」

おつ、ストップが出ました。

では後は任せましよう。このシヨタにバリケードを作るスキルは

ないので邪魔にしかありません。疲労がマックスなので参加すると音を盛大に立ててしまい、二階のかれらを引き寄せる結果が見える見える……（五敗）。

ああ……労働の後の夕日が眩しいぜ。

「ゆきちゃんもお疲れ様」

「……うん。やーくんと、屋上に行つていい……？」

「ああ、いいぜ。これが終わったらあたしらも行くよ」

という訳で。

ゆきちゃんと行動開始、自由行動のお時間です。

ですが、三階が開放されたとはいえ、各種施設はまだ使用できないのでやる事はまたありません。

本チャート通りなら、屋上で適当に待つてればバリケードを設置し終えた三人と合流、就寝になり——二日目は終了になります。

三階が開放されたので、今日はおシャワーでお布団。こういった衛生的なものはあるのとないのとはダンチなので、さっさと制圧したんですね。

まっ、他にも理由はありますが（意味深）。

「……………」

ゆきちゃんがアンニュイな感じですよ。

初めて、人の生き死にを直視するとこんな感じになります。この状態が続くと、他のキャラにも影響が出るので良くありません。本チャートであれば、屋上でのお話で和らげます。

ですが、ここは——。

ゆきちゃん。

「なあに……？」

焼き芋、食おうぜ。

「えっ……？」

チャート補完、あーんど回収！

初日と二日目で、本来やるべきだった事を今やりましょう。

ただ待っているだけなど、RTA走者にあるまじき暴挙！こういう時は無駄の無い無駄じゃない動きをしましょう！

向かうべきは、職員室。

教員にはタバコを吸う奴もいるのでライターを余裕で見つけられますし、今は人目はゆきちゃんしかいません。隠蔽工作など容易い容易い。

紐ルートの事もあるので、皆の好感度をまとめて稼ぎに行きましょう！

あつ。職員室の死体がまだ消えてません。

……オブジェクトが消えるタイミングっていまいち把握されてないんですよねえ。気が付けばもう無くなってるのが多くて。

まあ、居ても居なくても特に意味はないのでちやっちやと済ませてしましましょうか。

——ぐしやあ。

潰れて、はじけた。遠くから聞こえた、そんな音。

それが——耳に纏わり付いて離れない。

「……っ……っ」

「ゆうりさん……」

「すみません……もう少し……このままっ……」

リーさんがめぐねえにすがりついている。震えた身体、冷たくなった手を温めるように、めぐねえが静かに抱き締めていた。

気持ちはわかる。あたしだって、先輩の事がなければあんなって

た。冷たさが伝わってくるように感じて、気付かれないように顔を背けた。

バリケードを作り終わった後。

あたしとめぐねえ、リーさんがやったのは——後処理だ。

三階を住処にするなら綺麗にしとかなきゃいけない。血だなんだは気が滅入るし、よく知らないが病気になるしうさだつた。

それに——もう動かない『かれら』を放置しておく訳には行かなかった。

直ぐに済ませる部分はそれだった。

最初、リーさんにやらせるつもりはなかった。

やなぎとゆきの様子を見に行つて欲しいってのもあつたし、こんな事をやる人など増やしたくはなかった。

でも、リーさんは気丈にもやってくれた。

おかげで早く終わった。……リーさんの精神に傷を付けて。

「……ありがとうございます」

数分して、リーさんがめぐねえから離れた。

顔色はマシにはなっていた。

「……今日は、もう休みましょうか。掃除は明日にしましょう」

その言葉に異論はない。

もう、気が参るような事なんてしたくなかった。
やらなくちゃいけない事をやった。そのはずなのに、誇れなかつた。

血に濡れたシャベルが、ひどく虚しかった。

「……………」

「……………」

「……………」

屋上までの道。

色んな疲れのせいか足が重くて、中々進んでないように感じてしま
う。

「やなぎは」

ふと、口が滑った。

「やなぎは、軽蔑したかな」

「そんな事——」

「だって、あたしが殺したのは——あいつの友達だ」

やなぎは人気者だった。

なぜなら——学校中の全員と友達だから。生徒も教師も、用務員と
だって。誰にでも名前呼びは当たり前だった。それはあたしもだし、
りーさんも、めぐねえだってそうだ。

アイツがいるところは、いつも明るかった。

そんなアイツの前で——友達だった奴を殺した。

肌は赤黒く、血と涎に塗れて、あたしには誰が誰なのか判別なんて
もう付かなかったけど——アイツはきつと、気付いただろう。

「やなぎくんは、言ってたわ。——『誰も居ないのか』って」

りーさんが呟いた。

「ロッカーとかトイレとか。誰かが隠れられそうなところを何度も見て
た。くるみが紐で結んでくれてなければ、飛び出していたかも。あれ
は良い判断だったわ」

「……そっか。そこだけは良かった」
「ええ」

沈黙が、少し流れた。

ちらりとめぐねえを見ると、何を言おうか言うまいか悩んでいるようだった。

それでも、何も言わず——ただ、ボールを強く握りしめた。

何を言えいいのか。

あたしにも分からなかった。

ただただ沈んで行く空気が変わったのは、屋上への階段を登り切ろうとした時。

物理的に、空気が変わった。

「なんか煙たくないか」

「確かに」

「いったいなにが……？」

疑問のまま、扉を開けると——

「いいかね、ゆきちちゃんくん。焼き芋はね、タイミングなんだ」

「タイミング？」

「焼きが短くても、長くてもダメ。じつくりコトコト、でも焦がさない

……シチューのような心持ちでなくちやいけないんだ」

「……にやるほど？」

園芸部の畑——その端で、黒い煙を上げながら燃える火の側でしゃがみこむ、やなぎとゆきがいた。

枝切りバサミから作ってた槍で焚き火の灰をかき混ぜながら、やなぎは講釈を垂れていた。横のゆきは確実に良く分かっている。

「おっ、皆。おつかれさん」

「なに……やってんだ？」

「なについて……焼き芋。あつ、ゆきちちゃんくん。皆に例の物を配るよ
うに」

「はーいっーくるみちゃん、リーさん、めぐねえ！これどーぞ」

さつきよりも一段と明るくなったゆきが渡してきたのは——軍手だった。

「園芸部から勝手に使ったけど、大丈夫だった？」

「え、ええ。別にそれはいいのだけでも」

「じゃあ、よし！焼き芋よおい！」

「焼き芋よおい！」

やなぎがそう言うのと、ゆきがばたばたと焚き火に駆け寄る。

……さつきとは打って変わった明るい雰囲気。あたし達はただぼんやりと見ているしかなかった

「やーくん！熱くて取れない！バサ槍さん貸して！」

「なぬ。オーライ、任せろ。このバサ槍さんにかかれば……！」

枯れ葉と紙カスに塗れた焼き芋を、枝切りバサミの槍で掻き出す。

その刃先で、ついつと突つつけば——湯気と一緒に、美味そうな黄色が見えた。

上手くいったようで、ニヤリと笑い合う二人の顔。

——何故かすごくほっとした。

「ん？」

安心したようにあたし達を見ていためぐねえが、ふと焚き火をじつと見たと思ったら、ずずいつと近づいた。

ぎくり、とゆきとやなぎの肩が揺れる。

「ねえ、やなぎくん……」

「な、なななんですか？」

「今、焚き火から紙が見えたのだけど、あれは？」

「しよつ、職員室にあったのを使っただけ！適当に……適当に！」

「そう——今、ゆきちちゃんの名前が書かれたテストが見えたわ」

「——貴女のような勤の良い教師は嫌いだよ」

「もーっ！なにどさくさに紛れて赤点燃やして、証拠隠滅してるの！」

——ぶふっ。

急な事で、あたしとリーさんは吹き出してしまった。

こんな状況で何してんだコイツは。

「はっはっは」

「誤魔化さない！」

「あつ、くるみの赤点もやっといたよ」

「おつ、サンキュー」

「——くるみさん！」

「りーさんのは無かったからしなかったよ」

「……ここで仲間外れはなんか嫌ね」

「——ゆうりさん！」

「因みにこの証拠隠滅の発案は、ゆきちゃんです」

「ええ！なんで言うのやーくん……あつ」

「——ゆきくちやくん？」

「わっ、私にだけ当たりが強い！やーくんがやったのに！」

「焼けてる赤点の大半が貴女のなんですから当たり前でしょう!!」

ひいやああああ！と叫びながらほっぺをむにゆられるゆき。

その間、やなぎは——ほつと息をついていた。……怒られる矛先を逸らすとは中々の智能犯だった。

やなぎは枝切りバサミの槍で器用に焼き芋を半分に切ると、それを誰かの赤点用紙に包んだ。

「さあ、食いねえ食いねえ。——おつかれさま」

焼き芋が手渡される。

じんわりと——手が温かさで包まれた。甘やかな湯気があたしの顔を撫でた。

ふと、目頭が熱くなった。

「——ありがとう」

自然とそれが口から出ていた。

「大事に食べるからな」

「……うまだいっぱいあるから遠慮しないでいいよ？」

「バカ。そういう事じゃねえよ」

「……う？……う？」

分かつて無さそうなやなぎの頭を、リーさんが静かに撫で始める。

「はい、リーさんもお上がりなさいな」

「ええ。……あら？手が塞がってるわ。食べさせて？」

「……頭撫でるのを止めるか、バサ槍さんを離せばよいのでは？」

「あーん」

「……」

「あーん」

「……あーん」

「ふふっ、ありがとう」

……。

温かな光景を見ながら、焼き芋を食べる。

じんわりとした熱と、ねっとりとした甘さが喉を通る。

冷たさを消すように。

「ふふっ」

不思議と、何かが軽くなったような気がした。

——夜が更ける。

昨日とは違って、コンクリブルシートは卒業だ。

三階中から集めた簡易布団を並べて、被害が無かった資料室を寝室に、そこで休む事になった。

その前で、あたしは——軽くシャベルを素振りする。見張りを買つて出たからだ。

ガラガラと寝室の扉が空く。

振り向くと、めぐねえが申し訳なさそうに顔を出していた。

……その後ろで、やなぎがゆきに襲われてるんだが、あれは大丈夫なのだろうか。

「見張りを、任せて大丈夫？」

「ああ、バリケードを作ったけど不安は残るだろ？」

「でも……」

「いいから寝なつて。めぐねえは今の今迄気張つてたんだから」

「でも……」

「はい。でもでもだつては明日にしましょうね。おやすみなさい」

そこに同じく見張りを志願したりーさんが有無も言わず、めぐねえを寝室に押しこむと扉を閉めた。

……少しして諦めたのか、もぞもぞと衣擦れの音が聞こえて——それは直ぐに止んだ。ぬわあああ、と吸い込まれるように消えた悲鳴は聞かなかつた事にした。

「……りーさんも寝ても良かったんだぞ？」

「いいえ。くるみを一人にする訳にはいかないわ。それに、私にも武器はあるし」

「……でも枝切りバサミだろ？」

「枝切りバサミ槍さんよ。きつと使えるわ」

「そうだな。さつき、焼き芋作る時に使われるぐらいだもんな」

まあ、そんなぐらい平和な使い道の方が良いんだろうけど。

「さて。長丁場になるだろうし。コーヒーでも淹れましょうか。くるみもいる？」

「ああ、砂糖いっぱいな」

「あら、お子ちゃまね」

「……そう言うりーさんは？」

「……ミルクたつぷり」

「お子ちゃまめ」

「ぐぐつ……」

悔しそうにしながら、りーさんはコーヒーを淹れに生徒会室に向かつて行った。

その背中を見ながら、あたしは静かに寝室の前に腰掛ける。

夜の廊下。惨劇を想像出来る血。割れた窓ガラスからは風が流れてくる。

でも——あまり冷たくなかった。

「また……焼き芋、食いたいな」

「……………」

「……………」

……………（ゆきちちゃんに筋力対抗フェイズに負けてショックです）。
「……ねえ、めぐねえ。起きてる?」

「まだ起きてますよ。貴方達が寝るまで起きててあげますからね」

……………（お母さんかお前は）。

「……焼き芋、美味しかったね」

「ええ、赤点で焼かれてなければもつと美味しかったです」

「……………もくひします」

「折りを見て、再試験です」

「あ〜う〜」

……………（MEGE IS HUSIANA）。

「……これから、どうなっちゃうんだろうね」

「そうですね。でも、大丈夫ですよ」

「大丈夫?」

「ええ。だって——私が守ります。だから、安心して笑っていて下さいね。それが私達を救ってくれます」

「……そう?だって、やーくん」

……………（寝てますねえ!）。

「……やなぎくんも疲れたんでしよう。さっ、ゆきちちゃんも寝なさい」

「はい。……おやすみ、めぐねえ」

「はい。おやすみなさい」

……………。

「……………」

「……………」

……………。

「……………すう……………すう」

「……………むにゃ」

——きゅぴーん（起床）

そのまま寝ると思ったかバカめ！

夜廻の時間だオラァ！チョーカーさん助けに行くんだよお！！

二日目・深夜 Dream

ある意味そのままな深夜廻りを敢行するRTA、はーじまーるよー
……（小声）

ゲーム内時間で、就寝から一時間くらい経ちました。

このぐらい過ぎれば、寝ている二人はノンだのレムだのに入っ
て起きませんし、見回りの二人も緊張が解れ出している頃です。

動くには実に良いタイム……（イケボ）

とはいえ、行動開始には少し時間がかかります。

気持ち良く寝入り始めた段階での起床なので、シヨタがしっかりと
起きてないのです。

就寝前の疲労度によって最適な睡眠時間が設定されています。無
論、全然足りてないので覚醒まで若干の時間を有してしまう訳です
ね。

何しても無意味なので、ここは心を落ち着かせて意識が覚醒するま
で待——はよ起きろやオラアン!!（ボタン連打）

………ちつ。

やはり無理か（仕様に抗う走者の鑑）。

仕方ないので、時間を無駄にしない為にも——これから行う、
チョーカーさん救出について少しお話しておきましょうか。

チョーカーさんこと、柚村貴依ちゃん。

彼女は、アウトブレイク後において主要キャラ以外で唯一学校で生
存する、サブキャラ・隠しキャラ的な立ち位置の子です。

まあ、有り体に言っ居ても居なくてもどっちでもいい子ですね
（明け透け）。

彼女専用のイベント・エンディングを取ろうとしない限り、救出し
てもしなくてもストーリー進行に影響はありません。

しかし、彼女は平均的なステータスながら、キャラ同士のコミュニ
ケーションを円滑にする『話し上手』スキルを持っていて——学園生
活部のペペローション（迫真）になりうる存在です。

基本、主要キャラはかれら武力最強・恵雑事最強・上位三隊魅力最強・何も思いつかない基本万能という特化キャラしかいないので、居れば痒いところに手が届くようになります。

こうした中間管理職はやっぱり大事なんやなって。それに本チャートにおいて——頭数はタイム短縮の鍵です。ケツイをキメて救出に行きます。ですが、問題点として。

彼女はアウトブレイクからだいたい三日ほどしか生存出来ず、且ついる場所も学校のトイレの個室——時間も場所もランダムです。

つまり、下手をすれば一日目の時点でかれらになつていたりしてまですし、運が悪ければ一階から三階のトイレの個室を全部見ないといけません。

その為、どーしても……！（苦渋）

救出出来ない可能性が出てきます。今の私は後衛組なので余計に。その場合はロスになります。諦めるしかありません。

ですから、今が実にベネなんです。

二日目が過ぎれば正直見込みは無くなります。夜は『かれら』はゴーホームで少ないので絶好の救出日和です。

「すう……すう……」

「んっ……むにゃ、や……」

二人とも気持ち良く寝てますねえ……（二チャア）

チャンスです。ゆきちゃんはやけに鋭かったり、めぐねえは大人の汚さで妨害してくるので二人が封じられてるのは実に大きいです。

さっさとチャーカーさんを助けにいきましょうか。

二人とも一度寝入れば何しても中々起きないのは知ってます（平行世界の実体験）。

行って帰って、そのままチャーカーさんも一緒に寝るまでが一セットが理想ですね。

まあ、余裕ですけどねっ？あつたりまえだよなあ？

——おっ、動くようになった。

では、行動開始です。するりと布団から抜けだします。

まずは寝室を出る扉に、耳を立てましょう。

今回見張りをしているのはゴリラとリーさん。……リーさんも一緒に見張りは予想外デス……。大抵、二日目はゴリラズの片割れなんですけどねえ。

『……ろ、かしら……』

『ん……な。もう少し……な』

『コー……り……る？』

『……むわ』

むっ。

丁度二人共いますね。出るのは待つべきです。

時計を見ます。……22時ぴった。

見張りは基本的にくるみが仕切るので、彼女の趣味的な意向で時間刻みでバリケードの点検に行きます。後少ししたら出かけると思うので、くるみはクリア。そうすると残りはりーさんですが……お茶を沸かしに行くか此処に残るかどちらかですね。前者である事を祈りましょうか。

では、二人は行動するまで部屋でやるべき事をやりますか。

まずは枝切りバサ槍さんを回収します。頼りにしてるぜ相棒。月明かりで煌めいて自信満々ですね。

あとはバッグがあればいいですが……あー、めぐねえのしか無いですね。チョーカーさん救出の合間に物資回収もしときたいんで、空のバッグが必要です。中身引っくり返して音を立てる訳にはいきません。バッグは二階で適当に取る事にします。

……あっ、因みにここでバカ正直に『外行ってくる!!』と言うのは止めましょう。

先に結論から言います——大口スです。

寝てる二人はともかく、外の二人は閉鎖的なりアリスト（偏見）なので、なにバカな事言つてんだと一笑されます。好感度低い状態だとさらに下がるほどです。説得も可能ですが、それは『かれら』の中をすいすい泳げるような武力を二人に見せとかなないと無理です。

つまり無理なんですう！（慟哭）

そつ、それもこれも……！

「すう……びーる、びーる……」

このめぐねえのせいだあ！おつ、冷えてるかあー？（煽り）

こいつが私のボールを盗むからあ……！

皆さんは知らない事だと思いますが——私は根に持つタイプです。具体的にはたとえショツピングモールとか行つても、ぐびねえの為にお酒は持つてきてあげません（ドヤア）。……まあ、このままじゃあ私が外行けるかどうかもアレなんですが。

……それにしてもまたボール持ったまま寝てますね。何でしょうか、固めが好きなんでしょうか（レッテル張り）。

——ふむ。今ならイケるか？さすがにステータスだけは優秀（だった）めぐねえが相手でも、寝ている間ならボールを取るぐらいいけるのでは？『かれら』の間をスルスルと進む必要があるので、正直あれば助かります。

……ていうか、本チャート通りなら使うつもりでした！（怒）

まあ、二人がどっか行くまで時間ありますし、ここは盗りに行きましょうか。

筋力対抗フェイズに入ります。1か、2分くらいで余裕でしょう。

まあ、流石にこのクソザコシヨタでも寝ている相手に負けるはずが

盗れなかったぜ。

投稿者：がっかりザコ走者 何月か分からない日 22時30分くらい。

めぐねえの握力がつええぜ。最悪や。

筋力対抗フェイズに入る余地すら無かった。もう気が狂う。

なんとか離させようと脇とか首を擦ってたら、寝ぼけて抱きついてきた。あばらが三本ずつ折れた（比喻表現）。もうめちやくちやや。

腹が立ったんで、仕返しにめぐねえの髪を纏めて、天辺で結んでやったぜ。そうすれば、朝起きた時に髪が広がって虚無僧になってるはずや。ざまあねえぜ（タイムロス）

ふう……。

嫌な……事件でしたね……（現実逃避）。

もういいや。もういいですう！……酒見つけても片っ端から穴開けてやる……（怨）。

パールは諦めて次だ！次い！

壁に立てかけてあるめぐねえのカバンからマニユアルをスリます。

すっ（バッグを開ける）

サーー！（迫真のマニユアル奪取）

よしっ。

これで、マニユアルは全部手中に収めました。まあ、こいつ以外すでに……ククク（黒幕並感）。

では、この世から抹消……する前に、シヨタに一回読ませます。

チャート補完の一環です。本チャート通りなら、シヨタの口から皆に漏れる可能性も込みで完全に闇に沈めるところですが——ここは把握だけはしておきます。選択肢は多い方がいいので。

使う場面が無い事を祈りますが……。

ここは暗いので、読む事は出来ません。

灯りを付けると流石の二人も気付くので、違うところで読みます。

扉に耳を当てて……。

………。

おっ、何も聞こえませんか。（気配も）ないです。

——頃合いです。出撃しましょうか。

……だあれもいませんね。

廊下は静かなもんです。いや、遠くでライトの光が見え隠れしたんで、くるみが三階を回ってるのは確かですね。気付かれないように、反対側のバリケードを目指しましょう。

りーさんどこ行つた？反対側のバリケードですかね……？
ここからは時間との勝負です。

見張り組が定期的に三階を回る事もそうですが——寢室の様子も確認してくる場合もあります。

そうなると一発で気付かれるので、こればかりは乱数の神に祈る他ありません。まあ、遅かれ早かれ気付かれるのは想定済みです。出来る限りそれが遅れれば楽は出来るのですが……。

むっ、廊下の先に明りが漏れてます。

……生徒会室。後の学園生活部の部室ですね。あそこは三階唯一のキッチンがあるとこなので、予想通り、茶ア沸かしに来ているみたいです。

……ちらつ。

「…………ふふくん…………」

やはりりーさん。ここにいましたか。

患体を揺らしながら、インスタントコーヒーを淹れてます。

……すげえ機嫌良いですね？

アウトブレイク発生直後は一人でいる時は死んだ魚みたいな目をして、じつとしている事が多いんですが——これは正気度足りてますねえ！（満足）。焼き芋が活きたんですね。

定期的にやりましょうか、アレ。

「さてつと、くるみのところに…………」

おつと。こつちに來ます。えーと…………隣の教室で隠れましょう。

お盆を持ったりーさんが出てきました。

そうして……くるみが居た方向に行きましたね。よし、なら反対側は安心です。

オーケー。

ついでに生徒会室でマニュアル読んどきましようか。下手に違う部屋の明かりを付けて感づかれても面倒です。

では、いざ読書タイムとしましょう。

私は親の顔より読んだ内容ですが、このシヨタには初めてです。

——正気度はガツンとイキます。

はえー、すつごい減り幅……。これが所持金なら過呼吸起きそうな勢いですねえクオレハ……。

まあ、プレイキャラ側の正気度減少は操作に影響を及ぼすだけです。ゲームプレイにこういった感情的機微を反映させるのはちよつと大変だったんですね、きつと。

ですので、慣れてる我らRTA走者からすれば死に設定に近いです。常時メダパニなだけです。えつと、→は↓、↓は←、←は↑で↑は→……つと。おしつ。

さて、マニュアルはこれで用済み……。

ふふふ……皆の安寧の犠牲になって貰いましょうか。これもRTAのため……。

生徒会室のコンロで炙っていきましようか。赤目は火を嫌うつてそれー——ん？

——足音。

てえ……こつち来てる!?

えー……もう気付かれました？くそつ、今回は乱数の神様は微笑んで下さらなかったか!

タイムに響いちやあーう→→。

マニュアル燃やすのは中止します!

ええつと……そう、柵!柵に一先ず隠れましよう!このシヨタの体

型なら大丈夫です！あつ……つと。バサ槍さん忘れるとこだったあぶねえ！

「——つとと。忘れものしちゃった」

——セーフ！んんん……ンセーフウウウ！！

危ない、あと数秒遅かったら見つかってました。

りーさんです。何か忘れて戻ってきたみたいですね。

気付かれた訳じゃないみたいですね。良かった。まだバレてません。

「お砂糖お砂糖……あら？コンロが……消し忘れたのかしら？」

んー！バレてない！バレてないぞお！

私がバレてないと言ってるのだからまだバレてない！（自己暗示）
ん？また足音が……。

「——りーさん」

「あら、くるみ。コーヒーはちよつと待ってね。今お砂糖入れるから」

「あんがと。それより……ガムテープないか？」

「ん何使うの？」

「いや、バリケードをもうちよい補強しようと思って。まだ不安でさ」

「そうね……やり過ぎるなんて無いものね」

KURUMI IS GANBARIYA。

ありがたい。滅多に壊れませんが、バリケードを補強するに越した事はありません。

安全はタイムの次に大切です！いえーい！ありがとうくるみ！もうゴリラとは言わなくてもいいよ！

……ん？りーさん。なんでこつち……。

「確か、棚に何個かあったはずよ」

「ああ、一個くれ」

「一個？もつと必要じゃない？」

「いや、なんかあった時の為に残しといたほうがいいだろ？」

「それもそうね——くるみ、かしこいつ！」

「……褒められてるのかこれ」

——ファツ!?

えっ、まつ……ああ！確かにガムテは棚にたまにあります！

ちっ畜生、こつ……こつちに来るな！ああ、マズイです！ここでバ

レたら連れ戻されるに決まっています！マニユアルもバレ……！

ぴい！リセットはやだ！やだあー！小生やだ！

ごめんりーさん！もう裏でセクハラしないから許し——

「——はい」

「おっ、サンキュー。んじゃあ、ちやつちやとやってくるわ」

「ええ、コーヒー。そっちに持っていくわね」

「おう」

……と、隣の棚……。

ペッ！恵体め！恵体め！……ビビらせやがってこのお……恵体
めっ！（語彙力不足）

……二人が行きました。棚から出ましよう。

廊下を確認します。……あっちのバリケードに行きましたね。補
強をするならばらくはこちらには来ないでしょう。

ふうく……あつぶねえ……余裕でしたねっ！

いや、危うくいく所でしたよ。いやあ……良かった良かった。

では、今の内にバリケードへ向かいますか。

バリケードは作る人によって大きく癖が異なります。

ですが、このゲームをやり込んだ私にはその癖——バリケードの弱点が完璧に分かります。

えつと、今回はめぐねえ・くるみ・リーさんだから……右下！よし、紐を切れれば通れる箇所です！行くぞ、バサ槍さん！

——少しのアレはありましたが。

体良くバリケードを抜けられました。安全地帯を抜けたので、ここから戦闘パートですね。

『かれら』は勿論、います。ですが、その数は少ないです。昼間の三階程度ですね。

『かれら』は——生前の行動に沿って行動します。

つまり、学生なら朝は家・昼は学校・夜は家ですね。ですので、大半はゴーホームしているという訳です。それでも感染の進行具合によつてはそれすら忘れて、徘徊するようになります。

今いるのがそれらの個体ですね。

……廊下に二人。教室に出現する数は多くて、三人です。楽勝です。目的を一つ一つクリアしていきましょう。

ここはRTA走者っぽくステルスで……——いや、RTA走者だよあたしゃ！（セルフツツコミ）

最近、カボチャ派ニンジャなる存在が台頭していますし、ここは一つ——このシヨタもやればデキる子であるという事も証明していきましょう！サツマイモ派は、決して屈し……うーん、カボチャ。あれも中々……いや、皮が分厚くてこのシヨタじゃ無理だわ。

やっぱサツマイモイチバーン！

皆さん忘れていない事を祈りますが——このシヨタの初期スキルに《隠密》があります。体格も込みで、大きな音を立てるか目の前を

堂々と歩くかしない限りは『かれら』にバレません。私のプレイスキルも相俟って、ニンジャプレイは余裕なんだよなあ（自信）

因みに此処でスキルポイントを稼ぐのはロスです。

シヨタ単体の場合、まず攻撃を待ってからの——カウンター！でしか殺せないのです。強制戦闘はこの先もあるのでスキルポイントさんはここでは端から期待はしません。

では、一番近い教室に入って、まずはバッグを手に入れます。

バッグは生徒のがいっぱいあるので、シヨタの体格にあったのを適当に選びます。こういうサバイバル物では容量が多いモノを選びがちですが、体格が良い奴ではないとかえって動きが鈍くなってしまうのでロスです。

バッグには物が入っているので、中身を全部出して空にしてしましましょう。どうせ誰も使いません。

捨てる際に音が出るので『かれら』に気付かれます。

——が。

攻撃モーションは《掴み》からの《噛み付き》しかないのです、スルスル避けて次に行きます。数も居ないので。

はい、お湯——。

次の教室は……むっ。一人ですか。ならここで必要な物資を集めきってしましましょうか。

とはいえ、教室で回収できるのは一区分の物資だけです。

——『誰かの物』。

教科書・文房具・キーホルダーとかそういった雑多なものを合わせて、そう表示されます。

正直、通常プレイでも使う機会は少ないゴミ区分です。文房具はともかく、教科書なんて使わん使わん。

ここで必要になるのは、ハサミや先の鋭いペン、後は金属で出来たキーホルダーを集めます。バッグいっぱいになるまで集めます。それ以外は要らないので容赦無く捨てましょう。

ハサミやペンは言うまでも無いでしょう。近接武器として使います。特にハサミは即席ナイフとして分解出来るので用途は多く、『誰かの物』区分では一番有用と言えるでしょう。

むっ。捨てる音で『かれら』の一人に気付かれました。

教科書でも投げ付けて妨害しながら回収を続けましょう。おらっ、『かれら』になっても勉強すんだよおらっ！（鬼畜の所業）

次にキーホルダーですが、一つだけではゴミです。

ですが、これを纏めると即席の鈍器に早変わり。ボール補完の一つです。バサ槍さんは歴戦の枝切りバサミだったので、いつ折れるか分かりませんし。

おっ、これは旅館の売店にある男子中学生が絶対買う龍の剣のキーホルダー……！キーホルダーの中では一番殺傷力が高いので回収です！

……キーホルダーの中で一番殺傷力あるってなんだよ（素）

——こんぐらいですかね。バッグ中がパンツパンだぜ。

さて。やる事は終わりました。

とつとつトイレでチョーカーさんを助けましょうか。じゃあな！教科書踏んでねえできちんと読めよ！

廊下をダツシユで進みます。

無論、音で『かれら』に気付かれますが——スルルスルリと回避しつつ突貫です。私に掛かれれば、こんなの本当に余裕なんだよなあ！

あつ、ここ走れない人はRTA止めてGEOってからまた買ってRTAして下さい（大煽り）。

——ふう。

やばいです。

なんか——私今、すごいRTAしてる気がします（錯乱）。

いやあまじか。最高だわ。予定通りに事が運ぶってこんなに気持ちがいいんですね！（純粹）

この区間タイムも、物資回収分を含んでも誤差は一分単位！ぼく、満足！

——難なくトイレ着。女子トイレに入りましょう。ここまで良い感じなんだから此処にいてくれよなあ？

では、個室を開けます。三室なので直ぐに済みます。

一室目。居ない。

……ままつ、たまにはね？

二室目。居ない。

……いやね？最後があるから、気配とか何も感じないけどいるかもしれないからあ！

三室目。居ない。

……ええ……。

まじか。えー、まじかあ……。

一階？一階行かなきゃだめ？いや、一階は流石になあ……。生徒じゃない外の『かれら』も入り込んでるので数はダンチです。生徒が持つていないモノを持つてるので、有用ではありますが今の状況ではロスでしかありません。

どーすっかなあ。物資回収できたので諦めるのも手ですがいやでも全体のタイムを考えるとここで諦めるのは——

——ガンツツ！

むっ。隣の男子トイレで音がしました。

まあ、『かれら』が適当に転ん……ん？男子、トイレ？

……。

——シユバババババツツ！（ダツシユで隣に行つて扉を開け放つ音）

「——ひい……！」

ああ！ここかあ！

男子か男子トイレにもいる事があるのか！基本女子トイレにいた

——シヨタの耳囁きASMRで心を静めてあげましょう。この状態だと『かれら』を見ると腰が抜けてお荷物になった挙句噛まれます(2敗)。

落ちつくとも『かれら』にビビっても黙って付いて来てくれるので、それで十分です。

「柳……」

おし。落ちつきました。

取り敢えず、簡潔に状況を説明し、フォローミー！と叫びます。大統領の娘並みに付いて来ます。

第一目標はクリアですね。

では、三階にもどつ——*おおつと*。

「大丈夫か……？」

——大丈夫だ、問題無い。

プレイ画面が少しブレましたね。これは疲労がキてる事を指しています。

寝不足、悪魔マニユアルの書とダブルで疲労を削りに行ってるので、体力持久力クソザコのシヨタにはキツイです。ですが、三階まで行っちゃえば問題ありません。

耐えてくれよマジで。

では、行きましようか。

さつきとは違い、チョーカーさんがいるので廊下を走る事は出来ません。これ終わったらGEOってこのゲームを買い直しましよう。

ですので、さつきのバリエードの逆側——くるみとりーさんが補強していたバリエードに向かった方が早いです。

では、行くぞー！

「うっ」

口を押さえて吐き気と恐怖に耐えてるチョーカーさん……最高やな！

でも静かに付いてきてくれます。さんきゅーです！

むっ。先にいる『かれら』の位置、ちよつと悪いですね。このままスルーしても気付かれてチョーカーさんが美味しく頂かれそうです（比喩に非ず）。

ここは、集めておいたキーホルダーの一つを適当にそこらに投げて誘導しましょう。

「——それは……」

ん？そこらで集めたキーホルダーだよ。

ぽいっ。

……オーケー。行きましたね。

チョーカーさん行くよ。

「……ああ。照子……」

だれだよ（ピネガキ）

むっ。

こつち側は結構多いですね。誘導できて進めてるのは良いんですが。

「……………」

チョーカーさんが青ざめながらも付いて来ます。

ありがたし。キーホルダー投げた度に顔色変えてるのは気になります。キーホルダーマニアなのかな？

バリケードの直ぐ近くに来ました。

……小さく話し声が聞こえますね。くるみとりーさんです。……補強が終わって、休憩中かな？ さつきからゲーム内時間で30分かそこらなので妥当でしょう。

「……着いた！」

あつ、おいバカ！ 走るな！（素）

その近くに『かれら』の一人がいるのが見えんのかお前え！

「……ひっ！」

ああもう！

気持ち分かるけど！ 最後で気抜けるのは分かるけどお！
くそっ！ しょうがない！ 行くぞバサ槍さん！

突進して、脇腹を抉ります！

「……柳！」

口しか出せんのかお前は！

よしっ、このまま押し出してえ……！

——ポキッ。

ん？

あれ、急に感触が無くな——ああ。

刃先が『かれら』の腹に刺さってますね。歴戦のバサ槍さんは老年のバサ槍さんだったんですね。接合部分が脆かったみたいでははははははははははははははははは——ジイイイイイザアアアアス

!!

「……だつ、誰か！そこにいるんだろ！助けてッ……！」

ばつか叫ぶな！他の来るダルルオオ？！

でもナイス！このままじゃ二人とも死ぬからネ！リイセットの危機イ！

——くるみー！早く来てくれー！（クリリン並感）

「……えっ？」

「なぎ、くん？そこにいるの？」

——いるからとつと来て！やーらーれーるー！

「——っ！くるみっ！」

「ああくそっ！よく考えれば分かる事だった！やなぎっ！待ってる直ぐにそっちに……！」

おしっ、これで大丈夫——じゃねえ！

流石『かれら』脇腹刺されてもびくともしねえか！くそっ、こうなるんだったら、ヘッドオシヨオオを狙うべきだった。体格上むずかっただけど！

ああ、このままじゃあくるみが来る前に！

……やりたくなかったけどしゃあない！

先ほど『かれら』は生前の行動に沿って行動をしていると説明しました！つまり——生前の事を利用して誘導出来る余地はまだあります！夜にまだいる奴なんで期待は出来ませんが、やらなきやりセツト！やったるぞコラあ！

こいつは誰だ……？

さっさと思い出せシヨタア……！義一くん？サーカー部？

いや、だれだよ（ピネガキパート2）

いや、そんな事はどうでもいい！ともかく、声を掛けます！
大丈夫だ私を信じろ！——ゆきちちゃんと幼馴染の私を信じろお!!

——あれ？義一くんまだ学校に居るの？また顧問に怒られるから早く帰った方がいいよ？

こい！こいこいこいこいこいこい！

「あつ——」

よしっ！止まった！今がチャンス！
くるみい！

「——やなぎから離れろ!!」

——グシヤア。

うわあ……ぐるてすくう……（助けてもらった人）

「やなぎ！……ああくそつ、噛まれてないよな！なんであたし達に何も……つて。柚村？」

「……恵飛須沢」

あつ、この子生存者。助けてもいいよね？

——まあ、事後承諾させるけどなあ！おらつ、見ろ！さっきの騒ぎで『かれら』が寄ってきてるぜ？感染の有無よりまずは脱出だあ！

「——くるみっ！なぎくんは無事っ!？」

「っつ！今は後だ！二人とも行くぞ！」

「……ああ」

やった！勝った！

チヨーカーさん救出、完!!

今回はRTA出来た気がするぞおい（歓喜）！

あつ、こういう脱出になると後で詰問になるのですが——シヨタの疲労がピークで、安全地帯に入ると気絶するのでその詰問もカットされます。

だから、早く起きてマニュアルを読んだんですね（偶然）。

——何が起きたのかは分からなかった。

でも、悲鳴と轟音と呻き声——血。

それだけでなにか酷い事が起きたという事はわかった。

私は、トイレまで走って個室に隠れた。

友達に「なにがあつたの!？」と聞かれた。無視した。

知り合いが「助けてくれえ!!」と血に塗れた手を伸ばしてきた。無視した。

ゆきもやなぎも——どうなったかすらも考えなかった。

ただじつと耳を塞いで、目を閉じた。

扉を叩かれて、悲鳴と怒号——すぐに呻き声と血が溢れた音と咀嚼

音が聞こえても。そしてしばらくして、動き出した音が聞こえても。

聞こえても、ただ……ただじつと隠れていた。

……意識が覚醒する。何度目かわからない目覚め。朝か昼か夜かも定かじやなかった。

私は個室から一步も出られなかった。あの光景が過るとどうしても足が動かなかつた。外に出ないで済むのなら——便器に顔を突っ込むのも苦じやなかった。

……これからどうなってしまうのだろう。

不安と恐怖と、空腹で——頭がおかしくなりそうだった。いつそこ
れは全部ドッキリでトイレを一步出れば、皆がクラッカー片手に大笑
いしてくれればどんなに良いと思つた事か。

また意識を失つて——覚醒した。もう限界だった。

ずっとこのままでいるくらいなら、いつそあんなつた方がいいん
じゃないか、と変な笑いが零れた。

お腹は空いたし、便器に顔を突つ込む自分を笑う事すら出来なく
なつた。

——もう、いいじゃん。

そう思つて、立ち上がつて。

ふと——隣から物音が聞こえた。

「……っっ！」

身に張り付いた恐怖と空腹のせい、足に力が入らず——転んでし
まった。

ごっつんつ、と壁に頭を打つてしまう。

呻いてる暇は無かつた。

その物音が——直ぐにこのトイレの扉を開けたから。

「ひいー！」

怯えは一瞬。

ただ口を紡いで耐える。そうすれば居なくなる。居なくなつてく
れる。

何が聞こえても、動かさず……ただ、聞こえない振りをしていけば—

「——おい。誰かいる？やなぎくんだよー」

ふと——聞きたかつた友達の声が聞こえた。

なんで。どうして。——そんな事も考えられず。私は直ぐに扉の
鍵を外した。

ああっ、やっと……やっと！

「ふーん——ボくなら、開けるんだ？」

そこにいたのは——血に塗れた友達と、私が見捨てた知り合いが立っていた。

「私が聞いタ時は、聞きもしなかつたのに？」

「僕が手を伸ばして助けてつテ言つた時ハ、跳ネのけタのに？」

「俺ガ開けてクれつテ言ツた時は、何モしなかつたノに？」

「二柳なラ開ケルのカ？」」

ちっ、ちがつ……！

「ヒキョウモノ」

「——ッ!!」

——身体が起き上がった。

久しく感じなかつた感触。

「はあ……はあ……」

窓から差す朝日、温もりが残る布の感触、飛び跳ねてるであろう髪の毛の鬱陶しさ——良くあるような、朝の目覚めだった。

「……………」

——助かった。

一番に想つたのはソレ。私は助かった。……皆を見捨てた卑怯者が、助かった。

「——目、覚めたか？」

重い頭を横に動かすと、シヤベルを持った恵飛須沢が気持ちよさそうに寝ている柳の頭を撫でながらこつちを見ていた。

その横には、ゆきと佐倉先生が静かな寝息を立てている。……ゆきも助かっていたんだ。佐倉先生は寝る時、あんな面白い結び方して寝るのか、とどうでもいい事が頭を過った。

「三人、寝てるから静かにな……」

そう言つて、顎を部屋の外へとしゃくる。柳の頬を一つまみしてから外へ出てつた。

——あの後。

バリケードを越えた後は大変だった。

恵飛須沢はこつちにシヤベルを向けて「奴らにならないだろうな！」なんて凄んできたし、若狭は若狭で、柳を抱きしめて「どうしてこんな事したの！」って絶叫してたし——当の本人は、気絶したみたいに寝始めるし。

実に混沌とした現状だった。

結局、やけになつた私が服全部脱いで「どこも噛まれてねえよ文句あるか！」と叫んだのを最後に収束したが。

……今思えば、相当キテたな、私。

ゆつくり立ち上がつて、起こさないように外を出る。

私を助けてくれた勇者は、何も無かつたような安らかな寝息を立てていた。

「……………」

廊下に出ると、恵飛須沢がバツの悪そうな顔をしていた。

「なんだよ」

特に何も無いが、ついそう言つてしまった。

「いや、その——ごめん。夜の時は悪かつた」

「……………いいよ。あの時はきつと恵飛須沢が正しかつただろうし」

人を喰らうような化け物が徘徊してるんだ。

そんな所で、いきなりまともそうなのが出たらああなるだろう。私

だって、逆ならそうする。

恵飛須沢はきつと、私が寝ている間も——じつと睨みつけたんだと思う。私がいつ奴らになってもいいように。

結果、朝まで私はぐっすりとお悪夢を見てたから。問題無いと判断して謝ってきた。そんなところだろう。

「それでもだ。ごめんな」

「……………」

こいつ。こんな、良い奴だったのか。

恵飛須沢はどっちかかっていうと寡黙な奴で、卒業したOBの事しか興味がないって印象だったんだが……なんか——意外だ。

……こんな状況でもなきやあ、卒業までそのままだったかも。

「じゃあ、謝るのはこれで終わりにしよう。私もアレで、恵飛須沢もアレだった。それでいいだろう」

「そう、だな。……あんま、湿っぽいものな」

そうして、へへつと笑う恵飛須沢はやっぱり新鮮だった。

「りーさん。柚村が起きたぞー」

「……あら、おはよう。お湯でいいかしら」

「……？コーヒーもうないか？」

「いえ——コーヒー飲み過ぎたせいかな、頭痛いのよ。カフェイン摂り過ぎたかしら」

「ははは、ありそう」

生徒会室では、若狭がお湯をくれた。

夜とはうってかわって、焦りを煮出したみたいな顔じゃなくて——
疲れてても穏やかな顔だった。

……誰も何も喋らない沈黙が広がった。お湯を啜る音が、やけに大きい。

特に何も無かった。でも、私が居た場所や出来事は軽く話した。便器に顔を突っ込んだ事とか——友達を、見捨てた事は隠して。

その後、今度は二人が何があったのかを話してくれた。

屋上で難を逃れた事、生存の為に三階にバリケードを築いた事。話してない事もありそうだったが、お互い様だ。そこは聞かない。

「運が良かったんだな」

「運が良い……のか？」

「さあ？」

「……お前が言ったんだろ」

なんだか会話が楽しくて、つい軽口も漏れてしまう。

悲鳴しか言えなくなっただと思っただが、良く生きていたな私の口。

話題は自然と柳の事になって言った。

というか、私が誘導した。聞きたかった事があったからだ。

「そういうえば、柳はどうして外に居たんだ？」

バリケードは強固の印象だった。

奴らを近づけないように考えられていて、端から外に行くなんて思考の外にあるように隙間が無かった。

つまり、皆としては外に出るつもりは無かった——なのに、柳は外に出た。

それのおかげで私は助かった訳だけど、どうしても知りたかった。

二人は息を吞んで——深刻そうな顔をした。

「……抜けだしたんだ。きつと、生存者を探そ——いや、きつと信じられなかったんだと思う」

「そうか……」

柳はきつと——信じたくなくなっただと思う。

あいつは皆と仲が良かった。そのの日々を、血で塗り潰された。そんなの認めたくなかったろう。

「……ねえ、二人とも。なぎくんのバッグの事なんだけど」

若狭はそう言うと言柳が背負っていたバッグを机に置いた。

チャックを開けると——血に塗れた文房具やら、キーホルダーが雑多に詰め込まれていた。もう何も入らないほどにギツチリと。

「なんだこりゃ」

「ええ。なんでこんなもの……」

二人は分かかっていないみたいだった。

でも——私には分かっていた。その意味が。

柳が、奴らになつていた友達に投げたキーホルダーを思い出す。

……彼氏に貰つたって喜んでいた淡い水色の魚のキーホルダー。
照子……私の友達だった奴のモノだった。

アイツはそれを目で追つて、近づいて行つていた。あれは、音に寄せられたのか——それとも、他に何かあつたのか。それは私にはわからなかつた。

私はその事を話すと。

二人は——静かに項垂れた。……ぎしりと歯ぎしりが聞こえた。

話す事はもう無かつた。

軽口を言える空気でも、もう無かつた。

私はお湯を啜りながら、窓の外を見る。

奴らが校庭で蠢いていた。体育着の奴らが多い。まるで——朝練しているようだった。

ふと。奴らに襲われた事を思い出した。

『あれ？義一くんまだ学校に居るの？また顧問に怒られるから早く帰つた方がいいよ？』

誰かもわからないくらいな奴に、あたかも当たり前のように言った柳。

それを聞いて——ぼんやりと目を柳に向けたアイツ。

『……ア、ヤ……』

『——やなぎから離れろ！』

想像は血を思い出したので頭から追いやつた。

もう、どうでもいい事だ。

それよりもこの空気を何とかしたかつた。

もう裸になるのは通じなさそうだったから。

「——んっ。むう……ふぁー、やーくんおはよお」

おはよう。ゆきちちゃん。はい、ぎゅー。

「むふふ」

……うーん、チョーカーさんが居ませんね。

早めに起きたんでしょうか？まあ、寝室に戻ってるので問題なしです。

「……んんっ、つむ」

おっ、虚無僧が起きたぞ。

「……めぐねえ？なにそのあたっ——むぐっ」

しー。ゆきちちゃん、しーっ。

私は、根に持つタイプです（大事な事なので二回）。

「……ふふっ。やーくんもワルよのう」

「あら？見づらい……」

寝ぐせすごいつすよめぐねえ（大嘘）

「そうだね。早く、鏡見た方がいいよ」

「ううん……そうね。ちよっ行ってきまふ……」

……なんかボール持って歩いてる虚無僧って下手な『かれら』より怖いなアレ。

「ねえ……やーくん」

なあに、ゆきちちゃん。

「この後怒られる気がする」

おっと、それを考慮に入れないとは悪代官失格だぞ、ゆきちちゃんよ。

「そっかあ」

——悲鳴が聞こえてきました。こっち誰か走ってきますね。

……………。

チョーカーさん、救出大成功！ミッションコンプリート！今回はガバナかつ——

「やなぎくん！ゆきちちゃん！私の頭をパイナップルにした件についてお話があります!!」

いや、それ虚無僧です（鋼の意思）

三〇四日目 Lost

やっとRTAっぽい事が出来て嬉しいRTA、はーじまーるよー!!

三日目に入りました——私は死ぬほど元気です!(テンションバリ高)

いやあ……やっと、やっとチャート通りに進んだんやなって。

色々あつたですけど、チョーカーさんを救出できたのは大きいです。頭数はあるだけでタイム短縮に繋がり、多少のガバはチャラにできます!

バンザーイツ!(テンション→)

「それで?やなぎくんはどうして先生の頭をパイナップルにしたんですか?」

だから虚無僧だつて言つてんじやねえかよ(テンション激サゲ)
寢室から、場所は生徒会室に移動しました。

そこに主要キャラ達が集まっております——私はそこで正座をしています。

「あー、びつくりした。ジャンルがサバイバルからホラーになったかと思つた……」

「そのたとえば良く分かんないけど……あれは妖怪だったわよね……」

くるみとりーさんが仲良くお菓子を摘まみながら談笑してますが——私はそこで、正座をしています。

「たかえちちゃん、たかえちちゃん!無事で良かったよお……!」

「ゆき……」

目の前で感動シーンで繰り広げられているというのに——私は！
そこで！正座をしています！

なんとめぐねえは空気が読めないのでしょうか。風情が無いって
それ一番言われてるから。

「こらっ、不服そうな顔をしないっ！」

おっ？やんのか——むぎゅっ。

うおっおっおっ。めぐねえがいたいけなシヨタの頬を捏ね繰り回
しています！ダメージが、微妙にダメージが蓄積するから止めろお！
(主要キャラ筋力値二位)

いつ、いきなり他人のほっぺいじくるとか常識無いか！捕虜への
拷問は条約違反なんだぞ！

「……………やわっ(っい)」

あっ…………あの？いつまでやってらっしやるの？ (お嬢様部)

いつ、痛い (HP減少中)

「あーっ！めぐねえだめだよっ！やーくんのほっぺは私のものっ！」

止めて近づかないでゆきちゃん！参加しないで！

ふうおおおお (HP減少率アップ)。死ぬう！死んじやあーう！
ほっぺいじくられて死ぬとかスペランカー大先生以下だぞシヨタお
前え！

「あー、ほらほら。あんまいじくってやるなって可哀そうだろ」

GORIMI IS YASSII

助かりました。このままだと進行しませんし。…………お菓子食って
回復しておきましょう。

「こほんっ。それで……袖村、さんですよね？」

「はい——柳のほっぺ触って恍惚としていた佐倉先生」

「そっ、それは違います！……違った、わよね？よねっ！よねっ!？」

「率直に言っつてBPO案件だったぞめぐねえ」

「くるみ、それを言うならPTAよ」

「——はうっ!」

「大丈夫だよめぐねえ!——私も気持ち分かるもん!」

「——ふぐう」

「あーあー、トドメ刺したるなよ、ゆき……」

「トドメってなに!？」

なにやってんだあのシヨタねえは……（ポリポリ）

今始まつてるのは新キャラが救出された際に入る『合流イベント』です。顔合わせですね。

ここで互いの好感度が低かったりすると、険悪な雰囲気になり、下手したら合流すらしなくなる事もあります。滅多に起こらねえ事です。が。

会話を見るに……互いの好感度は問題なしですね。特に問題無く、チョーカーさんは受け入れられるでしょう。

チョーカーさんが加入すると、ゆきちちゃんの正気度減少に補正が掛かります。めぐねえもいるので、誰か死なない限り——ゆきちちゃん、発狂とは無縁な空気清浄機（比喻）として活躍してくれるでしょう。やったぜ。

この後、軽い自己紹介とあだ名決めイベントが始まりますが、ここは何しても変わらないのでスルーしながら、菓子を摘まんで回復に勤しみましょう。

タイムの短縮には——出来る限り、今ある食糧の消費を早めておく必要がありますので、さりげなく、食い散らかしておきます。

「それで、どうやって此処に？他に誰か居たの？」

おっと。

めぐねえ、それは。

「……他に、人は居ない。私一人だった。どうやっては……あー」

チョーカーさん悩んでますねえ。

私を見て、くるみりーさん、んで私を見て、言おうか言わずか悩んでいます。

くるりーさん達は……こっちも悩んでますね。

「……う？どうしたの？」

「いや……その——」

さて。ここで私が一人で夜廻を敢行したのがバレたら——秒でお説教です。

今日のお昼頃まで時間が潰れてしまいます。まあ、三日目はやれる事も少ないので構いませんし、チャートのにも想定済みですが——この時間を有効活用したいっていうのも本音です。

ここは一つ。こっちをチラチラしてるチョーカーさんにウインクをかまして、黙って貰うように伝えましょうか。単独での救出の為、好感度は高めのはずです。私の意図はしっかり伝わるはず。

「えっと……だな」

チョーカーさん！——バチコーンツツ（迫真）

「柳に助けて貰ったんだ」

あれー？

えっ、伝わんなかった？さっきお前言おうか言わずまいかチラチラ見てただろ？スゲー見てたゾ。

なのになんでウィンク見た途端、迷いなく暴露し始めたんだよおい。無視より酷いぞお前！意図を察してもその通りしてくれないとか……えっ、意外に好感度は低いのか……？うーん？

「やなぎくん。どういう、事……？」

——説教確定ですネクオレハ……。

チョーカーさんの裏切り者お！空気読めるチョーカーさんなら伝わってただろ絶対い！ああ……横からの視線の圧がつよい。見なくとも涙目のゆきちゃんが見える見える……。

バレたのなら仕方ありません。説教を甘んじて受けましょう。

むしろ、めぐねえの説教は心が和むのでほんわかしながら流しましょう。顔真っ赤にしてプンプンでめっ！してくるめぐねえいいゾこれ。

さて、適当に——

「どうして、そういう事したの？危ないのよ？」

えっ、危なくなんて無いんですけど。余裕だつて安心しろよお（RTA走者の鑑）。

ヘーキヘーキ、ヘーキだから。三十分で一人！簡単だったぜや。褒めてくれてもええぞ！

「——平気ではありませんッ！」

——ふやっ!?

……めぐ、ねえ？

「今、外がどういった事になってるか。分かってるでしょう？なんで

誰にも言わずに……！」

……けっ、気色が違う！

私が想像していたのはプンスコッ！ってオコしてるめぐねえなの！こんな、こんな……！——何しても怒んない眼鏡の友達から眼鏡取り上げてガチギレさせちやった、みたいな説教は望んでない！

見てよ！めぐねえがあまりの剣幕だから——皆して、悲壮に満ちた顔してるじゃん！

えー……えー……？

なんかあ、アレですね？——意外に。皆、好感度、低い……？

ゆきちちゃんはビンタだし、ゴリラも腰紐だし、チョーカーさんはスルーしてくるし、めぐねえはこれだし……あれ？想定以上なのりーさんだけじゃね？いつもは隠れ発狂してるりーさんだけ上手く行ってるってどういう事？嬉しいのにすっげえ複雑！

ゆきちちゃん幼馴染ルートのはずなのに！

なんでしよう？知らずの内に、好感度を下げる行動をしていた、とかでしょうか？あー……アカン。特に思いつかない。いや、ガバはあっても好感度が下がるような行動は……。

ええい、仕方ありません。後で全員に死ぬほど媚びを売っておきましょう。

「やなぎくん……やなぎくん！」

だから、今は甘んじて受けてやるう！！

ひい、本気モードめぐねえ迫真過ぎる！これも覚醒めぐねえのせいなのか！シヨタじゃなくて、私自身が怒られるように錯覚するほどなんですけどお！

「うー……」

三日目、昼です。

こつてり絞られたような気がします。気持ちは牛乳を拭かれた後の雑巾。実に惨めな気持ちです。今も右腕はゆきちゃんによつて絞られています。柔らかか痛いです。

ガバはあつても上手く行つてたはずなんですけどねえ……。

まあ、気持ちを切り替えて行きましょう！（ポジティブ）

三階制圧までが言わば、序盤！

ここからは耐久戦な中盤の始まりです。ここまで行けば、滅多な事はあつても私ほどの歴戦の走者ならば問題ありません。安心して終盤に備えて行きましょう。

主要キャラ達は、朝になると朝食を摂った後、バリケードの外に出る「えんそく」などのコマンドが発生しない限りは——皆自由に活動し始めます。

あつ、夜に見張りを行なつたキャラは三時のおやつ辺りまで寝室に行きます。

……今頃、リーさんは恵体を投げ出して寝ている事でしょう……くつくつく。まあ、何もしないし、したら好感度高いリーさんでも問答無用でいく（そういう意味ではない）なので注意しましょう。

「うー……うー……」

ここから恐れるべきは——直近で七日目。皆大好き「あめのひ」イベントです。

このゲームは、七日過ぎる毎に雨が降り、そうすると雨でビチョビチョになる事が嫌な『かれら』が校舎内に殺到し、朝昼夜限らず飽和状態になります。ゾンビクラフト系かな？（すつとぼけ）

ですので、階段が上がるのが難しい『かれら』もバリケードまで到達しやすくなり——バリケード崩壊、総力戦つという事が起こるので

す。雨は流石に止める事が出来ないので、その為の準備が必要になります。が。

「うー……うー……」

知る人ぞ知る必殺技があるので——特に準備する事はありません。ここは本チャート通り、好感度稼ぎと食糧の貯蓄をこなしていきましようか。特に、好感度ガバが激しいのが分かって来てるので積極的に揉み手で媚を売りに行きましょう。うーん……足を舐める辺りまでなら大丈夫ではないでしょうか！（謎基準）では、早速。

——キャラの好感度稼ぎをやっていきましよう！

「うー……——がうっ！」

痛っ！ゆきちゃんに噛まれた！（小ダメージ）

これは、感染してしまいました！——ゆきちゃん可愛過ぎ病に！（バカップル並感）

あー、ほっとき過ぎて怒っちゃったんだねー。ほうら、よしよしー。頭もほっぺも撫でてスキンシップを取りましよう。

「うー、んにやうー！」

子猫かな（鼻血）——たまらねえぜ。

「むーっ、やーくん。私も怒ってるんだからね？」

まあ、ゆきちゃんに隠れて外に行ったという事ですしね。

これは好感度高低関係ありません。素直に謝っておきましょう——次は一緒に行く？（ぜってえ行かせねえけど）

「もー！めぐねえのお説教理解してないでしょっ！やーくんのお馬鹿！」

ひっ、酷い！

全教科赤点なゆきちゃんにバカって言われました！

ここはプリンスコゆきちゃんを落ちつかせる為に、ほっぺをむにゆりますか。ほーら、うにやにやしてねー。ふっふっふ、怒り状態を保てず、口元が緩み始めたぞバカめ！このちよろゆきちゃんめ！

「うーっ、やーくんったら。……誤魔化されてあげるよ、もう」

よし、勝った！

では、気を取り直して——好感度稼ぎ、やっていきましよう！

「ねー、やーくん。なにする？めぐねえはくるみちゃん達が起きてくるまで自由にしていいって言ってたけど」

じゃあ、お外——

「あっ、お外はダメだからね！行こうとしたら私の幻の右手が炸裂するからっ！」

それはノーサンキュー。

まあ、お外はジョークです。流石にお昼はかれらの数が多いのでムリのムリ、カタツムリです。

めぐねえが言ったのは、くるみ達が起きてから始まる清掃の時間の事ですね。廊下も教室も、血塗れガラス塗れですから。……運営も、かれらの死体を自動で消すんなら血の跡とかも自動にしてくれれば

いいのに。変に不親切ですよねえ。

清掃の時間は夜まで掛かるので、三日目の好感度稼ぎは今の時間にしか行えません。ちゃっちゃと行きましょう。

まずは、めぐねえですかね。

……お説教のさつきさつきのさつきなので、顔を合わせづらいのは否めな
いですが——今のめぐねえは覚醒めぐねえ、ゴリラに匹敵する戦闘能
力を持っています。私は常に強い者の味方です。合わせる顔がなん
ぼのもんじゃーい！

「えっ、めぐねえに会いに行くの？……うーん、そうだね。行ってみ
よっか」

めぐねえは基本的には職員室か生徒会室に居ます。今回は……職
員室みたいですね。行きましょう。

おっ、職員室の扉が空いています。

ここは堂々と……は、止めて。先にこつそりを様子を見てからにし
ましょう。

——ちらっ。

「……………」

あら？あれは私のバッグ。

アレを眺めて茫然としてますが、どうしたんでしょうか。

使い道を捻りださないと使えもしないゴミの束なんですけどね、ア
レら。

「……………なに見てるんだろうね？」

私のバッグ、お外で色々持って来たんだよ。

「…………キーホルダー？ペン？何使うの？」

補強だよ、補強。

……そういえば、バサ槍ブツ壊れちゃったし、ある意味やっておい
て良かったですね。

ついでに補強もやっておきたいですし、返してもらいましょうか。

おーい！（媚び）

めぐねえ様あん！（媚び媚び）

どうしたのおーん!?!（媚び媚び媚び）

——これオカマだわ。

「えっ？あつ……ううん、なんでもないの。どうしたの二人とも？」

「えっとねっ！やーくんがめぐねえに謝りたいんだって！」

「……そうなの？」

えっ、そうなの？そうだったっけ？（池沼）

あー……まあ、特に拒否する必要はありませんので謝つときましよう

——めーんごっ！（精一杯の可愛げ）

「……もう」

ひい、めぐねえが近寄ってきました。

また圧力がががが——と？おや、頭を撫でられています。これはあ

……これはあ……？

「先生も……私も。言い過ぎたと反省してたの。ごめんね」

これはあ……大丈夫やな？（不安）

「だから、ね？——皆、やなぎくんが心配な事だけはどうか分かって欲
しいの」

大丈夫……って範囲内でもいいですねこれ！（確信）
めぐねえの顔が実に優しげです！そうこれだよ！これ！さつき欲
しかったのはさあ！

ここは神妙に「はい」と項垂れて、恭順を示しましょう。こうす
れば、いざの時まで警戒されないので（ゲス）

「……うん。やなぎくんは良い子ね、本当に」

「そうだよっ！」

いや、そんな事……—ありますねえ！（得意げ）

……めぐねえはもう大丈夫そうですね。もう怒ってないみたいで
す。

次はチョーカーさんのところに行きましようか。あつ、めぐねえ。
バッグ返して。

「あつ、ええ。はい——何に使うの？」

いやね。あつ、あとバサ槍さん知らない？私の方の。

「ばさやり……この事？」

「ああっ！バサ槍さん！」

oh、これは無残ですね。

昨日は暗くてあまり見えなかったですけど、やっぱり酷いですね。
刃の部分が根元から完璧にイってしまってます。

これでは槍ではなく、ただの古びた棒です。はじまりの城で貫える
棒よりも弱くて脆いとかゴミでねこれは（辛辣）。いけませんね。

ですから——このバッグの中身が必要なんですネ。

おうりーさん！その恵体でちよつくら工具のドリルを探してえ
……って。そういえば、寝てるんだった。……うう、今んところの私
へ確実な好感度を示してる唯一の良心があいないい……。

うう……。

——ねえ、めぐねえ。工具のドリルない？

「ドリル？……うーん？」

「なあに？ろけつとぱんち？」

ゆきちちゃん、それはロボに付ける方のドリルや。

「ああ、もしかしてネジ穴を開ける奴の事？それなら確か、園芸部の備品に……」

……ほんと何でもあるな園芸部。

「——ん？どうした？ゆき、やなぎ」

「あつ、たかえちゃん！」

こちら、屋上。

恥知らずのチョーカーさんが黄昏てました。

おまえの大ピンチを助けてあげたのわかってる!?!この恩知らずめえ！（ゆきちちゃん並感）

まあ、好感度稼ぎは後です。

先にバサ槍さんを治してしましましょう。えーつと、では備品を荒らしましょう。シヨタならば直ぐに見つかるでしょう。

「……んー？やなぎは何を探してるんだ？」

「ドリルだって！」

「ドリル？ぐれんらがん……？」

だから、そういうドリルじゃねえ！

おっ——こっ、これは、コードレス・高品質バッテリー・小型サイズの工具ドリルです！これはレア度高い！……いや、これにレア求めてねえよ！こういう時に豪運発揮すんのやめて!?

「ああ、それか」

それだよ。

あっ、ゆきちゃん。ちよつとバサ槍さん押さえててくれない？

「……………」

では——ギューイインと。柄の部分に穴を開けましょう。これはクソザコシヨタにも容易いです。

そこに、取って来ていたキーホルダーの中で、おっきめの輪っかが付いてるのを嵌めます。

そして、その輪っかに一個ずつ。キーホルダーを付けて行きましょう。

「あっ——」

「……………」

出来れば、ゴツゴツでトゲトゲなのを選びます。

あっ、修学旅行で男子中学生が必ず買う龍の剣のキーホルダー！修学旅行で男子中学生が必ず買う龍の剣のキーホルダーじゃないか！こいつは絶対付けましょう。

こうやってキーホルダーを重ねて付ける事によって、振るえば鈍器になります。丁度槍ではなくなったので良いリカバーですね！

よし、出来た。このぐらいでいいでしょうか。

余ったのは、またいつか使う為に適当な箱に移して、バッグを空に

しておきます。

これで新しいバサ槍、さん……ではないですねもう。

バサ……バサ……アンバサ（イミフ祈り）……——そうだ！バサ杖！

今からコイツは枝切りバサ杖さまと命名しましょう！かーっ、なんて粹な名前！痺れるセンスが光りますね私は！

丁度見た目も僧侶が持つてそうな感じですし、実に良いです。動く度にシヤランシヤラン煩いですが、かれらを音で誘導できると考えるべきでしょう！

じゃあーん！見てよゆきちやーん！

枝切りバサ杖さま！

「……うん、かつこいいよ。やーくん」

ダルルオ!?

「……」

チョーカーさん。

なんだその目は！なんだその目は！こらっ、頭を撫でるな恩知らずめ！

「——皆。二人が起きたから、来てくれる？やっっておきたい事があるの」

！
おつ、めぐねえが来ました。もうそんな時間ですか。かしこまりっか。
チョーカーさんの好感度稼ぎは出来なかつたな……。まっ、いつか。

良いリカバーできましたし、三日目は良い感じですねっ！

めぐねえめぐねえ。

ほら——杖切りバサ杖さま。

「……そう。かつこいいわね、やなぎくん」

……ゆきちちゃんと同じは面白くありませんねえ（わがまま）

午後は（スタミナバー酷使走法を使って秒速で綺麗にするだけだから）倍速です。特に面白みも無いですしねえ。

普通なら、直ぐにでも二階制圧を試みたりだとかをすべきでしょうが——正直、後衛組に入ってしまった以上、ゴリラズに任せるしかありませんので無理です。あまり運頼みはちよつと、ですし。

という訳で、モツプ片手にバサ杖さま片手にちやつちやと終わらせ……くつ、モツプがデカイ。バサ杖さま邪魔だわ。チャリチャリ鳴るだけやんけお前え！

——工事完了です……（ぐ満悦）。もう夜ですわね。

「今日は私が見回りをやります！」とやけに自信満々なめぐねえに、私達は寝室に押し込まれてしまいました。うーん……本当はあめのひじやなければバリケード突破されないからやんなくてもいいんですけどねえ。掃除の最中にバリケードの状態もチェックしましたけど、特に問題ありませんでしたし。

皆は、私と違ってかれらの法則をまだ理解してないので仕方ないんですが。

早めにそれとなく周知させたい所です。

では、とつとと寝ましょう。

皆清掃で疲れてるからか、いそいそと就寝に入ります。私も寝ます

が……—また夜廻を試みましょう。

正直、行っても行かなくても問題ありませんが——行つて損はありません。必要なのは腐ってしまう生鮮食品とかですかねえ。

まだ物理的な拘束もされてないのでささつと向かいます。なあに、今回は急ぎじゃありません。バレれば時間の無駄なので即撤回します。

持ち物……バサ杖さま、空にしといたバッグ。諦めない心。では、まいりましょう！

布団を出て、廊下を歩いているのはいいですが。

むう……やっぱ体力持久力も無いシヨタだと二日連続は流石に—

「……やーくん」

ひえ、ゆきちゃん。いつのまに。

うー……見逃して？

「戻ろ？めぐねえにまた怒られちゃうよ、だから——戻ろ？大丈夫だから」

くそ、聞いてもねえ。

仕方ない。今回は諦めてやりますか——今回はな！

おはようございます。四日目、七時の朝——生徒会室でのお時間です。

めぐねえは「ふああ、わらしはねまふね……」とかふにやふにやし

ながら寝室に行つたのもう居ません。……大丈夫だよな、廊下でもう寝てたりしてねえよな。絶対宿直が苦手なタイプですねアレは。

朝ごはんは——残りのカロリーメイトと蒸しキャベツです。食い合わせ、イミフで最悪です。

さっきのめぐねえの縮小版みたいになつてるゆきちちゃんの口に詰め込んで起こしてあげましょう。おら、私の分も食えやおら。

私が良い感じに食い散らかしたおかげで、もう食糧が底を突き始めましたね。ひゅく、タイム短縮うく。

「……んー、どつかで飯を取りに行かないとなあ」

「そうね、三階のはもう取り尽くしたし」

「でも……外、だろ？大変じゃないか？」

お外ですか。

ここは、バサ杖さまを揺らして、自己主張しましょう——私が行つてもええんやで？（決め顔）

「……………」

「……………」

「……………」

——ええんやで？（エコー）

「そういえば、夜はやつらが少なかったな」

「えっ、そうなの？」

「ああ、廊下にまばらに居るぐらいだった」

おーい。

こっち見たのにスルーはないじゃないのー！ひどい……ひどくない？

「……そういえば、夜は校庭には誰も居なかったような」

「確かに。今は……たくさんいるわね」

「ひよつとしたらアレか——夜は家に帰ってるのか」

おつ、なんとなく法則に気付いてきたかしら？

それは良いですね。そうすれば、私もそれに則った裏技で楽が出来ますし。

「……取り敢えず、この話はめぐねえに通してからにしようぜ」

「そうね。今日も一先ず、ゆつくり過ごましょ」

「……ああ」

今日の予定が決まりましたね。

まあ、自由行動っただけなので今日も適当に好感度稼いで行きましようか。

「そういえば、焼き芋。食いたい。……やなぎが作ると美味しいんだ」

「んー、そうね。朝からすきっ腹だとね。……なぎくんが作ってくれたら」

「焼き芋か。いいな。……やなぎが上手く作れるのか？」

……期待した目で見ても、さっきの事——私、忘れてませんよ。

………無論、これが良い好感度稼ぎになる事も——私、忘れてませんよ。

しゃあないな。しゃーあ、なーいなあ！（銀河系より広い心）

やってあげましょう。どうせ、好感度稼ぎに終始する予定でしたし——あー、でも燃料が。

「燃やす物だったら、棚に何かいっぱいあるから適当に使えるわよ？」

棚ね。

ふっふっふ。

まあ、焼き芋だけで好感度が稼げるなら楽な商ばっ——

マニュアル「ハアイ」

——閉めます。

すうー……ふうー……（深呼吸）。

いや、まさか。いやあ……まさかねえ？きつと見間違いですね！R
TAのやり過ぎで目がやつてしまったんですねきつと！

マニュアル……マニ……アニ——そう！アニマル！

きつと、棚の中にライオンが入っていたんですよ！

ああ、よかつ——

マニュアル「ハアイ、ジョージイ……」

——ふあつきゅー！ふあつきんみーっ！

私のバカ！そういえば、忘れてたくそが！ああ、取り敢えず、適当
なものを上に置いて一先ず目に見えないようにして……！

いや待て。このまま一緒に焼却してしまえば——！

「ん？なにかあつ——」

覗き込むな、ゴリラ！

閉めます。閉めまあーす！押さないでくだあーい！！（駅員並感）

見られる訳には行きません！——いつ、いやあ。棚には何にも無
かったな！紙も無かった！しょうがないから、職員室まで取りに行か
なきや……。

「そうか。んじゃあ、あたしが取ってくるよ。頼むのはこっちだしな」

流石、ゴリラ優しいな！だからこの棚からとつとと離れろ！

「じゃあ、私はお芋掘ってるわね。なぎくん、たかえちゃん。ゆきちゃん
んが起きたら手伝いに来てね」

「ああ」

おう！分かった！とつととゴー！

ふう……ゆきちゃん。ほっぺちよつと借りますわ。

「むにゃ……うにゃ……むにゃ——ふえ？」

アレ、適当な時にどっかに隠すかコンロで焼きますか。あー……でも、生徒会室って基本誰かいんだよなあ……。

「……………」

チョーカーさん。なんだその目は！

こつち見んな！柵を見るな！見ないでえ！

焼き芋を振舞いました。好感度が十分に稼げた事でしょう。

スゲエ嬉しそうにしてたんだ。これは低いから普通よりちよい上
になったのでは？

なれ（豹変） なって（懇願）。

では、自由時間です。

生徒会室に行つて、マニュアルを入手しに行きましょう。

くつそ、これならまだめぐねえのここに置いとけばよかつた……！

「あらっ……どうしたのなぎくん？なにか用？」

用があるのは恵体じゃなくて、マニュアルなんだよお！

仕方がない——もう数時間後にもつかい……！

「ん？おー、どした？あたしになんか——」

なんもねえよゴリラ！

くそつ、また数時間後なら……誰も居ないは——

「む……どうした？柳」

「やーくん。また、だるまさん転んだしてるの？」

ぬわああああん！絶対誰かいる！なあんでいつも誰かいんだよ！もおおー！

「ふわあ、おふあようございまふ……」

ちつ、めぐねえも起きてきたか。時間を完全に無駄にしました。

……苦渋ですが、また機を狙いましょう。まあ、あんなところにマニユアルがあるなんて誰も思わないでしょうし。

夕方——そして、夜になりました。

何も無いとほんと何も無いのがこのゲームの良いところですよね（トイレ休憩の多さ）。

「じゃあ、今日も私が夜にいるわね」

「えっ？いいよ、めぐねえ。今日はあたしが……」

「ううん、大丈夫。くるみさんは寝てて？」

おつ、今日もめぐねえが見張りを……。

うーん、ていうか。そろそろかれらの習性を周知させて、夜寝かせた方がいいですね。昼夜逆転に慣れさせると面倒ですし、すれ違いが

起きて好感度が下がりやすくなります。なに？お前ら両働きの夫婦かなにか？

五日目に、それとなく伝えるとしましょう。時間的にも丁度良いですし。……四日目。ほんと時間の無駄だったなマジで。

「あつ、めぐねえ。私も付き添いますよ」

「それじゃあ、私も。その、話したい事があるし。佐倉……いや、めつ、めぐねえ……」

チヨーカーさんかわゆす。

りーさんも職員室に向かうようなので、これはこれは——夜行けそうな匂いがしてきますねえ！

「……まあ、夜起きてるのは辛いからありがたいか。んじゃ、寝ようぜ」

「うんーはいー！おいでやーくん！ぬくぬくしょ？」

んじやおやすみなさーい（ガンスルー）。

「ふえ……」

「……………。おい、やなぎー。ゆきが泣く一歩手前だぞー。一緒に寝てやれ」

——ちらっ。

「ふっふっふ。うっそ——」

——すやあ（秒速寝入り）。

「…………あれー？」

「やなぎがあんな呆れた顔すんの初めて見た……」

おら、とつと寝る寝る！ネルネルネルネしてやるぞ！（謎脅し）

……—とでも、言うと思ったか！（今回二回目） 夜廻の再来を行ないます（今回二回目）。

ふっふっふ、ゆきちゃんも何とか起きようと頑張ってたみたいですが、ぬくぬくの魔力には耐え切れなかったようすなあ（二チャア）

では、スルリと布団を抜け出して廊下を目指し……うおっ、また画面がぼやけた。シヨタはこういうのが弱いなあやっぱり。

うーん、この辺は諦めてチャート変更すべきですかねえ。

——お菓子数箱、カロリーメイトもそのぐらい。カップ麺人数分。キャベツは十玉、サツマイモは把握はしてないけどそれなりに。

それが私達に残された食糧だった。

「やっぱり……もうご飯が無いですね……」

「はい。キャベツとかお芋があるので当面は大丈夫ですけど……」

それでも、それだけじゃいつか枯渇する。余裕がある内にどっから取って来た方がいいのは明らかだった。

夜。職員室で丁度良いからと話しかけてきたのは——世知辛い食糧事情だった。

残ってるのは心もとないもの。どう考えても足りない。多くあつ

たように思えたが、意外に少なかつたようだった。……餓死なりかけの私がいっぱい食べたつてのもあるかもしれない。

持って、明日まで。

それが過ぎれば——焼き芋を主食にした、茹でキャベツの茹で汁生活だ。嫌だ、そう言える事態ではないと分かっているが——やはり、嫌だ。

「……外に、取ってくるしかないと思う」

私がそう言うと、めぐねえとゆうりは小さく頷いた。それでも不安は隠し切れない。

……当然だ——外には『やつら』がいる。耳の奥で呻き声が聞こえたような錯覚を受けた。

「ねえ、たかえちゃん。夜に、あいつらが少なかつたつて本当?」

「えっ、そうなの?」

朝の話に戻った。

やなぎが、これみよがしに「この僕が行ってきてあげるよ?」とドヤ顔しながら、バサ杖とやらをチャラチャラ鳴らしてたのを思い出して——少し、心が軽くなった気がした。

「ああ。その……やなぎが連れてつてくれた時、廊下に数人しかいなかった。教室も、そんなぐらいだつたと思う」

「そっか。じゃあ、行くとしても——夜」

「……」

「大丈夫よ。くるみさんもいるしね?」

そう言つて笑うめぐねえだが——ゆうりからは見えない手元は、静かに震えていた。

やつらはやつらでも——それでも、元は知り合いだつた。そう思うと、めぐねえの気持ちは理解出来た。

それでもやらなくちや生きられない。それは、とても悲しい事に思えた。

静けさが職員室を覆つてしまった。

めぐねえはボールを見つめて。ゆうりは頭を静かに抱えてしまつ

た。

……これじゃあ、相談してもさらに落ち込むだけだな。取り敢えず、空気を変えようと生徒会室で温かい飲み物でも淹れてこようと立ち上がった時――

シヤラン……シヤラン……。

金属が擦れる静かな音が廊下から響いてきた。

私達は顔を見合わせて――また、顔を曇らせてしまう。私の相談の元がやってきた。

音を立てないように静かに扉から覗きこむと、

「……………」

バサ杖さまだ。バサ杖さまだと自慢していた杖を片手に廊下を歩いている柳がいた。

その足取りはおぼつかず、わかりやすいくらいフラフラしていた。

「……やなぎくん」

そう呟いたためぐねえは酷く悲しげだった。

溜息を一つ。呼び止めようとしたのを――私は止めた。

「――やーくん」

後ろから、ゆきが近づいてきたのが見えたから。

ゆきに声を掛けられると、ふらつとそこに目を向けた柳は、何事か呟いていた。

「大丈夫――戻ろ？ぐっすり寝れば、また元気になるよ」

「……………」

「だから、戻ろう？明日になれば、悲しくないよ」

「……………」

ゆきの言葉に従うように、音は遠ざかって行った。私達はそれを――ただ、見ているしかなかった。

「無意識、なのかも」

ふと、ゆうりがそう呟いた。

「なぎくんはめぐねえの気持ちを不意にするような、そんな子な訳がない。でも、きつとそれでも……」

「こんな状況だものね。その……おかしな事が起きても不思議じゃない……」

「めぐねえ……」

あの杖に、一個ずつあいつらの形見を付けていた柳を思い出す。

それはとても悲しげで——何処か、上の空な印象を受けた。

「シャラン……シャラン……と擦れて鳴るアレは空虚で、もう無くなってる過去を——必死で隠しているような、そんな雰囲気があった。」

「相談つてのは、柳の事なんだ。その……何とかしてやりたい」

めぐねえとゆうりはしつかり者な印象が前からあった。こうした相談に乗ってくれるはず。くるみもいいやつなのは知ってたが、戦うなんて役目が強いアイツには酷だろう。ゆきは……まあ、うん。

「私達に接する時は、酷く明るいんだ。いつもよりもおどけて……励まそうとしてくれる」

「……」

「でも、それが見てて辛いんだ。アイツだって、苦しいはずだろ……？ あんなの作って、あんなになって……！」

「……たかえさん」

「私はっ、アイツに助けられた。だから、助けたいんだ。だから、知恵を借りたい。私には何も思いつかないんだ……」

この二日間。見てて思った。

——柳は危うい。

めぐねえの説教は、てんで効かない——何を言っているのかよくわかってすらも無かったように思えた。

現実を理解しているのか、していないのかも定かじやない。そもそも現実を見ていれば——私を助けようと、果たして考えただろうか。

——『あれ？義一くんまだ学校に居るの？また顧問に怒られるから早く帰った方がいいよ？』

血に塗れ、こちらを食べようと口を開いていた化け物を目の前にして、そう言える——それが果たして、正気なのか？

わからない。わからない。私達は専門家じゃない——だから、怖いんだ。

柳が壊れようとしてるのに、何も出来ない。助けられたのは私なのに、私は何も——！

「——たかえさん」

めぐねえの言葉に、顔を上げる。

気が付けば、視界が曇っていた。めぐねえが浮かべているのだろう。淡い笑顔が良く見えない。

「ありがとう、打ち明けてくれて。たかえさんは優しいのね」
「へっ……っ？」

「だって、そうでしょう？人の為に涙を流せるのは、優しい証拠。大丈夫、絶対それはやなぎくんにも伝わってるわ」

「……そう、かな」
「そう、思いましたよ？」

視界を拭っていると——ゆうりが何かを思いついたように表情を明るくしていた。

「ねえ、二人とも——だったら、楽しくすればいいと思うの」
「楽しく……っ？」

「終わった事は、終わった事……だから。それだったら今が楽しい方が楽しいに決まってる——家族だって、他人がなれるんだから、心は持ちようだと思うの！たぶん！」

「いつ、いきなり明るくなったわね、ゆうりさん……」

若干、良く分からないゆうりだったが——言いたい事は、理解出来た。

今をよりよいものにするのだ。過去が過去だと言えるような、そんな明るい今を。空元気であろうとも。

「この生活を、例えば部活って事にして」

「部活……だったら、名前とかどうしようかしら——」

盛り上がる二人に、私は「二人が不安だから」と席を立った。

それは本当だし、二人ももう大丈夫だろう。それに——指針が見えたような、そんな気がした。

寝室に戻るまでに、ふと生徒会室で立ち止まる。

そういえば、気になる事があった。

「……………」

棚。そこで柳は変な事をしていた。開けて閉めたと思つたら、また開けて。くるみが近づいてつたら中の物を隠そうとわたわたした。

二人は気にしてなかったようだったが——私は妙に気になった。

その後、柳がゆきのほっぺで遊び始めたつてもある。

柳がゆきのほっぺをいじくる行為。皆は微笑ましい光景として見ていたが——二人と絡みが多い私には、気付いていた。

あれは——柳が不安になったり、怯えた時にやるやつだ。

ゆきも、それを分かっているはずだ。だから甘んじてる——それで、柳が癒されるなら、と。あいつはポヤポヤしてるくせに、妙に鋭いところがあるし。

つまり——この棚には何かがある。

「……………」

開ける。

そこにあったのは、良く分からない紙の束だけだった。特段、気になるものはない。見当たらない。

「……………気のせい?」

それも、あるかもしれない。

柳は今——ひどく、疲れている。いつもと違う行動を取る事も不思議ではなかった。

「……どうにか、元気になってほしいな」

私も二人と同じ方向性で、何らかのアプローチを試みたい。行動をしていないと不安でしようがなかった。

アイツを意識させるもの。

過去じゃなくて、今——私達を強く思わせて、現実を見させる方法。少し考えて——頭のふちに、引っ掛かるものがあった。

「……………」

私の教室は——運良く三階だ。

なら、まだあるはずだ。

「あつた」

無残な教室。

私が座っていた席から——かなり離れたところに吹き飛ばされながらも私のバッグはあつた。

探し物はその中。

いつかの為にと取っておいたものだ。恥ずかしくて誰にも言わずに、それでも持ち歩いていたもの。

『一對のチョーカー』

二つ合わせたら満月になるっていう、今思えば少女趣味甚だしい代物だ。正直、今もちよつと顔が熱いを感じる。

「……………むう」

付けていたチョーカーを外し、このチョーカーの片割れを身に付ける。

床に散らばったガラスの破片を覗きこめば——首元に半月が揺らめいていた。

ふと、柳がこれを付けるのを思い浮かべる。
似合うだろう——きつと、似合う。

「柳、気付いてくれるかな」

手の中にある片割れを弄ぶ。

今は気付いてくれなくても、いつかきつと気付くだろう。

それがどういう意味かは、恥ずかしくてあまり考えたくは無いです。

——五日目に入りました。おはよ……あれ？なんかシヨタの首元に何かありません？

「あれ？ねー、やーくん。そのチョーカー、どうしたの？」

いや、わかんない。

いつの間に……って、アレこれ。この形状って……確か、チョーカーさんから貰えるアイテムの……

「ほら、なにしてたんだ。もう皆生徒会室に集まってんぞ」

おっす。チョーカーさん。これ、チョーカーさんが付けてくれたの？

「……………何の話だ？ほっ、ほらー！早く行くぞ」

あれー？

気のせいなのかな？えっ、幽霊が付けたとかバグ？……これ終わったら報告案件？

「……………たかえちゃん、首輪変えた？」

「首輪じゃなくて、チョコカーだったの。気分を変えてみた……似合
う？」

「うん！とっても綺麗！……やーくんとそっくりだね？」

「……ゆきは気付いたってのに、なんであいつは気付かないんだって
の。……気付け、バカ」

五〇六日目 Present

——七日目までやる事が少ないRTA、はーじまーるよー!

「おはよう。良く眠れた?」

「それなりー。めぐねえとリーさんもお疲れ。なんかあつたか?」

「特に変化はないわ。……くるみ。後で話があるからお願いな」

「んー?わかった」

五日目の朝、生徒会室。皆集まったのご朝食です。

本日の献立——キャベツ塩スープを啜ります。(スープはあつたか
いけど、食材のバリエーションは)冷えてますよお。

食い荒らした経験が活きてきました。食材が枯渇し始め、危機感が
強くなる頃合いです。タイム短縮に近づきました。

何故か、の説明の前に。

このシヨタの首にチョーカーが着いてる理由を……

「やーくん。はい、あーん!おいしっ?おいしっ?」

「……………」

(塩だけで茹でられてしなしなししていて、且つ味すらお湯で薄まった
キャベツ)おいしいですねえ!

やっぱ、ゆきちゃんに食べさせられると無色もバラ色になるやなっ
て。

いや、そうじゃなくて。

一瞬焦ったけど、このゲームの面白いところをですね……

「…………なあに、たかえちゃん?こつちを見てもやーくんしか居ないよ
?」

「——っ!あつ、いやなんでもない……あー、ご飯美味しいなあ……」

「…………ふうくん……」

「修羅場ね」

「修羅場だ」

「……………」

「めぐねえ——そんな置き去りにした青春を羨むような灰色の瞳しないでください」

「大丈夫だよめぐねえ。まだチャンスあるって」

「しっ、してません！」

……ええ、はい。

朝食を済ませている間に——シヨタの首元にチョーカーが着いている事について説明します。

一瞬、バグか？と焦りましたが、これはただのチョーカーではありません。この意匠には見覚えがあります。

これは「おくりもの」——『たかえのチョーカー』です。

「おくりもの」とは、キャラとの信頼イベントをクリアした際に入手する事がある特別なアイテムで——主要キャラ全員から、その象徴する物を貰う事が出来ます。それぞれ特殊な効果を持っていて、大変有用です。

一番最強なのはゴリラからの「おくりもの」です。こう言えば察しの良い皆さんなら分かると思います（視聴者への信頼）。

しかし、この信頼イベントというのが中々の曲者で——殆どが、好感度を上げるだけでは発生しません。キャラによっては、バッドエピソードギリギリまで行かなくちゃいけなかったりと入手条件はかなり困難です。

一番難しいのはゴリラからの「おくりもの」です。こう言えば察以下略（信頼の再確認）。

これがただのチョーカーなら「そっ、装備した覚えはない！ヤダ……コワイ……（恐怖）」とRTA中断でのバグ報告ですが——「おくりもの」なら話は違います。

柚村貴依の信頼イベントである『気づいてほしい、貴方へ』はひっそりと進行されるからです。

というのも、チョーカーさんは、自分をサバサバなパンク系だと思
い込んでいる中身純情乙女なので——信頼イベントは、面と向かって
発生する事はありません。『気がついたらアイテム欄にあった』『気が
ついたら装備されていた』というなんとも心臓に悪っ……………乙女な
いじらしさで渡してきます。

その為「……………まあたガバア？」と呆れた視聴者の皆さん、安心して
ください。

RTAはげんきです。信頼イベントの発生はしなないと思っ——い
や、想定範囲内です。ガバはガバでも良いガバなので大丈夫です
(一行矛盾)。

でもなあ……………(ジト目)。

「ん……………なっ、なんだよ柳」

……………でも。

信頼イベントが発生するくらい好感度が高いなら——どーして前
回は意図を理解してくれなかつたんでしよう？

通しプレイだと、大抵ああいった場合はこちらに利する形でフォ
ローしてくれる空気が読めるチョーカーさんだったんですが。

「……………っ、みつ、見るな。見るなよお……………そっ、それは、ほんの出来心
で……………！」

……………やはりバグ？

ですが、『好感度とかのステータス調整がブツダも引くほどシビア
でも、バグの類はほぼない神ゲー』なこのゲームで、まさか此処一番
でやべえいの引くとは思えません(断言)。

思いたいです(願望)。思わせて(懇願)。思え(同調圧力)。

「……………っっっ！」

昨日着いてなかったチョコカーに、周りの言及が少ないのも不穏ですし……そうですね。バグであったなら、リセなので……朝食中なら大したロスでもありませんしい……。

ここは一つ。
確実な安心を得るという形で——彼女に直接聞いてみましょうか。

着けたかどうかが大切です。バグならリセット。寝込みます

バグじゃなければ、チョコカーさんの好感度は高いのが分かりますし、『たかえのチョコカー』自体は有能なアイテムなので装備しているのは問題ありません。

——ねえねえ、チョコカーさん。このチョコカーって貴女が着けましたか？

「なっ……えっ、いやそれは……あつと、ちがつ、わなく……あの……」

ええい！なんじやい！どっち？それはどっち!?言い淀むなその時間がロスダルルオ!?

着けたのか！着けてないのか！ハッキリ声に出して言っつて貰おうかッ！チョコカー！

「~~~~ああ着けた！着けました！あんなところから助けてくれた感謝ですう！……これで満足かつ、言わせるなバカ……！」

ベネ。

よかった。バグじゃなかった。じゃあ、RTA続行！問題なし！チョコカーさんの好感度が高いのを示しています。これは大きいですねえ！（りーさんへの飛び火）

では、「おくりもの」を貰ったお礼を言しましょう。重要なものなので、こうした細かいところを注意しないと好感度が下がる時があります。面倒だなっ！（素）

ええと、そうだな。こんな感じでもいいですかね。

——ありがとう。大切にするね。

なぜ黙る？

「……」
なっ、なんか言えよ。なんか言っつてよ！不安になるでしょ！？
——えっ、フリーズとかした？バグ以前の問題？

「……………むう」
「あら、ゆきちちゃん。邪魔しないのね」

「だって……………しよーがないもん。たかえちゃんの気持ちもわかるもん……………」
「なら、なんでさつきまで威嚇してたんだよ」

「それは乙女の尋常な戦いだもん。……………いいもんいいもん。どんなに女に粉かけられても、最後にこの私の側にいてくれるなら」
「ラオウかお前は」

あっ、他の人の進行した。

ふええ……………（幼女走者）。チョーカーさんまだ何も言わずこっち凝視してるよお。

「……………私は若い……………私は若い……………私は若い……………！」
「いけない。めぐねえが若さに当てられたせいで、目が虚ろになってるわ」

「よーし、皆。早く飯食い終われー。早くしないとめぐねえが永遠の十七才とか言い始めるぞー」

仕方ない。時間ももつたいないですし、朝食を終えましょう。

信頼イベントが進んだのは確定しているので、変な事にはならない
はずです。

五日目の自由時間に入りました。

今回は——少々の確認と、フラグ建てを行ないます。それ以外に特
にやる事がないんですよねえ……。

本チャートだったら、この時間は三階を降りて購買部や学生食堂で
メシをかつぱらいに行くはずだったのですが……めぐねえあいつめ
……（怨嗟）

「ねえ、やーくん。私のだったら何が欲しい？」

君が欲しい（適当）。

「きやーっ！もー、やーくんったら……んじゃあ、夜にね」

はい。

例によつて、ゆきちゃんも一緒です。幼馴染で後衛組だと大体一緒
ですね。

ゆきちゃんは一緒にいるだけで、正気度が安定するのでありがた
し。拝むようにほっぺをむにゆりましょう。

「うにやみだぶっ」

なんて？

それでは行動開始。

まずは、めぐねえかくるみの様子を見に行きましょうか。その反応
を見て、今後の行動如何を決定します。

移動の間に——何故、私が食糧をクッキーモンスターの如く食い荒
らしていたかについて説明しましょう。

まあ、ざつと言えば食糧を取りに行かせる為なんですけどね。そうすれば、エンドまで行く時間が短縮されます。……なんでだつて？なんでやるなあ……？（すつとぼけ）

本チャート通りなら、んな事せずに私が勝手に取って来て皆の口に突っ込まずのですが、こうなつてしまった以上そうする事は出来ません。むりくり行つても妨害されるだけでしようし。

だから、危機感を煽らせて急かしていたんですね。ほらほらほら、どんどん行くぜえ！（デブの道）

戦闘メンツがゴリラがいる時点で過多なので、死亡の危険もありません。安心して逝つて貰いましょう。……あれ？

「……で、今日……」

「……い。準備を……」

——おつ。

丁度良く、めぐねえとくるみが職員室にいました。声を……掛けずにひっそりと覗きましよう。

「……う。なんで隠れるのやーくん？」

隠れたいから（適当）。

ゆきちゃんに聞かせないように耳を塞ぎましよう。互いの好感度が高いと危ない事だと止める事があるので。現状を諭されれば、結局領きますが——その時間自体がロスです（走者の鑑）。

「ひゃつ、くすぐりたいよお……」

かわいい声出すじゃねえか。黙つててね？

ゆきちゃんの耳を適当にこねこねしながら、二人の会話に集中します。夜探索の話かの確認です。……まあ、あんなシリアスチックな顔して校舎図らしきものと睨めっこしてる時点で確定ですけど。

「……たかえの言う通りなら、夜にやつらは少ない。行って帰るくらいなら危ない事も少ないよな」

「ええ。必要なのはスパゲッティとかお米とかレトルトとか。電気が通ってる内に、冷凍食品とかも回収したいですね。腐る前に食べちゃいましょう」

「あつ、だったらさ。明日のあの時に盛大に食べないか？ある意味祝いなんだから、そんぐらいしてもバチは当たらないだろ？」

「……そうですね。ちよつとくらい贅沢しちやいませよ」

「おっしやつ！やる気出てきた！」

「もう……本番は夜なんだから、あまりはしやがないようにね」

ふむ。やつぱり夜探索をしようとしていますね。おっけ、問題なし。

……それは良いとして——明日のあの時ってなんででしょう？特に明日はイベントらしいイベントは無いんですが……。

うーん？

ええつと、現時点で発生しうるイベントは『ゆきちゃんの補習』『めぐねえの授業』でしょ、あとは『スケベシャワーシーン』とか『校長室のワインを飲んだぐびねえ』とか？いや、それで贅沢という言葉は出ないでしょうしい……。

……あつ、『学園生活部、結成』。

そういえばこれありましたわ(素)。これなら確か、食糧が豊富な時は少しの贅沢としてご飯が豪勢になったはずですよ。

いやでもこれ、『誰かの正気度が著しく減少している際に発生』するイベントなんですけど、そんなのついていましたっけ？

めぐねえとくるみも、チョーカーさんも大丈夫そうですし。

「ふにゃあ……ふにゃあ……」

正気度爆弾なゆきちゃんも、耳をこねこねされてうとうとししてるし。猫かな？

りーさん？りーさんかなあ。いやアレは隠れ発狂の達人だから、誰にも悟られずに発狂するはず。……ニンジャかな？

うーん……？

まっ、いつか。明日はガチで何にも無いですし。『学園生活部、結成』の際に入手出来るアイテムもあつたら嬉しい神アイテムなのでオーキードーキー。

では、職員室から離れます。

次はフラグ建てを行ないましょうか。……恋愛フラグではありませんよ？

このフラグとは——七日目「あめのひ」の総力戦の際に使用出来るギミックと必殺技の解除です。

かなりの数の『かれら』がやってくるので、覚醒めぐねえが居ても突破はされてしまうってWIKIにも書いてありました。その為、やるだけやっておきましょう。

本チャートなら……うう、本チャートならなあ……。

外に出た際に、『かれら』の習性とか教えられて——こういった事しなくても、必殺技が出来るんだけどなあ……。

怨嗟が……怨嗟が私に降り積もって行く……（責任転嫁）。

バリケードの前に到着しました。ゆきちゃんの耳こねこねを止めましょう。

「ふにゆう……もういいの？」

ありがとう。とてもよかった（意味深）。

では、フラグ建てを……つと。

「ん？なにしてんだ二人とも。……あぶないぞ」

「あつ、たかえちやーん。さつきぶりー。あははのはー」

「……屈しない。屈しないぞ……渡したのに反省はあるけど後悔はな

い…………！」

チョーカーさんが来ました。二人ともやっぱり仲が良いですね。丁度良いです。フラグを建てるのは多い方がいいですし。

見て、二人とも——ここにバリケードがありますね。

「あるね」

「…………？そうだな」

よし、次行きましょう。

「おーっ！」

「えっ？…………えっ？」

次のフラグは、消火栓です。直ぐ近くです。とつとと行きましょう。

「…………なんなんだ？」

「…………——フツ」

「むかつ」

「あら？三人とも、仲が良いわね」

おつ、リーさんちーすっ！

見回り後ですから寝るみたいで、体操服姿です。デカイ（デカイ）。上も下も。

「リーさん！今からおやすみ？」

「ええ、寝させて貰おうかなって。あつ、ゆきちゃん。そういえばめぐねえからお話があるから聞いといて」

「うげえ、赤点の事かなあ」

「うーん。そんなところ、かな。たかえちちゃんもお願いね」

「おう。アレだろ？」

「しいー……」

「あつと」

アレとは？つと聞くのはロスです。どうせ、夜探索の話ですので。聞いても聞かなくても進行するので気にしな。いにしな。いにしな。

あつ、皆見てくれ——消火栓があるぞ！

「あるねっ！」

「あるな」

「……？ええ、触つちやダメよ？」

よし、次行くぞー！りーさんも来いほらっ！

「えっ？ええ、別に構わないけれど……なにこれ？」

「わからん」

「——フフフの、フツ」

「なんでゆきちちゃんはこんなドヤ顔なの？」

「ああ、こねくり回したくなるくらいムカつくよな」

「うっ、うにやあ！ほっぺはやーくんのものお！」

次は、ラスト——放送室です。これだけしとけば、ギミックも必殺技も使用出来ます。えっ？指差してるだけで傍目から見れば変質者だっ？別にいいんです。確認だけすればフラグは建ちますしい。

「ん？なにやってんだよ、お前ら」

「皆、集まって……大名行列？」

おっ、さらに丁度良い。

お前らも来いほいっ！

皆さん。こちらをご覧ください——放送室がありますね？

「あるねっ！」

「あるな」

「あるわね」

「そうだな」

「そうですね」

はい。フラグ建て終わり！

以上、解散！みんな帰っていいよっ！ラブ&ピース！

……時間は昼か。もう何も無いから昼寝して、夜に起きてまた寝ますか！

じゃあ、皆——あばよっ！

「ええ……？」

「なあ、りーさん。なんだったんだ？」

「さあ？」

「フツ、フツ、フツ……ふう——フツ」

「ゆきちゃんはわかるの？先生、分からないんだけど」

「うん……——わかんない！」

「胡桃。押さえといてくれ」

「あいよー」

「ふにやあ！やっ、やめっ！ほっぺはやーくんの！ねっ、寝取りは悪い文明！悪い文明だよお！」

「人聞きの悪い事を言うな！紛らわしいんだこの野郎！」

「女だもんっ！」

「この女郎！」

「律儀かお前」

——夜になりました。

今回の見張りは、めぐねえ、くるみ、チョーカーさんだそうです。ゆきちちゃんもリーさんも、皆そわってますねえ……なんでなんですかねえ（すつとぼけ）。

どうやら、あの後ゆきちちゃんにも夜探索の事を伝えたみたいですね。寝てる間の事なのでロスに非ずやで。

では、寝ま……

「やなぎ」

おん？どうした、くるみよ。明日のご飯は楽しみにしていますよ。その腕力であるだけかっぱらってきてください。

——つとと。頭を撫でてきました。これはあ……ただのスキンシップやな？（不安）

頭撫でてるのは振りで腰に紐はあ……付いてない！

「行ってくるよ。ゆつくりしてろよ」

……お前それ今日は違う事やるって言ってるのとおんなじやぞ。

なに？フリ？付いてけばいいの？（芸人）

ロスだから行かないけど（走者）。

三人が行きました。まあ、ゴリラ・ゴリねえ・一兵卒なら大丈夫でしょう。

「ねえ、やーくん。一緒に寝よう？」

ええで（かわいい）。

「なぎくん。私もいい？」

ダメです（でかい）。

「あら、なんで？」

「ダメだよ。私達は幼馴染で、愛し合ってるんだからいいんだもーん。ねーっ、やーくん」

（このシヨタはりーさんと一緒に寝ると胸元に顔突っ込んで呼吸困難になって朝起きた時にHP真っ赤になったりするからね）そうだよ。

「そう、幼馴染。……んじゃあ、寝ましようか。明日はきつと、楽しいわ」

「うんっ！」

明後日からは地獄だからね、腹一杯になるくらいメシを持ってきてればいいんですが。

六日目、朝になりました。

「いっぱい……持ってきたわね」

「ああ、往復したんだよ。こんぐらいあれば大丈夫だろ？」

「何回も行ったの？……大丈夫だったの、めぐねえ」

「ええ、夜だったからかれらも居なかつたので。チャンスだと思って。集めるだけ集めたの」

「そっか……」

戦果は——上々！FU〜!!

スパゲッティ、お米、レトルトがダンボールいっぱい！お菓子もありますねえ！冷凍食品もありますあります。流石ゴリラズ&Ms チョーカー、やりますねえ！満足行く成果です！

購買部とお、ついでに学生食堂も行きましたねクオレハ……。流石

に一階に行くのは止めて欲しかったですが、無事なら結果オーライ！
……あつ、因みに居なかつたは嘘です（看破）。

（流石に誰も居ないは）ないです。ゆきちゃんを心配させないめぐねえは先生の鑑。でも、スカートの裾に血いついてるのゆきちゃんガ
ン見してるの気付かない先生の屑。

さあて。

では、朝食……の前に、リーさんがやけにニコニコしてるのでこれはその前にイベントですね。『学園生活部、結成』でしょ？知ってる知ってる。

「ねえ、皆さつそくだけど部活……始めない？」

知ってる（念押し）。

「ぶっ、部活う？いつ、良いんじゃないか。たのしそー」

「でしょ？…こうして皆でいるんだもの。楽しい事しましょう？……くるみ、演技下手過ぎるからもう黙ってて！」

「……すまん」

はい、『学園生活部、結成』が始まりました。

本編でもリーさんとめぐねえが主導した、がっこうぐらしっ！の代名詞ですね！……基本的に本編見た人なら皆を曇らせないように行動してしまうので結局結成しないでクリアしてしまう事が多い、影が死ぬほど薄い代名詞ですけどねっ！

「ええ、貴方達は学生ですからね。因みに私が顧問ですっ！」

「えーっ、めぐねえが顧問？不安だなあ」

「……ゆきちゃんは顧問権限でこの後補習です」

「げえー！」

互いの好感度も大丈夫ですし、このまま何もしなくても勝手に進行

していきそうですね。

では、私は適当にボタン連打で聞き流しましょう。アイテム入手に行くまでバサ杖さまでも揺らしてBGMに花でも添えましょうか。しやらんしやらん。

「——ほら。柳」

うん？

なあに、このイベントでは居ても居なくても大丈夫なように台詞数が少ないチョーカーさん。

……ていうか、こつちに話しかけてくる時ってありましたっけ……？

「ちゃんと、聞こうぜ。大丈夫——今だって、きつと楽しいぞ？」

………？

なにいつてんだこいつは。

「そうよ、なぎくん。部長なんだから、ちゃんと聞いて」

………んう？

えっ、シヨタが部長？リーさんじゃなく？

「私は副部長よ。部長はなぎくん。貴方がやるの」

「じゃあ！私はやーくんの補佐やりたいっ！部長補佐？秘書？」

「んー、私はアレかなあ。戦闘員？」

「悪の組織か。シヨツカーかよ」

「むしろ、お前がシヨツカーっぽいだろチョーカー的に」

「お前も付けてんでしようが」

「私は顧問っ！」

「……なんでめぐねえはあんなに嬉しそうなんだ」

「確か、なんかの顧問やりたかったけど頼りないとかでやらせて貰えなかったらしいぞ」

「世知辛い。でも納得」

なんかシヨタが部長やる事になつてる……。

別に特に部長だからってやる事は特に増えはしないので構いませんが……うーん？いつもはリーさんなんですけど……。

まっ、いつか。

「それでは！結成を祝つてお食事の、前に！」

あかん。めぐねえが凄いテンション上がつてる。本編でもこんなに上がつてないだろ。なに？深夜テンション？

めぐねえが取り出したのは——ポラロイドカメラ。

撮った瞬間にべーつと写真が出て、少しすると映るやつですね。今で言ううちエキ？とかいうらしいですよ（時代）

「皆で一緒に、記念写真を撮りましょう！」

いつの間にやら用意されていた学園生活部の紙を生徒会室にペタッと。これで此処は今から部室に変わります。

文字数が楽……楽……。

「ほら、皆集まつて！」

「やーくんは真ん中ー！私はその横！」

「じゃあ、私はその後ろで」

「あたしもそうしよっかな」

「……すすっ」

「あつ、たかえちゃん！やーくんの横っていいよねー？」

「うっ、うう……」

「ここまで来ていじめてやるなよ、ゆき……」

「じゃあ、撮りますよ？はいっ——チーズ！」

——パシャリと。

はい。これで『学園生活部、結成』イベントは達成……ではありません。写真は計二枚です。本当はりーさんが撮るのですが、私が部長になっているので私が代わりにやらなきや進行しないでしょう。

——めぐねえ、カメラパス！

「えっ……っ？」

——めぐねえも一緒に撮るんだよ。あくしろよ。

「そうだよ、ほらっ！めぐねえも！」

「ですね。顧問が映らないと恰好が付きませんよ」

「だなー。後で、めぐねえの顔写真。右上にはつつけてもいいけど」

「やめろ、悲しくなるやつだろソレ」

「皆さん……」

感動的だけど、早くしてね？（数秒でも気になる走者の鑑）

では——パシャリツと。

これで『学園生活部、結成』イベント達成です。

神アイテム、『学園生活部の写真』を入手しました。適当に装備しましょう。

これは、装備していると——正気度が高い状態で維持されます。R TAの都合上、おろそかになりますからね。操作しづらくなるだけのバッドステータスですが、無いに越した事はありません。

問題はデメリットですが、大丈夫大丈夫。私は歴戦の猛者ですからねっ！

「それでは、結成を祝って。今日は贅沢をしましょうか！」

「やったあー！」

「……あつたかいご飯が食いたいなあ」

「私はパスタが食べたい……」

「腕によりを掛けて作っちゃうわよ！なぎくんは何食べたい？」

えっ、ハンバーグ。

今日は食事だけで、後は会話でもして好感度稼ぎでもして終えましょうか。

英気を養って——明日に備えましょう。

うーん——正直に言います。

不安しかぬえ!!

職員室。手に握るペンの感触。

——増えていく、名前。

五人。

また新しい名前が、増えた。増えてしまった。

「……………」
見えもしない終わりの頃には、いったいどれだけの数を書かねばならないのだろう。

私達以外の全員？……それとも私達の名前も書く時が、来るのだろうか。

「……………」やめましょう」

暗い気持ちを掻き消すように頭を振る。

そんな事を考える必要はない。ただ、忘れないように書くだけだ。

事実を。それだけ、それだけの事。

それより、今日は良い事があった。

「…………ふふっ」

写真立てに納めた、写真を眺める。

楽しそうに笑う姿を見て、心が軽くなるのを感じた。

——『学園生活部』。

ゆうりさんが考えた——言い得て妙な部活動。

ついでに任される事が無かった私が初めて顧問をやる、抛り所。これからの皆の居場所。

「そうだ」

部活動なら、やっておかなきゃいけない事があるのを思い出した。

私は、各種書類が納められている棚から——部活動申請書を取り出す。

軽く眺めて、必要事項を書いていく。

部活動名、『学園生活部』

顧問、佐倉慈。

部長、万寿柳。

部員、丈槍由紀。若狭悠里。恵飛須沢胡桃。柚村貴依。

活動内容。

小さく残った大切な日々を忘れないように、大切にする部活動です。

——
そこまで、書いて——教頭先生の机に置いた。

「教頭先生、確認をお願いします」

『佐倉先生…………ふざけているのですか？こんな意味のわからない部活、承認する訳ないでしょう！』——なんて。

そんな神経質な声が聞こえた気がした。

聞く事すら嫌だったそんな声も、今は酷く懐かしい気がして——小さく笑いが零した自分が、やけに可笑しかった。

寝室は、皆の気持ち良さそうな寝息で満たされていた。

月明かりで照らされた皆の顔は、安らかだ。久しぶりにお腹いっぱい食べたからかもしれない。現に私も良く眠れそうだった。

「あら……う？」

ふと、やなぎくんの手に——写真を持っているのが見えた。皆が映った、皆の写真。

「よかった……」

どうやら、彼の何処かに感じ入る物があつたようだ。

これでほんの少しだけでもやなぎくんが前に進めるといい。部活動の中でゆつくりと育めばいいのだ。

胸の奥から湧いてくる感情のまま、彼の頭を撫でようとしたら——月明かりが急に薄くなって、彼の顔が見えづらくなった。

見上げると、分厚い雲が綺麗な月を覆い隠そうとしていた。

「……無粋な雲」

これじゃあ、撫でててもこの子の顔が緩んだとか見えないじゃないかい。

まあ、いい——機会はきつと沢山ある。

皆を起こさないように静かに床に就く。

これからの活動がとても楽しい事になりますように、と。雲に隠れても、それでも光ってる月に祈りながら。

七日目・表 R (・) e—What (・) Coila
(・) pse?

狂気の世界の始まりだぜえ……！なRTA、はーじまーるよー！

七日目に入りました。

ずっと続いていた晴天の日々とは打って変わったの——大雨。

分厚い雨雲が朝日を覆い隠して、今が夜に思えるほどに外は薄暗くなつてしまつてます。

……まるで、この後に何か起こるような空気だあ(直喩)。

校庭に『かれら』の姿が一人も居ないような気がしたり、雨が窓に当たる音に混じつて——なあんか聞き慣れない音が沢山してる気がしますねえ！

なんででしょうかねえ？不思議ですねえ？(すつとぼけ)

「部活始めだつてのに……この天気かあ……」

「まあまあ、くるみ。天気はしょうがないわ。それより、ほら——好きな缶詰を選びなさいな。因みに私はコンビーフ」

「んー……じゃあ、あたしも」

「あらやだ、私の事好きなの？」

「ちやうわい」

生徒会室改め、部室。

皆揃つての朝食タイムです。

薄暗い雨に負けず、場の空気は日向のように穏やかですね。

この後大変なので惜しい気がしますねえ……(ニチャア)。

本日の献立——白米・インスタント味噌汁・好きな缶詰一つ。身体に良さそうに見えるけど悪そうにも思える、実に感慨深いお食事です。

備蓄は十分ですが、昨日贅沢したので若干の節約を、といった感じ

でしょうか。

……気にせず浪費していつて欲しい所ですが、食事関係は現在りーさんとめぐねえに牛耳られている今、シヨタが口出しする事ができません。

「(タイムの為に) いっぱい作って?」と言つても「(いつ無くなるか分からないから) ダメです」と正論で諭されて終わりです。

……くつ、スキルポイントさえ……!

スキルポイントさえあつたなら《料理》スキル取つて、私が牛耳る事もできたのに……! (怨嗟)

まあ、それはともかく。ともかくう……! (不満の鬼)。

七日目、〃あめのひ〃はもう始まっています。

必殺技のおかげで楽出来ますが、初のガチ総力戦な危険地帯です。帰らぬ過去より、変え得る今に目を向けましょう (私かつこいい)。

「私はねえ……大和煮! 朝から牛!」

「私はサバの味噌煮かなあ、王道に行く」

「それじゃあ、先生はサバの水煮に醤油とラー油」

「……めぐねえ、チヨイスがおじさんだね」

「ひどい! 美味しいのに……」

皆、朗らかに食事を楽しんでます。

正気度が低かったりすると、会話しなかったり、食事の量が少なかったり、そもそも食事に来てもなかったり、と分かりやすいアツピルがあります。

ですので——この段階では、全員安定していると言つてもいいでしょう。

良いことです。私が矢面に立ちづらくなっているので、一人でも欠けるとえらいこつちやなので。

「やーくんやーくんっ! やーくんは何食べる?」

あつ、やまとにい！まだあつたんだあ！（ゆきちゃん並感）
……………はい（羞恥）。

此処はゆきちゃんと同じ物を選んで少しばかりの好感度アップでも狙います。

もうビンタはい”や”な”の”です！（ぷらずま）

「一緒だねっ！……………やーくん私の事好きなの？」

そうだよ（適當）。

「きゃーっ！私も大好き！」

ヨシッ！（作業猫）

これで好感度が上がりま——寄るな触るな抱き締めるなはよ食え
タイムロスるしお行儀が悪いダルルオ!？（自業自得）

「……………さあ！くるみっ！」

「さあ、つてなんだよ」

「恥ずかしい気持ちも分かるわ……………でも私は大丈夫……………——さあ！」

「でさあ、今日一日は何するんだめぐねえ？」

「んう？……………んぐっ。そうですねえ、ここは部長のやなぎくんに決めて貰いましょうか。部長始めてのお仕事って事で」

おや、学園生活部の部長になったおかげで一日の行動の裁量権が委ねられたようです。これは良いタイム短縮です。

部長じゃなくても選択できますが、時たま反発されてその説得に時間を要する事もあるので、こうした実権は嬉しい誤算。

こういったところでリカバーを図るのが、RTAの基本なんです（ただの偶然）。

「……………」

……ああ、はいはい無視されて悲しいのね。無言涙目でにじり寄って来ないでねえ、リーさん——好感度上げミスった後の悲しみの向こう側エンド思い出すから（異次元の記憶）

おーよしよし……（怯え）。

……なんかやけにテンションたっけえなりーさん。

どうした、アニメでお行儀についてゆきちゃんを論していたあの聡明に見えて中身ボロボロなりーさんはどこへ行ったんや！

お前誰や！（錯乱）

リーさんに限っては——元気な事はいいですが、元気なのは良くないんです（矛盾）。

「あら、やなぎくん。今日はお腹空いてたんですか？」

そうだよ（肯定）

さっさと、飯をかつ食らってシヨタを腹いっぱいにします。

おすそわけして、好感度稼ぎもいいですが——不測の事態に十全に動けるように気力だけは万全にしときます（走者の鑑）。

これから始まる「あめのひ」は、がつこうぐらしRTAでの大きなリセットポイントの一つなので。

……最早、チャートなどはシロアリに食われまくった木造建築並みにスツカスカですので、何が起きても驚きません。驚けません。悲しいです。

ですので！日頃のプレイスキル（長年の自信）で何とか乗り切ってまいりましょうっ！

行き当たりばったりでもタイムが早ければRTAだって、それ一番言われてるから（暴論）。

「あつ、そうだ。皆さん、聞いて下さい」

ん？

「今日の午後にミニテストをやるので準備しててくださいね？」

……あー。

イベントが挟まってしまいました。

「えーっ」

「えー、じゃありません。皆は生徒なんですから、お勉強するのは当然ですからね。もうテスト用紙を用意してます。ていうか、教室に配置済みです」

「……準備万端じゃねえか……！」

「どっ、どうするくるみちゃんっ！大ピンチだよお！」

「おっ、おとおおちつけっ。ここは一つカンペを作るところから……！」

「……まったくいつもちよこちよこ勉強してないから焦るんだよ。なあ、悠里？」

「……………」

「……悠里？」

「たかえちゃんは私の事好き？」

「口裂け女みたいになってるぞ」

これは——『めぐねえの授業』ですね。

ゆきちゃんが本編で、一人で黒板に書いて一人で答えて一人で全問不正解なのを一人で論じて一人でびっくりするといふかなり闇深なシーンが、このイベントに該当します。

これは、学園生活部の面々（全員ではない）が生存且つ正気度が高い状態（各種アイテム・疾患）による見せかけ可）の場合に起こるイベントで、高校脱出の目処が立つまで何度でも発生します。

発生条件を満たしているとはいえ、まさか“あめのひ”である今日に挟まってしまうとは……。

イベントでは、学力を見せつけると好感度が上がったたり、リーダーシップが増したり、発狂しているキャラを現実に引き戻せたり、と通常プレイではかあなありいありがたい良イベントなんです——このチャートでは、はつきり言って時間の無駄無駄無駄ア！

好感度稼ぎならさつきのようにちよいちよいできますし、本チャートも補完チャートも、説得力は別にいりません。

誰かの発狂の予定も、ありまつ、せんっ!! (断固たる意思)

はあ……。

これはロスになっちゃあ………あつ、そつかあ (知将)
失礼。ロスじゃないですね。

だって、今日の午後でしょ?——「あめのひ」総力戦でキャンセルされますねえ!しやあおら、ロスにはならない!

予定されているイベントがキャンセルされると若干正気度が変動しやすくなりますが、これもタイムの為。

では、イベントも過ぎたので朝食の時間を終わらせましょう。

——『かれら』は着実にこちらにやってきています。

朝食が終わって、いつもなら自由行動のお時間ですが——今回は配置を選択します。

学園生活部、且つシヨタが部長になってるので、ちよつと不審な配置をしても怪しまれづらいでしょう。

「さあ、やーくん! 私たちは何をすればいい?」

なんだかほんわかした目を向けられているのが気になるところですが……。

選択タイムです。

今の状態では、第一バリケードと第二バリケードの点検。

後は三階の各種施設の利用。もしくは、前日までしていた、何も選択しない自由行動が選べます。

ここは補完チャート通りに。

くるみを第一バリケードへ。リーさんはその補佐。

めぐねえは第二バリケードへ。その補佐にゆきちゃんとチョーカーさん。

シヨタは部室に待機させる、を選択し。

それが終わったら、『めぐねえの授業』へと進むという予定で決定します。

「うーい。じゃあその通りに行こうぜ」

「ふふふっ、なぎくんに命令されるってなんか新鮮ね」

「てか、自分はナチュラルにサボリ宣言してるぞ。……別にいいけど」

「部長さん特権ね。先生は許しますよ」

「ぬふふ……亭主関白やーくん」

なんだか皆和やかですが。

この後、何が起こるか知ってる視聴者の皆さんならわかると思いますが。

はい——戦闘配置です。

最適な持ち場へ向かわせ、備えます。

本チャート通りなら、片方はゴリラ・片方は私といった分担でしたが、今の私はただの満腹クソザコシヨタなので代わりに覚醒ゴリねえに担当させ、私は全体の補佐に回ります。

……運ゲーが混じるのが痛い……痛いですね。イタイデスヨー……（エコー）

まあ、三階制圧戦ではAIがやったおかげでむしろ効率良かったので、今回もそれに期待します。

それに「あめのひ」は、ヌツコロヌツコロな殲滅戦ではなく、エツチラホツチラな耐久戦ですので、引き際を弁えれば大丈夫です。コツコロコツコロ（性癖開示）

「では、バリケードの確認が終わったら、テストですからね」

「……ゆき、作戦通りにな……」

「……うんっ、バツチリ見てくるよっ……」

「たかえさん、ゆきちゃん見てて」

「はいはい」

「——げえー!!」

「いや、諦めなよ……」

「くっ……こうなつたらやなぎに……!」

「はあい、なぎくんを悪の道に誘わないでねー。じゃあ良い子で待つてね。直ぐ戻ってくるから」

うーい。

………行きましたね。

では、コーヒープレイクでも……な訳はありません! さっさと柵開けてマニュアルを持ち出します。

このっ! このっ!

もうこやつが悪運もここまでです。邪悪は今ここで断たねばならぬ。我は無垢なる刃……!!

さっさとコンロを着火し、全てを灰塵に帰しましょう。

ポッ!

エチチチチチチチチチチ……ツツ!

ソオ……—

「——なぎくんっ! いるっ!?!」

——カチツ (コンロを切る音)

——ガチャツ! (コンロ下の柵を開ける)

——サツ! (マニュアルを放り込む)

——バンツ! (クソデカ閉める音)

チラツ……。

「よかったっ……！おいでっ、バリケードが……！！」

はえーよお（半ギレ）

すう……（深呼吸）

はえーんだよお!!（全ギレ）

まあた燃やせなかつたじゃんよもおおおお!!

タイム的にありがたいですけどお!?!RTA的には構わないですけどお!?

最早、タイムしか誇れないRTAだから良いですけどねえ!?!（逆ギレ）

りーさんに連れられ、廊下に出ると——Now Loading画面暗転。

戦闘前ムービーが入ります。

良くある、ボス出現演出みたいなものです。

と言っても、『かれら』が階段を上がろうとしてスツ転び（いつみてもかわいい）、その転んだ奴を足蹴に他のかれらがズンズン上がってくる（いつみてもかわいい）——

気が狂う人海戦術の様子を見て怯える学園生活部の映像が流れるだけです。

このムービーの間に——今回の“あめのひ”について説明しますね。

——“あめのひ”は3分間の耐久戦です。

血の気が多いプレイヤーは、全員殺し尽くせば終わると思いい「丸太

は持ったな？いくぞお!!」と果敢に戦いますが——それは不可能で、千体以上殺しても延々と湧いて出てきます。

巡ヶ丘高校は市内有数のマンモス校だった……？（たぶんちがう）その為、バリケードで『かれら』を塞ぎ止め、適度に殺しつつ、時間を稼ぐ必要があります。

——3分。

それはカップ麺の聖なる時間。……地味に長いですよね？

その為、大抵のプレイヤーは引き際を誤り、ひーひー言わされる……『がつこうぐらしっ!』の鬼門たる所以の一つです。

3分経過すると、選択肢が現れ、『何処かに立て籠る(任意選択)』『徹底抗戦』のどれかを選ぶ事が出来ます。

さつきも言った通り、『徹底抗戦』を選んでも『かれら』は枯渴しません。また選択肢が出るまで3分戦う羽目になります。これを選び続けると、B級映画の派手だけど胸糞エンドが待っています。

その為、まともな選択肢は『何処かに立て籠る(任意選択)』だけ。絶望だけしか残ってなさそうですが、ステータスが育ちきったプレイヤーなら、どこに立て籠ってもそれなりの苦労はしますが突破出来ます。

が——それが出来ない、一人犠牲にならなければなりません。

状況が好転しないと、こちらの制止を振りきってランダムで一人が囿として外に出ちゃうんですね。

……本編の、めぐねえのような末路になります。

ですが……まあ。そうですね。

ある意味、一人犠牲にすれば確実に突破できるのです。

——嫌だよなあ？（人道派）

本編めぐねえの献身を見て涙した純真無垢人畜無害な私には到底選ぶ事ができない選択です。でも、ここでリーさんをリタイアさせると後の正気度管理が楽——ああいや、なんでもないですなんでもきよーはいーてんきだなー。

頭数が大事な本チャートでそんな外道するわけありません。あははのすけー。

私には秘策があります。……まあ、ちよつと前から言ってる必殺技の事です。

知らない方に説明しますと——少し前に、『かれら』は生前の事柄である程度誘導出来ると説明しましたよね？

そして此処にいる『かれら』は生徒（+α）です。一日の半分ほどをチャイムと放送で支配される存在でした。

後は分かりますね？

つまり——放送室で『下校の時刻です』とか『全校集会なので体育館へ』などと流せば、『かれら』は緩慢にですが向かっていくのです！
これを使えば、難なく“あめのひ”を突破出来るという訳ですよ！

えっ？なんでこんな便利なのを最初から使わないんだって？

……連続して使うと成功率が下がりますし、こうした緊迫な状況下で行わないと、ただのイカレ行動だと思われるだけならまだしも——
「なんで知ってるの？」と不信感を抱かれて後の行動に大きく影響を及ぼす結果になるからです。

あんま楽をさせないようにする運営はゲーム作者の鑑。RTAの敵。

3分経つ頃に全員が放送室の前にいる事が理想ですね。選択肢が出た瞬間、サア——と入ってパパッと放送を流して終わりッ！にしてくださいましょう。

でもまあ、3分耐えなければ意味ないですが。

数を減らしつつ、ゆつくりと後退していくのを意識しましょう。意固地にバリケードを守っているのはロスです。

十分距離が開けば、バリケードが壊れても問題ありませんし。

では——ジャジャアーン、と。

私の方で、さつきお昼ご飯のチキンラーメンに使ったキッチンタイ

マーを用意しました。これを使って正確に行動していきましょう
スタートは動けるようになった瞬間、ゴールはめぐねえの「こ、こ
れじゃあキリがないわ！」までです。

ではあ……。

はい、よいスタート（本RTA二度目）

まずはリーさんに連れられるまま、くるみがいる第一バリケードに
向かいます。

「くるみッ！」

「リーさん！やなぎは……！」

「いるわ！」

こちら現場です。

第一バリケードの隙間から見える二階は『かれら』でひしめき合っ
ています。数に押し出されるようにこちらの階段にも増えてますねえ
！

まるで、昔のドラクエの発売日みたいだあ。

物売るってレベルじゃねえぞ！（PS3）乗るしかない、このビツ
グウエーブに（iphone）。

「なんで……！」

数が圧巻なせいで、リーさんの正気度が下がるのが手に取るように
分かります。

これは予測可能回避不可能で、主要キャラ全員が受けるので諦めま
す。今迄、そこそこ回復行動していつてるのでそこまで影響は無いつ
しよ。

『かれら』は、まだバリケードに到達していません。ですが、来るのは
もう時間の問題。

(流石のバリケードも肉の質量に押し潰されてしまえば意味) ないです。

「胡桃、悠里ッ！……柳も居たか、良かった。姿が見えないから心配したぞ」

「やーくんっ!!」

おっと、チョーカーさんとゆきちゃんが来ました。つつと。ゆきちゃん受け止めー。

……めぐねえが居ないって事は第二バリケードで足止めしてくれてるみたいですね。やっぱ覚醒めぐねえってすげえや(小並感)。

「……たかえ、あっちもか」

「ああ。……くそっ、今日になってどうしてこんなこ、と……に……?」

と。

惨状から顔を背けたチョーカーさんは——窓から見える雨を見て、ちよっと固まります。こうした事に引っ掛かりを覚えるチョーカーさんはほんと中間管理職の鑑。

これは放送室に行く口実が増えましたね。

皆、雨に濡れるのが嫌だから中に集まってるだけなんだよなあ……。

『かれら』ってやってる事は死ぬほどこわいっすけど、行動とかたまに幼稚園並みに素直なのでこっちとしてはやりやすいです。

——ミシッ。

おっと、屍ロードを越えた一人がバリケードに組み付きました。

「——ツッ！たかえ！お前はあっちに回れ！ここはあたしたちがツッ！」

「わかった！いいかつ、バカな真似はするなよ！絶対に！」
「こつちの台詞だっ！」

チョーカーさんは第二バリケードへ。

ゆきちちゃんも行って欲しい……。のですが、不安と絶望に染まった顔でキツく手を握られてしまえば無理に行かせるのもロスでしょう。私と一緒に行動します。

でも、手は離して？

「やだ……」

なん——とか言ってる場合ではありません。

流石に手元が少ないと大変なので、ここは説得します。

——大丈夫大丈夫。私がいるから。私が守るから。大丈夫だって安心しろよおー。

……よし。ほどいてくれましたね。

そうこうしている間にも『かれら』はやってきてます。

くるみがバリケードから手を離させようとシャベルで手を払おうとしますが……。

一人を対処している内に二人。二人を対処している内に四人と。呻き声は増える一方。

バリケードに『かれら』が殺到し始めました。

「くっ……くるみ！」

「りーさん！やなぎ達を……！」

「………わかったわ。なぎくん、ゆきちちゃん。こつち……！」

「うん……！」

おっ、おっ？

バリケードから離されました。……まあ、今此処にいても何も出来

ません。今は従って援護出来るものを探します。

ゆきちゃんとりーさんとで、手頃な教室に向かいます。

その際、シヨタがバサ杖さまを持つている事を確認し、行動する際は常にジャラジャラ鳴らす事を意識します。こうすれば耳が良い『これら』は音で少し動きが止まります。

嫌らしい遅延行為イイゾお。……できれば私もバリケード防衛したかった。もぐら叩きみたいで結構白熱なんですよあれ。

んんっ！（咳払い）

ここで探すのはバリケードを補強する板状の物。あるいは『かれら』を押し戻す棒状の物が良いですね。

ちよつと前にバリケードはくるみが補強してくれたので、ここは掃除ロツカーから地味に万能武器であるモップを取り出します。

殺傷力は少ないですがリーチ良しで、今の状況にピッタリです。

ゆきちゃんとりーさんに装備させます。これ持って。

「えっ……う、うん……」

素直なのはいいゾ。ゆきちゃんはやつぱ天使や。

さっ、りーさんもりーさんも。

「……なぎくん。私は大丈夫」

えっ？

いや、拒否してる場合じゃないんだって！シヨタがクソザコなんだから助け……あわ……な……？

「……私も、戦わなきゃ……」

おや？なんでりーさんが——バサ槍さんを？相棒は殉死したはずでは……！

まさか、生きて……！

……………あつ。そういえば、片割れ渡してました。

りーさんは基本戦わないから存在忘れてましたわ。テへっ（精一杯の誤魔化し）

でっ！でも、これは良いガバですよっ！

りーさんが珍しく戦おうとしてくれています。前から刃物持たせていたからでしょうか？りーさんはほんと予測不能ですな！（理解放棄）

消極的でも積極的でも戦ってくれる事はありがたい！

私も後ろからサポートするで！行きましょう！

「……………なぎくん達は此処にいて」

なんで？（半ギレ）

「……………お願い。その、くるみの気持ちをわかってあげて。私も……………その、不安なの」

りーさんはそれだけ言うと、シヨタの頭を撫でてから行ってしまいました。

……………いや、行きますけど（反逆）

不安がどうのとかって話だが、お前らだけで耐えられる訳ねえだろお！行くぞおおおおお！！

「まっ、待ってやーくん！」

ふっ、ゆきちちゃんに止められようが——とお!? → →

最初の方から思ってたけど力強いなこのゆきちちゃん！ゴリラ並みか?! いっ、いや違うシヨタだ！シヨタがクソザコなだけだこれえ！

「りーさんの言う通りだよ！此処にいよ？皆なら大丈夫だよ。きつ、昨日だって無事に……………！」

……いや、確かにゴリラズいるから大丈夫だろうけどさ。

「それに……りーさん達はヤーくん……」

いや、良く分かんないけど——不安じゃん。なんかあったらカバーできる立ち位置っていうか、備え万全にしたいじゃん。

これ以上ガバはお呼びじゃねえんです！

ごほんっ！（説得タイム）

ここまで来たんだ。色々あったけど。

もうチャートが息していなくても。最早、RTAという名の行き当たりばつたりのタイムアタックだとしても。

ここまで、私達は辿り着いたんだ。

尊シヨタい犠の牲富があ土つて、道複行雑き過へぎの不安ゲがあムつて、それロでも！

残リされた時間アの間ルの中でここまで、来たんだ！

もう……。

もう……！！

もう——再走、したくないっ……！！（ここまで来るのに78敗）

——頼再む走ゆはき嫌ちだちゃん再。行再か走せてはくれ嫌。後再悔走したはくない嫌んだだ。

「うっ……あつ、でも……でも、ヤーくん……わたしは……！！」

頼むお願い！説得通って！

後でアマゾンで他の奴と三倍くらい値段違うゆきちちゃんのフィギュア買うかもしれないかもしれないからあ！！（虚勢）

がっこうぐらし全巻GEOってからまた新品買い直すからあ！

（嘘）

「……わたしと、いっしょなら……」

やい！

ゆきちちゃん愛してる！——この言葉で十分だよな！

……えっ、さつき何か言ってた？……なんのこったよ（屑）

では、さつきと向かいます！

もう1分半経過しました！残り半分です！……10分は優に過ぎてるような気がするほど濃かったです！

そろそろなんとかしないとバリケードが悲鳴を上げる時間です！

りーさんの下に戻ります。

大丈夫そうならめぐねえのこの様子を見に行きます！

「くっ……このっ！さつきと……!!」

「もうっ……！どうして、どうして私達が……!!」

現場に戻りました。

——さつきより地獄ですね。

『かれら』は進む事しか考えていないので——前の人を押されて、誤ってバッグの底に入れてしまったオニギリみたいにペチャンコになろうともズンズン来ています。

くるみりーさんは返り血、返り肉片塗れ。シャベルとバサ槍さんをやたらめったら振り下ろしています。……ちよつと恐慌入ってるな。まずいかもです。

うーん、ぐるてすくう……（見慣れた光景）。

にしても——ちよつと『かれら』の数多くなあい？
にしても——ちよつと『かれら』の数多くなあい？

「ひゃ……！」

——つと。

ゆきちゃんには刺激が強いですね。目を隠します。少しでも正気度減少を抑えましょう。

あつ、そういえば本チャート通りだったら二階にもバリケード設置するはずでした。それが無いから足止めされるはずの分が一気に来てるんだ。

あー……これはちよつとこのバリケードはもう駄目かも分からんね（冷静な判断）。

「あつ……やなぎ……！」

「——ッ！なぎくん駄目！見ちゃ駄目！」

あつ！バカ！くるみは攻撃を放棄するな！！リーさんはこっちに来ちゃ駄目だつてえ！！

焼け石に水に見えるけどそれすら止めると——！！

——ミシツミシツミシツ。

oh~……。

……。

——昔の諺にこういったものがあります。人は城、人は石垣、人は堀と。

つまり——大量に集まれば、バリケードなんて物の数じゃあないんですよ。

「……下がれ」

ゆきちゃん。目を瞑っていいから後ろ反転。走って。

大丈夫——残り1分。

「——下がれえ!!」

——ドンガラガツション!!

はい、第一バリケード崩壊しました。『かれら』が安全圏に侵入——撤退します。

『かれら』は足は牛並みなので走れば追い付かれませんが、掴まると即死攻撃のオンパレードなので十分に距離を取ります。

……にしても、廊下全体を覆い隠すみたいな数はやっぱりこわいですね。バリケードが壊れた反動で潰された奴らも這いずりながらこつちに来てるとかパニックホラーですな（今更）。

よほど腹減ってんですねえ……。

「ごめんっ……ごめんっ……!」

「くるみは悪くない!私がつと……!」

「……っつ……っつ!」

つと。恐慌状態が高まってまいりました。

放送室前まで後退しました。これで少しの間は接敵しませんが……うーん、残り40秒。これはちよつと、逃げ切れませんね……。

「——皆さんっ!」

あつ、めぐねえ達が合流してきてくれました。同じく血塗れですが無事みたいです。……肉片塗れのボールがセクシー……エロい!（ホラー映画の見過ぎ）

……第二バリケードの崩壊の音は聞こえてきませんので、二人は黙々と良い仕事をしてくれたみたいです。……やっぱ——覚醒めぐねえってすげえや!何も言えない!（KTGM）

「……あつちは?」

「……まだ保ってるけど時間の問題。後少しすればああなる」

「ここは、あたしが——」

「駄目ですくろみさん！こんな数では……」

「——じゃあ！どうすりやいいんだよ！このままじゃああたし達みんな……！」

「……やーくん」

残り30秒。『かれら』は目と鼻の先です。

これ以上後退すると、『かれら』に放送室の入り口が妨害されてしまうので出来ません。もう少しどうにかも無理ですね。

……ふう。……ふう。……ふう。

ぬわああああああ!!!くそっ！やだぞ！ここまで来てリセはほんとにやだぞ！冗談抜きで！本当にいい！

この数で、この狭さではゴリラズも足止め出来ませんし第二バリケードもじかつ——

——ドンガラガツシャーン!!

ふあつきん、ゆうつつ!!!

のっ、残り25秒……。

「……たかえさん。皆を連れて屋上に」

おい、めぐねえ——そっから先はマジで言うなよ!!

めぐねえが言っているいい言葉は「こ、これじゃあキリがないわ！」だけだからなっ！

くっ、ぢぐじょー……！

「やーくん！だめっ！」

二度の制止に引つ掛かるかお間抜けゆきちゃんめ！可愛いぞっ！
伸ばされた手を受け流し、そのままめぐねえに向かつて押します。
そうすれば、囮しようとしためぐねえも止まります。

前述した通り——事態が好転すれば、いいのです。

「やーくん……!!」

大丈夫、ゆきちゃん——感染する予定はまだ先だからなっ！

「な、なぎくん……」

「ああ、くそー！止めろ、やなぎー！早まるな！」

私がやる事は足止めです。残り20秒程度なら、スキルポイントを振ってないクソザコシヨタでも、私に掛ければこのぐらいは出来ます。出来るはず。出来るに決まってる！

強いゴリラもこの数では怯えますが、私が入ったシヨタでは問題ありません。

……バサ杖さまも必要ねえ——いや、必要だ。てめえらなんか怖くねえ!!

野郎オブクラツシャー!!!

そおい！（手近な奴を攻撃する）

あっ……！（残った奴に腕を掴まれる）

あにすんだ離せえ……！（振りほどこうとする間にまた掴まれる）
なんだお前ら！シヨタの腕なんか触って喜んでんじや……！（這いずってる奴に足首を掴まれる）

あっ……！ちよっ、ちよっと待ってもらって……（引っ張られる）

ちよっと待ってくれ、待てって言ってるん——マッ！（転倒・後頭部強打）

……画面暗転しました。

なあーんも見えないです。なあーんも。

私のキューティクルなフェイスしか見えません。あははのはー。

……。

……。

……。

……ふふつ。

いやあああああ!!にやああああああん!!ぎやあああああ
あああ!!ぐあああああ!!こつ、こんなのRTAのはずが
ない!!!即墮ち2コマなこんな無様がRTAのはずがない!!!

あ……でも今迄のゲームプレイも多量のガバもよく考えたら

……

これはRTAじゃなかった?

にやああああああん!!うああああああん!!
!!

そんなあああああ!!いやあああああ!!はああ
あああああ!!巡ヶ丘ああああ!!

この!ちきしょー!やめてやる!!RTAすらマトモに出来ないこ
んな人生なんかやめ……て……え!?画面……に?画面の右下にN
o Loadingが出てる?

画面の右下にNow Loadingが出てるぞ!Now Lo
ading中に見えるTipが出てきたぞ!なんかGAMEOVE
Rじゃないぞ!!

シヨタが……あんな状況下でまだシヨタが生きてるゾ!!!よかった
……世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ!

いやっほおおおお!!私には運が付いている!!やったよゆき
ちゃん!!続いてるならまだRTAだもん!!! (難癖)

……えっ、いや——なんで生きてるん？（素）

正直、自分でも「だめだこりゃ」くらいな即堕ち2コマかましたはずなんですけど……もしやあれから誰か犠牲になつたとか？それとも前の日のフラグが活かされたんでしようか……？

おっ、ゲーム画面が出てきました。

ここは……職員室の天井？時間は……17時過ぎ。

あれは朝だったから、かなり時間が過ぎてる事になります。……雨が上がってる、夕日が眩しいところを見るとイベント自体は終わってますが——*おおっと*。

ゲーム画面が揺れました。これはあ……疲れじゃないですね。『脳震盪』の疾患です。

まあ、後頭部打ったからなあ……。画面見辛くなるだけなのでさっさと起き上がりましょう。

どうやらシヨタは職員室のフカフカソファーに寝かされていたみたいです。

辺りには、応急処置用の本が数冊、無造作に広げられていますね。血塗れのタオルも……頭を触ると拙いですが包帯が巻いてあります。どうやら倒れた時に当たりどころが悪くて、頭から派手に出血したみたいです。運悪いな、くそ。

《応急処置》スキルは、本を読めば楽に習得出来る半面、完治は出来ず、且つ使用者によって効果がまちまちです。ですので、上位スキルである《医学》がとれるまで、『脳震盪』や頭の傷とは長いお付き合いになります。

ですが、《応急処置》スキルはプレイヤー視点でメリットがあるんです。

このゲームに慣れた人ならば、処置の方法で誰にやられたかはわかるんですよ。

くるみならおおざっぱ、リーさんならきちんと、ゆきちゃんならがたがた、とかだから、結構わかりやすいんですよね。

これはあ……えっ……めぐねえ？

めぐねえは生きてる？ 罠を止める事には成功した？ では、必殺技を——うーん……駄目だ。あれからどうなったのかいまいち読めません。

意味不明なほど高度なゲームシステムなこのゲームですから、何が起きてても不思議ではありません。

……ともかく。

ある意味タイム的には得出来ました。かなりの時間短縮です。

これが私の考案した気絶キャンセルです（大嘘）。……そう思うしありません。

しかし、これが一人犠牲になった結末だと結果的にはプラマイゼロ。いや、マイナスに傾くかもしれません。

特にゆきちちゃんが死んでると不味いどころの騒ぎではありません。まず私のモチベが死んでしまいます（自分本位）。

全員の無事を確認しにいきましょう。

職員室を出て皆を一人一人見つけ——*おおっと*。

……あれ？ 前に行こうとしたのに、なんで後ろって……ああ！ 写真！ 写真がないっ！ 『学園生活部の写真』が！

そのせいで正気度がオカシクなってしまったから、またメダパニが……ああ、めんどい……！

→→←←↑↑↓↓BA！——ヨシッ！ 問題ないな！

三階を急いで見に回しましょう！

廊下に出ます！

「あっ……」

おっ、チョーカーさん！ よしっ、これで二人生存確認です！

……なんで扉の前で座り込んでるの？ えっ、大丈夫？

「柳……」

ていうか、チョコカーさんに誰が生き残ったかこれで聞けますね。ええつと。チョコカーさん、誰か死に――

「やなぎい……!!!」

ぬわっ、抱きついてきたっ!

ああ!揺らさないでっ!脳震盪が……脳震盪があ!

脳が揺れるっつ!!(SYMIKO)

「よかったあ……ぐずっ、よがっだよお……!!」

あー、うん。ごめんね。心配掛けましたね。

確かに目の前で死にかけるのは堪えましたよね。少し待ちますか。

………でさあ、誰か死んだりし――

「わたしっ、わたし不安で!柳が死んじゃうんじゃないかってえ……倒れた時、頭まっしろになって……!」

ああ、うんうん。そうだね。

それで、誰か死ん――

「でも、でも………もう誰も見捨てたくなくて!!だから私頑張って、何とか……何とか出来ても皆が……」

せやな(天下無双)。

それで、その皆のお話んだけどさ。誰か――

「皆、思い詰めちゃって……!わっ、私がっ、何とかしなきゃっかかりしなきゃっがんばってえ……!!」

んにやぴ……。

「取り繕っても……柳が居なくなると思うと苦しくてえ……!!」

いや、あの――

「だから、柳が居なくなるなら……私も死のうって思っ……うう……やなぎい……!!」

――いや、お話聞いて!? ショタの言葉聞いてあげて!?

「うわああああああんっつ!!」

あー……だめだ。完全に泣きに入った。

これではお話が出来ないです。

泣き止むのを待つのはロスですねえ……。

泣いてていいから、はいつ離す! はいつ手を繋ぐ!

簡易電車ごっこで他の人を探すとしましょう。

まずは部室に行くのが最優先………ん? その他の教室で――めぐねえがうずくまってますね。肩震わせてるから泣いてます。

なんでこんな特になにもないとこに……あつ、プリントがある。ここが『めぐねえの授業』のイベント会場だったのか。

「……えっ、やなぎくん……っ」

(たぶん) 治療ありがとよっ! でもフォローは後だ、次イクゾー!

「まつ、待って……! お願い、離れないで……!!」

むっ、部室から料理のかほりをショタが感じとりました。……カレーとな?!

りーさんやなっ！（女子力消去法）

「……あつ、なぎくん。よかった」

……若妻風りーさん、疲れ添えだけか。くるみとゆきちゃんがいま
せん。

……泣いてないな。お話できそうですね。

りーさんやりーさんや。くるみとゆきちゃんは何処か――

「夜ご飯は貴女の大好きなカレーよ。自信作。……ほんとに、お疲れ
さま。貴方のおかげで……。ありがとう、なぎくん」

ちつ、台詞被った。もっかい。

りーさんやりーさんや。くるみとゆきちゃんは何処かのう？

「……………。くるみは確か、休むって言った気がするわ。ゆきちや
んは……ごめんなさい。分からない」

微妙に使えない恵体ですnee（明け透け）

ままつ、ええわ。生きててくれたならそれでええ。

休むなら……寝室ですか。向かいましょう。

あばよ――旦那とすれ違い気味で少し欲求不満な若奥様風りーさ
ん！

「もう……怪我してるんだから、あんまりはしゃいじゃダメよ」

わあーてるわあーてるう！（くるみ並感）

寝室に向かいますしょう！チョーカーさんはそろそろ泣き止んで！

寝室う、寝室う、ベッドインルームにはあ……。

――ガラツと、な、

「すう……すう……」

ゴリラ……かな、アレは。

……うん、くるみだ。ツインテールとシャベルがある。うちのゆきちゃんは横に寝そべってもあんな艶かしいラインは出ない子だからな。……やらしいゴリラねっ！

てか、あそこってシヨタの寢床………いやまあ、良いんですけど。

……ゆきちゃんは？えっ、ゆきちゃんどこ行つた？

トイレ？………居ない。

他の教室………居ない。ロッカーにもゴミ箱にも居ない。

下の階………は、簡易的にバリケードが設置されてます。行くはずがない。

……屋上？なして？ま、さか……。

いつ、いやあそれはね？それはないと思いますよ。だってシヨタの類に一発食らわせ、主要キャラ中最下位の筋力なのにシヨタが押し潰されたあのゆきちゃんですよ？

まさかそんな——

(本編のゆきちゃん回想中)

——あつ、やるわこれ。

めぐねえ死んだらエアめぐねえを出現させるポテンシャル持つてるから、世を憐んで(意味深)とか余裕だわ。

いつ、急げ！時間がない！

ゆきちゃんが死んだら、主要キャラ(と私)の正気度がイク！修正とか絶対無理い！

せっかく拾った人生だぞ！無様でも完走までは行きましようぞ！

「あつ、柳……」

ゆきちちゃんはチョロい。QED（大人の汚さ）。

「ごめんね、やーくん。ごめんね」

やっぱ天使ですね。

ふんわりと抱き締めてきました。ヒュー！夕日をバックに映えるぜ！まあ、このスチル全主要キャラバージョンもう見てますけどね。その時は、こんな台詞ではなくて、愛の告白だったんですけど。

「だから、おねがい……—」

とりあえず、7日目は終了！

何とかりカバー出来たと思われます！（推測）思いたいです！（願望）思え！（強制）

全員生存（シヨタ重症）で、戦いがカットされたからタイムは想定
の半分ちよつとで大変良き！

結果的には良かったんじゃないでしょうか！

……：気絶している間、何が起きたのか不安でしょうがないですけど
ネ！（空元気）

七日目・裏 Re—Wh（・） at Co（・） ll
ap（・）（ se（・）（ ）？

——あの時。

一瞬。

なにもかもスローモーションになったような錯覚を受けた。
血の臭いと一緒に押し寄せてくる、在りし日の隣人たちの波。
怯えて、恐慌に包まれる私たち。

——離れる手。

私たちの為に立ち向かおうとする小さな背中。

波に溺れるように——『かれら』に飲まれる愛しいあの子。

ひりつく喉も強張る顔も、喉奥から込み上げる吐き気さえも。

それすら吹き飛ばす絶望が、私を包み込んだ。

私のせいで。

先生が、私が……もつとちゃんとしていれば。

あの子は——

手に握っていた私の意思が、ひどく空虚なものになった気がした。

『——やーくん!!』

ゆきちちゃんの叫びで、私は我に返ったのを覚えている。

体の感覚が戻って……でも、目を背けたくなる絶望は私の前にあつた。

『なぎくん……あつ、いつ、いやああ!!』

ゆうりさんは、顔を真っ青にして腰を抜かしていたと思う。

からん、と床に落ちたのはあの子が作ったお手製の武器。ゆうりさんが勇気を振り絞って立ち向かおうと、握っていたものだった。

——あの子が『かれら』に飲み込まれていく。

私たちの為に立ち向かったあの子を嘲笑うように『かれら』は蹂躪した。足を掴み、手を掴み——体勢を崩して、そのまま押し倒す。

地面に叩きつけられたあの子の呻きは、おぞましい『かれら』の声にかき消されて。

『——っ!!やなぎい!!』

『待て!胡桃!!』

『ぐっ……離せよたかえ!!やなぎがどうなってもいいってのか!』

『ち、ちがう!ちがっ……だって、あれじゃ、あ……お前まで……!』

『あ、ぐっそ……!あっああああ!!』

そこで。

這いずっていた『かれら』の一人が、あの子に覆い被さるように向かっているのが見えた気がする。

足先からゆっくりと。血に汚れた唾液で、あの子を汚しながら。

『やめて』

どこからか声が聞こえた。

おぞましいくらい感情が無い、そんな声。

横目で、呆然とこつちを見つめる皆の視線を感じた。

『やめて』

すぐに気がついた。

私の声だ。

『やめて……』

あの子を取り囲もうとするソレらの中から、私たちに近づいてきた一匹に、握っていたボールを打ち付けた。

ぐしやりと潰れて動けなくなっても——まだソレらはたくさんいる。

早くしなきや——あの子が殺される。

『やめて……やめてえ!!』

私は狂ったようにソレらを潰しながら、あの子に向かっていった。いや、きつとあの子の時は狂ってたんだ。今もそうなんだろう。

『くっ、めぐねえー!』

私が潰し損ねたソレが私の足首を噛む前に——くるみさんが、潰してくれた。それに感謝を言う余裕は、あの子の私には無かった。

『その子だけは……!お願い!やめて!!』

あの子を見るあまり、視界の端から襲いかかってくるソレに気づかず、首元に噛みつかれる——前に、たかえさんが拾った枝切りバサミの槍を、ソレの口に突き刺して、押し退けてくれた。

きつとあの子の時、私が噛まれてでもあの子を救おうとしていたんだ、と今でも思う。だからこうして生きているのはきつと二人のおかげだ。……この話を、蒸し返したいとも思わないけれど。

私は、言葉にならない声を叫びながら——あの子に手を伸ばす。

やめて。やめて。やめて。

そう叫んでもソレらに届くはずもないのに。

あのまま行ったら、私たちは死んでいた。

『——ぶっつて』

確か。その時間こえた声は——ゆきちゃんだった。
もう一人の私の大切な子。ポツリと呟いただけの言葉は、今でも私の耳の奥に残っている。

あの時のゆきちゃんの目はソレらを見ているようで、見てはいなかったように思えた。それを通して、もっとちがうのを見ていた。

『どうして?——どうしてみんなわかんないの!?!』

ゆきちゃんの叫びは、私たちにも、ましてやあの子にも向いていなかった。

あの子を食らおうと、私たちを食らおうとした——ソレらに向かつて。

ゆきちゃんは怒っていた。

『あんだけにいっしょにいて!あんだけで楽しそうに笑って!私の大切なやーくんと時間を奪ってたくせに!』

ゆきちゃんは泣いていた。

『それは——やーくんなんだよ!?!みんなの友達でしょ!?!』

人を食べるおぞましい化け物に向けての言葉とは思わない、そんなゆきちゃんらしい、優しい言葉だった。

悲しい現実を見てないと言えばそれまでだ。私たちはなまじ、現実を見ていたせいかなそんな言葉なんて考えもしなかった。

『お願いだからわかってよ……!!』

皆と仲が良いあの子を、ずっと横で見っていたゆきちゃんだからこそ。

私たちのように殺すことの無かった——夢見がちな、そんな言葉。

『……ア』

だからこそ。

きつと、そんな奇跡は起こったんだ。

『ヤア、イ……』

あの子を噛み付こうとしていたソレは、固まって。

緩慢な動作で首を揺らしていた。ゆきちちゃんを見て、それから覆い被さっているあの子を見て。

濁った瞳が、見開かれていたような気がした。

それからあの子を噛む訳でもなく——ふらりと立ち上がった。

『は……？』

それはきつと皆の声だったと思う。

『ソレら』はただの化け物。在りし隣人だけで、私たちを食らうおぞましい存在のはずだった。

思い出は血に汚されて、そうであつたかすらも定かではないほどに。

それがあの時、ふらりふらりとあの子から離れようと蠢いているように見えた。

まるで、自分のやろうとした事に怯えるように。

私たちに襲いかかろうとしていたソレらも動きを止めて——緩慢な動作で、倒れたあの子を見つめていた。

ソレらの呻き声は、束の間。言葉にならない声に変わっていたように思った。

『——っ！そうか！やっぱりそうか！』

たかえさんが叫んだ。

それになにか言う前に、たかえさんは壁に設置されていた消火栓を叩いた。

併設された警報器のスイッチが押され、けたたましい警報が鳴り響く。

『めぐねえ！胡桃！——柳を！』

たかえさんのやろうとしている事は、流石の私もすぐにわかった。一步下がる。横から、引つ張り出した放水ホースを構えるたかえさんが出てきて。

勢い良く吹き出た水流が、ソレらの群れを押し退けた。

踏ん張る事も忘れたソレらは転がるように後ろに下がる。

あの子の周りに誰も居なくなるほどに。

『やなぎくんっ……!!』

すぐに私はあの子を抱き抱えた。

血と水に濡れた彼の体は本当に小さくて……こんな子に、勇気を出させるほど情けない私が許せなかった。

『ゆきっ！リーさんを助けてやって！』

『うっ、うん……!!』

『胡桃！放送室に行くぞ！』

『なんで……っ？』

『いいから！』

雪崩れ込むように放送室に駆け込む瞬間。

ふと、私は後ろを向いた。

——ソレらは血と涎を溢しながら向かってきていた。

……やっぱり。

今思っても、あれは私の幻だったんじゃないかと思ってしまう。弱い私が見せた――都合の良い現実”。

それでなんとかあったとしても、どうしても信じる訳にはいかなかった。

放送室に入っても状況は悪かった。

ソレらが扉を破ろうとしているのを、くるみさんが抑えて。

ゆきちゃんとうりさんは、あの子にすがり付いて泣いていた。

手持ち無沙汰な私を尻目に、たかえさんがテキパキと放送室の設備を操作していた。

『つつ！たかえ、何すんだよ!?!』

『アレを見たら?! アイツらにもまだ残ってるんだきつと!』

『ああ!?!』

『意識とか……記憶とか! じゃなきゃ、ゆきの言葉で止まったりしない! あの夜だって、柳の言葉に耳を貸してた!』

『おっ、おい? 本気か……?』

『じゃあ、今すぐ扉開けて応戦するのか!?! ――これしかもうできる事はない……!』

たかえさんは、マイクを私に向けてきた。

目まぐるしく変わる状況に戸惑う私に、たかえさんは説明してくれた。

『アイツらはまだ聞いてくれるはず。今日がこんなに多いのも、きつと雨が降ったせい。外にいた連中が校舎に戻ったんだ――前と同じように』

そんなこと、と否定するのは簡単だったが。

『体が覚えているんだよ、学生の時の事を』

『じゃあ、まさか……！放送でアイツらを追い出すのか！』

『ああ！集会とかなんとか言えばきつと……今、下校と言っても早すぎて帰らないだろうし』

でも、もうそれ以外選択肢はない。

私はすがり付くようにマイクに向けて、告げる。

『ぜつ、全校生徒……並びに教職員に連絡、します。これから全校集会を行いますので、しつ、至急体育館に向かって、下さい……』

先生の時に何度か言った事のある台詞。

その時は違う緊張を振り払って、何度も何度も。その言葉を繰り返した。

一分、十分、三十分。一時間も経ったかもしれない。しばらくして。

ふと、もう扉を叩く音が聞こえなくなった。

『ま、マジ……』

くるみさんがゆっくりと扉から離れても、ソレらが破ってくるような事はない。

慎重に扉を開けて――

『いつ、居ない。あんなにいたのに……』

その言葉を聞いて、私も廊下を覗く。

隙間もないようなソレらの群れは、本当に居なくなっていた。

廊下が血とガラスに汚れている。それだけが、確かにソレらが居たという事を教えてくれている。

『やつ、やったなたかえ！おまつ——』
『ふ、わっ……！』

くるみさんがたかえさんを近づくと、すんとたかえさんが座り込んだ。

笑いながらぽたぽたと涙がこぼして……。

『は、はは……！やったやった、私……私はやった……！』

『ああ！手柄だよたかえ！お前……ほんとに最高！』

くるみさんは感極まってたかえさんに抱きついて。

それを見た後、私は急いであの子に近づいた。安全になったならすぐに手当てしなくちゃ、と。

現に倒れた時に何かで切ったのか、頭から血がたくさん流れていた。

私はすがりついている二人に声をかけた。

『ゆきちちゃん。急いでやなぎくんを手当てしましよ。私が運びます』

『うん……』

『さっ、ゆうりさんも』

『…………て、や……』

『——ゆうりさん？』

そこで、私はゆうりさんの様子がおかしい事に気がついた。

横たわるあの子の頭の傷を手で抑えて——血まみれになりながら、錯乱していた。

『……やつ、なんで……なんでまた、私の目の前で……やだ、るーちやつ——やなぎくん……！』

小さく呟く言葉を聞いている暇は私には無かった。

出てる血が多くて、ゆうりさんを気遣う余裕なんてなかった。ゆうりさんを押し退けるように、あの子を抱き抱える。

向かう先は職員室だ。あそこなら、横たわせるのに丁度良いソファがあるし、救急箱もあった。

『めぐねえ！はやくいこつ！やーくんが……！』

『ええ』

『あたしも行く。まだアイツらが隠れてるかもしれないからな』

『じゃあ、私と悠里はここにいるよ。動きたくないし……悠里を落ち着かせとく』

私は、たかえさんの言葉に甘えて、三人で職員室に向かった。

そこであの子を手当てして、一緒に助かった事を喜び合うのだ。

——終わった、つもりでいた。

『……やーくん、やーくん……！』

『ほんとに居ないな。……じゃあアイツらは……』

あの時。ああ、あの時。

不安げなゆきちゃんの言葉に急かされた気持ちを感じなければ。くるみさんの後悔するような眩きが耳に入らなければ。

——あの子はとつても頑張ったんだから。

すぐに癒して慰めて、いっぱい褒めてあげたい。抱き締めてあげたい。

なんて。

そんな自分本位な気持ちを優先しなければ。

『ア……オア』

職員室の扉を開けた先。

いつも集会の時。生徒に渡すプリントを運ぶ——学年主任がいる事に気づけたはずなのに。

大口を開いて飛び付いてくるソレに、反射的に守ろうと身を振る。

——痛みは訪れなかった。ふわりと香ったのは、甘い香り。

訪れたのは、悲鳴。怒号。嘆き。

潰れたソレに濃い血の臭い。

走り去っていく背中を辿る血の跡——固く閉められた扉。

私は何も出来なかった。

扉を開ける、大丈夫だからと叫ぶ声も、扉の先から聞こえる押し殺す泣き声も。

呆然と眺めてしまった。

腕の中にある暖かな感触。皆の、絶望に染まっていく瞳。

ふと——割れたガラスの破片に気がついて。

へらり、と歪む私の顔を写していた。

ああ

ああ

ああ

ほんの少し前に誓った約束さえ、守れない私は——いつたいなんなのだろう。

—————

人間。

切羽詰まれば、何も考えなくても動けるものだ。

私は、逃げ隠れたトイレの中で——無意識に便器に顔を突っ込んだ
辺りから、それがずっと頭にある。

生きる為。やらなきゃいけないのは勝手にやっているんだ。

だから、ふと気づいた時——二階への道を塞ぐバリケードがなんか
それっぽく出来ていた事に驚いた。

「……………」

拙いも拙い。

工作が得意でもない小娘がやった程度、アイツらに群がられたらす
ぐに崩れるような……そんなもの。

それでも——ひどく安心した。私たちの場所を取り戻せた。そん
な気分が、ずいぶん心を軽くする。

「…………皆。大丈夫、かな」

——あの後。

どうなったか思い出したくもないほどに鮮明に覚えている。バリ
ケード作りに没頭したのはそれを少しでも忘れたかったのかもしれない。

誰も責められない、出来事だった。

めぐねえも胡桃も悠里も。私は……どうなんだろうか。

あの時。気づけたはずだ。

集会を口実に追い出せるのは生徒が殆どで、先生は居ないのもいた
のに——とか。

誘導できても、それでも化け物には変わらないのに。何故追い出し
た程度で安心したのか——とか。

追い出して。三階を全部見て回って、こうしてバリケードを作っ
て。

それから初めて、生還を喜ぶべきだっただろう——とか。

そうすれば——今も私たちは笑えてたはずなのに……とか。

「……つつ!!」

頭に浮かんだ『都合の良い現実』を振り払うように、壁に拳を叩きつける。じん……と手首に響く痛みが、私に現実を教えてくれた。

逃避、している場合じゃない。

起こった事は……しよう、が……ない。のだ。

今を見据えるしか、私たちにできる事はないんだ。

「……もう夕方か」

外を見れば、朝方の雨が嘘のように——綺麗な夕日が空に浮かんでいた。

それを浴びるようにアイツらが蠢くように学校を出ていくのが見えた。

私の推測が正しいなら家に帰るのだろう。それでまた明日、何食わぬ顔で校舎を占拠するんだ。

——私・たち・を・こ・ん・な・風・に・し・て・お・い・て。

「……っ。この……!」

胸の奥から湧き出すような苛立ちがむず痒い。

ああ、アイツら全員殺——

『ぐっ、ずっ………』

そこでふと、泣き声が聞こえた。

一瞬、肝が冷えたが——そ・う・じ・や・な・い。

女子トイレから聞こえた声。

勝ち気な印象のほすのソレは、ひどく弱々しかった。

「………」

私は女子トイレに入つて——閉じられた扉の前に立つ。扉の隙間からは、血で赤くなったシャベルの先が見え隠れしていた。

『……………』

「……………」

『……………用を足すなら、男子の方使つてくれ……………』

「ちやうわい」

くるみがいるから躊躇しているんじゃない。

——どう、話しかけた方がいいか躊躇してただけだ。

「……………バリケード、また作ったぞ」

『……………そっか。わりい、手伝えば良かった』

「いいよ。良い気分転換にはなった」

『……………他のみんなは?』

「これから。私もさつき我に返ったって感じ」

『……………そっか』

沈黙が少し。

話したい内容は沢山あるのに——どれも話したくない。

『あたしき。ずっとぼんやり考えててさ』

「ああ」

『どうして、あの時あたしが前に居なかったんだって。そうだったらあのハゲくらい、すぐにやれたってのに』

「……………学年主任、禿げてたっけ」

『……………そういえば。フサフサだったよな』

「カツラか」

『カツラだな』

特に知りたくもなかった。

『なんかさ。すごい辛い。先輩を殺しちゃった時よりも』

「……………」

『アレはさ。今思えば、それしか手段は無かった。怪我した先輩をほつとく訳無かったし、ああなつた先輩を野放しにしてたらあたしが死んでた』

「……………」

初めて知った事だった。

胡桃の好きだったOB、死んでたのか。それも胡桃が殺して。

ああ——だからああも、殺すのに躊躇無かったのか。最初に大切な人を殺したから。

『でも、さ……あの時、もつとやれる事……たくさんあつ、たなつて……！バリエードももつと頑丈にできた。もつと上手く、もつと多く、もつともつともつと——何とかなつたはずなのに……!!』

『後悔だな。ははは、陸上やってる時から後悔しないように全力でつて。ずっとバカみたいに言つてた気がすんのかな』

胡桃も、私と同じ気持ちだった。

いや、推し量るなら胡桃の方が辛いと思う。

だって、目の前にいて。後一步、行つてれば——間に合つた。なまじ、現場を見たから想像が止まらない。

『あーあ。トイレから出たら全部嘘でしたー。……なんて都合の良い事なんて無いよな』

「ああ。無かつたな、私の時も」

このまま胡桃をほつとく訳には行かなかつた。

それは理屈ではなく、経験談。

トイレにずっといると——気が参る。

「ともかく。出てきなよ。そこにいるよりかは、布団で転がってた方がいい」

『……………』

「それとも。お前も便器の水飲みたいのか？」

『……………飲んだのか?』

「んんっ！誰にも言うなよ。特に柳には」

少しして…………ぎい、と扉が開く。

俯いた胡桃が立っていた。血と埃まみれ、見られない格好だった。…………私もか。

「出る。ついでにシャワーも浴びて寝るわ」

「おう」

「…………りーさんには今日の飯はもう要らんって言つといてくれ」

「ん？悠里は部室か」

「うん…………ふふ、部室か。今じゃあ少し笑っちゃうな」

「——おい」

ふと、胸から湧き上がった感情を抑えきれなかった。

言つちや駄目だ。それだけは。それだけは、私たちは。

「…………すまん。やっぱ、疲れてるなあたし」

胡桃は視線も合わせずに、トイレを出る。

廊下を歩いていくその様は——アイツらみたいに、死んでいた。

「なあ」

ふと、声を掛けられる。

背中越しからのその声は聞きそびれるほどに小さくて――

「アイツは、今も泣いてるかな」

私は一回口を開きかけて――閉じて。

「――もう泣いてはないよ。きつと」

「だよな。……っ、だよな……」

胡桃はそのままシャワー室に消えていった。

震える体も、出る頃には少しはマシになってるだろう。

ふと、耳の奥からくぐもった泣き声が甦ってきた気がした。

「……悠里か」

部室に足を進めながら、少し不安になる。

放送室の時はちよつと混乱してたし、落ち着かせる前に――あんな事になつたし。

それから今まで、悠里と話した記憶はない。

ずっとあのまま。なんて事はないだろうけど。

「ご飯の話はしてたし。少しは………むっ」

そこで、ふんわりと。

カレーのいいにおいが私の鼻を撫でた。

……特段、お腹が空いてるとは言えないけど。習慣的に涎が出てくる。

「あら、たかえちゃん」

部室に入ると——エプロン姿の悠里がキッチンにいた。

ポコポコ言う鍋をかき回しながら、目元はちよつと赤いが——元気そうに見えた。

そんな悠里は、私の顔を見て心配そうに顔を歪める。

「……お茶でも淹れる?」

「いや、そこまではいいよ」

「じゃあ、缶コーヒーでもいいから。なにか飲んだ方がいいわ」

そう言って、昨日校舎内から掻つ払ってきた段ボールの中から、コーヒーを出してくれた。

……有りがたく頂く。

「……大丈夫か?」

「大丈夫かそうじゃないかって言われれば。大丈夫じゃないわ。でも……泣いてても変わらないの。変わって、くれないの」

「……だよな」

「くるみとは話した?」

「ああ、シャワー浴びて寝るってさ。ああ、飯は要らないって」
「そう」

ぐるぐるとカレーを焦がさないようにかき回す悠里は——自嘲気味に笑った。

「それにしても。経験が活きたわ」

「……経験?」

「——家族が死んだ時」

「……………」

「辛くても苦しくても泣いても何しても——どうしようもならない。それがなきや、私は今も放送室にいたわ」

急にぶっこまれた重い話に私は咄嗟に反応出来なかった。

それなら……私もそうだ。考えたくないが——この状況じゃあ、私たちが奇跡だつてのはわかる。

私がないと言わなかったからか、悠里は慌てて、誤魔化すように。

「あつ、ごっつ、ごめんなさい！そ、それに私には下の子がいるから……一人って訳でもないし……そのう……」

「ああ、悪い。黙って。……下の子って、弟？」

「………………。ええ、そう。弟。大切な、私の家族」

「……………そうか」

悠里とも、こうなる前は特に知り合いでもなかった。

だから小さいところでも知れるというのは少し嬉しい。——たとえば、生存が絶望的であったとしても。

悠里はそこで「そういうえば」と呟くと、食べ物を適当に詰め込んだだけの段ボールの中から、缶詰を取り出した。

なんてことはない。スイートコーンの缶。子供が好きそうな奴。

「たかえちゃんって、カレーにコーンを入れても大丈夫な人？」

「んん？食べた事は無いけど……合いそうだしいいよ」

「良かった。家じゃあ入れてたから。なぎくんも大好きでね——よく一緒に食べてたの」

「へえー」

……柳の好物ってコーンカレーだったのか？

初めて知った。アイツ、購買のパンでもゆきの消し炭弁当でも私のおかずでも何でもうまそうに食ってたけど、そうなのか。

……うん？ていうか、一緒に食ってたの？家のカレーを？

いや、ゆきの奴が、泥棒猫を許す訳が——ああいや、私も学校の外は詳しくないし……そうだったのかも。柳、誰とも仲良かったし。

「だったら、早く起きるといいな。柳」

「……そうね。とても心配だわ」

柳は——アイツらに噛まれては居なかった。

血を拭つても、怪我らしい怪我は、頭をちよつと大きく切つた傷とタンコブだけ。そこだけが不幸中の幸いだった。

あとは——アイツが目覚めてくれるだけ。残ってるのは。

「……ちよつと見てくる」

「ええ。ああ、そうだ。めぐねえにもコーヒー持つてってあげて。きつと気を張り詰めてると思うから」

「そうだな。……ブラック？」

「めぐねえ的にはカフェオレじゃない？ 甘いやつ」

「……間を取って微糖にしとくか」

「それは聞つて言うのかしら……」

そうして、缶コーヒーを手に——職員室に向かう。

保健室が一階にしかないのが悔やまれる。あつたら万全に治療出来たかもしれないのに。

廊下を歩く。

綺麗だった。そう思い出すしかない、血に濡れた廊下を。

「……………」

トイレじゃないが——気が参る。

綺麗な時を知っていたせいで、余計に。

「ん？」

そこである教室に目が留まった。

色々グチャグチャな中で整然と並んだ綺麗な机と椅子。そしてそ

ここに並べられた数枚の紙。

黒板には……抜き打ち、テストの……文字……。

「……………つ……くそつ……………」

——気が参る。

職員室の扉は空いていた。

覗くと、柔らかなソファで寝ている柳と——その横で座り込んでるめぐねえの姿が見えた。背中を向けてて表情は見えなかったけど。離れてても沈んでるのはよくわかった。

「無理も、ないか……」

小さく呟く。

だってめぐねえは——張本人だ。両方の、出来事の。

胡桃も悠里も、そして私も。柳も……ゆきだって——めぐねえを責めないだろう。

そう思えるほどには私たちはきつと仲が通じていたと思う。

私はめぐねえに近づく。

そうして声を掛けようとして——

「どうしてこうなっちゃうんだろう」

——無機質な声に足を止めた。

「私ってどうしてこうなんだろうなあ。成績はそれなりにいいのに、本番になるととんで駄目。恋も駄目だったし、部活だって……就職はすぐに決まったけど。でも、顧問すら任せて貰えなかったし」

何故か、喉がひりついた。

ただの眩き。ただなんてことないような言葉なのに——妙に心がざわついた。

「それでこれでしょ？二人だけは守るって言っておきながらこの様。やなぎくんは私のせい。ゆきちゃんも私のせい。私がつとちゃんとした先生だったら。ちゃんとした大人だったら。……あー、あー、あー。ほんと——私って使えない」

そうだ。私たちは絶対に責めない。

でも——めぐねえだけはきつと、自分を責めるだろう。

私の知ってるめぐねえは大人しくてどこか抜けてるふわふわとした大人な女だった。

こんな——淡々と己をなじるような人だったか。

「アレが元は人だからってなんていうだろう。罪を償うってバカみたい——この子を失ってまで守るべき事じゃない」

「……っ……っ」

「やなぎくん。先生……いや、私はもう絶対に間違えない。何があつても守る。……守らせて。私、なんでもする。だって——」

——これ以上、聞いてはいけない。

きつと、誰も聞いちゃいけない事。めぐねえだけの、めぐねえしかわかつちやいけないものなんだ。

私は後ずさつて部屋から出ようとする。

今ならまだ——

「——ああ、そうだ。もうあんなの要らないじゃない……」

——不意に立ち上がったためぐねえから隠れるように、手頃の机の陰に蹲る。

めぐねえの表情は髪に隠れて見る事は出来なかったが——口許は。

酷薄に歪んでいた。

「ついでに、顔を洗ってこよう。こんな顔、この子に見せられない」

そうしてふらふらと。

めぐねえは廊下に出ていった。少しして——くしゃり、と紙を丸める音が、やけに良く聞こえた。

「……………」

私はなにも言えなかった。

きつと踏み込んでいたら——何か壊れるのはわかっていた。もう、なにかが壊れるのは嫌だ。

私は——努めて、部屋の一角からは目を逸らして。柳を見る。

……顔は青かった。散らばる応急処置の本、血がついたタオル——ガタガタに歪んだ包帯。

どこを取っても痛々しい。

跪いて、手を握る——ひんやりするほど冷たくて。私の体温を奪うようだった。

「あれ？」

——柳って手の平は熱い奴じゃなかったっけ？

「えっ、あれ…………えっと、あ、っと…………」

いや、どうだったろう。

たまにゆきのほっぺをつまみ合う時にちよつと触れあった時は、いやあの温度はゆきのほっぺのせいかな？違う、ちゃんと触った…………はず。暖かった…………はず。

あれ？どうだったっけ？えっ、大丈夫なのか——ほんとに、このま

までいいのか？

暖めるように掌を両の手で包む。

それでも——柳の顔は青くて。あれ？そういえば、呼吸が浅いような気がする。いや、違う。眠ってる時は呼吸が深いはずで……あれ？ならこれでいいのか？悪いのか？

——どうなんだ？

「とっ、とりあえず……悠里に頼んでタオルを温めてもらいに……」

このままでは埒が空かない。

そう思った私は、手頃なタオルを引っ付かんで廊下に出て、扉を閉める。

キツチンにいる悠里に頼んで電子レンジとかで温めて貰えば——それで。

……もし目を離れた時に柳の容態が変わったらどうしよう。いや、そんな事言ったら何も……いやでも、そうして誰も居なくて——死んだら。

死んだら。

柳が死んだらどうする。ゆきも柳も居なくなったら。私たちは、私は——どう生きればいいんだ？

柳に助けて貰った。なら、そのお礼に柳を……皆を助けるべきで。

でも、ゆきはいなくなつて。柳も死んで……いや、柳は死んでない！死んでない……いや、このまま起きなかつたら？頭を打つたんだ。もしかしたら当たりどころが悪くて。

柳が死んだら。柳が死んじゃったら。

私は、生きる必要があるの？

——ガラガラツ。と。

ふと、開くはずの無い扉が空いた。

「あつ……」

視線を向けると——痛々しい姿をした柳が、私を見下ろしていた。
……見下ろす？そこで私はやっと——自分が座り込んでるのに気がついた。

「むっ、たかえちゃん発見。……他の皆は？」

そう尋ねてくる柳に——私は泣き出すのは抑えられなかった。
不安になった。どうしようもないくらいに。

ただ悪い方向に転がっていくだけの現状に、挫けそうになった。

でも、もう——今は大丈夫だ

柳がいる。柳が生きてくれている。それだけで、今は。

だから。

見落としたんだ。柳が焦ったように皆を探し回るのを。段々、段々と。柳が狂っていくのを。

自分が安心してもう大丈夫だなんて。

——ほんの少し前に後悔した事すらも忘れて。

なんとかなったはずなんだ。

泣く前に——泣かせる前に。柳に伝えるべき、大切な事が。

ゆきはいない、ってこと。

もう、きつと柳には聞こえないだろうけど。

「大丈夫だよゆきちゃん！そりゃあ、辛い事いっぱいだったけど、生きてれば良いことあるよー」

「僕は、ゆきちゃんと一緒にいたい。ゆきちゃんに行ってほしくない、死なないで——」

こうして。

私たちの地獄は、また一つ過ぎ去った。

新しい希望は血で汚されて。ガラスのように砕け散って。

「えっ？なに冗談だったの」

「……ごめんなさい」

「もーっ、ゆきちゃん。流石に今、その冗談はちよつとキツイよ。まあ、いいけどさあ」

つまらなくとも暖かい日々を失い、それでも懸命に生きようとした私たちを嘲笑うように、絶望は押し寄せて。

「それよりゆきちゃん。辛かったよね……ごめんね。僕がもっと……もっと」

「ごめんなさい……！やなぎくん、ごめんなさい……！」

「——むっ。……やっぱりゆきちゃんは優しいね。あつたかい」

ついには。

「だから、お願い……——」

「まあ、全部終わり良ければすべてよしだね。僕も大丈夫だし、ゆきちゃんも大丈夫。皆大丈夫ー！万々歳！」

「——お願いだから私を見て！」

希望すら失った。

私たちがなにをしたって言うんだろう。

大それた事なんて一つも望んではいなかった。

私たちはただ……静かに、普通に……生きていたかっただけなのに。

どうして、こうなってしまったんだろう。

小さな希望すら壊れた私たちは、これからどうすればいいんだろう。

八日目・日中 Sweet Dream

この世には結果だけが残るRTA、はーじまーるよー！

(気絶していた間の)過程や……(私抜きで生き残った)方法など……
(タイムが良ければ)どうでもよいのだああ！

まあ、良くはないんですが(素)。

……結果的に全員生き残って、重傷だったのはシヨタだけ。

こう挙げれば——まあ、ベターベターのベトベターです。

どう生き残ったのか、聞いときたいですが——最早、タイムしか誇れるところが存在しなくなってきたこのRTAにおいて、それはロスですからねえ！(自虐)

まあ、なんやかんやあつてなんとかあったんでしよう。なんやかんやあつて。

「……………」

「……………」

「……………」

「——やーくん、あーんっ」

あーん。

——八日目、朝。

部室での朝食の時間です。

……お通夜状態です。

カチャカチャと響く食器の音以外ほとんど無音。

これじゃあ、りーさん謹製のカレーの味もわからないんだよなあ……。

ゆきちちゃんだけが心の抛り所やでえ……。

「……………くるみさんは」

「まだ寝たいって……まあ、しょうがないよ」

「できれば朝ごはんは食べてほしいけれど……」

「はい、やーくん。あーんっ、ああーんっ」

あーん。

——正直、ちよつと由々しき事態です。

前にどこかでお話したと思いますが——朝食での皆の状態が、どのぐらい正気度が減っているかの目安として分かりやすいのです。

食べる量が減っていたり、やけに会話しなかったり——そもそも朝食の場に来なかったり。

「……………」

「……………」

「……………」

完璧に当てはまりますねえ！

おっ、冷えてるかあ〜？（場の空気） ヒエテマスヨオー（エコー）

ヒール、ヒール！（世界観ガン無視）

「…………昨日は大変だったもんね。疲れちゃうのはしょうがないよ。はい、あーん」

あーん。

……昨日の「あめのひ」が余程堪えたようですねえ。

まあ、然もありなん。

二階を制圧してなかった事でかなり多くなった『かれら』の群れ。バリエード崩壊に、シヨタの戦闘不能……不利な状況でんこ盛りでしたし。

必殺技のフラグとか、覚醒めぐねえとか。

そういった有利な条件があったから、皆の頼れる私が居なくてもなんとかかなりでしたが——正気度減少は、想定より多くなっても不思議ではありません。

しよーじき。一人も怪我無く、それも脱落しなかったのが奇跡で

す。

めぐねえあたりがポカやらかして一人脱落とか平気であるので、これは覚醒めぐねえのせい……いや、おかげでしょうか。

ボール窃盗犯ですが、恐らくは一連の流れの救世主です。感謝の祈りを捧げましょう。

アーメン……ボールカエサーメン……（執念）

「りーさんのカレーおいしいね。あーんっ、あーんっ、ああーんっっ！」

あーん……っつて。

ていうか、ゆきちちゃん。なんであーんばかりしてくるのん？

こういった行動は好感度が高いなよりの証ですが、やけに多いよ
うな。

「だって、やーくん。頭怪我してるでしょ？病人なの！だから、私に任せて？はいっ、あーんっ！」

ああ、なるほーあーんーど。

シヨタが怪我したせいでゆきちやーあーんーんの庇護欲を掻き立ててしまったようです。まあ、いいでしょう。

お互いの好感度が高い状態で“看護”されると、両方の好感度が上がりますし、正気度も少しーあーんー回復します。ゆきちちゃんリカバーとして、為さーあーんーれるままになつとききます。

……他の連中にもリカバーをーあーんーしないですね。

これで皆がわかりやーあーんーすい怪我でもしてば私も“看護”でいけーあーんーるんですが。

うーん、シヨタがーあーんー怪我してしーあーんーまった以上、他にーあーんーもリカバーあーんーバ……っつてちよっ、多すぎィ！
ちよっとゆきちちゃん、ペース！ペース早い！

シヨタの小さな口にそんなの（大量のカレー）挿入らない！

はやくそんなもの（スプーンいっぱいのカレー）閉まって下さい
……！
ちっ、近づけないで……（カレーの良い）匂いが……！！

「えー。いっぱい食べないと元気になるよ」

不満そうにしな—あ—ん—言ってるそばから！

くっ、何故だ……！何故今回はこうも甲斐甲斐しい……！？好感度か？
正気度か？シヨタの怪我具合のせいか!?

くそっ、このゲームの高度なフラグ管理のせいで曖昧にしかわか—
あ—ん—ちっ、窒息する……！この万寿柳がカレーで窒息死してしま
う……！！

「……ふふふっ、美味しいですか？やなぎくん」

なにわろてんねん！

……たとえゆきちゃんにわんこソバよろしくされても美味しいで
すねえ！当たり前だよなあ!？（ゆきちゃんへの愛）

「気に入ってるからってそうがつつくなよ。喉詰まらずぞ」

「いっぱい食べてくれるのは嬉しいけど……たかえちゃんの言う通り
——めっ、よ？やなぎくん」

それ、ゆきちゃんに言ってくれませんかねえ!?

「にへへ……あ—んっ」

くそっ、可愛い許す！（これをゆきちゃん無罪と言います）

「じゃあ……私たちも食べちゃいませうか」

「そうだな」

「ですね」

おや。

どうやら一連の流れで多少……ほんとに多少ですが、和やかな食事風景に戻りました。

これを不幸中の幸いと言います（正しい表現）。

やっぱりこういう時のゆきちちゃんの空気清浄器っぷりは伊達ではありません。後でほっぺむにゆむにゆで労ってあげましょう。

さて。

ゆきちちゃんにわんこカレーをされてる様を皆がほほえましくしている間に——今日やるべき事を軽く説明しましょうか。

割りと窒息死の危機ではありませんが。私がボタン連打すれば問題ありません（意地でもゆきちちゃんを責めないスタイル）。

八日目は、中盤の鬼門たる七日目の「あめのひ」が終了した次の日——『かれら』によつてメタクソになった安全圏の修復や、生存者の回復に勤しむ……そんな重要な一日になります。

これを怠れば、次の「あめのひ」かつ最終戦の十四日目を持たずに、『かれら』が入り込んでタイムロスの原因になりかねませんし、皆の正気度の具合によつては要らぬイベントが挟まり、これまたタイムロスに繋がります。

傷は、出来てすぐに処置をした方が悪化もしないし早く治るのは自明ですね？

今日はそんな一日なのです。

……本チャート通りで行ってれば、ここでエンディングに向けての下準備とかショツピングモール組の救出のフラグ建てとかもやる予定でした。でした！（苦渋の過去形）

ですが、周りの正気度の減少幅……特に此処に居ないゴリラはかなりヤバそうなので……そういったのは隙が空いた時に、振り分ける事にしましょう。

ショツピングモール組に関してはシヨタがこんな様なので……修

正が必要だ……。

「……今日の事なんです」

なんれふふあ、めふねえ（口に物を入れて喋るお行儀わる子）

「取りあえず、バリケードの修繕を。もう……入り込まないように」

「ええ、廊下も綺麗にしなきゃですし……その……」

「ああ、そうだな——早めにやっちゃおう」

……三人は前向きに話を進めてますね。表情も良いものではないですが、悪いものでもないです。

一様に暗いですが、建設的な話ができているので——正気度的にはそれほど深刻にならなくてもいいでしょう。

後でハグでもして補強しつつ、それでも足りなさそうなら今日一緒に添い寝でもしとけば大丈夫です。

シヨタであれば、体を売る事で異性を元気にさせる事ができます（悪意ある解釈）。

「うーん……やーくん。私たちはどうする？手伝う？」

いいえ。

ここでゆきちちゃんに協力させてもそこまでの短縮にはなりません。シヨタも怪我を負っているのです、いつものスタミナバーギリギリ酷使走法は封じられています。

今日のRTA的短縮ポイントは、いかに効率良く皆の正気度を一定水準に戻し、且つ安全圏を素早く確保するかに限ります。

ですので——とつとつと、くるみのケツを蹴り上げて立ち直させましょう。

食事にすら来てないという分かりやすいほどイッてるので、色んな意味で急務です。

空気清浄器ゆきちちゃんもいれば、正気度回復は確実。

学園生活部の力（直諭）が復帰すれば、後片付けも早く終わりますしね。

一石二鳥……ある意味、くるみがダウンしててありがたいですね！

（屑）

じゃあ、ゆきちちゃんにくるみを起こしに行く事を手伝って、とお願
いしましょうか。

「わかったっ！じゃあ、寝坊助なくなるみちちゃんを起こしに行こう！
おーっ！」

おーっ！（今のうちにゆきちちゃんからスプーンを取り上げて、手の
届かない所に置きます。お腹いっぱいでちっ！）

「あら、なぎくん。ふふ……お腹いっぱい？」

「……まあ、そんなに食べばな」

「でも、気持ちはわかるわ。ゆうりさん、ありがとうね？」

「いえいえ。昔からおんなじを作ってますから……ねー？なぎくん
？」

ねー……え？えっ、なにがよ（ボタン連打で聞いてない）

まあ、ええか。

んじゃあ、私——ちよつとナマケモノになっただくるみを起こしに
行ってきます。

その間、先に片付けてて？

「——駄目よ」

なんで？（半ギレ）

「一人じゃ危ないわ。そうね……じゃあ、私が付いてくから、二人は先

「お願いしていい?」

「いや、胡桃と最後に話したのは私だし。私が行くよ」

「いいえ。私が付いてつてあげます。なぎくんもその方がいいでしょ?」

「ダメ! だうめえ! やーくんとは私がいっしょに行くの! 三人ともつ、カップリングは大事なんだよ? 寝取りいくない!」

まあ、なに言われてもゆきちゃん一択なんですけどね。

趣味も実益も兼ねた選択、イイゾ〜これ(満悦)。

じゃあゆきちゃん行くよ!。

「うん! いい! いい!」

うきうきゆきちゃんカワユス。

じゃあ、ほな。ワシらはイチヤイチャしながら行ってくるさかい。

そっちはそっちでたのんますわあ――

「――あつ……えつ……」

「……………」

「――」

――いや、無言はちよつと止めて!?

「やーくんとおろ、二人つきりい〜、ぬふふふん」

……あつけなく場面転換したけどほんと大丈夫なんですかねこれは。

まあ、ええか(今回二回目)。

ご機嫌ゆきちゃんと一緒に向かうのは、くるみがいる寝室ですが――
――十中八九いません。

こういった場合、くるみは屋上で黄昏ています。
くるみが正気度減った状態でどつか消えたなら屋上を探せば問題
ありません。

では、ちやつちやと屋上へ。行くゾー！

てつててて、かーん！ててつ——臭っ!?

「あつ……やなぎ……」

「むむつ……ちよつと焦げ臭いよ、くるみちゃん……」

思わずシヨタがのけ反りました。

（屋上へ来た途端、むわあとした黒い煙が顔に直撃したら）そりやそ
うよ。

焚き火の横でくるみが項垂れています。……これはアレじゃな？旨
いもん食わせた弊害じゃな？

で、くるみは何をしていたのですか（詰問）

「焼きいも、食べたくなって……やってみただけど……」

その手に持ってるのはなんですか（追求）

「焼きいも、の……つもり」

焼き炭の間違いでは？（揚げ足取り）

「……………」

勝ったな（なにがだ）。

……ふむ。

これは想定よりも早くくるみのゴリラ（比喻）を元気に出来そう

すねえ！

ちようどいいバナナのアイテムが！

では、私が代わりに焼き芋焼いてあげます。ゆきちゃん手伝って下さい。

「はあーい！じゃあじゃあくるみちゃん！ちよつと待っててね！」

「……………」

「美味しいの作るからねっ……………やーくんが！」

……………まあ、ゆきちゃんは調理スキル壊滅的だからね、しょうがないね。

では、調理開始。

ここで一子相伝の秘伝の裏技テクニクをお教えしましょう。

焼き芋はね。火で焼くじゃない——熱で焼くのです。

石焼き芋ってありますよね？あれは熱した石が放つ熱がじんわりと芋を温めるからとても美味しいのです。だから田舎を練り歩く屋台のジジイは大抵石焼きイ芋オクなどと叫んでいる訳です。最近見なくなつてとてもさみしいです。直火も電子レンジも駄目です。芋は一気に火を通すと固くなって風味が落ちてしまいます。ただの芋でも蜜を溢すほどうんまくするには、石焼きが強い。故に至高。異論はあんまり認めない。オーブンも美味しくなりますが風情つてもものがないですよ風情つてやつが。石が無ければ、燃え尽きた灰の中もいいじゃない。焚き火跡の土の中に入れるだけでもぜんぜ——なんか脇から腕が視点が浮いた抱き抱えられた髪に顔を埋められたあ!?! わつ、私はただ美味しいやき芋講座を……………！（趣旨を忘れる走者の屑）

「……………」

まあ、こうなるのは想定通り。

少し前に言った通り——シヨタを抱くと気持ちいいですからね（意

凶的な切り取り)。

ともかく。

美味しい焼き芋が出来るまで、誰かの赤点用紙の灰をぐーるぐーる掻き回しながら——くるみの正気度回復を始めましょう。

とはいえ、難しくはありません。

くるみが欲しがってるのは、褒める事と愛する事。

承認欲求をこれでもかっと満たして、無償の愛を見せつけてやりましょう。これだけで問題ナツシング。

心の綺麗な私だからこそ出来る事ですね！

「なあ……怒ってないか、私の事」

怒ってないですねえ！

だって基本くるみが居ないと『かれら』相手はハードモードですから。主要キャラ全ての筋力値を足しても尚も上回る暴力の化身に対して、媚を売って靴を舐めて体を売って焼き芋を貢ぐのはともかく——怒る事はありませんねえ！

「だって……だって、私のせいで——！」

「——むう、ちよつとやーくん。私の事忘れてない？」

あつ、ごめんゆきちちゃん。今忙しいからちよつと脇行つてて。

そこにいるだけでマイナスイオン出てるから。

「——つ」

「むうー！あーそうですかそうですか！いいですよーだ。やーくんのバカ！大好き！愛してる！」

可愛すぎか（鼻血）。

まあ、空気清浄器YUKICHANは稼働してもらっておいて。

呆然とするくるみに畳み掛けます。

くるみが居なければそもそもここまで来てない。くるみが居たら皆生き残れた。つまり、くるみ⇨希望なんだよなあ。誇りに思っ
て、どうぞ。

……ていうか、本編もくるみ居なかったら一巻辺りで全滅してそう
だし。

「そうかな……？」

そうだよ（適当）

ゆきちゃんもそう思ってるって大丈夫だって安心しろよおく。

ふう……。

くるみの顔色もだいぶ良くなってます。

まあ、こんなかわゆいシヨタに慰められれば誰でも嬉しくなるって
はつきりわかんだね。

焼き芋も良い感じに仕上がりました。ついでに他の三人分も見
繕つといて、くるみに朝ごはんとしてこれを食わせましょう。

これでもう平気やろ。

「ゆきも……」

あん？

「ゆきも……そう思っ
て、くれる……かな」

だってよ、ゆきちゃん。

このゴリラに、慈悲深い御言葉を告げておやりなさい。

「っーん」

っーん、てかわいいかよ。

抵抗しないで言っ
てあげなさいって。

「……やーくんが言ってあげて」

なんで？（０ギレ）

「くるみちゃんはやーくんの口から聞きたがってるの」

……。

いや、なんで？（０．０００１ギレ）

「いいからっ。さん、はいー」

……うむう？ふむ……ふみゆう……（可愛げアツピル）
なんかおかしい気がする。

ゆきちやんがここで渋る必要が——

「——ごっ、ごめん！変だよな、変だったよな……あっ、あはは。すまん、なんでもない忘れてくれ！バカだよな私。ほんと……ほんとにバカだ……」

うわわ！

不味い、せっかく戻ってきた正気度が……！

ええとええと、このゆきちやんマイスターであるこの私が算出する、ここでのゆきちやんの気持ち——！！

——いつも頑張ってくれてありがとう。大好きだよ、くるみちゃん。

……どーよ。どーよー！

月刊『ゆきのきもち』を購読してた私に隙はない！

「……っ。ああ、ああ……！そうだよな、ゆきならそう言うかもな……」

！」

「そうだよーくるみちゃん！私がくるみちゃんを嫌いになるわけないもん！大丈夫大丈夫！——元気出して？」

くるみ嗚咽、ゆきちゃんご満悦。

……完璧な仕事ですねクオレハア。

「……………よしっ！」

現場猫かな？

「くよくよすんの終わり！あたしのやる事はまだある！なら、じつとしてる訳にはいかないよな！」

おーし、よおーし。

くるみ復帰ですね。流石ゆきちゃん。辛い空気も完璧浄化ですね。

これで問題ありません。

さあ、くるみ。

この焼き芋を食って今日もRTAの為に馬車馬の如く働くのです。

「ああ！行ってくるー！」

くるみは焼き芋啜えて屋上を出ていきました。

食パン啜えて走る女子高生かな？……女子高生だな。

「…………良かったね。やーくん」

ほにほに。

ゆきちゃんもあんがとね。ほら、ほっぺふにふにしてしんぜよう。

「すいー……」

何故避ける!?

……まあ、機嫌めつちや良さそうですねから別にいいか。

さあて。私たちも手に入れた焼き芋を他の三人にも渡して、正気度を回復させてやるとしましょう。

では、夜まで倍速でさくさくつと行きましょう。

前にもやったモツプ持つて廊下を綺麗にして、バリケードを作り直すだけの単純作業ですからね。時給は焼き芋半欠片!

……あれ? そういえばバサ杖さまは? 決死の特攻を共にしてくれた私の戦友はあ!?

でっ、出てこない。……まさか、『かれら』の誰かが持つてった? 生前の癖とか習慣で行動しがちですからアイツら。

あちゃー。武器がまた無くなった。

……まあ、そこらへんのリカバーは……もう、ええか(投げ槍)シヨタ怪我しちったし。それも自然に治らない『脳震盪』だし。

完全に後方ムーヴに切り替えた方が良いでしょうね。切り替え切り替え。

「——このぐらいで、いいですかね」

つと。めぐねえの一言でお掃除タイム、終わり!

そのまま場面はあ……寝る頃合いになりました。

……マジで何もねえ時何もねえなこのゲーム(RTAの味方)

夜ご飯? ……さつまいもカレーにでもなったんじゃないですかね。

では、いつもの雑魚寝ですが……。

今日は正気度の兼ね合いもありますしい……安全策でめぐねえあたりと——

「じゃあ、やなぎくん。私と寝ましようか」

「やーくん——私とだよね」

「なぎくん、おいで」

「浮気はダメだよやーくん」

「……まあ、柳が来たいってなら、断る気は……」

「マスコミさんの前で土下座したい？いしやりようとするよ？私スパー弁護士と知り合いだからね」

「やなぎを困らせるなつて。ほら、やなぎ。こつちやこいこい」
「……………」

——ゆつ、ゆきちちゃん一緒に寝ますつっ！正気度とか知ったことか！その前に nice boat になるわ！

みつ、皆そこで能面になつてるゆきちちゃんの前で良く誘えるな!?好感度高いと独占欲とか出るけど乙女ってほんと遅しすぎ!!

「そ、そうですか」

「……………」

「まっ、まあ柳がそう言う、なら」

「んじや、寝るかー。やなぎ——トイレとかは私を絶対起こせよ」

うん、わかった（起こすとは言っていない）。

「むふふっ…………とーぜんだね」

恫喝で勝ち取った添い寝は気持ちいいか？

たぶん最高でしょうね。顔が言ってます。

電気を消して、横になります。

さて………………。今日の夜廻はどうしましょうか。

色々補完とかもしたいところですし……でも、怪我してるシヨタを

野放しにしてはくれないとも思います。

怪我人が出るとこういうのは気づかれやすいんですねえ……。

うーん。

うーん。

……試してみますか。大してロスでもないですし。

成功すればヨシッ！ってことで。

では、もう少しだけ時間を置く間に……。

次に発生する直近のイベントの“おでかけ”——ひいてはショッピングモール組こと主要キャラのみーくとけい、後は太郎丸について軽く説明しておきましょうか。

“おでかけ”は校内の物資が少なくなった時に発生し、そこから巡ヶ丘市全体マップから選択した所に向かうという内容です。

駅とか小学校とか警察署、製薬企業……それなりに選択肢はありますが——まあ、皆は大抵ショッピングモール行きますよね。

本編ではそこに向かってます。

物資も食料以外も入手は容易く、さらにはマジレスウーマン直樹美紀こと“みーくん”と癒しマスコット() “太郎丸”と合流出来ますし。

みーくんは学園の後輩で、主要キャラ屈指の頭脳派であり、方針の決定はもちろんのこと、探索もある程度はイける良キャラ……本編でも人気があるので仲間にする人は多いんじゃないでしょうか。

しかし、それは軽く毘です。

少し前のマジレスウーマンが毘なのです。

みーくんはちよつと……そう、ちよつと思慮に欠ける言動が多くて。

ほら……たまにするりと正論を言われてカチンツと来る事ありません？

アレです。みーくんはアレです。……不和の呼び水としてはこれ以上ないでしょう。

その為、合流直後の状況によっては——敵対一歩手前まで行ってし

もう事もあつたりと割りにとんでもないキャラです。

それが原因で全滅とかなくなったりする時もあるし、まさしくサークルクラッシュヤーウーマン、M I K I……!!

……そういうのを乗り越えると超絶有能なんですけどねえ……。

そんなみーくんのストッパーとなつてくれるのがいい。

ゆきちゃんがあだ名を付けるところによる「けーちゃん」です。

けーちゃんはみーくんの親友であり、みーくんのちよつとヤベエ言動を窘め、もつと柔い感じにしてくれ、チョーカーさんと同じく『話上手』を持つてたりと中間管理職として便利。

意外にありがたいキャラ……なのですが。

私たち学園生活部が行く頃には、けーちゃんはシヨツピングモールには居ません。

化け物が徘徊する恐怖と何も変わらないのに減るものは減る現状に嫌気を差して、みーくんを振り切つて外に飛び出しちゃってるんですよね。助けを呼びにいくつて。

まあ、その……ね？

現実というものは残酷で——普通に行けば、『かれら』となつたけーちゃんが学校に登校してくるようになるんですが。

ですので、仲間にするにはその前に救出する必要があります。

条件は『ラジオでけーちゃんの救難メッセージを拾う』『駅に向かう』で、救出クエスト的なものが発生し、『かれら』のお仲間になる前に助ける事が出来るんですね。

……みーくんはともかく、けーちゃんは別にいてもいなくてもですが……頭数を増やすという確固たるチャートは破りたくない今日この頃。

出来れば……出来れば、救出しましょうか。

なあに頑張りますよ——めぐねえたちがなつ！

私？……ワタシ、ビョーニンヨツ！アンセイ、シナキャツ！オダイジニアボリジニ！

まあ、キーアイテムのラジオを入手せんことには話は始まりません

がね。

……………？

ああ、太郎丸？

太郎丸は犬。骨あげると喜ぶ。ゆきちちゃんの愛情を奪う末っ子。以上です。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

さて——そろそろ良い塩梅じゃないですかね。寝入ってしまったえば、ゆきちちゃんでも妨害できませんし。

では、行動開始——ほぼ寝てたシヨタを叩き起こします。

ふう〜！ふらつく視界い〜！

ひよこりひよこりと廊下に出ましよう。

月の光に照らされて雅な廊下を歩いて向かうのは、部室です。

元・生徒会室なあそこにはラジオもありますし——今だに生にしがみついている死に損ないもいます。さくさくつと処理しましょうか。

部室に入りました。

まずはラジオを……………この棚に中確率だったのですが……………おっ！これはっ！

——広範囲アンテナ・高品質バッテリー・非常事態仕様のラジオ！
……………くう、運が良い……………道具類だけはすんなり手に入ってしまう
……………！（複雑）

非常事態仕様のラジオは、充電用の手回しハンドルと懐中電灯が備わった——まあ、災害用のやつです。ありがたし。

では……………奴を。

適当に放り込んでいた——マニュアルを取り出します。

こやつのも運も、本当に……………そう、本当におしまいです。

コンロで灰塵に帰し、灰はトイレに流してやりましょう。ゴー・トウ・ゲスイドー!

では、コンロを——付ける前に安全確認ッ!

私は最早過去の私ではありません。邪魔などもう二度とさせません。

部屋をかくにーん。扉も……ヨシッ!

上、ヨシッ!下、ヨシッ!左右……ヨシッ!

……ヨシッ!じゃあマニュアルを燃や——

「——なにやってるの、やーくん」

にゆわあああ!?!なあんでえ!?

……
……
……。

——ほっとしたの。

鬱々とした朝の目覚め。悪夢のような現実の始まりで。

やなぎくんが——押し黙りながらも笑顔でカレーをパクついた時。夢中で食べるあの子を見て、ほっとしたの。

きつと、昨日の事は混乱して口走っただけの幻で——今日我に返ってくれて、現実を……受け止めてくれたんだって、思ったの。

『じゃあ、僕はくるみちゃんを起こしに行ってくるね』

そんな事ある訳ないのに。

『……っ?いや、ゆきちちゃんが行ってくるから平気だよ?』

そう言つて、手を繋いでるように部屋を出ていくあの子に私は何も言えなかつた。

私の都合の良い、そんな甘い夢は跡形も無く碎け散つた。

——そろりと、私たちを起こさないように、優しげに扉が閉まる。ととと、と廊下を歩いていく音を聞いて——私たちは寝てる振りを止めて起き上がった。

「やっぱりか……」

そう呟くくるみさんの声は、諦めと——ほんのちよつとの悔しさが滲んでいるようにも聞こえた。

やなぎくん……とゆきちゃんのいない間を縫って、私たちはこれらを話し合つた。

あの子は——壊れてしまつている。

ゆきちゃんがいると思ひ込んで、あの雨の日以前までの生活を続けてようとしている。

それを——どうするか、を。

私たちは専門家ではないし、職員室に少ないながら置かれていた医学書にも精神の治療法なんてある訳がなかつた。

なら——あの子に付き合うのか。

それとも——真実を告げるのか。

その二択が会話で浮かんだ時。

きっと私たちが思ひ浮かんだのは——やなぎくんの笑顔だつたらう。

幸せそうに微笑む、あの子の。

それが脳内に浮かんでしまうと……後者を選ぶ事は、私たちにはどうしても出来なかつた。

とはいえ、じやああの子の甘い夢に寄り添い続けるのか、と聞かれれば否だ。

だから私たちは、あえてあの子を一人にした。

一人の時にゆきちゃんに会えるのか。どうなのか。

なんでもいいから。今のやなぎくんのことを知りたかった。

「行くか」

「ああ」

「……………ふあい」

「——ええ、行きましょう」

私たちは頷きあつて、廊下へと出る。

月の明かりに照らされたそこから、やなぎくんが部室へと入っていたのが見えた。

「……………なんとか、してやりたいよな」

「当たり前だ。その為に、少しでも……………くそつ……………」

「しえ……………そう。たしゆけ、なきや……………むにや……………」

「……………やなぎくん」

そうして私たちはひそひそと部室の前へと歩き出す。

目を反らしてはいけない。

これはきつと、私たちに課せられた罪なのだから。

「うにゆ……………ぬ、むう……………」

……………。

「……………むにや、むにや」

……………えつと。

「あの、ゆうりさん？流石に辛いなら明日教えるから寝ても……………」

「——だめでふ……………むにや、わたしゆはなぎくんの……………だから、ぜんぶ知っておかないとだめ……………だめ、だ……………むぐつ……………」

「あー、取り敢えず枕持ってくる。いつでも悠里が気絶出来るように」
「りーさん、寝付き異様に良いから辛いよなそりゃ」

「……なんとも締まらない私たちは苦笑しあっていたけど——それでも。」

ある事については、私たちの気持ちは一致していた。
職員室の……あの部屋の先だけは見せてはいけない。

たとえばあの子が真実に向き合えたとしても——きつととても酷な事だから。

な、なじえゆきちゃんがここに?!自力で脱出を!?

「やーくん、なにしてるのって。聞いているの」

えっと、その……あつと、そもそもどうやって部屋の中に……?

「やーくんの事で私に出来ない事はないの」

謎の説得力すげえ……。

「……手に持ってるソレ、なあに?」

ん?非常事態用マニユ——あつ、いやなんでもない!なんでもないです!ただのゴミなんで!

「……じゃあ、私が捨ててあげるから貸して？」

いやあ、流石にそんな事させられないっすよ、へへへ……。
さっ、ゆきの姉御。寝室に戻って、寝てしまってください――

「――さげぶよ」

へっ？

「見せてくれないなら、さげぶ」

いつ、いやそれはあ……。

「……………」

……………。

「――すう」

あー！わかった！わかったから！

だからめぐねえたちを呼び寄せるのは止めて！ほんとにRTAお
わっちやーう！

「わかればいいの。……………」

あわわわっ……………！（精一杯の可愛げ）

どっ、どうしてこんな事に……………ちやつ、ちゃんと部屋チェックした
のに……………！

いつ、いやおちけっ！おちけっ！

ここまで来て退くのはチルドレンの恥……………！長時間RTAでの不
慮の事故は必定……………大事なのはリカバー力……………！！

こうなったら……！

「ねえ、やーくん。これって——」

なんやかんやして、なんやかんやするしかない……！（ノープラン）

八日目・夜半 Bitter Reality

ピンチをチャンスに、チャンス短縮に変えるRTA、はーじまーるよー!!

皆さん、不測の事態つてえ……ありますよね？

例えば……そう。

電車が遅延で行き先に間に合わなくなってしまう……だとか。行こうと思っていた店が突然閉店してがっかり……だとか。

そのまま行けば、最悪の最悪。一日、気分ダウン。もうマヂムリ……リスカシヨ……つてなっちやうでしょう。

ですが、そこでこそ視点を変えるのです。

——電車が遅延なら、路線を変えればいつもより早く行けるかもしれない。

——店なら他にもあるじゃない……違う店を探せば、面白い発見があるかもしれない。

即ち、ピンチをピンチとして受け止め、諦めるのではなく。

ピンチを新たなチャンスと見るのです。

^{チャート}予定通りに行かない？……^{チャート}予定とはそういうもの。

我らが父祖は、こう……おっしやられました。

『RTAとは最速のみに在らず——走り抜け、それを形にし、世に放つたものこそがRTA』だと。

つまり——ガバはガバじゃない！まだイケるッ！つてことなんだよっ！（史学家特有の歪曲展開）

はい！言い訳終わりッ！（正直）

今は、目の前の事態に集中しましょう……！（現実直視）

「……………」

ああ……熟読されてる……完璧に網羅されてしまっている……
！
どうしてこうなった！ちゃんと見たのに！現場猫風に茶化したけど、ちゃんと見たのは確かなのにい！

ふう……ふう……！（瀕死）

……ここで、常時赤点獲得大天使であるゆきちゃんに、こんな小難しいもの理解出来るはずがない！……と期待してはいけません。

今読まれている緊急避難用マニュアルは、悪魔の書。

開いた者に正気度を犠牲に、地下への道を教えます——強制的に。

その為、これを漢字が読めない小学生が読んでも理解できます。

必要なのは知力^{I_NT}ではなく、正気度^{M_P}。……魔術書かなにか？

「……………」

ひい……ひい……ふう……！（全集中・苦悩を逃がす呼吸）

さて——問題はここから。

マニュアルを読んだ主要キャラは、正気度減少後に——二種類の行動に別れます。

即ち、正気度^{ポジティブ}・高かネガティブ^低か。

丹念に正気度管理していれば、がくと下がってもまだポジティブ——問題ありますが、問題ありません（矛盾）。

運が良ければ何も無く、不眠になったり嘔吐したり一人になる事に怯えたり……と軽傷なので——まだリカバーが可能です。

しかし、ネガティブは……もう無理です。

錯乱・発狂・自殺はまだマシ。

好感度が高ければ絶望して無理心中、これを隠そうとしたシヨタが黒幕なんじゃないかと勘違いされての拷問・監禁は勿論——皆大好き『ゆきちゃん化』の可能性も浮上します。

それほどまでに、マニュアルによる正気度減少幅はとんでもないんです。

まあ、数週間はイける豊富な物資と、一度だけ感染を防げる『抗ウイルス剤』が手に入るようになるのもそうですし——書いてある内容が、マジで地獄な現実そのものですから残当なんですけど。(精神)こわれる。

「ねえ、やーくん。これって——」

ここに至っては祈るほかありません。ゆきちゃんへの愛を示す時が来ましたね……! (ちがう)

信じる……日頃、ゆきちゃんを真綿で包むように慈しんできた私とゆきちゃんのほつぺを信じろお……!!

ポジティブならセーフ、ネガティブでもお……『ゆきちゃん化』以外ならまだセーフって事にしたい……! (自分に甘い走者の屑)
お願い、ゆきちゃん! 耐えて!

「——やーくん、これってとっても大切なものじゃんっ! なんで捨てようとしたの?」

おっ……??

「た、しかに。辛いものだけ……目を背けたいけど、必要な物があるのに……」

これはあ……ポジティブやな?

それも表向き変化の無い、軽いものも軽いバカ軽の!

「むう、やーくん。聞いているの?」

やった! やりました!

日々、ほつぺをむにゆった甲斐がありましたね！

むにゆりも積もればリカバーになる——至言です。

メモ帳に記して、後世に残しましょう。千年後の史学者もびっくりするぞっ！

いやあ……よかつた。これならまだ何とかかなります。

誰も死んでないので『ゆきちゃん化』はないだろうとは思ってはいましたが、不安なものは不安ですからね。

……誰かが死んでるとマニュアルで大抵、ゴートウお花畑しますし。

——『ゆきちゃん化』は誰が成ってもロスです。

その場合は、諦めて再走——こればかりはしようがないです。不確定要素だらけになっちゃうんで。……通常プレイだと結構スリリングで楽しいんですが。

……。

……『ゆきちゃん化』したゆきちゃんも、かわいいんですけどねえ

……(RTAに私情を持ち出す走者の屑)。

これは絶望と苦難と、そして希望の本編……(唐突な語り)

唯一心から信じられる対象だったためぐねえを失った事を信じられなくて——自らに都合の良い現実にするゆきちゃん……。

それでも頭の冷静な部分はしっかりしているのか——妄想めぐねえを通して重要なアドバイスをするゆきちゃん……。

そして、妄想を尊い思い出として昇華し——迫る残酷な現実に毅然と立ち向かうゆきちゃん……!!

ああ、最高や。たまらねえぜ……! (ゆきちゃんガチ勢)

このRTA終わったら、また『ゆきちゃん化』したゆきちゃんと遊ぼう、そうしよう。ずっといっしょだよっ! (お花畑疾走)

「……もう！なんで黙ってるの！やーくん、誤魔化しは……めっ！なんだからねっ！」

おっ、とつと。

黙ってたら良い物も悪くなっちゃいます。難関は越えました。さくつと行きましょう。

言い訳という名の説得を行ないます。

ゆきちゃんを言いくるめるのは簡単です。ゆきちゃんマイスターの私にかかれれば余裕のよっちゃんイカです。

華麗にケリをつけてやります——いざっ！

——いや、だつてこれ皆に知られちゃいけない事だし（RTA的に）
「でも、学校の見取り図とか地下のこととか。みんなに教えたほうが生活が楽になるとおもうよ？」

——……いや、でもウイルスの事はちよつと皆にはキツイじゃん？

（正気度的に）

「……でも、みんなならきつと受け止められるんじゃないかな。やーくんがいたら、大丈夫だよ」

——おっ……？おっ、おう!!（語彙紛失）

「ねえ、やーくん。不安なのはしょうがないよ。でもね？抱え込んじゃつたらツラいのはやーくんなんだよ？……わたしは、やーくんがツラいのはやだな……」

——なんか正論で諭された!?!さらに情で訴えられて倍プツシユやんけ!

ゆきちゃんはこんな頭の良い事しないっ！（○）

おっ、おっ、どうすんだこれ。説得できねえ。

正論だもん。正気度ブツ飛ぶけど知つといた方がいい情報の方が
多いもん。ウイルスの事とかこの学校の事とか。

「……やーくん」

でもさ……でもさ。

後顧の憂いっていうのがありまして……。

最終的には、私が感染状態のままでもなくちゃいけないので……。

だから『抗ウイルス剤』が邪魔でして……。

好感度高いとみんな聖人君主様々で脱出前でも取ってきて自分が感染しても私に使ってくるので……（これを大きなお世話と言います。最低ですね）。

ここは一つ。

好感度でゴリ押し——情で訴えます！（土下座外交）

ゆきちゃんならいける……いける……！

——それでも……みんなには言いたくないかなあって。

「………むう」

大丈夫、私はゆきちゃんを信じています。

好感度が高い状態だと——理屈より情を選ぶゆきちゃんをな！（大人の汚さ）

へへへっ、そこが可愛いぜっ！（きたない）

「——わかった。ナイショにする。でも、捨てるのは駄目。私がぼっしゅーします」

——っしや、おらあ！（体育会系）

なんとかまりました。

処分できないのは………まあ、折衷案としてまだマシ。「大人のめぐねえには見せとこ？」と言われただけマシです。

……まあ、今回のゆきちゃんバレは、今の今まで処理できなかった私への戒めにしましょうか。

他走者の皆さんにタイム短縮の余地を与えるのもチルドレンの定

めです（これを、論点のすり替えと言います）。

——マニユアル、ちゃんと隠してね？

「だいじょーぶっ。誰もわからない場所知ってるからっ！」

……例の仕掛け棚だな（本編でのマニユアルの隠し場所）。

アレならめぐねえとゆきちゃん以外知らないし、めぐねえもマニユアルのことがなければ開けないので大丈夫ですね。

オーキードーキー。

ふう……（余韻）。

とりあえず、最悪の事態は避けられました。

大量の物資もそうですし——『抗ウイルス剤』を周知される訳には行きませんかからね。

「ね、ね。やーくん」

おや。

どうしたの、ゆきちゃん。

「この——『抗ウイルス剤』ってなあに？」

あー。どうやら、興味をそそられてしまったようですね。

………ただのビタミン剤って嘘つく——のは止めますか。下手に嘘ついて、やっぱやーめた！って言われるのは勘弁です。

——『抗ウイルス剤』はワクチン的なサムシング。

名前の通り、ウイルスを抑制するお薬……まあ、ヤクって言っても差し支えないヤバイクスリです。

医薬部外品……ぷくくっ……！（上手い事言ったつもり）。

「ふうん。治せるんだね。すごいや」

うーん……感染直後ではまあその通りなんですが。

ゲーム内では、『感染者を治療できる。発症者の場合、日数によって確率変動する』って感じで。

感染直後は100%治療出来ますが、感染から日にちが経つていくと成功確率が下がっていったって——七日を過ぎると使用しても治療出来なくなるっていう仕様です。

まあ、基本。噛まれて発症する間ぐらいにしか使う暇ないのでこのデメリットは無いに等しいですね。

『かれら』になったらデストロイ。これ鉄則。本編でもそう記されている。

「あつ……エレベーターもあるんだね……知らなかったよ」

……エレベーター？

あつ、三階から地下まで行ける、マニュアルで示されている職員避難用のやつの事か。一般生徒にはわからないように壁の中に偽装されています。

まあ、知っていたとしても——アウトブレイク直後に地下からロツクが掛かるのでこちら側からは使えません。

RPGとかでよくあるステージ間のショートカットのようなものです。(基本使わ)ないです。存在を忘れる空気そのものです。

「……………やーくん。やっぱりみんなに——」

——いやです……ずえったあいになやだあ……!! (終盤、土壇場で持ってこられて皆に抑えつけられて無理くり使われたのを思い出している)

「——そっか」

……………くそう。

大人しく寝てればこんな事には……（オリチャーいくない、はつきりわかんだね）。

ふう……もう、ふて寝しましょう。敗残兵はさつさと寝床へゴーホーム。

とほほ……もうガバはこりこりなん……。

「あつ………ね、ねえ。やーくん？」

なんだい、ゆきちゃん。

私もう寝たいんですけど。

「あのねっ……その、えつとお……」

……おや？

ゆきちゃんの様子が……。

「ちよつと、職員室まで一緒に行かない？……ほつ、ほらこの本隠さな
いとイケないし、えつと……それにね？——」

——頬の赤らみ（かわいい）。

——もじもじと擦り合わせる太もも（せくしー……）。

——マニュアルで顔を隠しながら流し目チラチラ（えろいつ）。

そして——まるで往年のラブストーリーによくある、月だけが私
ちを見ている夜の学校！（いんもらるっ！）

これはあ……アレじゃな？

「——渡したいものがあるの。……だめ？」

——信頼イベントキタアー！

やった、これはありがたい！やっぱ今までのマニュアルの下りガバ

じゃないわ！これが出たならガバではないです！

信頼イベントは、ちよつと前のチョコカーさんにもあった一定条件を達成した際に起こるイベントで——“おくりもの”が入手できる良イベ！

特にゆきちちゃんの“おくりもの”はなつかなかに有用です。欲しい欲しいっ！

——行かない手はぬえ！

……あん？やること済んだから寝たい？

……誰ですかそんな事抜かしたチャランポランなアンポンタンは。

「そつ、そつか！んじや、いこー！」

ははは。嬉しいからってそんなあわて——引つ張る力がつよいっ！（くそ雑魚シヨタ）

病人！私まだ病人だから！

て、そうだ。

職員室まで、まあまあ距離ありますな。ゆきちちゃん歩幅に合わせるので。

ですのでここは——みなさまのため——ではなくて。

せつかく手にいれたラジオを使って、けーちゃんの救難放送を拾っちゃいましょうか（オリチャー補完）。

私が聞いてさえいれば、後は駅に向かわせるだけで救出条件満たせるガバガバ仕様なので。

……そこまで期待はできませんが。

ラジオは、周波数がわかってないと——ランダムで適当に繋がります。繋がった放送はブクマされて、次からは選択できるようになる感じですね。

聞ける放送は六種類……けーちゃんの放送が出る確率は六分の一

といったところでしょうか。

当たりは一つ——大外れも一つ。……なるべく外れ来る前に聞きたいですね。ラジオ壊れるかもしれないので。

では……ちえけらっ！

——ザツ……ザザツ……——

「……ラジオ？……むう、やーくんやーくんやーくん」

なんだい、ゆきちちゃんや。

「デートの時はスマホ見ちゃしつれーです」

これはラジオです（屁理屈）

「むっ……それは、たしかにそうだけど……むにゅ」

……これで丸め込めるのに、なんでさつきは出来なかったんだろうか……コレガワカラナイ。

——ザツ……『——かれらをおそれはいけません』……『かれらは未来です。クラウドです』……——

あら、残念。

クラウドおじさんに繋がっちゃいましたね。

——……『クラウド、わかりますか』……——

すまねえ。英語はさっぱりなんだ（赤点シヨタ）。

——『データをネットワークで薄く薄く遠くまで広げることです』……『人間の心もデータですから薄く薄く遠くまで、広げることができます』……——

クラウドおじさんは、本編でもよくわかってない謎のおじさんで——
——こうしてよくわからない妄言を垂れ流しています。

ちよつと宗教っぽい感じですよね。

—……『かれらにとって、心は一つの肉体に収まるものではないのです』……『かれら全体の中に薄く遠く広がっているのです』……—

自衛隊駐屯地とかで電波傍受して場所を特定しても、この放送のメモがあるだけ、という実にミステリアスなおじさんです。

ゲーム内では、感染者ルートでは聞いた方が有用だったりします。

今回は特に使わないので、ほんとにただの妄言垂れ流しおじさんです。

—……『かれらを迎えますよう。クラウドを迎え』……ザ……ザ……ザ……ザ……—

はい、次々。……距離的に聞けるのはあと二つぐらいですかね。

「さっきの……なんだろうね。やーくん」

ねー。

邪淫おじさん並みに意味不明な存在だよね。

邪淫について……お話しします……（全省略）

—……ザ……ザザツ……『圭で』……『こえてますか？』……『駅の北口』……『駅長室』……—

おっ！圭——けーちゃんの放送です！

よかった……ギリギリ聞こえましたね。

—……『足を怪我して、噛まれてはないと思うけど、うまく動けない』……『結構、痛くて』……『聞いてる人、もしいたら来てください』……『水が少な』……—

——フラグがたちました。

後は、駅に行けば救出できるようになります。

……まあ、たぶん私は連れてって貰えないでしょうけど。……で
しょうけど！（苦渋）

ですので、くるみ達には——駅前のマックで月見バーガー買ってき
て、とか適当言っ行ってもらいましようか。

マックのバーガーは一ヶ月経ってもさほどカビは生えないらしい
からイケるイケる。

——……『あと』……『ショッピングモールの最上階』……『女の
子』……ザ、ザザツ……—

（みーくんの事は知らなくても助けられるから）キャンセルだ。
必要なことだけ聞く……まるでRTAみたいだあ……。

「……やーくん？」

つとと。

けーちゃんの放送に集中しちやって足を止めちやいました。

……止まるんじゃないぞ……（団長並感）

「……………ねえ、私もラジオつかっていい？」

うん、どうぞ。

……あれ？わかりやすい救難放送を聞いて、ゆきちゃんが何も
言わない？……途切れ途切れだったから？

うーん？

——ザ……ザザツ……『当社では、新たな世界にふさわしい……未
来を担う人材を募集しています！』……—

げっ。

—……『あなたも私達の元で、新たな未来を作ってみませんか？』
……『いつでもお待ちしています！』……—

あーっと。この放送は大外れです。不味い。

……いや、ゆきちゃんに限ってはなにか。流星に大丈夫なはず。

—……『よりよい未来をお届けする——ランダル・コーポレーションよりお知らせ』—

「……………ツ!!」

——ガツシヤンツ!!

——ゆきちやああん!?

ええ!?!ゆきちゃんでもやるのお!?

あー……ラジオが叩きつけられて大破しました。……これはあ、修理しないともう使えないですね。

「……………っ、っ……………」

えー。

ゆきちゃんには似つかわしくない暴力的側面が出た理由を説明します。

まずマニュアルには、この騒動の事実が記されています。

——『かれら』が発生した原因。

アウトブレイク時の避難方法、待機方法、処理のやり方。何もかも、今の状況が想定されていたのです。

そしてこれを主導したのが——ランダル・コーポレーションである事も。

この会社……まあ、製薬企業なんです。

ウイルスウイルス言ってる中で『製薬』という名で大体わかる通り——このゲームにおける黒幕です。

コイツらのせいで——巡ヶ丘市に『かれら』が発生するようになりました。

です。

マニュアルを読むとそれが理解できちゃう為——主要キャラのラ
ンダル・コーポレーションに対する敵意が跳ね上がります。

もうそれは殺意と言っても過言じゃないほど。

……でも、ゆきちちゃんが読んでもここまでになる事は無かったんで
すが……。

正気度が高い弊害？私しか居ないから？

うーん？うーん？

「——あつ」

おつ、我に返ったなゆきちちゃん。

「ごっ、ごめんなさい！ラジオ壊しちゃって……あつと、えつとね」

かまへんかまへん。

ラジオはもう用済みだったからねっ！

……正直、一緒にくつついてた懐中電灯とかクラシック兄貴姉貴と
かがかーなあり惜しいですが、ゆきちちゃんは悪くありません！（意
地でも非を認めないモンペの鑑）

ほらほら、職員室着いたよ。ゆきちちゃん気にしない気にしない。

「うー……ほんとにごめんね？」

ええんやで（やさしいせかい）。

「ふっふっふ、みてみてやーくん。ここを押すとね……じゃあーん！
隠しスペースになってるのだった！」
知ってる。

「あつ、このちっちゃな金庫はめぐねえのだよ！大事なものはここに
閉まってるんだって」
知ってる。

「——てえ、えへへ。やーくんも一緒に見てたから知ってるか……」
知って——えっ、そうなん？

じゃあ、さっきの下りロスやんけ！（短気）

……さて。

ロマンチックな感じはさっきのラジオでちよつと飛んじやったけ
ど、ちゃんとイベントやるよね……

「……………」

……………よね？（不安）

「ねえ……やーくん——こっちにきて？」

ふうー！（テンションマックス）

あー……良いシチュですよーこれこれ。

職員室は月明かり。乱雑になった室内に、初々しい二人の男女。お
互いの心音すら聞こえるような静寂……。

——たまらんっ！

「——これ、あげる」

そうして渡されるのが——「ゆきのぼうし」。
するりと脱いで、しやらんと揺れる髪がセクシー、エロい……！潤
んだ瞳とほのかに赤い頬がアクセントですねぇ！七兆点、優勝。

これはゆきちゃんの信頼イベント『離れたくない、貴方へ』を達成
すると手に入るアイテム！

装備すると《主要キャラとの好感度が下がりづらく、上がりやすくなる》——好感度が重要なこのRTAには神アイテム!!
さっそくいそいそと装備しましょう。

「やーくん、似合ってる。……うれしいな」

まあ、でもそこまで希少ってほどでもありません（明け透け）。

ゆきちゃん幼馴染みルートだと大抵入手出来ます。それ以外にも
入手自体はできるイベントはありますし。

難点は——シヨタぐらいじゃないと、かぶっても似合わないってだ
けです。……普通の野郎が装備すると、ハンターハンターのゲーム編
に出てくるドッジボールの人が使ってくる念獣みたいになります
ねぇ！（うる覚え）

「——やーくんは、私にずっといてほしい?」

当たり前だよなあ!?(ゆきちゃんガチ勢)

——いてほしい、以外に選択肢が出てこないのがシヨタの好感度を
示してくれますねぇ!

「……そっか。そっか!」

思いが通じあって嬉しそうなゆきちゃんをみると私も嬉しい……

(幸せスパイラル)

「じゃあ——これからもずっといつしよだよ。やーくん」

わあい！

ゆきちちゃんの信頼イベント達成！

R T A 成功に大きく一步近づきましたね……。

ふふふのふ。

最初はマニュアルでとんでもないガバをやらかしてしまったと思いましたが——ラジオでのけーちゃん、そしてこの「おくりもの」。かなりリカバーできましたね！これなら、他の部分の時間も短くなりますし……タイム短縮短縮う！

……。

——そうだ。アレも済ましてしましましょうか。

ちよつと前に話題に出したと思いますが『校長室のワインを飲んだぐびねえ』っていうイベントがありました。

めぐねえは、酒をかつくらうとストレスが減少して好感度も上がりますし、絡み酒で他の連中も巻き込んで行けます。

ついでです。

校長室にお邪魔して、ちよつくらワインを搔つ払っていきますか！

「……やーくん？」

……そういえば。

やけに——校長室への扉に机多くない？

職員室の机はランダム配置だけど、こんな塞ぐみみたいな……まあ、ランダムだし。そういう配置もあるか。

「やーくん。戻ろっか」

ガバもリカバーもやったし——ほんの補完。

十数秒でめぐねえの機嫌 (+α) 取れるなら儲けものよっ！

夜出歩いたのバレても「大好きなめぐねえのためだもん……」って言えばむしろ好感度上がるし。

「めぐねえたちも心配しちゃうよ。はやくいこ?」

ああ、ゆきちゃんちよつと待って。

そのめぐねえの為に、校長室行ってくるから。

ワインをスツ……ってすり盗ってすぐ戻ります。

「駄目だよ。戻ろつ?もうめぐねえに怒られたくないでしょ?」

むしろ喜ばれるんだよなあ……。

……まあ、そんな事ゆきちゃんにはわからないだろうし。不安にさせとくのもアレだし——さっさと机を退かしちゃいましょう。

「やーくん。だめ、戻ろうよ。もう寝よう?くるみちゃんもりーさんも、たかえちゃんも待ってるよ?」

……どうやらゆきちゃんはめぐねえに怒られるのが怖い様子。まあ、この中で唯一の大人ですしさもありなん。

でも、私は行きますぜ!非行は大人の始まりってはっきりわかんかね。

「だめ、だめだよ……やーくん」

——退かし終えました。

校長室のドアを開けましょう。校長室のワインは、部屋の隅の冷蔵庫庫の中に——

「ダメツ!——そのドアを……」

「——はいっ。みつめましたよ、やなぎくん」

げえ!?!めぐねえ!?

ちつ……タイムアップですか。

まあ、かなりのリカバーもできました。 “ゆきのぼうし”もあるし、ヨシツ!としまししようしまししよう。

ガバは見えなあい、しらなあい。
ていうか。

めぐねえにかぶってちやっただけど、ゆきちゃんなんか言ってますんでした?

……。

……。

……。

「——はいっ。みつめましたよ、やなぎくん」

笑え。笑え。笑え。

今の私は、ただ寝ている隙に夜遊びをしているこの子を注意しにきただけ。私は出歩いているのを呆れながら注意しにきた先生だ。

それだけを意識しろ——ドアノブを握る手を抑えているのは、偶然。

——校長室を開ける前なのも、偶然。それを絶対に悟らせる訳には
いかない。

さりげなく校長室を机で塞いでいれば、特に用もないから開けよう
ともしないはず、と皆に結論付けた。

甘かった。油断した。——あの子が聡いことぐらい知っているの
に。

「……めぐねえ?」

突然、現れた私をぼんやりとした瞳で見上げるやなぎくんの頭には

——ゆきちゃんの帽子がある。

きつと隠れた時に落ちた物が、職員室の机の陰とかにあっただのらう。

それをゆきちゃんから受け取った——と思う。やなぎくんが嬉しそうにゆきちゃんにお礼を言ってる——ように見えたから。

「もう、探しましたよ？おトイレかな？ってちょっと待ってても来ないんだから……くるみさんもちゃんと起こしてって言ってたでしょう」

「あはは、ごめんなさい。ちょっと……その、めぐねえに喜んでもらいたくて」

「——っ。それでもっ、です」

この夜。この子の夢の中。

それを——私達は眺めていた。

——月明かりだけが差す部屋の中で。

——やなぎくんが笑って嬉しそうに話していた。

——誰にも見えない世界の中で、ゆきちゃんと一緒に。

想像できた事だ。覚悟もしていた。

昼間のあの子の様子を思えば、わかりきった事だった。

けれど——面と向かって見つめれば、胸の奥に重いものが込み上げる。息も出来ないほど苦しかった。

それは他のみんなも同じことだったろう。

……約一名はもう耐え切れずに夢の中だっただけでも。

いつそ、ゆうりさんのように夢の中に行けば——私もゆきちゃんに会えるのかな、なんて。バカな考えが浮かんだ自分がおぞましい。

「——ああ、ごめんね。ゆきちゃん、見つかったやつだ」

「……………ゆきちゃんも。やなぎくんが出歩いてるならあぶないって

「言わないとだめでしょう?」

——きつと、あの場に飛び出すのが正解だったのかもしれない。
飛び出して、どこも見えていないあの子の頭をひっぱたいて、目を覚
ましなさいって叫ぶ。

そうすれば、やなぎくんは目を覚ます。きつと。あの子はやさしく
て強い子だから。

でも、出来なかった。

あんな幸せそうな笑顔を消すなんて……残酷なこと。

目を覚ましたところで、どうなのだ——彼の甘い夢に敵うような現
実は私達にはもう無いのにな?

「あつ。それより見てよめぐねえ!これこれ、ゆきちゃんからもらっ
たんだ!……似合う?」

「ええ、とつても。頭の怪我也保護できるし、丁度良いかも。……ゆき
ちゃんにお礼は言った?」

「——もつちろん」

でも、今はそんな事はどうでもいい。

何故、あの子が職員用の緊急避難マニュアルを私達に隠れて読んで
いたの?とか。

何故、突然豹変してラジオを地面に叩きつけたの?とか。

そんな疑問は今も瑣末な事でしかない。

——ここからすぐに離れよう。あの子が私達に気づく前に。

「さつ。もう寝ますよ?明日もあるんですから」

「あつ……その、もうちよつと待ってもらっていい?」

「……どうして?」

「校長室の中にワインがあつてね……ほら。めぐねえ、疲れてるで
しょ?お酒を飲めば元気になるかなつて」

「それは……」

『……ア、アア』

ああ……ああ……。

——きつと、やなぎくんの声が聞こえたからという訳ではないのだらうけど。

「……めぐねえ？」

扉の奥——校長室から聞こえる呻き。

やなぎくんにはだけは聞こえないように、ぎゅう……と抱き締めた。腕の中、胸の中に仕舞いこむ。苦い現実が——これ以上、この子を壊さないように。

「……そんな事。気にしないでいいんですよ」

「でも、めぐねえ飲ん兵衛でしょ？」

「誰情報ですかそれは」

「かみやん」

「昭子ちゃん……。んんっ！確かにそうですけどっ——」

——とん、とん、とん。

扉を叩くか弱い音。ふとしてもわからないような弱弱しい音——何かを求めているような、そんな音。

その“何か”は——決して私の空想通りのはずはない。私には、やなぎくんの世界は見えない。苦い現実しか映らない。

ふと、視界の端で小さな光がちらついた。

気付かれないように視線を向けると、扉の陰でたかえさんと、眠っ

ているゆうりさんを背負ってくるみさんが見えた。

手に、月明かりを跳ね付けるボールとスコップを握り締めて。目に、決意があつて。

——だめだ。

すぐに首を振る。たかえさん達もこの子も、あの子も。

もう血はたくさんだ。今日は……もういいでしょう……？

「——私は、貴方が笑っていてさえくれれば、もう幸せですよ」

甘い夢を汚す事は絶対にさせない。

「……そうっ？」

「ええ。さあさ、寝ますよ。ゆきちちゃんも」

「うん、そだね。いこっかゆきちちゃん」

気付かれないようにくるみさん達に先に行くように促す。

……夜の事をやなぎくんは知られたくないだろうから。

さあ、今日は一緒に寝よう。

たどえゆきちちゃんがなんと言おうとも今日はこの子を抱きしめて、一緒に布団で眠ろう。

せめて、夢の中だけは——やなぎくんが見える世界が、甘い夢が見れることだけを信じて。

嗚呼、この子の笑顔はどうしてこんなにも痛々しくて——愛おしいんだろう。

苦い現実すら、閉じ込めているだけの私には、もうこれにすぎる以外に——立つ勇氣すらも湧かない。

さして。寢室に戻ってきた訳ですが。

「すぴー……すぴー……」

「……っ……っ」

「ふう……ふうっ……」

約二名が汗かきながら息絶えてる件について。

これはあ……アレだな？見たな？急いで戻ってきた口だなこれ。

「なっ……なっ……!!」

あーあー。ゆきちゃん顔真っ赤だよ。

「……えっと、そのアレです」

……めぐねえが言い訳を考えてる……。

「——ごめんなさい二人とも。ちよつと無理ありましたね。ゆうりさんのせいで」

「くっ………そうだよ、これもそれも全部りーさんが重いから悪い！主に一部が！」

「そーだ！そーだ！たゆんたゆんしてるのが悪い！……くっ！」

開き直りやがったぞこいつら!?

それも弁明できない爆睡してる奴押し付けたぞ、なんて奴らだあ!?

「もーっ！乙女の秘めごとを隠し見るなんて！ぶんすこっ！！」

「すぴー……すぴー……」

にしても気持ち良さそうに寝てるな、リーさん。

……リーさんのこの寝顔って、安心できる何かが無いと見れないんだけど……アレか。学園生活部ができたからか。

正気度安定ひゃっほい！

九日目 “THE SHINING” of
りーさん — PART 1 —

運が良ければ今日は大幅短縮なRTA、はーじまーるよー！
九日目に入りました。

二桁が見えてきましたね。もうそろそろ終盤です。

昨日は少し予定外な部分が入ってしまいました。

ですが——

(結果的には) マニュアルの隠蔽。

(犠牲になったラジオ君に捧ぐ) けーちゃんの救出フラグ。

(愛しいマイハニーの) 『ゆきのぼうし』。

と——実とうまあじな一日でした。

後顧の憂いも人手も好感度調整も。終盤に向けてどれも重要で
す。運が良かったですね。

それにけーちゃん救出フラグが出たので——今日にも “おでかけ”
イベントが発生するはず。

そうすれば、後衛組ならではのタイム短縮が可能なのです。期待し
ましょうか。

「——はーい。みんな、朝ごはんですよー」

「わーい！おなかすいたーっ！」

「うーい。……なんかりーさんがすっかり食事係になっちゃったな」

「まあ、うまいし。私は文句はないよ。料理ができるって訳でもない
しなあ」

「……いいんですか、ゆうりさん。流石にお手伝いを……」

「いいんですいいんです、気にしないでください。……さっ、なぎく
ん。どうぞ」

謝謝茄子！（エセ中華）

ほう……………オムライスですか。

卵と米、ケチャップさえあれば作れる簡素さ、尚且つ満腹度も正気度も回復幅が大きいありがたい料理の一つ……………大したものですね（メガネクイツ）。

部室での、いつものお食事シーン。

今日は全員いますね。顔も特に暗くなく、“あめのひ”前の和やかな感じが戻ってきました。正気度が落ち着いてきた良い証拠です。

特にりーさんが笑顔なのが実によき。

りーさんは日が経つほどに疲れを隠さないようになるので、昨日の爆睡然り今日の笑顔然り——すっかり、学園生活部が心の支えになっているように。

日頃の私の行いのおかげでしょうか？えがったえがった。

「今日は良く出来たと思うの。召し上がれ？」

では、頂きましょう。

時に、皆さん。

オムライスにケチャップで絵を書くっていうのは最早あらゆる所での定番ですよ？

このゲーム、オムライスを作って他人に振る舞うと……………その人への好感度がわかります。

——好感度が普通なら無難なもの。

——好感度が高ければハートマーク。

——好感度が低ければ……………ケチャップはセルフサービスです。

……………地味に効くんだよなあ！（思い出し泣き）

机に並べられたりーさん謹製オムライス。めぐねえ達のは無難です。真ん中にブチョーつと出されてるだけです。

問題は私のオムライスですが……………さてはてシヨタへの好感度は—

「すげえ……………一面ハートマークなんだが」

「ハートマークの中にもハートマークあるぞ。……轟負も極まると笑えるなこれ」

「あはは……」

こっつ、これは好感度が極高状態にのみ起こる乱れ撃ちハートマ——

「——ふんっ!!」

ゆきちやああん!?

スプーンの腹でハートをぐりぐり潰してる……。

いや、わかるけど。わかるけども!好感度的に!

でもさ。

「あっ……」

ほら!ゆきちゃん見て!

りーさんの悲しそうな顔を見て心痛まないのゆきちゃん!私そんな子に育てた覚えありませんよ!?

三人もちよつと責めるような目で見てるよ?……——私を!

えっ、ゆきちゃんがやっただけですけど!なに、監督責任かなにかです!?

「浮気はだめなんだよ、やーくん」

いつ、いやでもねゆきちゃん——

「浮気はだめなんだよ、やーくん」

せっかくのご厚意というのを無駄にするのはね——

「浮気はだめなんだよ、やーくん」

……ていうか、私達『恋仲』状態でもないし――

「う・わ・き・はーだめ、なんだよ……やーくん……？」

ひい!?

ゆきちゃんおかしい……おかしくない……？ (困惑)

ここまで独占欲高いのは……いやでも、信頼イベントクリアしたし、仲の良い女の子はすぐに嫉妬するってラノベに書いてあったし…… (真剣ゼミ理論)。

さもありませんか……？

「ああ、ゆきちゃん。それならしょうがないわ。ごめんね、ゆきちゃん」

「うんっ！ちゃんと理解してくれるならわたしももう怒らなっ――」

「次はゆきちゃんにバレないようにやるわね」

「もーっ！そうじゃないの！やーくんはわたしのやーくんなの！ぷんすかー！」

あつ……周りの空気が和みました。よかった、いつものじゃれあいだと分かってくれたみたいです。

まあ、真顔で愛情を潰し始めたら流石にね……。

にしても、リーさんの好感度が極高なのは驚きです。

そりゃあ地道に稼いで来たので、順当に上がってもおかしくはありませんが……。リーさんの好感度が高すぎると、下手すればとんでもない地雷が炸裂するので……どうしましょうか。

乳でもビンタすれば好感度下がるかな。

「なぎくん？どうしたの？いつもと作り方違うけど、これも美味しいわよ」

「……いつもの作り方？」

「ええ、私た……じゃない、私の家だどごはんにお肉とかお野菜を細かくして混ぜるんです。今回は食料に余裕がなくて……」

「へえー、手間をかけてるんですね。私が作るとどうしても面倒で……お米、卵、ケチャップだけのシンプルなのなっちゃって」

「めぐねえ……それはシンプルじゃなくて必要最低限って言うんじゃないかな……」

まあ、やらないけど。やったらむしろ減りすぎて別の地雷が炸裂しそうだし。

地雷女（直諭） リーさん、悔りがたし……！

まあ、好感度調整は追々。

今は血の池地獄になったオムライスを平らげて、次の場面へと進めましょうか。

「あっーやーくん！あーんっ！」

……まだ食べさせてくれるのか……。

まあ、ええんですけども。自分のもちやんと食べなねゆきちちゃん……。

「それで……皆さん。大事なお話があるんですが」

はふはふはふはふ（返事をしないお行儀わる子）

「……話って？」

「シビアですが……どごはんの話です」

「あー……確かに。もう場所が……」

「ええ。もう取れるところは取っちゃってます。購買、食堂……これ以上違う場所探しても……」

「あってもお菓子ぐらいですもんね。……なぎくんにはおいしいどごはんを食べてほしいです」

「だな」「そうだな」「勿論です」

まだ地下がありますねえ！ありますあります……（超絶モスキート小
声）

「ですから余裕がある内に——“外”に行こうと考えているのです
が、どうでしょうか？」

ヨシツ。

予測通り、“おでかけ”のフラグが経ちましたね。

前に説明した通り、巡ヶ丘市内の各スポットに行ける探索パートで
す。お食事問題でお外に出るなら、私が何もしなくても100億%
シヨツピングモールに行きます。

うちはゴリラを二人飼っていますので、これでみーくん救出は確定
です。

や（→）ったぜ。

「あたしは良いと思うぜ。さんせー」

「四の五の言つてられないもんな。私も賛成」

「……………。そうですね。良い機会だと思います」

「おでかけだー！」

“おでかけ”では、編成するパーティの面子が重要です。

まあ基本、特に触らなければ——全員出撃の脳筋スタイルになりま
す。皆も最初からその方向で話が進めますしね。

それで問題はありません。『かれら』も次のあめのひまでバリケ
ドを越える事は滅多にありません。

話をボタン連打でスルーしてちゃっちゃと進めちゃいましょうか。

「面子はどうする？あたしとめぐねえは確定として」

「危ないけど全員でいいんじゃないか？雨でも降らなきゃ、奴らも三

階には上がってこないだろうしさ」

「……でも。万が一ってのもあるわ。二人ぐらいは、残ってた方がいいと思うの」

……会話がまあまあ長いので……。

——「おでかけ」に行くことになるイカれたメンバーを紹介するぜ！（唐突）

くるみは……何も言わなくていいよな！（最初から紹介になってない）。

めぐねえは今回、『覚醒』しているのだからくるみに次ぐ戦闘要員としてイケるぜ！

りーさん、チョーカーさんは……特に突出してはないが、人手〓物資の数なのでありがたいぜえ、ふえい!!（謎の掛け声）

「そうか？前みたいに、連中をどっかに誘導すれば一日くらい……」

「いいえ。くるみ、劇的だったのはわかるけど——あんなのを信用して行動するのは危険だと思うの。……ここは私達の家なのよ。誰かが待っていないと」

「そりゃあ……たしかに」

「いやでも、悠里。人が居た方が沢山集められるだろ？」

「でも、帰ってきたらまた三階入ってるってあるかもしれないでしょう？たかえちゃん」

「……まあ、それもそうか。帰ってきたらもう一仕事お……は嫌だな、うん」

そしていつちちゃん重要なのはゆきちゃんです。

ゆきちゃんは戦闘クソザコの代わりに『発見』などの探索系スキルが極まっています。ゆきちゃん一人いるだけで集まる物資の質が全然違う。ハンバーガーが、かぶりつく奴からフォークで食う奴に変わるくらい違う。

最高かわいい愛してる（確定事項）

んで、この私は……ですが、と。

「それで、やなぎくん。あの、ね——」

唐突ですが、皆さん。

私——名探偵です。

かのシャーロック・ホームズに匹敵するとも（私に）言われていま
す。

最初から今までの、状況。

シヨタと彼に取り巻く人々の心情・イベントフラグ・各種パラメー
タを正確に読み取ることで——予言にも近い卓越した推理を披露で
きます。

ここでシヨタがこう言うとしましようか。

——連れてって？

そしてこう返されます。

——ダメです。

——なんで？（半ギレ）

はい。

最早いつもの流れですね。

不毛です。ロスです。ロスチャイルドです。これはフリーメーソ
ンの策略です（陰謀論者風飛躍的解釈）。

ここは抗う必要はありません。

いつものように説得しようとしてくる会話もロスなので、さつくり
こつちから伝えちゃいましょう。

——あつ、私お留守番で。

「………そう、ですか。でもやな——」

「——それじゃあ。なぎくんはお留守番として。他にもう一人誰が残るか決めましょ」

「……だな。流石にやなぎを一人にしとく駄目だし」

「……私が残ろうか？バリエードを点検してあいつらを入れないくらいなら——」

一人お留守番を選択すると、もう一人お留守番を選択しなければなりません。ツーマンセルが基本です。

何もしなければ、この中ではりーさんかチョーカーさんでしょう。たまにゆきちゃんになったりもします。

編成を選択しない事によって、数秒でもタイム短縮。それ以降の会話もズバツといきたいですねえ……。

ここは、かかかつとオムライスを掻き込んで平らげて朝食の時間を切り上げる方向で。

ゆきちゃんスプーン返して。昼休憩中のサラリーマンみたいに食べるから。

「えー……やーくんお行儀」

男子高校生だからセーフ（正論っぽい暴論）。

「ねえ、私が残ってもいい？」

「りーさんが？」

「ええ。……えつとね？やっぱりお外で頑張るなら帰ってきたら美味しいご飯があったら嬉しいでしょう？——食料に余裕もある事だし、少し凝ったのを作ろうかなって」

「おっ、それいいな」

「……？でも、りーさん。さつき食料に余裕ないって——」

「——それはオムライスの材料が、って事よ。心配しないで」

「そっか。おけおけ」

ふむ、リーさんがペアですか。

……まあ、その体じゃあ満足に行動できないでしょうからねえ……
(ねっとり視線)。

ふう…… (まんぷく少年)

さて。オムライスを食べ終わりました。朝食終了として、引き上げる……前に。

——皆、聞いてほしい。とつても重要な事なんだ。

「……っ！なんですかやなぎくん」

「なんだよ改まって」

「どうした？」

——駅前のマックでハンバーガー買ってきて。

「……へっ？」

——後、駅前の本屋でジャンプ買ってきて。

「……おっ、おう？」

——駅前の酒屋さんでお酒も買ってきて。チューハイがいいな。

「……いや、流石にそれはダメだからな？」

……お留守番になると編成に口出せても、行き先の指定はできませんからね。

ここまで言い含めておけば、けーちゃんのいる駅前に寄ってはくれるでしょう。そうすればイベント発生——結果はお任せですが、タイム短縮したので致し方なし。

まあ、それでも行かない時はありますが……まあ、そのときはその

とき。

私がけーちゃんの分までごはんを食べればいい訳ですし。太っちょシヨタもアリだと思います（幅広い度量）。

んじや、よろぴくとばかりに席を立ちます。これ以降の会話は全てロスです。

ほな、さいなら。頑張つてなー。

「あつ、その、やなぎくん——！」

はい！余計なイベントが発生する前に廊下に出る！

七日目の教訓！

廊下に出ました。

向かう先は一にも二にも——寝室です。

“おでかけ”は拠点である学校では入手できない物資を獲得できる重要なイベントです。

本チャートであるならば、ここで颯爽と先頭に躍り出て、皆を率いて練り出します。

——戦闘スキルもなく、そもそも武器すらもない今のシヨタでも、『発見』スキルがあるので、レアアイテムとかも見つけやすいです。ですが、それ以上に。

この“おでかけ”でお留守番をしていた方が、タイム的には良いのです。

“おでかけ”でお留守番を選ぶと学校内での行動になり、そこから選択できるのは『バリケードの点検』と『会話』、そして『休む』だけ。重要なのは『休む』——端的に換言すれば、おひるねです。おひるねシヨタです。

皆が帰ってくる夕方頃まで時間を飛ばすことができます。

……タイム短縮ですね？（得意気）

ゲーム的にはクソつまんねえので誰も選択しないお留守番……R

TAでは有用の有用です。

とはいえ、お留守番の場合。

“おでかけ”イベントは、某艦これで言うところの遠征と似たようなものになります。

違いは——下手すると死ぬところでしょうか。

皆に全てを任せる事になるので——成果も無事も何もかもランダム……まあ、そこまで不安になることはありません。

成果はともかく、無事はゴリラと一緒になら——生存確率は八割は堅いですが、ガチで。そこに覚醒めぐねえも加えれば九十九割大丈夫大丈夫。

——スパーンツ！と寝室の扉を開け放ちます。

——とう！と布団にダイブ……あかんお腹打った痛いっ！（HP半減）

——うずくまりながら、ゆきちちゃんの布団にくるまりましょう（これを役得と言います）。

後は寝て夕方になるのを待ちます。

果報は寝て待て、これ至言。

いやあ……これは良いタイム短縮になったんじゃないでしょうか！（誇らしげ）

丸々半日……だから、リアルで30分くらい？かなり大きいんじゃないかと！……まあ、その代わり成果に期待は出来ませんが。

うーん、シヨタが戦力外じゃなけりやなあ……“外”には有用なのは結構ありますし。例を一つ挙げるなら、警官かれらの六連拳銃とか。人の形をしてれば何でも一発で殺せる公式テーマです。

……いつそ『ゆきちちゃん化』でもしてれば、気晴らしにと連れてつてくれるんですが……まっ、それ以上にメンドイのであれですけどね。

ささっ、お腹いっぱいなので眠気も十分。

すぐに画面が暗転します。

んー。
さてどうなるかな。

『こんっこんっこんっ！やーくんやーくん！』

……なんやねん、騒がしいなあ（巡ヶ丘クレマー）。
寝室には……誰もいない？

あつ、ドアの前。陽の光のシルエツト的にゆきちちゃんですね。

時間は……寝る前とさほど変わらない……？

ゆきちちゃんも行くはずですが……あつ、いつてきますのあいさつ？
新婚さんかな？

『あちや寝てた？ごめんね、やーくん。でも、ごはん食べたあとにすぐに寝たら牛さんになっちゃうよ？』

牛さんになっても私はかわいいから問題ありません（暴論）。

『そっかー』

納得するのか……（困惑）

『……………ねえ、やーくん』

はい？

気を付けていつてらっしやいねゆきちちゃん。

ゆきちちゃんはいかんせん好奇心が先走って危険な状況に合いやすくて、目を離すとすうぐ襲われたりしますからね。……『ゆきちちゃん

化』してれば、妄想めぐねえとかが諫めてくれるんですけど。

……他の皆？ゴリラがいるからなんとかなるよ（ある種の信頼）。

『やーくん……いつしよにお外行かない？』

——いやです……（小声）。

『——なんで？』

タイムの為……（ささやかな抵抗）。

『——お外はこわくないよ。あぶないのはみんな、くるみちゃんめぐねえがえいつてやつつけちゃうもん。たかえちゃんもいるし、りーさんもおいしいごはんを作って待っててくれるよ？』

……ゆっ、ゆきちゃんになんて言われようともタイムすら消えてしまえば私のRTAとしての意義が……！（苦渋）

『わたしだって一緒にいるよ。……一人だけじっとしてちゃだめだよ。みんなでがんばらなきゃ』

……なんか今回のゆきちゃん、やけに頭いい事ばっか言ってる……（偏見）。

でもまあ、率先して下がったのはちよつとマイナス印象ですからね。シヨタにデロ甘なゆきちゃんでもちよつと苦言してくるものもしょうがないでしょう。

ですが——タイムの為。

私はその為ならば、負け犬にもなりましょう。

くうーんくうーっん（私はかわいい）。

流石にゆきちゃんの好感度下がるでしょうが、やむを得ません。

ここはぎつくりと拒否を示します。

——こわいからいや。

『……そっか』

……ん？

声のトーンが想定と違いますね。失望するときの暗い感じじゃありません。

……ままええか。幼なじみだから減らないだけなのかも。

『——わかった！じゃあ、やーくんはそこにおいてね！わたしがうんと美味しいもの取って来るからね！』

ハンバーガーよろしくね。

『テリヤキワッパーなら任せてっ！』

いや、それバーガーキン………行っちゃいました。

………うーん？まあ、いいか。

さあさ、寝ましよう寝ましよう。

ゆきちゃんが状態の良いメガマックでも見つける事を願って……
！（打ちきり並感）

すう……すう……。

………。

………

『ねえ、なぎくん。起きてる?』

寝てます!!!! (クソデカ肯定)

いや、寝かせて? タイム短縮以前の話になっちゃうだけどー! なあんの為にお留守番選んだと思ってるんですかねえ!?

ていうか、リーさん? ゆきちゃんならともかくなんで今——

『入るわね』

うんともすんとも言っていないだよなあ……。

「ああ……やつぱり起きてた。ごめんなさい、眠たいわよね」

はいはい、リーさん。

それでどうして来たの? 眠いんだけど? (塩対応)

まあったく、どう、して……あれ?

——なんで、包丁持ってるの?

「皆行つたわ。言いくるめるの、ちよつと大変かなって思ったけど、なぎくんが残るって言うてくれたからスムーズだった。……やつぱりわからなくても通じ合ってるのかもね、私達」

おっ、おう……?

「そういえば、なぎくん——ゆきちゃんは?」

えっ。

さ、さつきい……すれ違いますでした……?

「……………。そうだったわね。ゆきちゃんもお外行くのよね?」

はっ、はあ……。

「……そう。そうーなら、私達は……ふふっ！なら丁度良いわ。話したい事があるの。私達にとって、とつても大切な事」

あれれー？おっかしいぞー？（死神並感）

今の状態でこのテキスト出るのはあ……—あれ、マズくね？

「これまで言おうか言うまいかずつと悩んでたわ。なぎくんは多感な年頃だし、拒絶されたらつて思うと悲しかったし。でも、こんな状況でしよう？貴方も心細いと思うから言おうと決めたわ。でも……でもね……？」

いやあ……流石にこれはあ……。

あのエンド？あのとつても理不尽なりーさんのバッドエンディング？

じよっ、条件満たしてる……満たして——ない！満たしてない！満たしてないったら!!（現実逃避）

「——皆は違うじゃない？私達だけが……なんて言われて、なぎくんが傷ついたらつて思うと躊躇っちゃつて。だから、ずっと……ずっと待ってたの」

正気度はまあ、それなりに低いな、うん。

好感度はあ……高いな。さっきのオムライスがある。

『ゆきちちゃん化』……あつ、やべえ。目の前でシヨタ倒れてたぞ。するぞこれ、運悪いとしてるぞこれ。

「やっと——二人きりになれたわね？」

あー……………うん。
ちよつと。

……………ちよつと気絶していいですかあ
!?!?!?!?!

—————

血で塗り潰されたのは平坦な日常。どうせ惜しくもないのにどこか恋しい、くだらない日々。

化け物になった同級生達が徘徊する学校。目まぐるしく進んでいく、絶望にしか変わらない現実。

——頭が痛かった。

ほんとは痛くないのかもしれない。でも痛かった。

自分でも何を思っているのかもわからない。ただ意識を押し潰すような現実には、痛みを感じているのはすぐにわかった。

どうしてこんな目に合わなきゃいけないのだろう。これでも嘘はあまり吐かず、誠実に心を掛けて過ごしていたのに。

そんな馬鹿を嗤うように。

家族を失った私から、今度は日常すら奪った。

なら——私に何が残るのだろうか？

その答えは返らない。

ただ、呻きと意識だけが削られていく日々が流れていく。

ぐちゃぐちゃと揺れ動く思考を何とか取り繕いながら——私達は生き残る為に行動し始めた。

皆が一緒で良かった。

もし、私一人だけだったらどうなっていたかなんか考えなくても分

かる。

皆、いい人達だ。

くるみは——私の人生の中で一番のお友達。こんな状況でも私達を守る為に前を歩いてくれる勇気があって優しい子。

……わかつてればこんな事になる前からお友達になつてれば、なんて思うくらい。

佐倉先生……めぐねえは優しげでぼやぼやしたちよつと頼りない先生だと思つてたけど、とんでもない。彼女は大人として私達を守ろうとしてくれている。……震える身体を押さえ付けて。

もう「先生」なんて肩書きは肩書きですらないのに。それでも、私達を助けてくれる——立派な先生だ。

たかえちゃんは元々友達が沢山いたからか、私達にすぐに馴染んだし——なぎくんに助けられる前はひどい目に合ったせいかな、やけに肝が座つてて。所々で支えてくれている。

あと。

ゆきちゃんと——なぎくん。

正直、私はこの二人に対して複雑な気持ちを抱いていた。

だって、二人だけだったのだ——失っていないのは。

くるみは、恋していた先輩を失った。

めぐねえは、安穩とした日常を失った。

たかえちゃんは、人としての尊厳を失った。

なら、あの二人は？

手を繋いで、お互い触れ合つて、仲良く連れ添つて。

彼が苦しそうだと彼女が寄り添つて。彼女が悲しそうだと彼が笑わせて。

確かに、二人も……友達を家族を日常を失った。でも——互いを思い合つてる二人は残っている。

とても——羨ましい関係だった。

でも、嫌いという訳じゃない。二人とも良い子だし、居るだけで励

まされた。

あいつらを処理した氷のように冷たい手を溶かした——あの焼き芋の暖かさは、何があつても忘れる事はないだろう。

だからか、いつしか二人は私達の大切なもの変わっていった。もう戻つてこない日常の形。友達であり、恋人であり——家族である形。

それが私達の希望だった。

もう、それは粉々になつてしまつたけれど。

『家族はなれるし、なるものなんだよ!』

ああ、だからかな。

『家族はなれるし、なるものなん■よ!』

私は大切な事を思い出した。

もう誰も覚えていない。知らない——私となぎくん……二人だけの秘密。

『家族はなれ■し、なるもの■ん■よ!』

ごめんね。ごめんね。

どうしてこんな大切な事を忘れていたんだろう。なぎくん、もう大丈夫よ。泣かないで。

『家族は■■■し、なるもの■ん■!』

ゆきちちゃんの代わりに。

『家族は■■■■、なるもの■■■■！』

今度は絶対に——お姉ちゃんが、貴女を守るから。

—————

こんな事になってから聞く事は無くなった聞き慣れたエンジン音。駐車場から校庭へと躍り出た赤のお洒落な軽自動車。

私は車に疎いけど——いかにもめぐねらしい車だと思った。

エンジン音に誘われて、校庭のやつらがゆるりと車に近づくけど、追い付く事はなく。

めぐねえとくるみ、たかえちゃんを乗せた車は校門を出て——“外”へと出た。

私達が知っていて、そして知らない街並みへと。

「……………」

私は、それを二階の教室から眺めていた。

三階のバリケードの“外”。階段を降りた二階すぐの教室。その窓枠から校庭へと垂らされた火災避難用の梯子の先を撫でる。

“外”に出るにしても、二階はともかく一階は予想以上にやつらが多かつた。

だから、ここから三人は降りた。

ふと先ほどもでの会話が耳の奥から響いてきた。

『…………やなぎに会わなくていいのか、めぐねえ』

『ええ。ちよっと、急ぎ過ぎたみたいです。…………やっぱり怖いわよね』

『まあ、露骨に避けてた感じだったな。要求だけはきちんとしたけど』

めぐねえは言った——“外”に行こうと。余裕がある内に行動しよう。

それは嘘じゃない。

でも、それを建前にした本当の理由に気づかないほど私達は鈍くはない。

建前なんて置かずに、直接言えばいいなんて益体の無い事を考え付いたりもするが——私がめぐねえの立場になっても濁した言葉で誘う事しかできなかつたろう。

——それが彼を傷つける可能性がある限り、一步踏み出す事は決して出来ない。

まあ、だからこそ。

それを私は利用できた訳なのだけど

『行く予定はショッピングモール……だっけか』

『はい。そこなら食料もそれ以外の物も沢山あるでしょうから』

『柳のご所望の物はどうする？』

『そうですね……駅はショッピングモールの通り道ですし、寄るだけ寄りましょう。危なければ避けるイメージで』

『りょーかい。酒は……こどもビールでいいか』

『逆にウケそうだな』

三人は“外”に行くにしては穏やかな会話をしていた。

奴らと対峙してきた自信からか。それとも帰るべき家があるからか——守らなくちゃいけない存在がいるからか。

『んじゃ、頼んだりーさん。帰りもここ使うから、連中が入らないようにドアは閉めといてくれ』

『美味しいご飯、期待してるよ。こっちも期待しててくれ』

『夕方には戻りますが、奴らが多そうなら夜を待ってから帰ります。やなぎくんを、見ていてね——ゆうりさん』

先ほどまでの三人の会話。頼まれた事。

私はそれをぼんやりと反芻して——

「……………よいしょつと」

——垂らされた梯子を回収して教室に放り捨てた。

「……………ふふっ」

溢れた笑みは、呻きに覆い隠される。

私がいる事に気づいたやつらが緩慢に寄ってきてる。

が——そんな事はどうでもいい。

「さあつて。やなぎくんに美味しいご飯を作つてあげなきゃ」

バリケードへ向かい、屈んで通つて——開けた穴を念入りに塞ぐ。

これでいい。

家の廊下を進む。まずはお料理の下ごしらえをしないと。

「ふんふん、ふーん……………」

ああ、やつとだ。

やつと二人きりになれた。

私の家族——たった一人だけの、私の妹おとうとと。

私達はもう二人だけ。

奴らのせいじゃない。ずっと前からそうだ。お父さんもお母さんも、ずっと前に亡くなっている。

冴えないサラリーマンだったお父さん。

いつも優しいけれど、悪い事は叱ってくれたお母さん。

そして——小さな小さな、私の弟。

慎重しくてよくあるような家族だった、幸せだった。

事故が全て奪っていったけれど。

ああ、今でも思い出せてしまう。

買い物に出掛けると言って、小さな壺に収まって帰ってきた二人。

その悲しみが消える前に、私の目の前で車に轢かれて、血塗れになつたあの子……私は、なにも、できなく、て……？……？……？

あら？じゃあ——どうしてなぎくんは、

——『なにもおかしくない』——

ふと振り向けば、窓に薄く私が写し出されている。

眺めていると——小さく笑みを浮かべた。

そうだ。なにもおかしくない。

私はあの時、何とかあの子を——なぎくんを助けられた。病院に連れてつてお医者さんに治して貰った。

うん、そうだ——そうだった。久しぶりに思い出したから、記憶が混同しちやつた。後でぎゅーってなぎくんを抱き締めてあげなきや。

リビングに入る。邪魔なものは多いけど、片付けは後。

今は料理が優先。

私はあらかじめ準備しておいた物を使って——カレーを作り始める。あの子が良く食べたいとせがんでいたコーンカレー。

甘口で挽き肉は多め。お野菜は細かく、特に人参は念入りに……少しでも人参が目につくと嫌だ嫌だとグズっていたのが懐かしい。

……お父さんは私がカレーを上手く作れる事を誉めてくれたっけ？お母さんは……ちよつと嫉妬して、悔しそうにしてた気もする。美味しい美味しいと笑顔で食べてくれるあの子の笑顔も忘れられない。

こんな事になってもこうして家族と過ごせるなんて、私は幸せだわ。

……………。

……………いや、待つて。じゃあ、なんでなぎくんの名字は私と同じ若狭じゃないの？そもそも同級生だったし、それにもう一人私の大切な、

——『きにすることじゃない』——

ふと、具材を刻んでいた包丁が目に入る。

手首を返す。てらりとした刀身に、歪んだ私の口許が反射していた。

……………そうよ。そうだった。

なぎくんはお父さんの連れ子だった。お父さんとお母さんは再婚して、私はお母さんの連れ子。

でも、お母さんが自分と血が繋がった私以外育てたくないって言うて……お父さんはお母さんの我が儘を聞きちゃって。

お父さんは国の偉い人だったから、小さななぎくんの戸籍を偽装したんだわ。その時、年齢も誤魔化した。

だから、なぎくんは他の人より小さいのよ——本当は年下の私の弟だから。

これよ。これだったはず。

……やっぱり私も疲れてるのね。こんな大事な事忘れるなんてあり得ない。お姉ちゃん失格ね。

「ふう……………」

——少し落ち着こう。家族二人きりになって、テンションがあがっちゃったのがいけないんだ。

思い出に浸るのもいいけれど、これからはなぎくんと家族として新しい思い出を作らなきゃ。

——古い思い出を覆い尽くすくらいに。

「……そろそろ一回、なぎくんとお話ししようかしら」

——小さい頃の話だから。

なぎくんは私と家族である事はきつと覚えていないだろう。でも、お話すれば。

何度も何度も話そう。思い出を。私しか知らない、覚えていない思い出を。

そうすれば、きつと。なぎくんも——思い出せるはず。

カレーが良い具合に仕上がるには時間が掛かるから、その間にすれば、終わる頃には出来上がってるはずだ。

「……いないわ」

リビング^部、廊下、バスルーム^{シャワー}、トイレ、お庭^{屋上}。家の中を少し回ったけどなぎくんは居ない。……流石にお姉ちゃんに黙って“外”に出るのはあり得ないし……。

「……むむっ」

そこでふと、寝室でぼそぼそと声が聞こえた。ああ、おひるねしてたのね。

耳を済ますと誰かと話しているようにも聞こえる。

「……ゆきちちゃん……」

私となぎくんが親の勝手な都合で離ればなれになっているときに

——私の次に出会った、なぎくんの幼馴染。

今でも、なぎくんの心にいるほどに、大切な子。

ああ、苦しいのね。悲しいのね。

でも、もう大丈夫。家の中には家族だけ。もう煩わしいものも邪魔をするものも居なくなつた。

それに。それにだ。

とても重要な事——幼馴染より、姉の方が上に決まつてる。

声掛けをして、部屋に入る。

……ちよつと不機嫌そう。ノックをしなかったからかな。年頃だし、そこら辺は気にしちゃうのかも、ふふつ。

そんななぎくんを喜ばせる為に、ゆつくりとゆつくりと言葉を紡ぐ。

少し勿体ぶつちやつたけど、その方が嬉しいのも一塩よね？

ああ、震えるなぎくんの大きな瞳には——笑顔の私が映っている。私は幸せだ。

だって——これからずっと家族と一緒にいられるんだから。

ねえ、なぎくん？

もう我慢しなくていいのよ？

なぎくんもきつと——もう気づいてくれているはず。

さあ

また

もう一度

ずっと

私をお姉ちゃんって呼んで？

—————

……………。

「……………」

……………お——

「……………っ！おっ！——」

——お断りだよばあああか!!!はいつ、横すり抜け脱出!!早く同じ空間から離れないと!

「まあ……………もう、なぎくん反抗期?だめよ、お姉ちゃんに向かってそんな事言っちゃあ」

まずいまずいまずい!!

よりにもよってえ!よりにもよってりーさんのバッドエンドの中で一番最悪なの引いた……………!

——『偽物の家族』エンド!

「ふふっ、鬼ごっこ?そういえば昔やってたわね。いいわ。私が鬼役

ね?——」

くそう!くそう!

えっ、イケる?……無理くね?特にフラグ建ても、ああもう!

これじゃあタイム短縮案も今までやってきた事も全部ぱあ!じゃ
ねえか畜生めっ!

鬼!悪魔!デカ乳!

「絶対に逃がさないわよ。私の私の、大切な弟」

ああ……………(諸行無常)。

九日目 “THE SHINING” of りー
さん — PART 2 —

——はいッ！（いつもの気だるげな前口上は）キャンセルだッ！

「ふふっ……鬼ごっこだもの。ちゃあんと十数えてから始めましょう？」

まずは四の五の言わずに、すぐに近場の教室に逃げ込みます！
とにかく視界から外れる事が肝要です！

「いつうち。にいくい。さあくん………」

……りーさんにしては、妙に明るい声なのが背筋にゾクゾクきます
ね……！

教室の中は散乱した机椅子その他諸々に溢れています——適当な
ところの陰に隠れて、暫く様子を窺いましょう。

……出入り口にバリケードでも設置した方がいいと思うかもしれ
ませんが、倫理観終わりーさんに強行突破されてしまった際は、出口
が無いという事。

秒でガメオベラです。ここは基本バレるという事を踏まえ、すぐに
脱出できるようにします。

……慎重に……慎重に。

「よおうん。ごおうお。……ふふ。ねえ、なぎくん。こうしてると、よ
く近所の公園で二人きり遊んだのを思い出すわね？鬼ごっことかか
くれんぼとか……でも、二人きりだとすぐ終わっちゃってつまんない
から、結局は一緒にお手々繋いでのんびりしたり……なぎくん。覚え

てる？覚えてるわよね。覚えてない訳ないわ」

.....知らないですねぇ！知らない知らない.....

「あら？お返事が聞こえないわ？もしかして覚えてない？.....
.....ああ、必死に思い出そうとしてくれるの？ふふふ、良い子。
ほんとに良い子。大丈夫よなきくん。思い出せないのは小さかった
頃だからしょうがないわ。お姉ちゃん怒らないから。.....これから、
これからまた新しく思い出を作りましょう？だって、私達——家族だ
もの。ずっと。ずっと一緒に。だから安心して？」

.....その怪文書のどこに安心する要素が!?

「ふふつ、ふふふ。...ろおおく。なあくな。.....」

(こわい)

えー、はい。

この絶望的な状況についてさくつと説明しましょうか。

今、現状は——バッドエンド一歩手前です。

それも特に狂っていて、そして理不尽なリーさんのエンディングの
一つ——『偽物の家族』エンドです。

これは『ゆきちちゃん化』してしまったりーさんが、主人公と自分が
家族であると思いつき込み、それを主人公に強要するといった内容で。

恋仲でなければ、姉弟か兄妹か姉妹だと認識し、リーさんの本当の
妹——るーちゃんと同一視し始めるのです。

これ自体は、このゲームでは良くある病み病みエンドなのですが——
達成条件が超絶鬼でありまして。

リアル時間二分。このりーさんと同じ空間で二人きりである——と、
即エンディングに移行します。

……まあ、プレイに自信ニキなら「いや、なら同じ空間にいなきやいいじゃんww逃げれば余裕wwぶうくんつww」とか言うかもしれません。

しかし、もうこのリーさんはただのリーさんではありません。

倫理観終わリーさん。ふぁみりーさん。

そして——空気強制汚染機RE||SANなのです！

先ほどのような現実と妄想が混じり合った妄言は、締まりの悪い穴（意味浅）のように常に垂れ流されています。

そして、操作キャラがそれを聞いていると——段々「……アレ？そういうば確かにリーさんはぼくのおねえちゃんなんじゃ……？（錯乱）」状態になり、こちらの操作が鈍くなったり、受け付けなくなる。スタン状態”になります。

この状態は、リーさんの妄想を聞いている時間と比例して、効果時間が増加していきます。つまり時間が経てば経つほど詰みやすくなります。

そうして動かなくなつた状態で、リーさんが忍び寄つてまた妄言を垂れ流し、そのせいでまた動けなくなり……の無限ループでガメオベラ直行が、ふぁみりーさんの基本戦術です。

……この才能溢れる私が、数々の難事を潜り抜けた華麗なる「説得」も『私はお姉ちゃんである』という謎に確固とした信念によつて効かず、そういうしている内に、洗脳に嵌まり……と。

滅亡を止められぬ平家のように、ぽかんと諸行無常の祇園精舎の鐘の音ぐわんぐわん（教養の開示）。

極論、続行するなら「排除」が選択肢に挙がります。

そもそも、あのリーさんはリーさん最強装備の包丁を持っている上、倫理観崩壊しているので遠慮も呵責もありません。

こちらが好感度高い状態の相手への攻撃という苦痛に対して精神対抗フェイズしている間に——

身体ズバズバ足の健スパーツ↓これでもう鬼ごっこはおしまいね？↓それでね。お姉ちゃん達はね（以下エンドレス洗脳）↓あつそつ

かあ（納得）。ワイらは姉弟やったんや！↓ジ・エンドってね。
——です。

もうね。どうしろと。

「はあくち。きゅくう——」

正直言います。

——もうこれ再走案件だろ。

いやいや。いやいやいやいや。

これももう無理だつてばさ。だつてアレだぞ。

スキルでの防御とか「説得」無効で、尚且つ精神貫通させて洗脳してくるお姉ちゃんビームの使い手だぞ？さらには同じ空間にいるだけで即死付与とかもう無理い！

流石の私でもこれはお手上げです。まずこれを突破する未来が見えない。

だつて、唯一と言つていい回避方法が「世界が狂う前の約束を果たす」ですよ？いや、そんなのあるわけないじゃないですかと。

プレイ時間で言えば、序盤15分くらいですよ？その間に、んな事不可能ですつてばさ。

スイートポテト「やあ、待たせたね諸君」

ぐう……このRTA……結構良かったと思うんですが……。

ぐだぐだのガバガバでしたが、奇跡的にタイムは良かったですし。

これをサイトに乗せればウケる上にバズってウエイイWウエイイWWと思つていたのですが………やっぱり思い通りには行かないのがこのゲームですね。

スイートポテト「序盤から速攻で影薄くなっちゃって——」

まあ、教訓は得ました。

これをバネに今度はより洗練したRTAをやろうと思います。

これまでのプレイ映像は戒めと後続への期待と私の承認欲求の為にサイトにあげます。

スイートポテト「——存在すら忘れられていた遅れた救世主のぼくだよ」

それでは皆さん。

また次回。今度は完璧なRTA動画でお会、い……？

スイートポテト「ぼくだよ」

ん？

スイートポテト「ぼくだよ」

……………。

……………。

……………。

そういえば、アウトブレイク前にプランターの作物を聞いた際に、スイートポテトの話をリーさんにしましたよね。

それで確か、良ければご馳走するって。リーさんは期待してるって……………。

これってえ……約束に該当しません？

スイートポテト「端的に換言すれば、該当するよ」

ぞつ、続行！これは続行しますッ！

スイートポテト！スイートポテトおおおお!!（歓喜）

そういえば居たよお前が！いや、居ましたよねお前さまが！

これはひよつとすればひよつとするかもしれませんよ？

……正直、これはこれで突破確率は極低ですが、それでも——やる価値はあるつてものです！

このふぁみりーさんを正気に変えさせると、凶行に対する負い目か

ら滅多にこちらの言う事を拒まない故、何かと進んでこちらのフロアをしてくれるような有 a n d 能な恵体に早変わり！

これはリカバーの価値！時間は結構ロスりますが、後の安定にあって損はありません！RTAの危機にタイムなんて言ってる場合ではぬあい！

イクゾー！（てっててててん！）（カーン）

もうとつくにガバのガバです！

これで失敗してもいいという腹積もりで、やれるとこまで行きましょうか！

では、約束——『スイートポテトを御馳走する』をクリアする為に！

「——じゅくう！ふふつ……さあ。私の愛しい弟くんはどこかしらあ？」

さあ！

では今すぐ適当なりユツクを手に入れて、職員室で要らない紙を大量に詰め込んでから、屋上に行つてサツマイモを掘つてじっくりと焼いておいしい焼きいもにした上で、かれらを適当に狩つてスキルポイント獲得して《料理》スキルを覚え、部室のキッチンでスイートポテトに調理し、見つければ遠慮無く攻撃してくるリーさんに食べさせましょう！！

ヨシっ！

出来る訳ねえだろクソツタレがアああああ！！！！（豹変）

「——みいっつけたあ」

——ひい!?!はやつ！

恋人エンドを迎えても淑女の微笑みくらいしか笑顔を見せない

りーさんが、ゆきちちゃん並みの満面の笑みでにじり寄ってきた！
正直メツチャ好みですよ包丁さえ持ってなければね！

「…………ふふ。どうしたの？そんなにびっくりしてえ…………あつ。もしかしてそこが良い隠れ場所だった？…………ごめんね？お姉ちゃん——大好きなぎくんの事ならどこにしようとも見つけられる自信があるの。だから、安心して捕まって欲しいな…………」

さつ…………！（顔が青ざめる音）

散乱としている教室から、適当にリュックを引っ掴んで脱出します

！

とにかくっ！とにかく、一つ一つトピックを消費していくしかありません！成り行き任せで突っ走ります!!

「ぎやつ…………もう危ないわ、なぎくん」

シヨタの足に向かって的確に包丁振ってきたお前の方がアブナイわっ！この天才の私でなければ、足の腿がクパアってなっただからな!?

なんで大好きとか言ってる側から殺意マシマシの攻撃してくんの!?…………これが殺し愛ってかやかましいわ死ね!!

廊下に出ました。

シヨタは頭の傷のせいで《負傷》状態なので、最高速度が出せず、りーさんに走られると秒で捕まります。

ですが、さつきの通り。

りーさんにとってはこれは《遊び》なので、一生懸命に遊ぶ弟を微笑ましく思いながらニコニコと歩いてくるので何とか逃げるといいう体を保つ事が出来るのです！（ひえこわ）

手にいれたリュックの中身は今の内に床にばら蒔いて、まきびしにしますか。

数秒も足止め出来ませんが——ほんの一秒でも距離を離します！
間合いに入れば刃物と洗脳光線が飛んできます！

向かうは、次の目的の職員室！

大量の紙ですが……今回は赤点用紙を狙うのではなく、コピー機を狙います。アレを調べれば適当な紙がたくさん入手出来ますからね。

「まあまあ、なぎくん？おうちの廊下を散らかしちやダメでしょう？
まったくもう、これが終わったらきちんとお片付けましょうね？……
そういうええあ……昔は良くこうして怒ってたわよね？そうでしょう？ふふっ、おつきくなつても変わらないのね。かわいい……」

あー！あー！きこえない！

はい、目に見えて走るスピードが遅くなったのは気のせいー！私の指が折れてるだけであつて、疲労と洗脳が同時にシヨタに響いてる訳ではありませんー！（自己暗示）

職員室は今日もはっちゃかめっちゃかで……す？

アレ？またなんか配置変わってますん？

なんで？いつから職員室は不思議なダンジョンになったの？

……まあ、コピー機の配置は変わってないから今はパス！

コピー機のカバーを外して、設置されている紙をリュックにありつたけ詰め込みます！グシャグシャでも何でもとにかくみっちり！

急がないとリーさんがやって……やって……？

………？

……来ないですね。

ぬるっと職員室に入って、にやあ……と昔話攻撃（妄想を根拠とし

?えー?どゆことおおお——っつてっつてっつて!どうでもいい事考え
てる場合じゃないのよお!

りーさんがあ!包丁をお!振りかぶってるう!

「——ていつ」

うわ!かすった!

シヨタの腕に包丁かすった!切れた制服の隙間から血が!血があ
!

マジでキ印入ってるぞあの女ア!?

「ああ……なぎくん……痛い?痛いわよね?可哀想に……ほら、お姉
ちゃんの側においで。手当てるわ。いたいのいたいのとんで
けーって」

やったお前の台詞じゃなくね!?

雑なマッチポンプやめてくださるっ!?

……シヨタもシヨタでりーさんの側に行くって選択肢出してくん
な、逃げるの一択決まってるだろ屋上行くぞごらあ!!

「ああ、駄目よ。なぎくん早く……早く手当て……怪我、しっ死んじや
う……なぎくん……るーちや……なぎくんなぎくんなぎくん……!!」

もうほんとこのりーさん怖い嫌い!

倫理観帰ってきてえ!

りーさんの悲痛な声に時々立ち止まってしまいましたが一十中
八九!間違いなく!完璧に!

気のせいですがなにか!?(強硬)

なんとか屋上に着きました。扉を閉め、初日でやったロッカーバリ
ケードを作った後——急いでいもを掘り出します。もうこの際手で

構いません。身体中泥だらけになっても手にいれます。

わっせわっせ……くっ、傷口に土が擦れて追加ダメが地味にきつ
……！

——ててててんっ（巡ヶ丘サツマイモ（品種魔改良）×1を入手
しました）

ヨシ！

今度はリュックを開けて紙を……ああもう面倒です！リュックごと
と燃やします！これで少しは時短になるはず……！

サツマイモは紙に包んで、その中に！

後はこれで——ひい!?

割れたドアの窓から笑顔でこっち見てる人がいるう！

「——なあぎくん。あけて？」ガチャガチャガチャガチャガチャガ
チャ

——いやです……。

「なんで？」ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

——こわいもん……。

「お姉ちゃんは怖くないわ？寧ろ、なあぎくんが世界で一番安らげる所
なのよ？」ガチャガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

——おねっ……！りーさんはお姉ちゃんじゃない！

「まあ、ひどい。でも、お姉ちゃんなの。ほら、今そつちに行くから一
緒にお話ししましょう？」ガチャガチャガチャガチャガチャガチャ

お話通じなあい。

てか、意味も無くドアノブ回して精神ダメージ与えてくんの止めて
くんない!?

こほんっ。

——では、耐久戦です。

焼きいもが出来上がるまではリアル時間で一分ほど。

つまり、この屋上で——この空間で、タイムアップまでの半分を耐えきった後、さらに半分が過ぎるまでに焼きいもを回収。屋上を脱出します。

わあ、無理ゲー。

………やったるぞこの野郎お！

取り敢えず距離を取ります。

流石の倫理観終わりーさんでも、バリケードごと扉を開けるのはほんのちよびつとだけ時間が掛かるので。少しでも時間を稼ぐ要因は確保しておきましょう。

その数秒の間にい………。

みなさまのためにく。

——ちよつと弱音吐いていいですか？

……《料理》スキル……どーしよ……。

いや、スキルポイントを獲得の為に『かれら』倒すの無理くね……？シヨタは負傷中で尚且つ武器も無いしい……。

あつ、つまりこれはめぐねえのせいだなっ！おのれめぐねえ……！

(隙逆恨)

「なぎくん、なぎくん」

あつと、キの字りーさんがエントリー。

ここでやるのは、古き良き追跡者を撒く逃走術——障害物グルグルです！青鬼とかで良くやるやつです！

これを花壇でやりま……あつ！乗り越えてくんの反則だろお前！ゲームの追跡者が一番やっちゃいけない事平気でやらないですよ！うわっ、一瞬で破綻したあ！

ぐつ、また包丁がかすりしました。

……なんとかギリギリ直撃は回避してませんが、かするだけでもクソ雑魚シヨタには致命的です。じわじわと体力が削られます。

体力が減るとその分動くスピードも落ちますので、さらにそこを狙われ、また体力が削られます。

うう……ジリ貧……！

「なあぎくん」

——うひい!?

そんな思いやりの籠った言葉と一緒に包丁振り下ろすのマジ止めて精神が揺れるの！主に私自身が！

てか、直撃コースだったらふくらはぎパクって裂けてたと思うんですが!?!姉弟として幸せになる前に死会わせでナムーでお仏壇の長谷川——！（混乱）

「なあぎくん——止まって?」

はッ！（嘲笑）止まれと言って止まるやつがどこに——って、止まるなシヨタマジで止める奴がいるかあ!?!

ぐおっおっおっ。

ゆっくり近寄ってくるリーさんマジキレイ………目えガン開きで包丁持ってそこから血が滴ってなければね！

「なあぎくん。私達は家族なの。一緒にいるべきなの。だからもう鬼ごっこはやめましょう?お姉ちゃん、大好きなあぎくんがお遊びでも離れていくのを見るととても辛いの」

（家族じゃ）ないです。

「……………ん。お姉ちゃんは悲しい。イヤイヤ期なのは分かるけど

……どうしたら素直になってくれるのかしら？」

ええ……（ドン引き）。

さて——おいもはあ、まだちよつと掛かりますか。

早くとりたいたいです、ベストなタイミングじゃないと「焼きいも」じゃなくて「生焼きいも」になってしまつて、スイートポテトになりませんからね。

その前に、シヨタの命の蠟燭が焼き落ちそうですけどねえ!?

「——あつ、そうだ！お姉ちゃん、良いこと思い付いちやつた」

ろくな事じゃないのだけはわか、うひゃああああ!?

なつ、舐めつ！いきなりシヨタの傷口舐めた！流石にちよつと今はゾクつとしましたちよつと興奮する（性癖の開示）。

てえ……えつ——なんでいきなり、包丁で自分の指でサクツつて刺したんですの？

あつ、自分で指ペロしてる……えつ、イメージビデオみたいな事してどうしたの……？現役OK鮮血指ペロ動画なの……？

「私達は姉弟。血が繋がつてるの。だから、ほら——お互いの血を舐め合つたら、きつとなぎくんは、心の底から素直になれると思うの——私達は姉弟だつて!!本能で、身体で、心で。……ね？お姉ちゃん賢いっ！」

??????????????
.....?
????

Hey, Siri.

りーさんは何を言ってるの？

——すみません。よくわかりません——

だよなあ？

こればかりはSiriを責められん。

えっ、どゆこと？

アレか？血で感じろっていう事？いつからこのゲームはBio d b o r n e になったんです？

あつ、もしかして血を飲み合えば混じって血が繋がる↓つまり家族

！

そういう理論……？

うわキツ好き。

「さあ……なきくん……」

さあ……じゃないんだが。

てか、血の滴るりーさんの指は結構セクシー……エロい……！つ
てってそうじゃないそうじゃない。

につ、逃げます！このシヨタはノーマルなんだよお！（私は一向に
構わんツ）

おいもっ！おいもは……まだ掛かる……！

ええつと。ええつと。なんか、もうちよいなんか無いのか……！

「逃げないで」

ぐっ……！ぐぐっ……！

何とか回避出来てはいますが、それでも小さな傷は増える一方です
ね。

てか、この傷の量じゃあ遅かれ早かれ処置せんとこのクソ雑魚シヨ
タなら瀕死やぞええんか！お姉ちゃん!?……………じゃない！りーさ
ん!?

「受け入れて？」

おいもお！（回避）

……………ヨシッ！もういいな！

では、さっさと入手します！あっちちっち……………！（火傷）

手のひら全体が大火傷ですが、気にしません！その前に死とRTAの危機なんだよお！

三階に戻り、バリケードまで走りま——とお!?あかん！転んだ！くそつ、流石に病弱怪我人シヨタには辛かったか！

傷でのダメーじ蓄積もありますし、仕方ありませんが——早く起きないとお姉ちゃんがくるう！

ボタン連打で起こします！

——諦めんなよお前！どうしてそこで諦めんだよそこでえ！（SY UZOU式ボタン連打術）

くっ！（疲労困憊）

流石にキツイですね…………。このままだと普通に逃げ回っても捕まるビジョンが見える見える……………。（戦慄）

なんとかか一つ、大きく時間を稼げるイベントでも起こせれば…………!!

「……………なぎくん。本当にそろそろお遊びはおしまいにしましょう？遊んでる時にお怪我したでしょう？早めに手当てしなきゃ、いたいいたいななのよ？」

……………怪我。血。——そうです！

私に良い考えがあるっ！

ここは強引にバリケードに向かいます！

いつそ捕まる一歩手前でもいいから、強引に！

「あら。なぎくんダメよ。そっちはお外よ。危ないわ」

今のお姉ちゃんに比べたら『かれら』の方がまだ可愛いですよーだっ！

バリケードに着きました！バリケードはあ……ああ、やっぱり隙間が塞がれてる。きたない流石お姉ちゃんきたない。

では、後は——待ちの一手です。

「うふふつ……もう鬼ごっこはおしまいね？」

シヨタも限界なのか、バリケードにもたれ掛かって座り込んでしまいました。ううん………フラインプレイ！

バリケードに血が擦れて、良い感じに匂いが広がるでしょう！

「さあ……お部屋に戻りましょう？そこでゆっくり過ごしましょうね？」

来い……来い来い来おい！

二分以内！二分以内来て……来て下さい！新鮮な良い匂いがする
ダルルオ!?

「お姉ちゃんがぎゅーってしてあげる。よしよしていっぱい慰めてあげる——もう苦しむ必要なんてない。泣く必要なんてない。必死に取り繕って誤魔化す必要はないの。お姉ちゃんに全部委ねて……？そうすれば守ってあげる。どんなものからも——絶対。だって、私はなぎくんのお姉ちゃんだもの」

……………(白目)。

どっ、どうして来ないの!?!いつもは「(・▽・)ノ」とか「(♪) (▽) (人) (▽) (♪)とか」「(?!+?)」とかみたいな感じで、呼んでもないのに湧いてくるくせに！

こういう時に限って来る気配ないとかほんと性格悪いよ君たち!?!

「ふっふっ、さあ……なきくん。おいで……っ。」

うへわあ！

プレイ画面もドンドン暗くなって、お姉ちゃんの恍惚とした笑みが迫ってくるう！怖いけどエロい、エロいけど怖いお姉ちゃんがあ!?!
夢に出てきそう（率直）。

「これから——ずっと、お姉ちゃんが一緒よ。絶対に離さない」

あっ（過呼吸）

あっ……（酸欠）

あっ………（窒息）

『……ア……イア……』

——キタアアアアア！（蘇生）

「なっ………！」

おし！蕩けスマイルが離れた。

そうでしょうそうでしょう！なんたって——シヨタの血に引き寄せられて、『かれら』がやってきましたからねえ！

『…………ア…………アア…………！』

おおつ、バリケードの隙間から腕が——痛つ、いたた…………！
シヨタの肩が引つ張られてます。バリケードで口が届かないから、
獲物を引き寄せようとしてるようですねえ。

……………。

エンディングには…………移行、しない！

…………という事は！

「…………つ、汚い手で私の弟に触れないで…………ツツ!!」

よし！回避！はい、緊急回避イ！

エンディング条件は二人きりだもんなあ…………？

シヨタ、お姉ちゃん、『かれら』の一体——これで三人だから無効
だつて、はつきりわかんかね。

「——このツ！」

つとと。

お姉ちゃんの攻撃で『かれら』の手が離れました。…………そのままや
たら半狂乱で隙間から刺し続けてますね、こわつ。

…………キレル十代や…………現にシヨタ斬ってるしな、つてやかましい
わ。

気が逸れている間に、この場を離れましょう。

これならばらくの間、『かれら』に釘付け。この間に、部室のキッ
チンに向かいますよう。

部室に着きました。

扉を閉め、ついでに鍵を掛けてしましましょう。

キツチンでは、お姉ちゃんが作った美味しそうなカレーがコトコト

しています。んまそおお!! (グルメスパイザー)。

……………クリアしていない諸々は一先ず置いて。

——『スイートポテト』の材料を用意しましょう。

ゲーム内で必要なのは、焼きいも・砂糖。後はコンロと鍋類です。
ええつとお……………ああ、ありますあります。

でえはあ……………スキル。

どうでしょうか。いや、ここまで至ってはもうどうにもできない
んですけどもね。

……………無くても出来るかなあ。

もしかしたらWIKIがスキル無いと出来ないって思ってるだけで、
ほんとはできるかもしれないし。さっきの「——ばあ!!」で信用
ならないってのは確定してますからね。

ようし……………では——調理、開始!

—————

- ・まずは焼きいもを潰します。
- ・砂糖をたくさん入れて混ぜ混ぜします。
- ・それをフライパンで油も引かずに焼きます。
- ・できた! (迫真)

—————

……………。

……………。

これただのさつまいもの素焼き (砂糖味) じゃねえか!!!

えつ、えつ、えつ。

それも焦げが付きまくって見映え最悪。ただ潰して丸めて焼いた
だけじゃん。えつ、スイートポテト? スイーツ (笑) ポテトの間違い
では?

「——ふう。あつ、いたあ」

いなあい（最後の抵抗）。

蹴破ったドアを踏み潰しながらやってくるお姉ちゃんが逞しいが過ぎる……！

「ふふっ、お腹がすい……？あぁ、もしかしてお姉ちゃんの為にお料理してくれたの？嬉しいわ……でも。火は危ない。危ないのよ？これからはお姉ちゃんと一緒にやりましょうね？」

これだけ聞くとまるでお姉ちゃんみたいだあ。

でも全身血まみれで包丁持って言われるとアレですね。貫禄というか………殺人鬼感っていうか……（畏怖）。

びっ、ビビってる場合ではありません。

もうやるしか……ゴー！

G O I S G O D……つまり、行動する事とは神の一手……！
（こじつけ）

——こっ、これ！

「……うなあに？お姉ちゃ、ん………——それは」

おっ、この反応は——真剣ゼミこうりやくどうがで見た奴だ！

押し通れエ!!（誉れ並感）

——これ、スイートポテト！あの日約束したでしょ!?!お姉ちゃん！

それはスイートポテトそれはスイートポテトそれはスイートポテトさつまいもの素焼き（砂糖味）ではない違うあり得ない断じて違う

——敵を騙すにはまず味方から！

でも、見た目自体はほんとにこのゲームの『スイートポテト』なんだ——焦げまみれで砂糖がそのまんまの、そのまんまサツママツシユポテトなだけどき。

スイートポテト……これはスイートポテトなんですよお姉ちゃん……!!

……てか、シヨタもうお姉ちゃんって言ってる!?!これも洗脳されてんじゃん!失敗です!?

「……………」

……いつ、いやこれはあ……もう一押し!

——お姉ちゃんは家族じゃないっ!でも、でも……大切な友達なんだよ!

どうだ。良い感じだろ!

月並みだからこそ刺さるものがあると信じてる!

通れ……通れ……!

通ってくれえ……!!

「——あっ」

おっ?

「えっ?あれ、なにが……っ?……どうして血……ひっ……!?!」

——からん、と落ちる包丁。

ガン開き血走り目はあ——閉じられた。

………っ！

完^コ全^ロ勝^シ利^ビ！^ア

いけた！さつまいもの素焼き（砂糖味）で行けたぞ！えっ、マジでこれがスイートポテトだったりするこれ!?

それとも今までの技術点が功を奏したのか……!?

ともかく！

ともかくやりました！——バッドエンド回避F U ！

あゝあゝ……づがれだ。

タアィムはあ………ああ、かあなあり、ロス。

これは二日目の三階制圧の分とか、チョーカーさん救出の分とか全部帳消しでおかつお釣りがドン!……とんでもねえな、ふあみお姉ちゃん。

でも、RTAのバトンが繋がられた事は喜びましょう！

………動画的に見せ場もできたって事で視聴数も爆上がり、コメントもいっぱいのはず………！（欲望の開示）

これからは正気度特級爆弾お姉ちゃんでは無くなるって事自体にも、目を向けましようか。はあ………なんか一生分のRTAやったような気がします。

………むむっ。視界が揺らぎました。

シヨタの方も安心して、張りつめた糸が切れたみたいですね。

丁度いいです。このまま気絶して、めぐねえ達が帰ってくるまでスキップしましようかね。

はい、ばたんきゅー。

がっしやん！——あっ、さつまいもの素焼き（砂糖味）が地面に落ちた、まあ残当かな。

——これでもう、おねっ………りーさんは大丈夫………だよね………？

おい、お姉ちゃんの事りーさんって言うのやめろよ。

……………。

……………？

……………！

あつ、やべつ素で間違えちった。私の方が洗脳されてる……………！

(戦々恐々)

——長い夢を見ていたようだった。

深く、ドロリと熱くて冷たい泥の中。そこから意識が這い出た。そうとしか表現出来なかった。

夢が覚めたきっかけは単純。

——私を見上げた弟の顔が、妹と噛み合わなくなった。それだけ。

「——あつ」

気がつけば、私は部室で呆然と立っていた。

「えっ？あれ、なにが……………」

記憶がひどく曖昧だった。

どうして自分がここに立っているのか検討も付かない。鼻を撫でるカレーの香りが、辛うじて料理をしていたという事を思い出す。

そこでふと——嗅ぎ慣れない、鉄錆びの匂いが近くから濃密に漂っているのを感じた。

「う？」

視線を辿ると——制服の前面が、血で真っ赤に染まっていた。

「……………どうして血……………ひっ……………!?!」

右手に握られた血まみれの包丁に気がついて、反射的に手放した。からん——と落ちたその音は、これが現実だと、私に教えてくれた。どういう事？私はいったい何をしていたというの……………?

記憶を辿ろうにも浮かぶ思考はひどく焦燥として——取り返しの付かない事をした、という確信めいた強迫観念だけが心臓を強く叩く。

——がっしやん。

そんな私の耳に響いた、お皿の割れた音。

突然脳裏に浮かんだのは——今はもう古ぼけた、お母さんに怒られた時の記憶だった。

振り向きたくない——と、誰かが呟いた。

振り向きなさい!——と、誰かが怒鳴った。

恐る恐る向けた視界に映ったのは——床に倒れ伏したなぎくんだった。

「——なぎくん……………っ!!」

慌てて駆け寄ると、彼はひどい姿だった。

全身は血と土に汚れて。顔は青白く、力無く投げ出された腕は制服の外から切り傷だらけで、手のひらは赤く水ぶくれが出来ていた。溢れる吐息は痛みに揺れて、か細くて。

「いったいなにが——」やっど——二人きりになれたわね?」……………あっ」

耳の奥から聞こえてきたのは、熱く蕩けた——気色悪い自分の声。
「ふふっ……鬼ごっこだもの。ちやあんと十数えてから始めましよう？」

「逃げないで——受け入れて？」

「ふふふ、さあ……なきくん。おいで……？」

「これから——ずつと、お姉ちゃんが一緒よ。絶対に離さない」

弾かれるように、床に落ちた包丁を見た。

皆を助けていたはずソレは、血脂で濁っついて。

刃に写ったのは——そんな大切な友達を、身勝手なイカレた妄想で傷つけたどうしようもない女の姿。

「ち、ちがつ……！」

誰かに言われるまでもない。

「いやっ、いやあ……！」

私がやったんだ。

「いやああああ!!!」

くしゃりと歪んだ顔。

泣きたいのは、きつとこんな私じゃなくて——なきくんのはずなのに。

応急手当の本と救急箱があつて助かった。きつと、よりひどくなる前に処置ができたと思う。

……でも、なぎくんの傷を一つ一つ見ていく内に、それをやった時の私のほの暗い悦びを思い出す度に。

そして——救急箱の中身を全て使ってしまった……使わなければいけないほどだったという事実が。

私を苛んだ。

「……………」

部室の床の上。

幾分か落ち着いた顔で、私の膝で眠っているなぎくんを眺める。

私は全て思い出した。

私は羨ましかったのだ。

家族を失った私の側で、互いを唯一無二と笑い合うなぎくんとゆきちゃんが。

そして、もしこういう人が私の側にいればどうだったのだろう、と想像し始めた事が全ての始まり。

それから現状が悪くなる度に、頭が痛くなる度に。

空想に逃げた。呼び掛けられるまでぼんやりしてしまうほど、深く。

なぎくんの優しさに触れる内に——いつのまにか、その相手がなぎくんにすげ替わって。

そしてあの、雨の日に。

私達を守ろうと飛び出したなぎくんが——亡くなった私の妹……るーちゃんと被ったように見えた。

それから……恐怖で。

なぎくんとるーちゃんが混じって……——あの子は私の弟いもうと。そう思うようになった。

それから今の今まで、なぎくんは私の家族だった。私の中だけで。

膨れ上がった妄想を抑えられなくなって、いつしかそれが現実だと思ひ込んだ。るーちゃんとの思ひ出はなきくんとと思ひ出になって。辻褃合わせを繰り返して――

誰にも気がつかれる事の無かった私の狂気は、二人きりになってしまった事で――鎌首もたげて、彼に襲いかかった。

「……なきくん」

ほんの少し前まで助け合う友達だったはずの女が――突然己の姉を名乗り出し、刃物片手に襲いかかったのだ。

どれほど、どれほど……！

怖かっただろう。辛かっただろう。気持ち、悪いと。思った事だろう。

無意識になきくんの手を握ろうとして――火傷の水ぶくれが目に入って、やめる。

私は彼の手を握る事も出来ない。その資格もない。

傷つけて、追ひ詰めて、こんなにもボロボロにして。

なのに――どうして、私は。

「なんで……」

思ひ出すのは――なきくんと「鬼ごっこ」。

あれは恐怖から逃げているのだと思っていた。でも違う。

彼は恐怖から逃げていなかった――私を、正気に戻す為に逃げていたんだ。

「なんで……私は……！」

職員室、屋上、部室。

駆け巡ったそれは全部――なんてことのない「約束」を果たす為だった。

私が気づくであろう、友達であった時の記憶。そうすれば、きっと元に戻ってくれるはずだって信じて。

私を、助けようとしてくれた。

あんな狂って狂って狂いきった気持ち悪い女を……彼は……！

なぎくんは、自分もおかしくなっている——助けしてくれた。救いだしてくれた。

それが——

「どうして——こんなにも嬉しいの……!?!」

傷つけたくせに。

追い詰めたくせに。

こんなにもボロボロにしたくせに。

——私は、なぎくんに対してほの暗い悦びを覚えてしまった。た。

「——んっ……う？」

ふと、膝から小さな音が聞こえてくる。

下を見ると——うつらうつらと目を瞬かせたなぎくんが、こつちをぼんやりと見つめていた。

そうして、私が膝枕をしている事に気づくと——びくりっと身体を震わせる。

「おっ……おねえちゃんっ？」

怯えるような。すぎるような。

そんな小さな声に、私はせめて安心させるように首を振った。

「ううん。——私は、りーさんよ」

「……そっか。うん、そうだ……そうだった……うん」

ふう……と深く息を吐いた彼の頭を静かに撫でる。
震えが返ってくる事が、私の罪を自覚させてくれる。

「ねえ、なぎくん」

「なっ……なに……？おねっ……じゃないちがう——んんっ！リーさん？」

「私は——まだ、友達かしら？」

自分でも心底虫の良い事を言っているのを理解していた。
そして——この後言ってくれる優しい言葉も。

「うん？勿論——リーさんは大事な友達だよ」

『——お姉ちゃんは家族じゃないっ！でも、でも……大切な友達なんだよ！』

ああ……ああ……。

「ありがとう」

私はそう呟いて、額にキスをした——歪んでいる口許が元に戻るまで。

「本当に大好きよ。私の大、切な……わ、たしの……」

ふと、呟きそうになった言葉を抑えた。

なんだ。つまり私は——もうとつくに狂っているのか。

「ねえ、ねえ……なぎくん」

「えっ、は……えがおこわい……なんで、しょうか……？」

「これね。一生のお願いのだけれど……」

「……………」

「もう一度だけ——お姉ちゃん、って呼んでほしいの」

「……………」

「……………」

「……………おっ——」

「……………っ！おっ？」

「——おとこわりですよーだ！この○姦魔!!」

あっ。

強○魔は流石にお姉ちゃんグサツときた。

いつ、いやそれは流石にひどくないかしら!?

「——ふう。さあつて。ようやくと到着だぞお……皆お疲れさん」

「あああああ、つかれた。荷物はあ……どうする？まだ大半は車の中だけど……」

「折を見て、次の夜に回収しましょう？皆日持ちするものだし。ふう……美紀さんも圭さんも手伝ってくれてありがとうね？……太郎丸もおつかれさま」

「いつ、いえいえ！あんな大ピンチを助けてくれて、尚且つ学校にまで連れて来てくれて……それに、大の親友とも再会させてくれて……寧ろもっと好き勝手使ってくれて大丈夫ですよっ！」

「圭、言い方。……私も改めてありがとうございます。あのままだったら……きつと」

「わんっ！」

「ああ、いいのいいの。気にすんな気にすんな。こういうのは……ほら、*“旅は道連れ”*……だろ？」

「そーそ。一番先頭に立って無双しまくった胡桃本人が言ってるんだし、そう気負らなくていいって」

「ええ、そうですよ。それに……」

「……？」

「それに？」

「わうん？」

「——もし、やなぎくんだったら貴女達を決して見捨てません。なら、私達に助ける以外の選択肢はあり得ません」

「そーだなあ、やなぎなら助けるな絶対」「寧ろどんな大ピンチでも行ってたな、柳なら」

「……結果的に今回は連れてこなくて正解だったな」「んだなあー」

「——そう、ですか」

「……。えつとお、万寿先輩は、若狭先輩とお留守番してるんだけたっけ。佐倉先生」

「ふふっ、別にめぐねえでもいいわよ圭さん。ええ、ちよつと……ね。まだ説明が思い付かなくてごめんなさい」

「いえいえ！別に……他にも助かってる人がいるなら嬉しい限りですよーねっ、美紀！」

「……そうだね、圭」

「わん！わん！」

「まあ、そんなこんなでおつかいは大成功な訳だが……」

「……そうだな。だが、二人が心配だ」

「梯子が片付けられている。バリケードは通る隙間を塞がれている。……なにかあったと見ていいかもしれません」

「……連中の死体も血の跡も無い。だから、大丈夫……だろ？」

「だと、いいんだが」

「……！声が……！」

「あつ、おい！めぐねえ！危ないかもしれないって！」

「あー。とりあえず二人とも。それと犬っころも。着いてきてくれ」

「はあーい！」「はい」「わあん！」

「やなぎくん！大丈夫で——」

「めぐねえ！前に出過ぎて、またなん——」

「——ふしやあああ!!」

「落ち着いて？ねっ、落ち着いてなぎくん！ほっ、ほら一回だけ！一回だけでいいの！それだけで私頑張れる気がするの！だから包丁持って威嚇しないで！」

「——ふしやあああ!!」

「………えっ、これどういう状況です？」

「………けんか？」

「先つちよ！先つちよだけでいいから！」

「ううう………うるさい！最初は皆そういう言うって結局ズルズルなし崩しって相場が決まってるの！」

「えつとえつと………ともかく！一回！お願い！これで最後だから！」

「そんな、別れたいのに身体の相性だけは良すぎて結局惜しくなつて別れられない爛れたカップルみたいな事言わないで！」

「えつとお………色々気になる事があるけどとりあえず止めましょうか。くるみちゃん」

「………そうだな。特に——やなぎが傷だらけの件とか」

「ゆきちちゃんたすけてえええええ!!」

十日目 WELCOME TO “SCHOOL
Life CLUB”!!

完走の為に安定を取ったぜ(結果的)なRTAはーじまーるよー!

前回までのあらすじ。

――――

・VSふぁみりーさん。

・要約:「お前も家族だ」「家族じゃねえし!」「お前も家族だ」「だからちがつ」「お前も家族だ」「話聞けよ!」

・慟哭、苦痛、洗脳、希望、陵辱、感動――全てを乗り越えた先に待っていたものとは――!!

「くにへ かえるんだな。おまえにも かぞくが――は?もう一回だけお姉ちゃんって呼んで?……………は?」

は???

――ラウンド2……ファイツツ!!

ゴリラ一行「なにやってんだあいつら……(ドン引き)」

――――

――はい。

まあ、ラウンド2は無いんですけどね。初見さん(無慈悲)

昨日の最後のドタバタは流石にイベント扱いなので暗転します。

(あんな状態で收拾つくわけ)ないです。

なんやかんやあってなんとかかなります。なんやかんや。

さて。

イベント連打流し中に、えんそく組が帰ってきたのも確認出来まし

た。

とりあえず、無事えんそくは成功したと見ていいでしょう。
うーん……みーくん達を助けられたでしょうか。特にけーちゃん。
駅からの救出は結構難しいですからねえ。

「——あつ。……おはよう、やなぎくん。よく眠れた？」

——ぬっ。

目を開けると、そこにはめぐねえのドアップ。どうやら起きるのを
待ってみたいですね。

シヨタの枕元から見下ろす状態で、垂れる髪で陰る優しげな顔も良
——髪が顔に当たって邪魔だおらア！

場所は寝室で、朝日が覗いています。どうやら十日目に移行したよ
うです。

「やっと起きたあ……ふふっ、お寝坊さんだね」

——ぬツツツツ!!……ふう。

ゆきちやんが、ひよこりと顔を出してきました。一緒に待つててく
れたようですね。

——ああ……! (浄化の音)

このスチル、この……ねっ!

髪先がかすかに顔を擦るこの距離感、少し空いた窓から覗くお日様
に照らされ、少し陰る顔には、優しげに緩む瞳と悪戯な口許……!!
最高やで。めぐねえと比べるまでもねえ。

りーさんの蕩け笑顔とは大違いで心が落ち着くなあ!! (小声)

「……まだぼうっとしてるの? 朝ですよ、そろそろ起きましょっ。」

「そーだよーくん! ほらあ、起きないとほっぺ、くにくにくってする
よっ。」

ううう……!!クニクニシテエ(断末魔)

「ありや。……もう!二度寝はだーめえ!起きるの起きるのおーきーてえー!」

——起きます(げんきのかたまり)(ザオリク)(フェニックスの尾)(リザレクション)(メダパニ)(メロメロ)(パフパフ)(アニメ版だと意外にセクシー曲線が輝くゆきちゃん)(ニフラム)

二人とも、おはよう(すつきり)。

「うん!おはよーやーくん!」

「……ええ、おはよう。ゆきちゃんも、おはようね。……さつきもやっ
たかしら」

「したよめぐねえ。もー、こーねんきはまだ早いよ?」

めぐねえがキレそうな事をさらつと言うゆきちゃんはマジゆき
ちゃん。

と、いう訳で。

前回、無事に……無!事!に!

ふぁみりーさんを突破する事が出来た訳ですが気を抜いてはいけ
ません。

——RTAは続いています。

RTAは続いています(固辞)。

RTAは……続いて、いるんです……! (切実)。

ですので、今日は皆様に「あっ、そういえばこれRTAだったな……
(懐古)」と思わせるムーヴを徹底していこうと思います!ロスと引き
替えに切り札を一つ増やせたと思えばいいんですよ昨日のは!

昨日は——タイムを犠牲にRTAの安定を取ったんですよ。

……てえ、事はですよ?!

これ以降は——安定を犠牲にタイムを取ればプライマイゼロでイー
ブンになると思いませんか?(単細胞思考)

チャートは逐次、組み直して進んでいきましょう！

……だって、本チャートがどつかのボール泥棒で崩壊して、残骸から作った補完チャートもふぁみりーさんが蹴散らしやがりましたからね！

高度な柔軟性を維持しつつ、臨機応変なRTAです（これを、行き当たりガバったりと言います）。

とはいえ、今日に関しては短縮要素は少ないです。処理と外せない好感度稼ぎが控えています。

……午後くらいですかねカットできるの。幸いな事に、ふぁみりーさんのせいでシヨタの疲労は留まる事を知りませんからね。

「やなぎくん……」

ん？何やら心配げなめぐねえが。

どうしたどうし——おや、ふにふにと頬を挟み込んできました。

おっ、これは……？

「ごめんなさい」

なんのこったよ。

「ゆうりさんの事……気づかなくて」

まあ、アレは私も予測してなかったですからね。しょうがないね。

隠れ発狂枠としての実力を遺憾なく発揮した形です（白目）。

……くそつ。気づいてたら、上京する恋人を乗せた電車を無謀にも追いかける田舎少年ムーヴで無理矢理着いてったものを……！

「こんなに……っ、傷ついて」

めぐねえが潤んだ目でシヨタを見つめてきてます。顔も少しク

シヤついて泣く一歩手前ですネ。

あー、てかこれは――

「ごめんなさい、ごめんなさい……怖かったよね？痛かったよね？私
がちやんと見てなかったばっかりに、また貴方を傷つけて……！」

――責任、感じてますよね？

腕の傷や手の平の火傷を撫でる手先が震えて悲壮感パないです。

いや、めぐねえは悪くないと思いますよ正直。大体ふぁみりーさん
が悪いと思うよ？だってシヨタを家族だと勝手に思いこんでるって
どう考えても気付ねえって。しょうがな、……しょうが、うん？

……いや、ちよつと待つてほしい。

そもそもあの場面で学校に残るという選択肢を選んだのは、めぐ
ねえがボールを盗んだからでは？シヨタが戦闘員になれなかったか
らでは？

――やつぱりめぐねえのせいじゃないか！責任感じてろおまえ！

(手のひらクルー)

「ごめんね、本当にごめんね……！」

「めぐねえ……」

とはいえ、このまま落ち込ませているのは悪手です。

めぐねえはただでさえメンタルよわわなので、こういうちつちや
な事ですーぐ行動不能になりますからね。(普通めぐねえならともか
く、覚醒めぐねえにくよくよさせる時間は)ないです。

横で、ゆきちゃんもアワアワしているので、さっくりケツを蹴り上
げましょう。

……なんで慰められる側のシヨタが慰める必要があるのだ？(疑
問)

ええつと。そうですね。変化球飛ばすとあらぬ球が飛んできそう
だし……。

——大丈夫だよ。結果的に皆無事だったじゃん。へーキへーキ。
まあ、こんなんで大丈夫——

「——大丈夫じゃないっ！」

えっ。

「大丈夫なんかじゃない！貴方が……貴方が無事でなければ何の意味もない！！貴方を守る為に、守る……なのに、また、また私は……！！」
「えっ……あつ、め、めぐねえ？」

「ねえ、ねえお願い約束して次こんな事あったら自分の身を守る事だけを考えて周りなんてどうでもいい貴方さええっ、貴方さえ無事なら私は——っ！！」

あつ、なんか地雷踏んだ。

なして？いや、普通に悪くない返答だったじゃん！？

だっ、大丈夫です。こういう時は、奥の手をですね！猫の手を！

——ゆっ、ゆきちゃんヘルプ！

「——」

「あわ、あわわ……あの、めぐねえ？し、心配してくれるのはありがたいけど、おちついてほしーなあって。ほら！あんまり騒ぐと近所めーわくだしっ！」

「…………ゆきちゃん」

「あの、えっと、心配かけたのはやーくんが百パー悪いし、あとでわたしからもお説教しとくから、ねっ？ねっ？落ち着いて……怒らないで……」

えっ、なにそれ聞いてない。

「まだ言ってなかったからですー！もおー、リーさんの為とはいえ頑張り過ぎー！やり過ぎー！帰ってきたと思つたら包帯まみれだったのを見たわたし達の気持ちになつてよもうー！」

でっ、でも乗り越えなかつたらガメオベラだったし、そもそも私のせいではなく勝手に発狂したりーさんのせいでは……？

「いいわけむよーっ！むがあーっ！」

ひい！牙を剥き出しにして襲いかかつてきました！

ゆきちゃんフレンズです！タタリガミです！鎮まりたまえー！

さざかし名のあるゆきちゃんと見受けたが何故そのように荒ぶるのかは分かつてますが鎮まりたまえーッ！

……ここで、めぐねえを盾に。

そうするとお……？

「っ。……。……ゆきちゃん、落ち着いて。突然取り乱した私が悪かったです。だから喧嘩しちやだめよ」

ヨシッ！なし崩しに落ち着きましたね。

流石、空気清浄機YUKIITYAN。修羅場に混ぜるとあらゆる不思議。途端に和むんで場が落ち着きます。こういうところは本当に有能ですね。尚、本人大体特大爆弾皆死終。

「うーっ、うーっ」

「ともかく。やなぎくん、次は絶対に危険な事はしないで。私と……ゆきちゃんに約束して」

「そーだそーだっ！」

おう、考えてやるよ（危険な事しないと短縮にならないからね。しようがないね）。

「やーくんー!」

「もう……まあ、次は絶対にありませんから。ゆきちゃんもしっかりやなぎくんを見ていてね?」

「はあーいー!」

わあ嬉しいなあ（正直、邪魔になる）。

……にしても、めぐねえのシヨタへの依存が強いな。

いえ、庇護対象に対してはそうなる傾向にはありますが……好感度を稼ぎ過ぎましたかね?後衛要員つてのもあるんでしょうが。

メイン盾にはなつてほしいんですが、モンペにはなつてほしくないんだよなあ……（わがまま）。

「それじゃ、ご飯にしましょう?ゆうりさんの事もそうだけど、“外”で助けたやなぎくんのお友達も紹介し——」

「——わんっ!」

ん?!

「えっ……?」

「およっ?」

「……わうん?」

おや。

気づけば、近くにちっこいのがいますね。

何者でしょう。

この——終盤に視聴者の涙腺を根こそぎ奪い去る、愛らしくも憎らしい、まるでゆきちゃんの愛をかつさらう為に産まれてきたような、アンポンタンふあつきん子犬は。

「わあ〜!ワンちゃん〜!!」

………チツ。

おっと、失礼。つい条件反射で。

淑女の前でなんて下品な……。

紳士たるもの。

淑女が子犬と戯れる光景には笑みを浮かべ……—そのまま舌打ちしましょう。

ニコチツニコチツ。ニチツコニチツコ。チツチツチツチツチツ。

「かわいいねえ〜！」

「わん！」

「んう〜？こつち向かないねえ。照れ屋さんなのかな？むふふつ、かあいいい」

「わん！わん！」

………ツツツチイイイイ!!! (霹靂一閃)

こつ、このイヌガキ………!

恐れ多くもゆきちゃんに構われているというのに、何故シヨタをガシ見しやがる……?!ゆきちゃんが可哀想だと思わんのか………!

チツ!!!

………ともかく。

この犬つころがいるという事は——

「あつ………」

「あちやー………太郎丸………」

直樹美紀と祠堂圭。

加入していればこの二人がいるという事です。

まだ知り合って一日も経っていないので、この犬つころはどちらかの側を離れないんですよ。

二人とも顔色も悪くないですし、目立った外傷も無さそうですね。特にイベントも起こらずに事が運んだようです。

……救出できてよかったあ……。

これでダメだったらダメダメのダメでダメがじs g i n j (動揺)。

「……美紀さん、圭さん」

「あつ、えつと……佐倉先生、その……覗き見のつもりは……えつとです、出るタイミングと、言いますか、あの」

「……いえ、大丈夫。むしろ、丁度良かったです。正式な自己紹介は後でやるつもりだったけど……やなぎくん、二人は昨日おでかけ先で見つけたの」

ええ、見つけさせましたからね (黒幕並感)。

気さくに挨拶をして、無事を喜びましょう。

ゆきちゃん幼なじみルートのおかげで二人とも友達関係ですからね。ほんと、こういう場面では刺さる有能恩恵です。尚、本人 (以下略)。

「はい、なぎ先輩も無事で何よりです！」

「………」

「……ほら、美紀」

「……元氣そうで、えつと……良かったです」

うん？みーくんの方はやけに気まずそ——ははーん (閃き)。

さては私とめぐねえが絡み合ってるシーン (意味浅) が複雑なんです。端から見れば禁断の恋だからね。しょうがないね。

「……つ……」

「あー、つと。太郎丸ー、こっち来なさい」

「わんつ！」

「あ〜！太郎丸〜！行かないでえ……」

こつ、このイヌガ（以下略）
にしても。

この二人も朝起こしに来るとは珍しいですね。こういう時は既存のメンバーが来るのが大半なんですが……。

『合流イベント』前で詳しい……？

「それにしてもどうしたの？ なにかありました？」

「あつ！ そつ、そうでした！」

——あつ、そつかあ（天啓）。

昨日はふあみりーさんの件が——また、りーさんか……！
えつと。

仲間が仲間に殺傷沙汰を起こすと発生する、イベントがありました。
て。

「そのつ、実はくるみ先輩たちが、若狭先輩の事を囲んで問い詰めてて

……！ ねつ、美紀！」

「……そうだね」

ゲーム内で言う——『尋問イベント』。

ざつくり言えば、吊し上げです。

そりゃあ刃物持って仲間を切り刻んで殺しかけたからね。しょうがないね。残当だね。

「えつと……私たちは当事者じゃなかったので外れてたんですが——
ちよつとよくない雰囲気です。圭と話して、先生を呼ぼう、と」

「あー……」

「たつ、たいへんだよ！ やーくん、二人を止めなきや……！」

まあ、今までの関係性や好感度的にやんべえ事にはならないと思

ますが、このままボケボケする時間がもったいないです。
急いで向かいましょう。ダツシユで！

こちら現場です。

部室前に来ましたが、実に物々しいオーラが漂っていますね。

「あわわ……！」

ゆきちゃんのこのくそかわ慌て姿を見れば、雰囲気が如実に伝わってくることでしよう。

腕の前に抱えるブリつ子ポーズでも、ゆきちゃんにさせればタイツ子ポーズ……——王の中の王と言えるんじゃないでしょうか（追いメダパニ）。

現場からは以上です。

「えっと、大丈夫そうですか？ なぎ先輩」

——大丈夫だ。問題ない。

……いや、フラグではなくガチで。

吊し上げて言っても大した事は起きないです。流石にこれまでの好感度と正気度は信用出来ませぬ。リーさんとかいう隠れ発狂専門家とは違いますからね。

それに、万が一にもやべえなら、めぐねえが近寄らせる訳はないので。

ではあ、行きつけのラーメン屋に入るように気軽にドアを開けましょう。

ちわーっ。

「いふあい……いふあいわ、ふるみ。ほっぺのひちやう……」

「おーおー延びとけ延びとけ、このバカリーさんが。やなぎにあんな怪我させやがって……世が世なら極刑だぞこの野郎」

「おんななんらけど……」

「この女郎!」

「いちいち律儀か。……よし、悠里。今日から少しの間このボード提げてな」

「……?なあにこれ」

「お前の悪行が目に見えるようにしたんだ。これを時々見て反省しなよ」

「……たかえちゃん」

「どう?やっぱ、文字にすると客観的に見れ」「これ、女じゃなくておねえちゃんって直し——いっっ!?!」

「ごめん、腕抓っていい?」

「抓りながら、いふあない……ふるみ。やめふえ、きやばおーふあーになっふあ——いっっふああ!?!」

「……どういう状況?」

——私が積み重ねた成果です(ドヤア)。

はい。部室に入ると、リーさんのほっぺを千切らんとばかりに引張るくるみと、手作りボードで戒めを与えようとしているチョーカーさんがいました。

ボードには……『わたしは ひれつなてで やなぎくん を きずつけた さいていおんな です』。

うん、しめやかに悔い改めろ。

——と、まあ。このように。

互いの好感度が高い状態であれば、殺しや悪辣な事をしなければた

いていは温い方向になります。

後は被害者本人が許す選択をすればいいだけです。

次やったら、これで済みませんが——ふぁみりーさんに関しては“次”なんてないので問題ありません。

皆も出来れば、仲間内で殺傷は嫌だからね。しょうがないね。

……ちなみに。

これで好感度が低いと仲違いや幽閉は勿論——極論、処刑です。

『がっこうぐらし!』は好感度激低状態だと、途端に現実的で生々しくなるんですよ。

きららの絵でウォーキング・デッドはやめてくれよなあ〜頼むよお。温度差で風邪引くわ。

「んんっ!!」

めぐねえが咳払いすると思いきいに虐めてたいじめっ子(残当)が、いじめられっ子(残当)から手を離してこっちに——ええい!心配しながら頭を撫でるな!両手が塞がってて逃げれん!さっさと次行かせろ!!

「えっと。美紀さん、圭さん。昨日の事の話し合いをするので、もうちょっとだけ待ってもらってもいい?」

「はい。重要な事ですもんね」

「……問題ないです」

「ありがとうございます。さっ、やなぎくん」

めぐねえに促されますが……うう、昨日の悪夢が蘇ってマジ手が震えてきやがった……! (恐怖)。

ちなみに震えているのは、私だけでシヨタは平静としています。マジかお前。

「やなぎくん」

ひえええ（萎縮）。

「昨日の事、本当にごめんなさい。おねっ……………、…………私、どうかしてたわ」

今もどうかしてるみたいですね。

「こんな事言うのは恥知らずかもしれない。でも……………どうか、私を許して……………」

「……………さつき、皆でゆうりさんとお話したの。もう、大丈夫だと思……………おも、……………思うわ」

「半ば反省してねえしな」

「なっ……………！傷付けた事は反省してるわ！」

「は……………って言ってんじやんか」

せめて嘘でも断定して。

とはいえ、大丈夫か大丈夫でないかと言えば——大丈夫ではありません。

先ほどまでの言動の通り、あの鬼畜クソ展開を切り抜けたとしても、目の前にいるリーさんは——ふぁみりーさんですから。

「……………やなぎ、無理はすんなよ。私たちは大丈夫だからな」

「右に同じく、柳に従うよ」

「……………あなたが決めて、やなぎくん。……………安心して？決して——悪いようにはしないから」

囁きが物騒で引く。隣ではゆきちちゃんが死ぬほど不安そうに見てきます。

当然ですが——即答で赦します。

いやだって、ここで赦さないって選択したらいったいあのホラーは

み j f S N w かいん ーん く d n (発狂)。

「……そう」

「なぎくん……」

「ゆうりさん。やなぎくんがこう言っているから今回だけは水に流します。でも——あなたは、やなぎくんを、傷つけたの。それだけは忘れないで」

「……わかってます、めぐねえ」

めぐねえの声がクソ低くて怖いゾ。

許したい気持ちも勿論あるけど——シヨタが許すから許してるが大半だっけはつきりわかんかね。……依存、手遅れくせえなこれ？
りーさんも反省したのか、神妙な顔して怖々とシヨタを抱きしめま
す。

シヨタもひしつと友情のハグを返しました。これにはオーデイエ
ンスも「しようがねえな(悟空)」と苦笑い。

みーくん達もなんか丸く収まったのをほっとしています。

うーん、感動的。

これで満面解決ハッピーエンドっけはつき——

「これからもよろしくね。私のなぎくん……」

やっぱり反省してねえなこの偽姉。

——はい。

という訳で、『尋問イベント』と、ふぁみりーさんイベント『YOU
MAY CALL ME SISTER』をクリアしたので——こ
れからりーさんはふぁみりーさんとして行動を始めます。

ふぁみりーさんは、普通のりーさんとは違い、戦闘にも積極的に参
加してくれるようになります。

さらに、これが霞むレベルで有用能力が二点追加されます。

まずは、正気度がこれ以上変動しない事。

そして——こちらの言う事を一切拒まないという点です。

正気度に関しては、隠れ発狂しなくなるのがいいですね。他の場面でもいちいち止まらない点も素晴らしい。……まあ、これ以上変動しない、という事は——ずっとこのままなんですけどね。

そして、命令を拒まない。これが凄いですよ。

例えば。今この場で「ゆきちゃん以外皆殺しにして？」と言うと、戸惑いながらも結局実行するというトングデモさです。これってえ勲章ですよ？（首級的な意味で）

つまりは、ふぁみりーさんは「言いなりーさん」になりました。

R T Aの為、存分に使って行きましようふえっへっへっへっへ（ゲス）。

イベント終了と同時に画面暗転^{now loading}。

そのまま朝食に入ります。

皆で机を囲んで、仲良くいただきます！ですね。メンバーが二人と一匹増えたのでちよつと手狭です。

メニューは、昨日キッチンで発見していたカレーです。コーン付きでゆきちゃん受けもいいのが二重丸。特に、新顔の二人にはクリーンヒットでしょう！ええ！

「……カレーだよ、圭」

「そう、だね……ぐずっ」

ほかほかのカレーを前に、みーくとけーちゃんは震えていますね。

うるうる涙目で——感動に浸っています。

「……う、やーくんやーくん、二人ともカレーが大好きなのかな？」

察しの悪いゆきちちゃん（かあい）が疑問に思うのは無理もないでしょう。我々は、食事に関しては二日目辺りから潤っていますからね。

「——いただきます」

「うう……いただきます……」

察しの良い面々の暖かな視線の中。

二人はカレーを一口。ポロリと零れる涙も飲み込みながらつき始めました。その姿は悲哀、そのものです。

ただのカレーでなぜに？——と思う初見ニキネキもいると思うので……。

食事風景を流しながら、ざっと情報の開示をしましょうか。

みーくとけーちゃん、例のショッピングモールでアウトブレイクを迎えた訳ですが、なんやかんやあって——ある一室で籠城生活を始めます。

運良くそこは、トイレ・シャワー完備。さらには当面の水と食料がありました。

——それしかありませんでした。

それに食料つつつても缶詰・レトルト、それが無くなれば乾パンオンリー。

……初日くらいですかね？言ったと思うんですが、腹が満たされるからといって粗食以下の餌を食ると——正気度が下がります。

ずぶずぶと精神がヤられていくのです。

一歩出れば地獄絵図。しかし、此処に留まってもジリ貧になっ
ていくだけ。

我々とは違い、ゴリラを飼っていないか弱いJKには、絶望的な状況。

——仲良しだったはずの二人の絆は亀裂が走っていくのです。
んでまあ、けーちゃんは現状が嫌になって喧嘩別れな形で「外」に
出て、駅でゲームオーバー。

みーくんも孤独に耐えきれなくなって部屋から出て、『かれら』に
まれたところを『学園生活部』に救われるが、心は荒んでしまってい
る……………。

——というのが本編の流れ。

けーちゃんの『生きているだけでいいの?』——は名言であり至言
でありながら悲しい言葉ですよねえ。

まあ、ゲーム内では如何様にも出来ます。

今回は、けーちゃんを駅でガメオベラ寸前に救出させたんで此処に
いますし、みーくんの心も合流したおかげでそこまで傷にはなってい
ないでしょう。

「……………」

「おいひい……………おいひいよお……………」

壮絶な展開からこの学校に来るまで——つまりはアウトブレイク
からこの十日間、二人はマトモな飯を食べていないのです。

十日ですよ十日。暖かい食事の有り難みが身に染みて溢れ出すの
も無理はありません。

今の二人は食事で特効がぶっ刺さってるのも当然。些細なことで
も好感度があがりやすくなっています。

です。

——ふたりのためにいゝ。

ニコリと笑顔を浮かべ「おいしい?」と優しく囁きかけ!

さらには、「もっとお食べ?」とせせせと自分の分も与えましょう!
これで好感度があがります(必勝)。

そう、気分は——拙い手料理をご馳走する恥ずかしげな同級生……!!

……あ？

これ作ったの、たぶんリーさんだろって？

……お姉ちゃんのやった事って、実質的に家族である弟の物だったりもしませんか？（ここぞとばかり利用する反抗期の鑑）。

「二人ともお腹空いてたんだねえ。はい、おすそわけー。ほいほい」「ありがとうでぜんばいつつ……やぎじい、すぎですう！」

「あつ、一夫一妻派なんでえ。お気持ちだけでえー」

「……ほんとに、優しいのは変わらないですね先輩。……少しだけ安心しました」

「そーでしょう！えらいんだよー？……チラ？チラチラ？」

なっ……！

本編で空気を読まずに食い意地張ってたゆきちゃんがお裾分け……だと……!?しかも自発的に!?（アピールスルー）

馬鹿な……！これはいつたい——あつ、ただの先輩風吹かせたいだけだこれ。

「はいはい、えらいえらい。……やなぎくん？二人にあげたいのも分かるけど、自分の分も取つときなさい？お腹空いちやうわよ？」

えー。

でも、もうこれ以上シヨタに飯食わすメリットもないんですねえ。あとは好感度上げてえ、さくつと最終日に感染するだけなんです。

まあ、無視してゆきちゃんにでも上げましょうかね。

はい、ゆきちゃん。

いっぱいお裾分けえらいねー。っ(ほうびあげますよー)。

「——えっ?」

「わあいーありがと、やーくんーあーん」

ううーん。ゆきちゃんの大口……せくしい。

サメってえ口を開けるのが求愛の証らしいっすよ(雑学の開示)。

はい、あーん。

カレーはゆきちゃんの好感度上げやすいので一石二鳥でありがた

「あら、ありがとなぎくん。んむっ」

……は? (半ギレ)

「んー!おいしい。なぎくんの愛を感じるわ」

は? (全ギレ)

「なっ…なっ…!!」

「でも、このカレーは元々なぎくん用に作ったから、なぎくんに食べてほしいなーって。はい、お返しなあーんっ」

は?えっ?あーん。

あっ、正気度の回復幅やば。もうこれシヨタ専用メニューじゃ——
なくて!!

「なんで取るのー!やーくんの愛ー!」

「ふふふ?美味しいでしょう?……思い出は嘘だったけど、なぎくんを思ってたのは間違いないから、遠慮なく食べてね?はい、あーん」

ちよつ。追いあーんはやめろ！好み過ぎてシヨタが拒めない！
すぐ横でお冠のゆきちゃんが見ええないの!?!これだからはお姉ちゃん
んは!?

畜生っ。えんそくで減ったゆきちゃんの好感度を取り戻そうと
思ったのに！

「ていうかあ！やーくんにあーんするのもわたしの役目なんですけどー!?!」

和気藹々な朝食が終わり、自由行動になりました。

今日は「えんそく」もないので適当に、散らばって過ごしています。

……あれ？『合流イベント』は？あだ名決めるやつは？と思った二
キネキもいる事でしょう。

なんで発生しないのか。それはみーくんのキャラクターの影響で
す。

みーくんってこう……アレです。物静かっというか……内気で
しょう？（気遣い）

本編でも、本当の意味での合流には一悶着ありましたし。

それゲームにも反映されていて——最低でも一日はこちらのグ
ループとして属した事にならないんです。

まあ、ゆきちゃんルートだし、カレーもありましたから。明日には
イベントが起きる事でしょう。

そんな事より！

私はこの時を待っていました！

前に言った通り、みーくんは主要キャラ随一の頭脳キャラ。

彼女一人いるだけで、勝手にフォローしてくれたり、戦闘・探索の際には高度な作戦を建ててくれる有and能な訳ですが——いけません、ズバズバ言いすぎて不和を呼び起こしかねないのが難点。

ですが、その難点はけーちゃんがいる事で緩和される………のは！

私のチャートじゃあ、あまり重要な事ではありません！

二人……というか、みーくんに求めるのは一つ！

——「みーくんの自己分析」です!!

なんぞそれ?という方に説明しましょう。

これはみーくんが加入直後にのみ使えるコマンドで、みーくと二人きりの状態で「ぼくたちの事どう思う?」と尋ねると、今の状況を忌憚なく語ってくれるというものです。

ざっくりまとめると「総集編」。あるいは、「これまでのあらすじ」といったところでしょうか。

……そんなくらいなら別にいらなくね?、と思います?思うでしょう?

悔るなかれ!

みーくんの語る「今の状況」は、建物の未開放箇所や充実度・満足度の具合。果ては、キャラの隠しステータスまで詳らかに教えてくれます!

ええ!ええ!——本当ならりーさんの正気度知りたかったんですよこれで!

ですが、起きた事はしようがないです。

それ以外の情報を知りたいですし。是が非でも聞いておきたい………の、ですが。

「さあ、やなぎくん?今日はわたしとゆっくり過ごしましょうね?」

「むう。やーくん?わたしも忘れちゃいやだよ?」

この二人が邪魔です（明け透け）。

……本チャートだったらゆきちゃんを切り離すだけで簡単に聞けたはずなのに、余計なめぐねえもシヨタに張り付いています。

今朝の通り、依存が強いせいでしょうね。

きっと目を離れたら死ぬとでも思われてるのでしょうか。はっ！要介護が笑わせてくれる……！

ですが、朝の時点で依存には気づいていたので、対策済みです！

では、二人を連れて寝室に向かいましょう。

「んー？もう寝るのー？」

「おひるね、ですか？……そうね、昨日は大変だったもの」

昨日、ふぁみりーさんと戦った傷がここで生きてきます。

元々、負傷状態のまま体を酷使したので、睡眠時間が足りていないので、こんな朝っぱらから『休む』コマンドを選択する事が出来るのです。

おやつの間くらいまで、がっつり休みましょう。

はい、ここ。短縮要素ですね（黒板びしっ）。

最終日に向けての小細工とかやっておきたかったです、そこは明日以降に持ち込めば問題無いけるでしょう。

数時間くらい経てば、依存めぐねえも違う事しますので。

その隙に、適当にキャラを誘導して、二人きりになるだけです。ふぁみりーさんもここぞとばかりに利用しましょう。

さあて。寝ようねー疲れたなー。ごころん、うわあ布団の柔らかさやべえなあ。

こりやあぐっすり寝れそうだなあー？目え離してもこのまま寝てそうなくらいだなー？

「やーくんが寝るなら、わたしもねるー」

「そうね。ゆつくり休みなさい？私が、ちゃんと側にいますからね」

いるな。どっか行け（反抗期）。

「もうっ。気にしなくていいの。側にいさせて？」

気遣いじゃねえんだよなあ……。

さあて。寝ましよう寝ましよう。

めぐねえが側にいるなら、前みたい二段構えでの睡眠妨害も無いでしょう。

「ふふふ、あったかいね。やーくん」

そだねー。

「よしよし、大丈夫だよ。皆が側にいるからね。さみしくないよ」

うう、ゆきちゃんの睡眠誘導ASMR……！

……。

……。

……。

よし！画面暗転now loading入ったあ！

ふうー！やっぱゆきちゃんのASMRは効くぜー！

朝ご飯食い終わってすぐ寝て、おやつ時間までなのでえ……大体8時間くらい？

疲労が溜まり具合によっては、いっぺん寝ると起きないっすから

ね。今の負傷を考えるといい塩梅かと！

「……………んうっ？」

おっ、起きましたね。

さて、もうめぐねえはいなっ——？

「やあくん、よく寝……………た……………？あれえ？」

あれ？なんで——皆寝てるん？

えっ？はっ……………？

じっ、……………じっ、時刻は!?今の時間は——七時?えっ?十九時じゃなくて?

は?

「あはは……………気持ちよすぎて寝過ぎちやっただね、やーくん」

いや寝過ぎイ!?!?!?

ありえねえありえねえぎつと二十四時間だぞ!?どんだけ疲労まみれなんだよ!?!いやおかしなおかしいおかしいおかしい!

流石にない!これはガバじゃない!ガバ以上のなんかだぞこれ!
待て待て待てまてめてめにめにまにまにどんな無茶ぶりも!(やけくそホイッスル)

「むっ。くるみちゃんもめぐねえもやーくんにちかいつ……………はーなー
れーろ……………!」

まっつて?まっつて?……………ここまで寝るなんてありえねえ。

いや、重傷とはいえただの外傷だぞ？

頭の怪我は下手すれば意識障害併発するけど……？
依存めぐねえが延々と寝かしつけた？……いや、少なくとも起きた
描写は混じるはず。

いやあこれはあ——もつと重傷だぞ。

「……なんかりーさんが簀巻きで転がされてる」

移動に問題ないから骨は折れてない。痛みが酷くないから傷が膿
んで感染症を引き起こしてる訳でもない。

頭。やっぱ、障害——？

重度だと“昏睡”の行動不能状態も付与されるから、もしかして。

「あれ？ねえ、やーくん」

ゆきちちゃん。まって。

今ちよつと考えて——

「みきちちゃんがないよ？おトイレかな？」

みきちちゃん？

……？……あつ、みーくんの事か。

ああ、『合流イベント』前だから、まだあだ名じゃないんだつた。聞
き慣れなくて誰かと——はっ！

——“みーくんの自己分析” イイ!!?

……………。

……。

——うめき声が響く。

聞き慣れてしまった在りし日の隣人たちの声。

よだれと血にまみれた粘ついた音を、耳が拾う度に身が軋む。目頭は熱くなつて、背筋は冷える。精神をがなる、吐き気がする、気持ち悪い。

それが何もかも塗り潰した。

そのせいで。

自分の呻きすら、搔き消える。

「美紀……！美紀、起きて……！」

私を呼ぶ声で、目が覚める。

視界いっぱい広がるのは——親友である圭の顔。

いつもは勝ち気な表情と悪戯な笑みを浮かべていた……と思う。確信が持てない。持てなくなつてしまった。

汗で張り付いた髪、ひきつった口元。恐怖と怖気を混ぜ合わせた表情が、いつもだ。

「……圭？」

「起きたなら早く手伝つてツ！——奴らが入ってきちやう!!」

圭は私が起きたのを確認するや否や、一目散に駆け出す。

その際に蹴飛ばされたお気に入りCDプレイヤーはきつと、邪魔なものになってきていた。

冷たい部屋と薄い布団。積み上げられた無機質な餌。

そんな物が今の私達の全て。

必死に、命を削つて。守らなくちゃいけない。こんなのを。布団を抜け出して、部屋のドアへと向かう。

唯一の出入り口にはたくさんダンボールを積み上げてある。奴らを通さないように。

でも、来る度に二人で抑えなければ意味もないような軽いものだった。

「美紀い!!」

「あつ……う、うん!!」

圭の金切り声で我に返る。

急いでダンボールを抑えるが、奴らがドアを叩く力が勝っている。

——ドオンツッ!ドオンツッ!

響く度に、私達の体を揺れる。積み上げたダンボールが一つ転げ落ちる。ゆっくりと剥がれていく様は、命のカウントダウンに等しかった。

「もつとちゃんと抑えてよッ!」

「やってる!やってるってばッ!!」

親友の苛立ちに苛立ちで返す。

こんなひどい声、喧嘩した時ですら出したことなかったのにな。

——ドオンツッ!ドオンツッ!

ダンボールが転げ落ちる。

隠されていたガラス越しに——白く濁った目と、視線が重なった。すぐに反らしたがもう遅く。叩く力は一層苛烈になった。

——ドオンツッ!ドオンツッ!

「……っ!圭!わたしが抑えてるから、新しいダンボールを!」

——ドオンツッ!ドオンツッ!

「圭!圭!早くして!」

——ドオンツッ!ドオンツッ!

「っ！ねえ聞いているの!?!いいから早くやってよっ!?!」

隣に叫ぶ。

「ただけど——圭は居ない。」

「えあ……っ?」

部屋を見渡す。居ない。居るはずがない。

だって——出て行ったんだから。

私を置いて。一番の友達であるはずの私を。

二人で聞いていたCDプレーヤーは——使えないから、と残されていた。

——ドオンツッ!ドオンツッ!

「くっ……んっ!いやあ……!!」

——ドオンツッ!ドオンツッ!

「だっ、誰か……!」

——ドオンツッ!ドオンツッ!

「誰か助けてっ!!お願い!誰かあ!誰かああ!!?!」

助ける人は居ない。助かる道は無い。

でも、縋って——私は叫ぶ。喉が痛んでも切れても血がこぼれても。

きつと、うめき声しか上げられなくなっても。

『生きていればそれでいいの?』

——消えた親友の声が聞こえる。私を責める言葉。泣いてうずくまる私に向けた嘲り。

しらない。なんなの。いみわかんない。

わたしは、ただ。

けいと。いつしよに。

それが、それが。

そんなに だめな こと なの ?

「——美紀、起きて」

――

――目が覚める。

荒れた呼吸、汗に塗れる背中。真つ暗な見慣れない天井に、困惑が勝った。もかくのように勝手に動く体は——誰かが抑えている。

きつと奴らだ。

「……っ！」

反射的にはねのけようと体をよじる。

もうだめだ、と頭でわかっているも嫌悪が神経を駆けめぐっていた。

「美紀、美紀……！」

「やめっ……やめて、お願い……！」

「美紀、落ち着いて……！私、私だよ……！」

「——んっ？……えっ、あっ……？」

聞き慣れた声に、背けていた首を動かす。

そこには——見慣れた親友の顔があった。

「ねえ、大丈夫……？」

いつもの勝ち気な表情を不安げに歪めて、こちらを見下ろしている。そこに苛立ちも何もない——ただ、心配だけが伝わってくる。

圭。私の親友。

私を置いて行つた。絶望の中に置き去りにした。

でも——それは決して苛立ちだけが全てじゃない。考えればわかる事が分からなかった。再会するまで。

ふと、沈黙が広がった。

荒れた呼吸を整え、混乱する頭を落ち着いていく。

「…………ごめんね」

一呼吸を置いて、こぼれたのはそんな言葉だった。

圭は、私の言葉に目を閉じる。

——こつんと額がぶつけてきた。汗で塗れる額から、かすかに震えが伝わってくる。

「…………ううん。私の方こそごめんね」

圭は言葉を返してくれた。

それだけ——もう十分だった。

「起きる?」

「うん…………このまま寝たら、地獄に逆戻りしそう」

「…………どんな夢か聞いてもいい?」

「圭が私を置いてった後に奴らが来た時の夢」

「うっ。…………それはあ、どうもご迷惑を…………」

「ほんとだよ。あの時が一番の地獄だった」

あの夢には続きがある。

とはいえ、なんてことはない。突破されるよりも前に、奴らが飽きたのかどこかへ行つて終わっただけの話。

…………でも、あんなに絶望的な状況じゃなかったし。そもそも私はあんな子供みたいに喚かないし。CDプレーヤーは大切だし。圭ともあそこまで険悪じゃなかったし。

私とはいえ酷い風評被害だ。訴えたい。裁判所機能してないけど。

「わっ、私だって地獄だったよ?外じゃ、もうひっきりなし」

「ふーん?」

「あ、自分が一番だって顔してる。へーんだ、そうやって井の中の蛙し

てなさいな。真の恐怖を知らないままでねっ」

「ちなみに私が一番怖いと思つたのは、水の為に便器に顔をつつ込むのを躊躇わなくなった自分だな」

「え……」

「よし。誰が一番地獄かな選手権は私の勝ちで終わったところで——声抑えて。柳が起きる」

「あっ……」

ふと、辺りを見渡せば。

そういえば、と。

自分たちは助けてくれた恩人達と一緒に雑魚寝してたのを思い出した。

——色々思う事はあつたけど。

お腹いっぱいごはんを食べて、恐怖とは無縁な……こんな状況になつて、初めて。

寝ることが怖くなかつた。そんな時間を過ごした。

恩人の一人、たかえ先輩が布団の中から頬杖をついて。

苦笑気味に私達を見つめていた。

「……すみません、騒いじやって」

「んーや、しようがないって。私も経験あるし。……それにしても、友情って感じで素敵だな二人って」

その言葉に首を傾げて……ややして、額を重ねていた場面であると思ひ至つた。かあ、と頬に熱がこもる。

「あつ、いやあれは……」

「謙遜しない。大切にしなよ——失つてからじゃあ、遅いんだ」

たかえ先輩の言葉には嫌なくらい実感が籠もっていた。

その視線は——万寿先輩に注がれていた。

「……結局、起きませんでしたね先輩」

「ああ、どつかのアホンダラのせいだな」

「あはは……」

先輩がゲシゲシと蹴っているのは——添い寝かまそうとして、先輩たちに毛布で簀巻きにされて放置された悠里先輩。結構な力で蹴られてるのに、俄然せずスピスピと寝ていた。

——万寿先輩は、朝に昼寝したと思ったらそのままずっと眠ったままだった。トイレや食事で起きる事もなく、言葉は悪いが……いつそ死んでいるのではないかと思うくらいに。

皆が言うには、疲れが出てしまったのだ言っていたけど。

無言で悠里先輩を見つめる佐倉先生が怖かった。

「んむう……う？なあんだあ、敵襲かあ？」

ふと、万寿先輩に添い寝していた胡桃先輩が体を起こした。むにむにと動く口元が完全に寝ぼけている。

からんっ、と握るシャベルを床に擦りながら奴らのように蠢いた。

「違うから寝てな。ほら、柳が寒がってるぞ」

「ん、やなぎい……大丈夫、あたしが……んにゅっ……」

たかえ先輩の言葉を聞くと、そのまま万寿先輩のほっぺに頬ずりをしながら覆い被さるようになら寝入った。

……胡桃先輩は悠里先輩を非難してたけど——先輩も先輩で、結構大概だと思うのが私と圭の見解だった。

かち、かち、と鳴るのは時計の音。

小さな寝息しか響かない時間が少しだけ流れた。

「あの……」

ふと、圭が口を開く。

ためらいがちな口調でなにを言おうとしているのかわかった。
……それは、たかえ先輩も同じだろう。

「なぎ先輩は——どうしちゃったんですか？」

万寿先輩は——圭の友達で、私の数少ない友達でもある。

男子じゃなければ、きつと気負わず名前呼びぐらいはしてるほどの友達。

だから、助かっていると聞いた時は嬉しかったし、素直に無事を喜び合いたいと思った。

だから。だから。

——言葉を失った。

誰も居ない空間に話しかけ、何も無い空間と手を繋いで、宙に向かってカレーを差し出した……あの姿。

私達に向けてごはんを分けてくれたあの言葉も、今思えば——きつとあの人じゃない。

どれもこれも異常だった。

ぎこちなく話を合わせる皆の姿も相余って。

そして、その理由は。

あの人の隣にいつもいた、あの小柄な先輩が居ない事で——なんとなくわかつてはいた。

たかえ先輩は、ややして小さく、声を出した。

「二人が地獄を見てきたように——私達も地獄を見た。競うつもりは欠片もないけど、辛かったよ。友人が化け物になって襲ってくるなんてな」

思い出すのは、奴らが溢れて大混乱になったショッピングモール。その似たような事がこの学校でも起こったんだろう。

まさしく――地獄。

「私達は耐えれた。柳と……ゆきがいたおかげで」

でも、と。先輩は続けた。

喉に詰まった物を吐き出すように、苦しげに――続けた。

「柳は耐えられなかった。ほんと、それだけの話なんだ」

先輩は顔を隠すようにうずくまった。

こちらに聞こえてくる大きな呼吸はなにかを堪えている。

何も言えない空気の中。

ひよこりと布団から出てきた先輩は、へらりと嗤った。

「まあ、なんだ。私達じゃだめだったんだよ――柳は」

ふと、思い出したのは――さっきの夢。

圭がいなくなつて、奴らに追い立てられる……あの夢。

もし。もしだ。先輩達がショツピングモールに来なかつたら。

私は。万寿先輩のように――

「そうだ。まだ眠るつもりがないなら、めぐねえのここに行つてくれ
ばどうだ？」

たかえ先輩は空気を変えるように、明るげにそう言ってきた。

見渡せば、確かに一つ布団が空いていて――特徴的なピンク色の髪
が無い。

「きつと、職員室にいる。……ついだ。きつと、めぐねえからも話し
たい事があると思うし、分かつていた方がいいでしょ？」

私は圭と顔を見合わせて、頷き合うと——立ち上がる。
何も言わず、手を握ってくれた親友の温もりが、とてもありがたい。
そうして廊下に出る直前。

「なあ」

ふと、声がかかってきた。

「私たちの事はいい。でも——めぐねえを責めないでやってほしい。
もう、いっばいいいっばいなんだ」

その言葉に、嫌な予感が沸き上がった。

佐倉先生は、確かに職員室にいた。

「……………」

月明かりの差す職員室は、私の知っていた姿ではなかった。

投げ出された机、折られた椅子。壁には消し切れない暗い赤が走つ
ていて、乱雑に破られたカーテンからは割れた窓ガラスが覗き、深い
闇を通してている。

先生はそんな中で、ひっそりと座っていた。

うず高く積まれた机の奥にある、校長室を見つめている……ように
見えた。

側に置かれたコーヒーマシンの暖かな湯気が、ひどく場違いだった。

「あら？」

入り口で立ち尽くす私達に気づいた先生は、「前」に見た柔らかな
笑みを浮かべた。

ほんわかと優しいけど少し頼りない先生の——顔。

「どうしたの二人とも、眠れない？」

「あつ……えつと……」

「夜更かしはだめよ。ぐっすり寝ないと身体によくないわ」

「……」

「さつ、寢室に戻りましょうね。安心して休んでちょうだい」

先生は笑顔のまま、私たちを窘めるとゆっくりと近づいてくる。
どうして、なのか。

——背筋がすごい寒い。

「……あ、あのっ！」

このままじゃ埒が明かない。なんのかんの連れ戻されそうだった。
圭の温もりを盾に——声を絞る。

「さつき、たかえ先輩から。話を、聞きました。万寿先輩の事」

「……そう。そうなのね」

すとん、と先生から表情が抜けた。

元の椅子に腰掛け、コーヒーを一口を飲むと——静かにこちらを見つめてきた。

「やなぎくんの事は気づいているわね。それで、私たちのやっている事はなんとなく分かってるでしょう？ 貴女たちにも……それを、お願いしたいの」

「えつと、それは……」

「ゆきちや……丈檜さん、覚えてる？ やなぎくんの隣にいた女の子」

「……はい」

「その子がいる、って形でいてほしいの。辛かったら無視でもいい——やなぎくんが、補完してくれるわ」

矢継ぎ早に語られるソレに、私たちは反応を鈍らせた。だって、万寿先輩はどう考えても——おかしくなっている。あの先輩が居ない事を認められなくて、いると思ひ込んでいるんだ。そんなの、そんなの。

「……治そうとは、思わないのですか？」

ふと、吐けたのはそんな在り来たりな言葉。
先生は、薄く笑った。

「治して、なんになるって言うの」
「……」

「ねえ、見て？この部屋。全部グシャグシャ。職員室だったなんて思えないくらい。学校全体も“外”だって似たような有り様だったわね？化け物がいっぱい。ご飯だって集めるのが一苦労だわ。電気も水も、いつ切れるかわかったものじゃない」

「……それが、なんだと」
「……んー、わからない？」

しやらんと揺れるピンクの髪。
陰った顔には、軽薄な笑みを浮かべた。

「——こんな世界にやなぎくんを連れ戻す意味があるの？」

その言葉に——私たちは言葉を紡げなかった。

なにか言いたい感情は胸に沸き起こっている。でも、それが言葉になる前に押し留まる感覚があった。

先生の言葉を、否定出来ない自分がいた。

「やなぎくんは今幸せなの。大切な子と一緒に、懸命に生きてる。それでもいいじゃない。そこから引き離してどうなるの？あの子はただ

ゆきちゃんと一緒にいたいだけ。ねえ、ねえ——それが悪いことなの？」

ふと、頭の中を過つたのは夢の中の自分。

泣いて、泣いて。ただ親友を置いてかれたことを嘆いていた——前の私。

何も言えなかった。

それを知っているからこそ——私にそれに対して何かを言う事が出来なかった。

「それに——ゆきちゃんは、ちゃんというもの」

先生は囁くように呟いた。

怪訝な表情を浮かべているであろう私たちに、ある場所を指差した

——校長室。

しばらくして……聞こえてくるものがあつた。微かに、小さく、だ

だって、だって。聞き慣れてしまったものだから。

ドアを、叩く、うめき声。

「ひ……ひ……」

全て思い至つた。

どうして万寿先輩がああなつてしまったのか、この学校で何があつたのか、そして——どういう結末を迎えてしまったのか。

たかえ先輩の言う通りだ。

皆が皆——地獄を見てしまつていた。

「ねえ、二人とも。貴女達を歓迎してるのは本当よ？皆と仲良くして

ほしいし、苦しんだ分少しでも幸せになつてもらいたい」

でもね？

「——あの子の幸せを奪う事だけは絶対に許さない」

そうして、ゆるりと私たちを抱き締めた。

「——ようこそ、『学園生活部』へ。私達は貴女たちを歓迎するわ」

先生——めぐねえの浮かべた笑顔はどこまでも綺麗で暖かみがあつた。

心の底から、私達を歓迎してくれているのが伝わってくる。嬉しい、と感じた。

でもそれ以上に。

——痛々しくて、見ていられなかった。